
クロップス

G A Y A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロップス

【Nコード】

N3215H

【作者名】

GAYA

【あらすじ】

西暦2078年11月。修学旅行生108人を乗せた旅客機がB国沿岸で忽然と姿を消した。しかしそれは巨大秘密組織「バベル」の終末計画の序章に過ぎなかった！この事件の真相を追うアンカーはバベルの陰謀に巻き込まれながら同時に秘密組織「ヘーラー」の計画にも関わるようになってしまう。近未来SFハードボイルド。

第1話 プロローグ

俗に言う『探偵』などという職業は世の中に存在しない。

何十年も前ならともかく今時そんなものは流行らない。もし似たような職業があるとすればそれは『ジャンク屋』だ。ガラクタミみたいな仕事をかき集めて日銭を稼ぐところが似ているから。

そういう訳で職業を尋ねられた時は『ジャンク屋だ』と返すようにしている。そう言うとき必ず妙な顔をされるが、はじめは違和感がある呼称でも何十年も使っていれば流石に慣れるものだ。

それにしても暑い。赤道直下のこの町に滞在して四日目。待っているのにも疲れてきた。とはいえ、ずっとベッドに横になっていようが足を棒にして歩き回ろうが、有力な手掛かりという奴に出くわすかどうかは運次第。情報とはそういうものだ。

「消息を絶ったC国のチャーター便は依然として……」

TVでは例の事件についての報道が繰り返されている。報道の意味もお粗末ならそれを垂れ流すTVも相当な年代物だ。多分、このホテルには新型を買う予算が無いのか、あるいは盗難対策なのだろう。

天井にへばりついて気だるそうに回るファンはふてくされているように見える。その回転数を羊の代わりに数えればいつでも眠りにつけるだろう。こういう退屈な町では昼寝が唯一の娯楽なのかもしれない。

そんなことを考えていると、てっきり故障しているもんだとばかり思っていた端末が枕元でいきなり騒ぎ出した。

『おい！ アンカー！』

「聞こえてるよ、ジイサン。耳元で大声出すなって」

ジイサンの声は端末越しでも結構、耳に響く。

『お目当ての記録が入ったぜ！』

それはまる三日間待っていた言葉だが素直に「そうか」とは喜べ

ない。半分はガセネタだった場合にがっかりしない為。残り半分は料金を吹っかけられないようにする為だ。

「で、頼んだ情報は全部揃っているんだろうな？」

「勿論だ！ だがよ。軍のシステムにアクセスするのに手間取ったまいったよ！」

「この国にそれだけのシステムがあるとは思えんが……」

ジイサンほどのハッカーがこれだけ手間取るとは想定外だった。

「まあそう言うなって！ とにかく大砲（ 1 ）でデータを送信するぜ！」

ジイサンの言葉通りに手元端末にデータが送られてくる。

中味はB国空軍機の航行記録、交信記録、そして給油の記録だ。

「そんなもので何が分かるってんだい？ やっぱりお前さんの勘かね？」

「勘？ 生憎だがそんなものに頼ってたら今頃生きてないさ」

「もしかしてB国空軍に先駆けて機体を見つけるつもりか？」

「まさか。相手は軍だぜ。そもそもこっちは飛行機どころかタクシーを拾う金さえ無い」

「けどよう。今時、旅客機が消息不明だなんて有り得ねえよなあ。

バラバラになれば破片は海に浮くだろうし、クローリー（ 2 ）が残骸をキャッチするだろうに」

ジイサンが言うように旅客機が忽然と姿を消すことは普通考えられない。第一、定員100人以上の旅客機には最低5個のGPS設置が義務付けられているはずだ。

「墜落の形跡が見つからないんじゃないやなくて、そもそも無かったとしたら？」

試しにそう聞いてみるとジイサンは小さく唸った。そしてしばらくを置いて声のトーンを上げた。

「つ、つまり墜落はしていないということか？」

「恐らくは」

ジイサンが寄越してきた記録を見る限り、やはり軍は本気で搜索

しているようには思えない。まるでC国の要請で仕方なく捜しているみたいだ。

端末上にB国空軍の哨戒機が飛んだ空域を表示してみる。問題の旅客機が進路から外れたとして予想される範囲は扇形に広がるはずだ。

「普通ならこの範囲を搜索する。だが見つからない。ということはリーダーから消えた直後に大きく進路が変わったということさ」

「けどよう。管制塔との通信記録では何も異常は無かったらしいじやねえか！」

「……ハイジャック。もしくは機長もグルだった。大方そんなところじゃないか」

「そ、そんな?! お前さん、まさか最初からそれを……」

その結論に至った根拠を説明しようとした時、異変に気付いた。

「ちよつと待て。外の様子が変だ」

廊下側が何やら騒がしい。

通常、壁の厚みはホテルの宿泊料と比例する。おかげでこうやって外の異常がすぐ分かるというわけだ。

「いったん切るぞ」

「あいよ。せいぜい気をつけな……」

ベッドから立ち上がり、窓から外の様子を伺う。

(軍用のジープ? なんでこんな所に?)

こちらの動きがキャッチされたとしてもいいのか? まさかそれは無いだろう。少なくとも表立った行動はしていないつもりだが…。

程なく客室のドアが激しくノックされた。

やれやれ。そんなに強く叩いたら壊れてしまうではないか。修理代を請求される身にもなって欲しいものだ。

止む無く鍵を開ける。するといかにも柄の悪そうな兵士がポルトガル語で何やら喚き立てながら室内に入ってきた。

端末の翻訳機能をオンにする。

『検閲だ! 旅行者か?』

「まあ、そんなところだ」

『左手を出せ！ 怪しい人間じゃないかどうか調べさせてもらうぜ』
言われるままに左手の甲を前へ。

柄の悪い兵士はリーダー（3）をかざして情報を読み取る。

『アンカー・S・カイドウ。日本人か。ふうむ。でSは何の略だ？』

「さあね。自分でも分からない」

『なんだと？』

「父親の顔を知らないもんでね」

『ほお。気が合うじゃないか。実はオレも親父は好きじゃねえ』

「ついでに言つと母親の顔も記憶に無い」

『……ふん。で、職業は？ 何の為に入国した？』

「しがないジャンク屋さ。中古品を売りに来た」

『なるほどな』

そう言つて自らの頬を撫でた兵士の顔は『にきび』だらけだった。
まるで月のクレーターだ。一方、いつの間にか銃を持った兵士がもう一人、入り口でニヤついている。

にきび面の兵士は臆面も無く手を差し出す。

『ところで、ちよいとばかり援助してもらえんか？ そしたら見逃してやる』

「見逃すつて何を？」

わざとそう尋ねてみた。

『分かつてるだろ？ 検閲なんて何とでもなるんだ。オレの気分次第でな』

……そういうことか。恐らく、こいつらはこうやって小遣い稼ぎをしているのだろう。言いなりになるのはシャクだが、ここは少し握らせて追ひ払った方が得策だ。

「了解。じゃあ、これぐらいで……」

丸まった紙幣を伸ばそうとした時だった。ニキビ面が俺の端末に興味を示した。

『お！ ジャンク屋にしては随分、良い物持ってるじゃねえか！』

「よしてくれ。商売道具だ」

『日本製か？ 俺はそっちの方がいいな』

冗談じゃない。これがないと肝心のミッションに差し支える。

「いや。だからこれで勘弁……」

紙幣を追加してニキビ面の手に握らせる。

が、奴の目はマジだった。

『お前、ただのジャンク屋じゃねえだろう？』

ぬかった。今、これを調べられると流石にまずい。

相手は二人。見たところ銃を持っている方は油断しきっている。

あの体勢から引き金を引くまでに3秒はかかるだろう。

『一応、命令は受けているんな。怪しい外国人がうるついていたらしよっ引いて来いってな！』

この相手なら『二倍速』で十分だ。

目を閉じて深く息を吸い込む。そしてゆっくり数える。

(1秒、2秒、3秒……)

『おいっ！ 聞いてんのか？』

1……でニキビ面の首に手刀を打ち込むと同時に奴の手からリダーを引っ手繰る。

2……でニキビ面を突き飛ばすと同時に入り口までの間合いを詰める。

3……で銃を払い、左膝を兵士のみぞおちに食い込ませ、右ひじを顔面に当てる。

すかさず身を翻し、窓に一直線！

窓枠を飛び越え、そのまま飛び降りる。

両足に衝撃。が、走れないほどではない。3階にしておいて良かった。

こうなってしまったからには取り敢えず場所を変えなくてはならない。どのみちジイサンの情報は手に入ったから次の目的地に……と思ったその瞬間、背後で銃声が！

振り返ると3階の窓から先程の兵士が銃口をこちらに向けているのが目に入った。

「意外に鍛えられていやがる。ちと手加減しすぎたか？」

人通りは多くない。が、銃声を聞いて道行く人々が慌てふためくさらに前方からは別な軍用車が人々を押しつけるように突っ込んでくる。軍用車は猛スピードで真横を通り過ぎ、ホテルの入り口に横付けされたジープの前で停止した。

「近くに仲間がいたのか」

どうやらのんびり歩いている場合では無さそうだ。

さて、どうしたものか思慮していると、今度は真横の細い路地から赤い車が飛び出してきて目の前に止まった。急発進に急ブレーキあまり褒められた運転ではない。だが、開けっぱなしのドアがちょうど目前にあるということは、つまり乗れということなのだろう。

(何者か知らんが言葉に甘えるとするか……)

助手席に滑り込みながら運転手の顔を拝見する。

見覚えの無い顔だ。

というよりこれだけの美人なら記憶に残るはず。

だが、記憶を辿る時間もドアを閉める猶予も与えずに美人ドライバーは車を急発進させた。

辛うじてドアを閉めてサイドミラーで後方を確認する。

今頃になって連中はこちらの存在に気付いたらしい。軍用車が方向を変えようとしているようだが、こっちは既に通りを抜けている。やれやれと思って座席に落ち着く。

すると美人ドライバーが一言。

「やっちゃったの？」

初対面の台詞にしてはなかなか刺激的だ。

これで後方から追いかけてくる小うるさい蠅共が居なければ良い退屈しのぎになるのだが…。

【用語】

1 「大砲」… データの圧縮と暗号化がミックスした技術。まるでデータ自らに意思があるかのように自身を暗号化して圧縮、反射通信（衛星通信の一種）でダイレクトに送信先に送られた後に自動的に解凍・復元される。

2 「クロウリー」… スパイ衛星の進化系。性能の異なる6つの監視衛星が一団となって地表を監視するシステム。3台のカメラで地表の3D映像を表示することが出来る。

3 「リーダー」… 手の甲に埋められた個体識別情報を読み取る小型端末。

第2話 ハード・ドライブ

苦手な奴に『借り』を作るのは気分が悪いものだ。が、相手が美女なら話は別だ。貸しでも借りでも悪い気はしない。なので取り敢えず礼を言っておく。

「助かったよ。まるで図ったようなタイミングだ」

「……」

一言多かったような気もするが楽しいドライブを続ける為には、はつきりさせておかなければならない。

「なぜ俺を助けた？ どういう魂胆だ？」

「……商談のためよ」

「商談……ねえ。で、こちらのメリットは？」

「あなたが持っていない情報を持つてるわ」

なぜこの女が消えた旅客機の情報を欲しがっているのかは分からない。

もう少し探りを入れる必要があるそうだ。

「まあ、いいだろう。だがその前にアレを何とかしないと」

いつの間にかバックミラーに映る車両の数が増えている。仲間を呼んだか。

彼女はチラリとそれを見て「わかってるわ」と、景気良くハンドルを右に切った。

次の瞬間、床下でガコツとつんのめるような音と同時に強い遠心力に尻が持っていかれそうになる。

結構なスピードを維持したまま住宅街の細い路地に突っ込む。彼女に迷いは無いようだ。

見たところSC（1）は付いてない。もし、SCが付いていたとしてもこんなスリリングな運転は出来ないはずだ。ということは改造車か。

路地を抜け、車は急速に左折する。

少し進んでまたわき道へ右折。そして左折。

右に左に忙しい。彼女はまるで発見したわき道を片端から試そうとしているようにも思える。

追っ手をまくために我々の車は右に左に迷走した。

そしてようやくまいたと思いきや…。

彼女がミラーをチラ見して眩く。

「やはり簡単にはいかないわね」

その言葉通りに追跡してくる車両が増えていた。いつの間にか警察の車両まで混じっている。

「アウェイでは分が悪いわ」

やはり連中には地元の利がある。これでへりまで出てきたら逃げ切れる可能性は限りなくゼロになる。

「どうやら今さら下ろしてくれとは言えない雰囲気になってきたな」

「悪いけどもう少し付き合って。今片付けるから」

そう言いながら彼女は胸ポケットからペンを取り出した。右手にハンドル、左手にペン。

彼女はペンの先端をくわえてキャップを引き抜くと左手でカチカチとどこかをいじって、それを運転席の窓から後方へ放り投げた。

（何だ？）と思ったのも束の間。次の瞬間、まばゆい光が炸裂した。

（閃光弾?!）

あんな物でこれほど強烈な光を出せるとは！

おかげでこっちも少し光を食らってしまった。

「ちよつと眩しいわよ」

「すまんが先に言っただけだからやってくれ」

「それは失礼」

その顔つきにはちつとも悪気が無い。

「やれやれ。で、連中は……」

振り返ると追跡者達の足並みがまるでカーレースのスタート時のようにバラバラになっていた。

しかし閃光弾の効果は確実にあったようで目をやられた運転者が

続出したせいか、敵の追跡は緩んだように思える。

「さて。問題はどこで何に乗り換えるか、だな」

「問題ないわ。手配済みよ。ただしちょっと近道するけど」

なるほど。逃走ルートと手段は確保済みということか。それだけ用意周到となると、やはりこの女…。

進行方向にやたらと低いトンネルが目に入った。

(こんなトンネル何に使うんだか……)

てっきり右か左に避けるものばかり思った。が、彼女がハンドルを切る気配はない。それどころか逆にアクセルを吹かせる始末だ。

「このまま行くわ。頭下げて！」

「な！ 無理だ！」

慌てて身を屈める。と同時に轟音と共に暗闇に放り込まれ、フロントガラスの破片が降ってきた。火花と悲鳴のような金属音の競演が頭上で繰り返される。

時間にすればほんの10秒ぐらい。だが、とても正気ではいられない。

次に明かりに包まれた時には流石にほっとした。

車が停止するのを待つて恐る恐る顔を上げる。

トンネルを抜けるとそこは小さな港だった。

潮の香り、穏やかな波の音。牧歌的な光景とは対照的に嵐の止んだ車の助手席で命の存在をかみ締める。なかなか出来ない体験だ。

「まさかオープンカーに改造する為にわざと突っ込んだんじゃないかな」

何のトンネルかは知らないが高さ制限が厳しすぎる。おかげで車の上半分が見事に吹き飛んでしまった。

「さ、ここで乗り換えよ」

「車はここで乗り捨てか？ フン。屋根をすっ飛ばしたのが無駄になっただな」

「別にいいわ。アタシの車じゃないし」

「なるほど」

彼女の導きで棧橋に停泊中のボートに乗り込む。他に小さな漁船が八つばかり停泊中だが人の気配は無い。

「これも改造か」

我々が乗り込んだ二人乗りボートにはエンジンが四機付いていた。これも事前に用意していたようだ。

彼女がエンジンを回している時に丁度、ジイサンから連絡が入った。

『よお！ 無事か？ アンカー』

「……なんとかね。危うくカツラの世話になるところだったよ」

『随分派手に逃げ回ってたようだが？ 上から見ると消毒液を浴びたゴキブリがのた打ち回っているみたいだったぞ』

「酷い言われようだな。俺が運転してた訳じゃないぜ」

『連れがいるのか?!』

「ああ、次はクルージングに案内してくれるそうだな」

『……そうか。まあせいぜい気をつけるこつたな』

相変わらず他人事だと思つてのん気なジイサンだ。そんな事は言われなくても分かっている。B国軍に目をつけられてしまったのは想定外だが、どのみち近いうちにやり合わなくてはならない相手だ。これはさほど問題ではない。

(むしろ問題はこつちだな……)

この女の正体。もう少し様子を見るつもりだが一体…。

【用語】

ボフティ・コントロール

1 SCCの略。2024年以降生産の自動車に搭載することが義務付けられた安全運転の機能。運転者の居眠りやよそ見、速度超過などを機械的に制御する。

第3話 目的

小1時間も二人きりで居ながら聴き出せたのは『ナミ』という呼び名だけだった。

それも本名かどうか怪しいものだ。

最も仮に彼女にその気があったとしても殆ど会話は成り立たなかっただろう。何しろ後ろでは4つのエンジンが怒鳴り合い、船底はゴツゴツと波を蹴飛ばし、風はずっと耳元にまとわりついて下手糞な口笛を吹き続けてくれたからだ。

この1時間の中に彼女の容姿とその内に潜む企みについて思いを巡らせてみた。

(容姿は申し分ない……)

年齢は20歳前後。軽くウェーブした黒髪は肩まで伸びている。顔立ちはややロシア系。鼻筋は通っているが決して大きすぎず、何より意思の強そうなとび色の瞳が印象的だ。それに体操選手のような体つきながら付くべきところには柔らかな膨らみが付いている。

(さて、どこまで情報を晒して良いものか……)

あのタイミングでの登場は映画なら誰も疑問は持たないだろう。が、出来すぎの感は否めない。この女が軍にタレこんだと考える方が自然だ。だとすればなぜこいつは俺の事を知っていたのか？ 何時からマークされていたんだろう？

それになぜ旅客機消失事件を追う？

好意的に考えればスクープをモノにしたい女記者という線も有り得なくは無いが、さっきの小型閃光弾といい、この改造ボートといい、どうもその背後に大掛かりな何かが潜んでそうな気がしてならない。

(しばらくは様子見だな……)

それが世界で一番無難な選択だ。

港に到着した。今度の港はヨット・ハーバーといった趣だ。

港から陸地にかけては人の気配が無い。明らかに一部の人間がたまにしか訪れないような雰囲気だ。この辺りは海と山の距離が随分と近い。恐らく山肌を削り取ったんだろう。白壁の建物が山の斜面に植えられていて、まるで緑の斜面に歯が生えているようだ。

「ここからは歩きよ」

彼女に促されて内地へと続く一本道を歩き出す。どこのリゾート地を参考にしたのは知らないが町の造り自体が完全に成金趣味だ。

* * *

五分ばかり歩いて案内されたのはこれまた無駄遣いの見本みたいな大層な豪邸だった。

「遠慮しなくていいわよ」

「アタシの家じゃないから、か？」

「そうね。何時までも居るわけじゃないし」

「持ち主は？」

「二階でお楽しみよ。違法データのトレース（1）でラリってるみたいね」

「なるほど」

彼女はリビングから出て行くとしばらくして缶ビールを2本手にして戻ってきた。

「ビールでいい？」

そう言う彼女はビールしか持っていない。それでは選択の余地など無い。

ビールで喉を潤してから尋ねた。

「で、商談というのは？ 日本製の中古品は割高だぜ？」

すると彼女は一瞬だけニツと笑みを見せ、すぐさま表情を引き締めた。

「一緒に探して欲しいの。出来る限りのことはするわ」
「……結論は同じって訳か。そもそも何で俺に目を付けた？」
「事件発覚から四時間後にはパイロットの情報を集めてたから」
「そうか。そういうことか。やはり口止め料をケチるのは止めた方がよさそうだ。」

「たまたまこの国に来てたんでね。興味が湧いたのさ」
「そんなこと信じると思う？ 貴方ほどの調査員が偶然この国に居たなんて」

「買いかぶるなよ。俺はしがないジャンク屋さ」

それを聞いて彼女は疑るような目つきで呟く。

「瞬身しゅんしんのアンカー」

その名を知っていると……ますます厄介だ。

「確かに。お察しの通り俺は別件であの旅客機にちよいと用があった。だが、まさかあんな事になるとはな」

「でも、すぐに気づいたんでしょ？ 旅客機は墜落していないって」
「そう言うお前さんはなぜアレを追っている？」

「それはお互い聞かないことにしましょう。見つけるまで協力することです」

確かにこちらの目的を晒す必要は無さそうだ。とはいえそれでは彼女の目的も分からない。しばらくは手探りだな……。

「いいだろう。で、そちらの情報は？」

「旅客機の乗客名簿。ただし所有端末の識別コード付きよ。ほぼ全員分の」

「ほお。確かにそれは使えそうだ」

「それより貴方の見解を聞かせて欲しいものだわ。もしかしたらそれで犯人の目星が付くかも」

「犯人……ということはお前さんの見立てではテロってことかい？」
「テロではないわ。陰謀よ。それも恐らくは『バベル』の仕業……」
「バベル?! ……初耳だな」

今現在、世界には巨大な秘密組織が二つあると言われている。が、

個人的にはそんなものは信じていない。少なくとも今までのキャリアの中でその存在に触れたことは無い。

「この国の軍を手足のように動かせる連中よ。連中なら旅客機を消すことが出来るはず」

「分かった。そういうことなら俺の情報と照らし合わせる必要があるな……」

ここからは駆け引きだ。

【用語】

1 トレース 被験者の脳に直接電気信号を送ることで他人の記憶を体感できる装置。海馬やA10神経細胞等に刺激を与えてドーパミンを過度に分泌させる為、国によっては麻薬と同様の扱いとなり法律によって規制される。

第4話 消えた旅客機

2時間遅れの午後22時38分にG空港を離陸したC国航空のチャーター機241便は、その4時間13分後に消息を絶った。場所はS州の州都Fから北東に700kmの海上。

発表では突如レーダーから消えてしまった、ということらしい。

また、管制塔との通信記録に異常は無く、原因はまったく不明のこと。それに離陸が遅れた原因は「整備の為」とだけしか公にされていないが、これも本当かどうか疑わしい。

「情報が錯綜しているわね。C国も焦ってるみたいよ。この3日間で大使が14回も国防省を訪れたみたいだし」

「大使が暇なのはどこの国も同じだな」

「もし通信系のトラブルでないならパイロット自らが連絡を遮断したとしか考えられないわね」

「しかもそのパイロットが離陸間際に変更されたとなれば結論はひとつだ」

「そうね。通信記録は私もチェックしてみたけど確かに異常は無かったわ」

どこでどうやってそんなモノを入手したのかは知らないが、やはりこの女の背後には何か潜んでいるような気がしてならない。

「ねえ。それでパウロ・イルニシヨスについて何か分かったの？」

「問題のパイロットは既に調べてある。」

「叩けば幾らでも埃が出てくる奴だった。大体、空軍崩れのあんな奴がどうしてピンチ・ヒッターに指名されたのやら」

「でもそれも『バベル』の計画通りだったんでしょね」

その『バベル』というのが分からない。彼女は何を根拠にそう決め付けているのか？ そもそもそういった組織が存在すること自体が自分には理解できない。

彼女はビールで軽く喉を潤してから催促する。

「出し惜しみしないで。持ってるんでしょ。空軍の極秘情報」

「フン。そちらのご立派な情報網に比べたらチンケなもんさ」

さっきの船旅の際にジイサンの情報にはさっと目を通しておいた。結果は概ね予想通りだったが、それをこの女に披露して良いものか……。

「いいわ。じゃあこちらが先に出すわ。B国空軍がこっそり輸入したミサイルの資料よ」

そう言っただけで彼女は一枚の紙を取り出してそれを寄越した。

それを受け取り、さっと目を通して確信した。

「輸入品目の明細だな。日付は3カ月前か……」

彼女は試すような目つきでこっちを見ている。恐らくこちらの反応を探っているのだろう。

「これが何か分かる？」

「普通の武器じゃないな。恐らくは……チャフ・ミサイル（1）」

「当たり。驚かないの？」

「どんなマジックでも必ずタネはあるものさ」

数十年前のチャフといえばアルミ材をばら撒いて電磁波を乱反射させるものが主流だったが電磁波吸収剤が普及してからは持続効果が劇的に向上している。最新式ではミサイルを爆発させて空中散布する型まで開発されていると聞く。

「問題はB国空軍がこれを使ったという証拠が無いことよ」

「……それを俺が持っているとしても？」

「ええ。そう確信してるわ」

「参ったね。で、証拠を掴んでどうする？ 空軍を脅すのか？」

「まさか。けど、根拠が無いと動けないのよ。無駄なコストは省きたい。誰だってそうでしょ」

「同感だな。無駄なコストと時間ほど邪悪なものはない」

どうやら出し惜しみをしている場合では無さそうだ。目的が同じならばらくは利用させて貰って方が得だと思われる。後は出し抜かれないよう気をつけることだ。

「戦闘機の航行記録は調べたのか？」

「勿論よ。この国の戦闘機の数なら大して手間じゃないわ」

「だが何も出てこなかったらどう？」

「そうね。記録を消したか最初から隠密行動だったのか……」

やはりそれぐらいは調べていたようだ。が、この情報は知るまい。

「6カ月前にミラージユが4機、退役している。それも予定を繰上げでな」

「?!」

彼女の表情が強張った。そして唇を噛む。

「それは盲点だったわ……でもそのミラージユって」

「半年あれば幾らでも改造できるさ。ステルス塗装ぐらいわからないだろう」

「そうね。密かに訓練を積むこともできるわね。でもどうしてそれに見をつけたの？」

「燃料の記録さ。航行記録と消費量が合わない」

「つまり燃料をどこかで使ってるってことね？ 極秘裏に」

「そういうことだ」

彼女は何か考え事をしている。さて、次にどう出てくるか？

「ところでさっきの資料をデータで貰えるかい？ ミサイルの明細だ」

「いいわよ」

彼女の持っていたデータ、すなわちチャフ・ミサイルの明細や仕様をジイサンに転送する。後はジイサンにミサイルの性能を分析して貰えば裏付けは取れる。そうすれば次は消えた旅客機がどこに降りたかの推測だ。既に候補は幾つか挙げているが、どこから手を付けるべきか……。

「さてと。少し休ませてもらうよ」

一人になりたくてそう言つと彼女は腕組みしながら釘を刺してきた。

「抜け駆けは無しよ」

「束縛されるのは好きじゃないんだ」

「分かってるとは思っけどあなたはB国軍にマークされているわ。私は大丈夫だけど」

「……どうも解せないな。尾行することは考えなかったのか？」

「生憎だけどもそこまで暇じゃないわ。あなたがどこまで真相に近付いているか分からなかったし。あなたの実力を疑ってるわけじゃないんだけど」

「フン。喜んでいいのかどうか微妙なコメントだな」

「とにかく探し物には最後まで付き合ってもらおうよ」

「いいだろう。アシは任せる。経費削減だ」

「了解。で、一応、方針は聞かせてもらえる？ パートナーとして知っておきたいから」

「近隣のB国軍基地の情報を集めてくれ。できれば見取り図も」

「2時間頂戴。ちゃんと揃えるから」

「明日まででいいよ。それより今晚の予定は？」

「どういう意味？」

「パートナーとして知っておきたいからな。色々」

「冗談半分でそう言うとな彼女はにこりともせず背中を向けた。

「調べたければご自由にどうぞ」

随分、軽く流されてしまったな。やれやれ。「冗談の通じない女は苦手だ。」

とはいえ単独でB国軍を相手にするのは大変だ。であれば紳士協定を結ぶのも悪くはない。どこまでこの女を信用して良いかはともかく、行方不明の旅客機を発見するまでは……。

1 チャフ・ミサイル…… レーダーに探知されないように電磁波を吸収する素材をばら撒くミサイル。

第5話 方針

やたらと高価な美術品を飾りたがる人間はよっぽど目が悪いか美術商に力モられてるのかそのどちらかに違いない。でなければこんな悪趣味な部屋にはならないと思う。油絵はまだいい。が、額縁がそれをことごとく台無しにしている。東洋の陶器とクリスタルが同居しているのはご愛嬌。趣味の悪いペルシャ絨毯はずっと眺めていると目眩を起こしそうだ。統一性の無い家具は国際色豊かな傭兵部隊を連想させる。

(あまり長居はしたくない部屋だな)
それが正直な感想だ。リビングに居ながら海を見下ろせる造りは悪くない。だが自分のような貧乏人には落ち着かない。外の景色が一望できるということは即ち外から丸見えということを意味するからだ。

ジイサンにミサイルの分析を依頼して2時間が経った。まだ日は高く夜までは時間がありそうだ。

試しにジイサンを呼び出してみた。

「ジイサン。分析結果は出たかい？」

「ああ。とっくに出とるわい」

「だったら早く連絡してくれよ。で、どういう性能なんだ？」

『どうやらF国製のようだが……規格品とは随分と違うみたいだ』

「特注か。で、シミュレーションの結果は？」

『発射して12秒後に爆発。電波吸収剤を霧状にばら撒くってトコだな』

「範囲は？」

『900から1200フィートといったところかの』

「旅客機をすっぽり覆うには十分だな。それが4×6発、時間差でぶっ放したとすると……」

『お前さんの推理は良い線いっとる。はじめ聞いた時は馬鹿馬鹿し

いと思つとつたがな』

突拍子も無い推理ではあるが、まんざら不可能ではないようだ。ジイサンが3Dライブラリ（1）からダウンロードして作った映像を眺めているとそんな気がしてきた。

「ターゲットを囲むように飛ぶ戦闘機が前方にチャフをぶつ放す。ちよつとした雲のトンネルが出来るわけだ。そこにターゲットが突っ込む。それでレーザーから消えたように見えたってカラクリか」

『まったく漫画みたいな話だな。どんだけ金がかかることやら……』
「で、理論上、レーザーに捉えられない時間はどんなもんだ？」

『機体に付着した電磁波吸収素材が有効なのはせいぜい15分から20分だろうな。風で流されちまうだろうから』

「思ったより短いな。だがこれで範囲は絞れる」

これは有力な手掛かりだ。チャフの洗礼を受けた旅客機がレーザーから逃れられるのは20分程度。であれば消えた場所から計算して……。

「何の相談？」

振り返るとナミの姿がそこにあつた。

いつから居たのかは知らないが相変わらず愛想は無い。

「パートナーでしょ。新しい情報が入つたなら隠さないで教えてよね」

「分かつてるさ。出し惜しみはしない」

『おいアンカー！ このお嬢さんかい？ ちよつと顔を拝ませてくれよ』

ジイサンの声を聞いてナミが意外そうな顔をする。

「あら。私のこと調べてたんじゃなかったの？」

「まさか。パートナーを疑つたりしないさ」

「どうだか」

「とにかく何か食わせてくれ。食いながら話す」

「ご自分でどうぞ。キッチンに冷凍室があるから」

「そりゃどうも」

腹が減っていたので止む無くキッチンへ向かうことにした。

ナミの言った通りキッチンの奥には冷凍室が備え付けられていた。金属製の扉を開くと肉がぶら下がっているのが目に付いた。それもひとつやふたつではない。

(……肉屋かよ。それともライオンでも飼うつもりか?)

肉は嫌いではないが流石にこれを解体してまで食す気にはなれなかった。幸い手頃な大きさにカットされた塊が放置してあったのでその場にあつた包丁で適当に切ってみた。

思ったより固かったせいで切り口がギザギザになってしまったが、塩コショウを振ってオープンにぶち込めば何とかなるだろう。

肉を焼いている間にナミの報告を聞く。

「この辺りの基地は全部調べたわ。転送するわね」

「思ったより早いな。どれ……」

端末に送られてきたデータを確認する。

(……驚いたな。ここまで分かるものなのか)

「どう? 少しは役に立って?」

「十分だ。まあ、修理中のトイレまでは必要ない情報だが……」

軍の施設がこれほど正確に把握できるとは恐れ入った。兵力や監視カメラの位置は勿論、配管・配線もネットワークのプロテクト構造まで、ありとあらゆる基地の詳細が記録されている。これは彼女の情報網が優れているのかB国軍のセキュリティがザルなのかは分からない。が、いずれにせよ侵入する際には重宝するだろう。

「それでそちらは何が分かったのかしら?」

「マジックの種明かしさ。こんな感じでな」

説明の代わりに手元端末のシミュレーション映像を彼女に見せた。すると端末を凝視していた彼女の目が輝いた、ように見えた。

「なるほどね。これならどの基地が怪しいか絞れるってことね」

「それに一時的かもしれないが100人以上の乗客を移すとなるとそれなりの施設は必要はずだ」

「だとしたら……R基地かD基地ね」

「異論は無いよ」

旅客機が消えたポイントはS州の海岸線から北東におよそ700km。ジイサンのシミュレーションではレーダーから機体を隠せる時間は15分から20分。となると例え方向転換したとしても陸地には辿り着けない。ならば海上に強制着陸するしかない。

「恐らく海軍を待機させていたんだろう。そこから機体を曳航したか、乗客だけ船に移したかだな」

「なるほどね。でも機体はどうしたのかしら？」

「沈めたんだろう。それが一番手っ取り早い」

「R基地なら港も近いわね」

「見に行く価値はあるだろう」

ちょうどその時、オーブンを呼び出された。どうやら肉が焼きあがったらしい。

「悪いが肉を見てくるよ」

「……どうぞ」

考え込む彼女を残して再びキッチンへ。

オーブンを開けてみたもののどこから手をつけて良いものやら悩んだ。

（適当な皿に移すか……）

枕ぐらいの大きさの肉が丸ごと焼けるオーブンもたいしたものだが、3台並んだ食器棚もなかなかの迫力だ。

一番手前の食器棚から大皿を1枚拝借してオーブンの前へ。問題ははこの肉をどうやって皿に移すかだ。

（何か道具になるものはないか？）

と、その時背後に気配を感じた。

ゆっくり振り返る。

キッチンの入り口にナミが立っている。

冗談のひとつでも思ったが止めた。

彼女はマネキンのようにぴくりとも動かない。真っ直ぐにこちらに向けられた腕。その手元に光る銃…。

「……何の真似だ？」

無言の圧力。

肉の表面で油が跳ねる音だけが時間を支配する。

対峙すること数秒。その間、思考を巡らせるがまるで理由が分からない。準備だけはしているが…。

やがて彼女の口元が微かに吊り上った。

そして彼女の指先に不穏な動き。

(クツ！)

1 3Dライブ러리… ウェブ上でフリー素材として提供される3D画像データ。異なるサイトから拾ってきた個々のデータを自由に加工することで誰でも簡単な3Dアニメが作成できる。

第6話 瞬身

やはり行くしか……

1 …… 右足を軸に反転、と同時にナイフを掬い上げ、体勢を低く斜め前へ3歩。

2 …… さらに4歩間合いを詰め、左で拳銃を押し、右のナイフを敵の喉元へ。

3 …… 左で手首を捻りあげ、反応を見る。

「何の真似だ？」

「……」

彼女は人形のような瞳でナイフを見下している。

(無反応、だと？ 状況が飲み込めていないのか？ いや、この表情は……)

「……安心したわ」

「?!」

「試したのよ。これから敵地に乗り込むのに足手まといだと困るか
ら」

確かに彼女が放った一撃は壁にオレンジを擦り付けている。そこはさっきまでの立ち位置だ。これをやってなければ肉と一緒にペイントまみれにされていたところだ。

彼女はチラリとこちらを見て口角を上げる。

「確かに脳の使い方を知ってるってレベルじゃないわね」

「……そりゃどうも。どうやら及第点は頂けたようで」

「噂には聞いていたけどこれが『瞬身』ね」

やはりこの女は俺のことを知っているようだ。どこまでこちらの能力が知られているのかは分からない。まさか今請け負っている任務の詳細までは知られていないはずだが油断は出来ない。

(それにしても瞬きひとつしないとは……何て奴だ)

彼女は掴まれた左手首をゆっくり振った。

それを掴んでいた手の握力を緩めようとして気付いた。

(この固さは……)

少なくともか弱い女性のそれではない。最も『か弱い』というのは死語だが。

「早く食事を済ませて貰えるかしら？」

「ん？ あ、ああ」

「食べ終わるまでに潜入する方法を考えて」

「無茶言うな。相手はまかりなりにも軍隊だぜ。だいたいそれが出来るならとくに商売替えしてるよ」

「必要なものがあれば言つてね。準備はこちらでするわ」

「だったら一個中隊用意してくれるか？」

彼女は無言でそれをスルーする。

やれやれ。冗談の通じない女は苦手だ。

「しょうがない。必要な物は後でリクエストする。それと振込も頼んでいいか？」

「振込？ ワイロにするの？」

「いや。さっきのジイサンにだ。追加料金を払っておいて欲しい」

「いいわ。じゃ、待ってるわよ」

そう言い残すと彼女は高慢な女秘書のような足どりでキッチンを出て行った。

(さて、どうしたものかな)

R基地の詳細は入手出来た。セキュリティもたいしたことはない。この程度ならジイサンにとってハナクソをほじくるより簡単だろう。鼻血のリスクが無い分だけそっちの方が楽かもしれない。

* * *

だっ広いダイニングで食つのも何なのでリビングに皿を持ち込むことにした。

フォークで肉を刺し、口に放り込む。

実に味気ない。なんだか留守番の報酬に肉を与えられた犬みたいな気分だ。

気晴らしに端末で最新のニュースをチェックする。

最新情報ではB国海軍が機体の一部とみられる物体を複数発見したとなっている。

(やはり墜落したことにしたいようだな)

タイミングとしてはそろそろかなと思っていて。そもそも破片がひとつも出てこないとなると疑われる可能性が高まる。現にこれまでは墜落に疑問を呈する意見も少なくなかった。中には「これは誘拐なのでは？」という真相に近づく推論もあつた。が、それを裏付けるだけの情報が足りない為、相手にされていないだけだ。とはいへ余計な詮索を免れる為にもC国に対するアリバイの為に墜落した機体の一部だけしか回収できなかったという既成事実は欲しい。そこでタイミングを見計らって機体の残骸を提示する…。

(やはりB国軍はグルだな…：しかし何が目的なんだ?)

問題はそこだ。誰が何の為にこんな大芝居をうつつのか?

ナミが言っていた秘密組織の仕業?

(まさかな。『バベル』だと? 聞いたことも無い名前だ)

この商売を長くやっていることやたらと「裏組織の仕業だ」とか「背後に謎の組織が」とか胡散臭い話に出くわす。だが自分はそんな話は相手にしない。個人であれ組織であれ、所詮、目的はひとつ。

『利益を得ること』必ずそれが動機なのだ。だからこそ今度の事件には違和感を覚える。

(旅客機を誘拐して誰が得をする?)

事件の全体像がはつきりしない中での強行突入は本意ではないが、本来任務を遂行するためには止むを得ない。

とにかく消えた乗客の確保を急がねばならない。その中に居る『標的』を見失う前に…。

第7話 潜入

暗視スコープでR基地を見下ろしながら考える。

同じ潜入するのでもその目的によって計画は大きく異なる。もし乗客全員の救出が目的だとしたら我々2人でというのは無理がある。なので、彼らの居場所を特定したら仲間を呼び、自らはかく乱行動に徹するのが定石だ。

しかし未だ彼女の真意がつかめない。であれば潜入した後は別行動が望ましい。

「念のために聞いておくが……」

「何？」と、潜入用のスーツを着た彼女は気だるそうに答える。ぴつたりとしたスーツだが身体のラインはちつとも色っぽくない。

それはさておき提案してみる。

「協力するのはどの時点までか決めておかないか？」

彼女は返事の代わりに疑い深そうな目でこちらを見た。

「いや。正直言ってこっちは乗客全員に用があるわけじゃない。会いたいのは一人だけだ。だからそいつに面会したら目的は果たせる」

「……いいわ。じゃあ基地に降り立つたら別行動ってことで」

「降りるまで、だな」

R基地上空まではあと5分程度。ということは彼女との付き合いもあと数分ということになる。

電磁波吸収剤をたっぷり塗った黒気球は予定通りのルートを進んでいる。このルートには基地が発するサーチライトも絶対に届かない。なぜならジイサンが基地の防空システムをハッキングして改ざんしてあるからだ。大抵の場合、基地のレーダーは中長距離の探知に重きを置いている。なので意外と頭上がおろそかになっているケースは少なくない。

「風が出てきたわ」

彼女の言葉通り先ほどから急に海風が強くなってきた。

「降下訓練は受けたことはあるか？」

「たしなむ程度にはね」

高度100メートルの気球からロープを伝って降下するのは並大抵ではない。しかし、そこまでして基地に侵入するからには彼女にもそれなりの事情があるのだろう。証拠集めだけなら何もそんなリスクを冒す必要は無い。スパイ・インセクト（1）を数個忍ばせれば十分だ。

（何かあるんだろうな。乗客に接触しなくてはならない理由が……）
彼女が下を覗き込みながら言った。

「そろそろね。準備はいい？」

準備なら整っている。彼女が用意してくれたマルチ・スコープ（2）は上々だ。見た目はサングラスと変わらない。なおにおよそ必要な機能はすべて備わっている。基地のレイアウトデータと熱反応は左眼で捉える。音声は集音マイクを左耳で、ジイサンとの通信を骨伝導（3）で受ける。いつもの通り右耳はフリーだ。微妙な音や空気のゆらぎはどうしてもナマでないと調子が狂ってしまう。たまに両目・両耳でフルに情報を受けようとするバカがいるが、それはバケツを被って綱渡りをするようなものだ。

「ひとつ相談なんだが、このスコープ、貰ってもいいか？」

「いいわよ。謝礼代わりにでもして」

「そいつは助かる」

闇に紛れて黒い気球で上空から侵入する。実に単純な作戦だが中途半端に機械化された警戒システムには案外有効だったりするから面白い。それもジイサンのサポートあってこそだが。

「ジイサン。これから下に降りる。そっちはどうだ？」

『あいよ。こっちも準備は出来てる』

「酒とつまみもか？」

『勿論！』

「まあ、宜しく頼むぜ」

ジイサンと会話している間に彼女が降下体勢に入った。

「おいおい。もう降りるのか？」

レディ・ファーストだからそれは仕方が無い。しかし「先に降りる」と一言ぐらいあつて然るべきだ。

「下で……」

そう言いかけて止めた。協力するのは下に降りるまでという約束だ。その後は自由行動。とはいえ目的地は同じ。先を越されなければ問題は無いだろう。

『ちよつと待てアンカー！』

「なんだい。降りてからにしてくれ」

『何か様子が変だ。む？ こりやどうということだ？』

「まさか敵に気付かれたとでも？」

『いいや。そうじゃない。むしろ逆だ』

「逆？ 意味が分からない」

『これは…… 幻覚（4）』じゃないか！』

幻覚？ ジイサン以外に何者かが基地のシステムに介入しているのか？

「どうということだ？ 発信元は？」

『…… 内部からじゃな』

「バカな！ なんで内部の人間がシステムに幻覚を？」

ちよつと西側の滑走路では小型輸送機が離陸しようとしている。

南ゲート方面ではトラックらしき車両が数台出て行くのが目に入った。基地は普通に機能しているように見えるが……。

『理由は分からんが外部との接触を次々にシャットアウトしてるわい！ こりやシステム障害なんかじゃないぞい』

「分かった。とにかく降りてみる」

すぐさまカーボンナノチューブ製のロープにフックを引っ掛け、飛び降りる。

スピードは手元で調整する。

（とにかく急がなくては）

一瞬、これも彼女の仕業かと思った。彼女が潜入すると同時に基

地のシステムを孤立させ、仲間に襲撃させる作戦なのかもしれないと。

(しかし最初からそれが出来るならわざわざこんな方法に付き合うこともないか……)

予定のポイントに降り立った。場所は整備倉庫の裏手だ。ここから左に200メートル行けば目的の第二兵舎がある。恐らく彼女はそこに向かってはいるはずだ。

(なんだこの違和感は?)

妙に静かだ。夜だから人が少ないのかもしれない。が、ついさっき輸送機が飛び立っていったではないか。その割には人の気配が無さ過ぎる。

『おいアンカー！ 中の様子はどうだい?』

「静かだな。読書をするにはぴったりの環境だ」

『監視カメラは寝ぼけてる。そのまま真つ直ぐ向かっていいぞ』

「分かった」

第二兵舎に向かう間も人の姿は目に入らなかった。

不気味な静けさ、とでも言おうか。深夜とはいえこんなに閑散としていて大丈夫なのかと他人事ながら首を捻った。

* * *

一階トイレ窓から建物内に侵入する。ここまでは予定通りだ。

ジイサンの調べではこの第二兵舎は新入りの研修にしか使われていない。なので、この時期はほぼ空っぽのはずだ。それにも拘らず建物の周辺を兵士が巡回していることが確認できた。そのくせこの場所だけ監視カメラの映像が一切無い。ということは、ここが一番怪しいはずなのだ。

「本当にここなのか？ あまりに人気が無さすぎるぞ」

『多分、上の階で軟禁されておるんじゃないか。その辺りは見張りしかおらんだろう』

「こつも静かだと逆に人恋しくなるな。見張りを見つけたら抱きしめてやりたい気分だ」

『お前さんの相棒はもう三階に上がっておるぞい』

「ふん。せつかちな女だ」

そう言いながら廊下を曲がった瞬間だった。異様な光景が目飛び込んできた。

(こ、これは……)

うす暗い廊下に転がる不自然なシルエツトが幾つか。良く見るとそれは人間だった。恐らくはこの兵士……。

(1、2……6人。死んでるのか?)

一番手前に転がるそれに近寄って脈をとってみた。

(眠らされているようだな)

微かに香るのは催眠スプレー特有の匂い。

「ジイサン。周りの様子はどうだ？」

『いいや特に変わったことは……』

「どういうわけか寝相の悪い兵士が廊下に何体も転がってる」

『相棒がやったんじゃないのか?』

確かに催眠弾を使えばこいつらをお寝んねさせることは出来るだろう。

(しかし、何か引つかかる。嫌な予感がするな)

そう思った矢先。背後に人の気配。振り返って身構える。

(子供?)

一瞬、状況が飲み込めない。なぜこんな所に十四・五歳ぐらいのガキがいる?

突如現れた相手は、こちらが戸惑っているスキを突くかのように突進してきた。

(!?)

速い!

- 1 スパイ・インセクト …… 探索目的に特化したナノマシン。虫サイズのマシンが自動的に飛行しながら撮影・映像送信をする。
- 2 マルチ・スコープ …… ゴーグル型の端末。肉眼で見る映像に端末画像を重ねて見ることができただけでなくズーム・暗視・赤外線画像などの機能を併せ持つ。また音声・通信も自在に行える。
- 3 骨伝導 …… 頬骨に振動を与えることで音声を認識する仕組み。
- 4 幻覚 …… コンピュータウイルスの一種。監視カメラ等に偽の映像を認識させる。

第8話 残された少年

真つ直ぐに向かってくると思せかけて少年は左に流れた。狙いはこちらの背後をとることか。

止む無くそれに合わせる。

少年が左側をすり抜けたと同時にこちらも動く。

勝負は一瞬。背後の奪い合いだ。

「え？」と、少年の動きが止まる。

こちらの背後をとったつもりだったのだろう。それが逆に後ろから首に腕を巻きつけられて驚いたようだ。

しかしこの少年は何者なのか。その只ならぬスピードは常人の動きではない。

「英語は分かるか？」

「う……YES」

「C国人だな？ なぜこんな所をウロついている？」

「それは……」

「君は241便に乗っていた生徒だな？」

「Y……YES」

少年がむせながらそう答えたので少し腕の力を緩めてやる。後ろ手に固定した少年の右手からスプレー缶が落ちる。

「そこに転がっている連中は君がやったのか？」

「そうです。役目だから仕方なく」

つたない英語でそう答えた少年に反撃する気配は無い。なので解放してやることにした。

「他の連中は上の階か？」

「あなたは誰？ なぜ僕らのことを知ってるんですか？」

「俺が警察官に見えるか？ 見ればわかるだろう」

少年は上から下までこちらの格好を眺めてから首をひねった。

「本国の人ですか？」

「残念ながらC国に縁はない。訳あって潜り込んできただけだ」
少年はしばし俯いて考え事をする。

少年の制服はクタクタで随分と汚れていた。ベージュの半そでシヤツは所々黒ずんでいて干物にされた毒蛇のみたいなネクタイが力なくぶら下がっている。良く見るとグレーのズボンにも引つ掻き傷らしき箇所が幾つもあった。

(監禁されていたとはいえ随分ボロボロだな……)

その時、突然、ナミが目の前に現れた。やあ久しぶり、とこちらが言うより先に彼女が険しい表情で質問してきた。

「その子は？」

「さあね。たつた今知り合ったところだ」

「C国人ね。だったら……」

そう言うやいなや彼女はツカツカと少年に歩み寄り、その額に銃口を押し当てる。

「皆はどこ？ 何があったか話さない！」

銃を突きつけられた少年は反抗的な目つきで彼女を見上げる。

二人の睨み合いはしばらく続いた。

「やれやれ。それじゃ埒があかないだろう。ひとつ、仲良くやろうや」

それを聞いて二人が同じタイミングでこっちに顔を向けた。空気を変えるつもりでわざと軽い調子でそう言ってみただが逆に反感をかってしまったらしい。

ちよつと気まずい雰囲気なので話題を変える。

「君らの旅客機はB国軍に拉致されたんだろう？ 世間では墜落したことになっているがな」

その言葉に耳を傾けながら少年は唇を噛んだ。

「私達は事件の真相を知っているわ。それであなたたちを救出するために潜入してきたの」

それは相手に銃を突きつけながら言う台詞ではないと思う。言動と行動がまるで一致していない。

「少なくとも俺達はB国の仲間ではない。敵の敵は味方、だろ？」
それを聞いて心なし少年の緊張が解けたようだ。

「そうだったんですか。でも遅すぎましたね」

「どういうことだ？ 他に連中はどこかに移送されたのか？」

「いいえ。脱出したんです。分散して」

「脱出しただと？ どうやって？」

驚きを隠せなかった。まさか彼等が自力で脱出を試みるとは想定外だ。だいたい十四歳前後の子供が軍を相手に…。

が、意外にナミは冷静だ。

「あなた達ならそれも有り得るわね」

「ばかな！ まさかこいつら皆……」

ただの修学旅行生でないことは分かっていた。彼らはC国が極秘裏に運営する超エリート養成学校の面々。表向きは特権階級の子女を集めた学校ということだが噂では…。

ナミは銃をしまいながら首を竦める。

「大したものね。子供なのに。C国が秘密にしたがるわけだわ」

確かにこの少年のさっきの動きを見る限りあながち絵空事ではないのかもしれない。

改めて少年の顔を観察してみる。やはり普通の少年だ。

（どんな訓練を受けているのか知らんがこんな少年達が軍の施設を制圧してしまうとはな……）

「で、『サアラ・タゴール』はどこなの？」

ふいにそんな言葉が彼女の口から発せられた。

（この女……嫌な予感はいったか）

やはり彼女の目的は同じだった。つまりクライアントの心配していた通りということだ。

少年は戸惑いながら答える。

「彼女がどのルートで脱出したかは分かりません」

「何よそれ。皆バラバラに逃げたってこと？」

「ええ。輸送機、ヘリ、トラック、それから船を使うルートも」

「それに何の意味があるの？」

「それは追っ手を分散するという意味もありますが……生き残るためです」

（生き残るとはまた大げさな……）

思わず苦笑してしまうところだったが少年の顔つきを見て考え直す。

「そうだな。君らが置かれた状況からすればそう考えるのも無理はないかもな」

少年はじつとこちらを見つめながら訴える。

「飛行機が着水した時にけが人が数名でました。監禁されてる間にどこかに連れ出されたのが8人。それからここを制圧する時に5人の死者が出ました。僕らにとってこの脱出はまさに命がけなんです。それにしてもよほど統制が取れていなければこんな事が出来るはずがない。」

そう思っで試しに尋ねてみた。

「軍を相手に見事なお手並みだ。よっぽど有能なリーダーが居たんだな」

「サアラです。彼女がいなければこの作戦は成功しなかったと思います」

サアラの名を聞いて彼女が反応する。

「サアラ・タゴールが指揮を執ったって？なるほどね」

少年はいかにしてサアラがこの作戦を遂行したのかを説明した。残された生徒全員の能力を完璧に把握したユニットの編成と役割分担。複数の逃走ルートの方策。軍施設制圧に至る完璧なコミュニケーション。それらをすべてひとりで行なしたという彼女。聞けば聞くほどサアラ・タゴールがずば抜けた頭脳を持ち主だということが分かる。

ナミが腕組みしながら感心した。

「幾らあなた達が特別でもここまでやれるなんて驚きだね。しかも犠牲者がたった5人だなんて」

「サアラの作戦は完璧でした。ボク等は彼女に指示された通りに動くだけでしたから」

「そう。よっぽど優れたリーダーだったのね。流石ってところかしら」

そう言っただけで彼女はチラリとこちらを見た。何か言いたげな顔つきで。

(こいつ。やはり俺の目的を知ってるんじゃないのか?)

そんな疑問がわいた。しかし、肝心のターゲットが既に居ないとすると我々がここに留まる意味は無い。

ナミは端末を指先で弄びながら呟く。

「結局、無駄足だったわね。せめてサアラの向かったルートを特定できればいいんだけど」

「ほ、本当に知らないんです。誰がどんなルートで逃げるかは本人達には知らされてないですから。それに彼女のことだから逃走の方法にも意外なアイデアを採用してると思います」

「隠すと撃つわよ」

そう言っただけでナミはまた少年に銃を向ける。それに怯まない少年も肝が据わっている。

「いいわ。知らないならしょうがないわね。その代わり何かヒントはない?」

その質問に少年はしばらく考えてから口を開いた。

「彼女、妙なことをしました」

それを聞いてナミが目を吊り上げる。

「どんなこと?」

「それが……その、誰も意味が分からなくて」

そう言っただけで少年は交互に我々の顔を見比べた。

「話せ。手掛かりになるかもしれないから」

「分かりました。彼女は……サアラは皆に『カウントダウンはもう始まっている』と言いました。で、皆がバラバラになっても直ぐに会えるだろうって。『狭い世界になるから』と」

少年の言葉にナミが肩を落とす。無理もない。そんな予言みたいな台詞では何の参考にもならない。

我々の反応を見て少年が申し訳無さそうにうつむく。

「ごめんなさい。役に立たなくなってます」

気の毒に思つて彼の肩に手を置く。

「そう落ち込むな。で、これからどうするつもりだ？ サアラは前さんにどんな指示を？」

「僕は助けを待てど。本国の人に連絡しておくからって」

「なるほど。大使館にでも連絡したか」

「いえ。多分、大使館の人たちじゃなくって諜報部が来るはずだつて」

「どういう意味だ？ いや……そういうことか」

ここはB国軍の施設。C国大使が直接乗り込んでくるわけにはいかない。それにしたたかなC国のことだ。仮に真相を知らされたところで事件を公にするより、外交のカードとして利用することを考えたとしてもおかしくはない。

(そこまで読んでいたかどうかは知らんが、つくづく大した奴だ)

ここにC国の連中が乗り込んでくるということはこれから賑やかになりそうだ。そうなる前に撤収しなければ。

先にナミが宣言する。

「私は先に失礼するわ。これ以上ここに居ても無駄なようだし」

「ついでに乗せて行つてくれると助かるんだがな」

「残念ね。予備の席は用意してないの」

「ふん。それが親愛なるパートナーに対する台詞か。泣けてくるぜ」
「契約切れよ」

そう言い残すと彼女はクルリと背を向けると正面玄関の方に向かった。端末でどこかに連絡をしながら。

(どうやら人海戦術に出るつもりのような。片端から彼らの逃走ルートをあたつていくんだらう。そうなると分が悪い)

彼女の背中に向かって嫌味のひとつでも言つてやるうと思つた。

「サアラに会ってもいきなりぶつ放すなよ！」

皮肉としてはいまいち弱いか。

が、彼女は反応した。くるりと振り返って返事をする。

「言われなくても丁寧な扱ってもらいよ。なんせ大事な『miracle crop』だから」

(ミラクル・クロップ?)

そのまま訳すなら『奇跡の作物』。しかし、なぜサアラ・タゴールをそんな風に言うのか?

意味深な言葉を残して彼女は颯爽と出て行った。

残された我々は戸惑いながらそれを見送るしかなかった…。

第9話 脱出ルート

(C国雇われじゃないとすれば……結局、あの女は誰の意向で動いているんだ?)

それに彼女が最後に残した言葉が引つかかる。

『ミラクル・クロップ』

クロップが作物なのか収穫物なのかその真意は分からない。が、いずれにせよ彼女が特別な存在であるサアラを拘束しようとしているのは確かだ。

「さてと。ぐずぐずしている場合じゃないな」

気を取り直して脱出方法を考える。最初の予定通りいくか別な方法で出るか…。

「じゃあな少年。気をつけろよ。B国軍の増援が先に来たら厄介だからな。」

「あ、はい……」

「ま、君の能力なら逃げる分には問題ないとは思うが」

それを聞いて少年が何か思い出したように口を開く。

「そういえば……あなたは何者なんです?」

「言わなかったか? 通りすがりのジャンク屋だ」

少年は首を振る。

「あのスピードには驚きました。あんなに完璧に見切られるなんてそれに裏まで取られるとは……」

最初に接触した時のことか。こちらも少なからず驚いたのだが…。

「なに。大したことはない。せつかちなだけさ」

「いいえ。普通の人間にはあんな動きはできません」

「そういう自分は訓練か? あのスピード、常人の2・5倍は出ていたぞ」

「ええ。まあ。でも僕なんか大したことないです。うちのクラスにはもっと上が居ますから」

(やれやれ。そういうことか。どうりで軍隊相手にスプレー缶ひとつで立ち回れるわけだ)

催眠スプレーで眠らされた兵士達を見て改めて納得した。一流のスポーツ選手が見せる反応速度を凌ぐ速さで動き回る相手に銃を向けるなどナンセンスだ。しかもそんな子供が何人も居たとすると、この程度の基地が制圧されても不思議ではない。

少年がぼつりと口を開く。

「ところでさつきから気になってたんですが」

というや否や少年は目にも留まらぬ速さでこちらに急接近。さすが手を伸ばしてきた。

ふいを突かれたがこれぐらいなら楽に交わせる。

ひょいと右に顔を傾けると空を切った少年の右手が何かを掴んで元の位置に戻った。

(なんだ?)

怪訝に思っただけ少年の顔を見る。

すると彼はぐつと拳を握り締めた後、それを広げてしげしげと眺めた。

「こんな小さいの初めて見ましたよ」

そう言っただけ差し出した手のひらには蠅のようなものが。ただし銀色の破片が少々。よく見るとナノマシンの残骸っぽい。

「……スパイ・インセクトか。彼女の置き土産だな」

なるほど大した動体視力だ。この少年、スピードだけではないらしい。

「あの女の人は仲間じゃないんですか？」

「まさか。利害が一致したから協力し合っただけさ。お互いにな」

「ということはあなたもサアラを？」

「お察しの通り俺も彼女の顔を拝みに来たクチさ」

「サアラは……彼女は、やはり狙われているんですね？」

「そのようだな」

「あなたも誰かの指図でサアラを？」

「そいつは違うな。守秘義務があるんで詳しくは言えないが彼女に近い人物から正式な依頼を受けてる。彼女を見守るようになってな」
「……そうなんですか」

そう言っただけで少年は思考を巡らせるような素振りを見せる。何か迷っているようだった。「それなら……いえ。その」

「言いたいことがあるなら早くしてくれ」

「それなら僕も連れて行ってくれませんか」

「断る」

少年の申し出を拒否して出口に向かう。ガキのお守りなんてまっぴらだ。

「彼女を守りたいんです！」

少年の言葉を背に受けて立ち止まる。

「それに考えがあります。彼女を捜すならば必ず役に立つはずですよ」

「やれやれ。一応、話だけでも聞いてやるか。」

「いいだろう。話せ」

「サアラ達は多分、空路は使わないと思います」

「どういうことだ？」

「サアラに付いている3人の中に飛行機嫌いがいるからです」

「飛行機嫌いだと？ そいつも241便に乗ってたんじゃないのか」

「ええ。離陸前に催眠スプレーを嗅いで眠ってたんですよ。彼はいつもそうです」

「しかし同じ手を使えば飛行機でもヘリでも……」

「そこまで言っただけで少年が手にしたスプレー缶が目に入った。」

「なるほど。そういうことか」

「ええ。だから彼が飛ぶ物に乗る可能性は低いはずですよ」

「そいつは良い情報だ。となるとルートは絞れるな。しかしさっきはそんなこと一言も……」

「知らないと言っただけでサアラのことだけです。連れのことまでは聞けなかったから」

「フン。気に入った。少年、名前は？」

「チャン・バステンです」

「C国人らしからぬ名前だな」

「父が中東出身なんです」

なるほど。確かに中東系特有のホリの深い目鼻立ちをしている。

肌の色は黄色人種のそれだが日本にも居そうな感じの美少年には違いない。

「俺のことはアンカーとでも呼んでくれ」

「分かりました。あ、それとですね。サアラは必ず米国を指すと思います」

「なぜ分かる？」

「それは追いつ追いつ話します。さあ行きましょう」

妙な流れではあるが、サアラ搜索の為には止むを得ないだろう。

* * *

兵舎の玄関を出て来たルートに戻る。途中、ジイサンに通信する。

「ジイサン。飛べそうなのはどれだ？」

『3番倉庫に向かえ。そこに哨戒ヘリがあるはずじゃ』

「燃料は大丈夫なんだろうな？」

『今朝満タンにして午後1回飛んだだけのようなから半分ぐらいは残つとるだろう』

「ところで俺の元パートナーはどこに向かった？」

『お前さんの目の前だよ』

目の前は滑走路だ。(どこに彼女が?) と思いきや滑走路の奥から高出力のエンジン音が聞こえてきた。ちょうど離陸体制に入るところのようだ。

「飛行機をかつぱらったのか」

『いいや。それはお前さんたちが突入してすぐに降りてきたやつじや』

「送迎用にしちゃ随分、ぶっそうな代物だな」

マルチ・スコープのスキヤニングを見て感心した。こいつはバリバリの戦闘機じゃないか。しかも米国製の最新型。とてもB国軍が買えるものではない。

(どれだけ金を遣うつもりなんだか……)

半ば呆れながらさっそうと飛び立つ戦闘機を見送った。

ふと横を見ると少年も同じように空を見上げていた。

(やれやれ。参ったね)

ただでさえ厄介な搜索だというのに妙な邪魔者が入ってくるとなるとチンタラしている暇は無さそうだ。

久しぶりに忙しくなる予感がした。

第10話 パーキング・エリア

昔から飛行機の操縦は着陸の時間が一番難しいという。おまけにへの操縦なんてそうしょつちゅうやるものではないからこの程度で済んだのは実に幸運だった。

「少年、怪我はないか？」

「……普通の人なら死んでたかも」

うんざりしたような口調でそう言つとチャンは身をよじつたまま安全ベルトを外した。見ると彼の座席には大きなガラス片が突き刺さっている。ちょうど彼のわき腹をかすめるような位置だ。確かに常人なら避けようがなかっただろう。

チャンは疲れ果てたような表情で抗議する。

「任せるつていふから信じてたのに」

「任せるとは言つたが『安全に』とは一言も言つてない」

「ついでに行くつて決めたのは僕ですから仕方ないですけど……」

とにかくへりを降りる。

改めてへりを眺めて情けなくなった。

つんのめるような体勢で木に突つ込んでしまったせいで前面部分の損傷が激しい。ひしゃげたプロペラは大木の幹にめり込んでいる。

辛うじて原型を留めているものの使い物にならないことは一目で分かる。

「やれやれ。これでは着陸とは言えないな」

「……どちらかと言えば『墜落』ですよね」

「まあ気にするな。大した差はない。どうせもう乗らないんだから予定通りここでへりを乗り捨て西へ進む」

五分ほど歩けば目的地に辿り着けるだろう。

* * *

目的のパーキング・エリアはすぐ見つかった。

目印は看板がひとつ。黄色い矢印の隣に『P』の文字が赤く光るだけのシンプルなものだ。その看板を過ぎると今度はやたらと明るい公衆トイレのような建物が目に入った。その周りには車のライトらしき明かりが寄り添うように幾つか。恐らくあれがパーキング・エリアの中心なのだろう。時刻は夜中の2時を少し回ったところだ。ここは幹線道路の分岐点に近いのでこんな時間でもトラックが十数台止まっていた。勿論、駐車スペースなど無く、皆が好き勝手に乗り捨てているような具合だ。

砂利を踏みながら先を急ぐ。中央の建物に近付くにつれドライバーの姿をちらほら見かけるようになった。

それを眺めながらチャンが声を潜める。

「良いんですかね……みんなお酒を飲んでいるのでは？」

確かに例外なく皆、酔っているように見える。飲酒運転など誰も気にしている風ではない。恐らくこの連中にとってはシラフでこんな時間まで働くことは法律を理解するより困難なのだろう。

「きつと皆『寂しがりや』なんだろうよ」

「でも飲酒運転なんて……」

「気にするな。俺が操縦するへりに乗るよりは安全だろう」

それを聞いてチャンが首を竦める。

「乗るって……冗談でしょう？ まさかこの人たちの誰かに……」

「そうだ。足代わりになって貰う。一杯奢ると言えば喜んで相乗りさせてくれるだろう」

「ああ」と、ため息をついてチャンは首を振る。

どこからか深夜ラジオの音楽が流れてきて、それに合わせて『飲んだくれ』が陽気に音程を外している。

「中の売店で着替えと食い物を買って来い。自分の分だけでいいぞ
そういつて現金を手渡すとチャンが礼を言う。

「助かります。端末は当分使えないですから」

「だろうな。あの女は君らの端末番号を把握しているからな」

「没収されていた端末は何とか取り返したんですが、安全な所に避難するまでは使うなという指示がありましたので」

「それもサアラの指示か」

「はい。そうです」

電子決済は便利だがその分アシがつき易い。本人しか使えないということとは裏返せばどこでそれを使ったかを探られると居場所が限定されてしまう。これがあるからいつまで経っても現金が無くならないのだ。

チャンが買い物をしている間にこちらのリクエストに合うドライブバーを探す。

通常、待合室や休憩スペースというものは、空港・駅・港の順にお粗末になっていくものだがここは文句なしに最下位だ。ゴミ捨て場で拾ってきたような不揃いなイスやテーブルが集まった部屋に時間潰しをしたい人間がぼつりぼつり。

(ひとりやふたりは居るはずなんだが……)

探すのは日系人。この先にある日本人街のあるK町に向かうであろうドライバーを見つけなくてはならない。

何人が顔つきを見て回ったところ手頃なのを発見。端末の翻訳機能をおんにして声を掛ける。

「よお。大将」

「んあ？ 何だオメエ？」

「見たところ同胞のようだがK町に向かうのかい？」

「フイツ……まあな」

「良かったら一杯おごるぜ。同じのでいいか？」

「いいのか。悪いな」

大して警戒もせず男はこちらの申し出を受けた。酔っている人間との交渉は楽で良い。

休憩スペースに隣接するバーのカウンターでビールとつまみを買ってテーブルに戻る。

「遠慮なくやつてくれ。大将」

「へへ。悪いな」

男はそう言つてジョッキを豪快に傾けた。そして半分以上それを飲み干したところでトロンとした目を向けてくる。

「で、K町まででいいんだな。たぶん明け方になるぜ」

「助かる。弟も一緒なんだが良いかい？」

「いいぜ」

商談成立。出発するまで小1時間ほど仮眠を取りたいということでいったんテーブルを離れる。

チャンを探しに売店の方に移動しようとしたらジイサンから通信が入った。

『兄弟だつて？ 随分あつかましいじゃねえか！』

「ちやかすなよ。そう言つておいた方が無難だろう」

『それもそうじゃな。正直に実年齢を言つちまったら兄弟どころか祖父と孫になつちまうからな』

「いちいち事情を説明するのは面倒だ」

正直に話したところで信じてもらえないのはいつものことだ。年齢を誤魔化すのは本意ではないが自分の場合は止むを得ない。歳をとる事とは無縁なまま四十数年……。

『同級生の立場から言わせてもらつと肉体だけは二十歳の頃と変わらないなんて羨ましい限りじゃぞい』

やれやれ。嫌なことを思い出させてくれる。ジイサンとは長い付き合いだというのに。

「……下らんな」

『そ、そうじゃつたな……済まんかった。ワシも飲みすぎたようじゃ』

「いいよ。慣れてるさ。それよりあまり夜更かしするな。明日は明日で忙しくなるぞ」

『お前さんも気をつけな。そろそろ検問が始まるようだぞ』

「それは想定内さ。大した問題じゃない。幸い相棒も俺と同じ特技を持つているしな」

B国軍は今頃大騒ぎしているらしい。随分のんびりしているように
思えるが、奴らが本気で動き出したらそれはそれで厄介だ。
油断は出来ない…。

第11話 クロック・アッパー

トラックの荷台で揺られながら次の展開について考える。

サアラを追うのは自分達だけではない。あの女……ナミも何者かの指示でサアラを捜している。おそらくB国軍も威信をかけて追跡を開始するはずだ。

（本当に逃げ切れるのか？）

チャンは大丈夫だと確信しているようだが、いくら普通の子供ではないとはいえ無事に出国できる保証はない。

それにサアラを狙っているのはそれだけではないのかもしれないのだ。ナミが言っていた『バベル』という組織……。分からないのは仮にバベルという組織がB国軍を操って航空機ごとサアラ達を誘拐したのだとすると、なぜこの数日間に行動を起こさなかったのか？

サアラ達を監禁している間に目的を果たせる機会は幾らでもあったはずだ。

（サアラだけが標的ならあんな大掛かりなこととはしないだろうに）
実に不可解だ。そもそもそんな組織が本当に存在するのも怪しい。

「ところで少年。よくそんなに食えるな。甘いものばかりじゃないか」

チャンはトラックに乗ってからずっとお菓子を貪り食っている。

それもチョコレートやらマシュマロやら甘そうな物を中心に。

「し、仕方が無いんですよ。僕らは一日に300g以上の糖分を摂取しないとならないので」

「多すぎやしないか？」

「いえ。脳の訓練をした時はどうしても必要なんです。それに今日は大分、脳を酷使しましたから……」

「君らはどんな訓練を？」

依頼主であるサアラの父親からある程度の情報は仕入れていたが

実際に彼らがどんな訓練を受けていたのかは不明だ。

「具体的には脳内血流やアドレナリンのコントロール訓練です」

（なっ！ そんなことが……可能なのか？）

「それから脳圧の上げ下げも。クロツク・アップには必須ですから」

（クロツク・アップ……こいつらはそう呼んでいるのか）

恐らくそれは普段自分が「倍速」「3倍速」と使い分けているスピードアップのことだ。これをやると周りの時間が相対的に緩やかに流れるように感じられる。

「一応、全員一通りの訓練は行うのですがやはり個人差はあって、みんな得意分野は違うんです。僕の場合はたまたまクロツク・アップが向いていたんですね。なので仲間からは『クロツク・アップ』って呼ばれていました」

この能力の源泉もまた『脳の使い方』にある。それは独学で学んだ。

理屈はこうだ。例えばテーブルの上に水の入ったコップがあったとする。そこでそれを掴むという行動に対して脳がどのように働くのかを考えてみる。まず脳は、視覚からの情報を整理してコップまでの距離を測る。それを受けてどれぐらい手を伸ばすかを決定して手に命令を出す。次にコップに触れたという触感から手がコップに到達したと認識する。と同時にコップの質量・質感から判断してそれを握るための握力調整をする。その間にも入ってきた情報を整理・命令を補正し、何度も手に命令を送り続ける。このようにひとつの行動には多くの過程があつて、脳はその各段階で逐一判断をしてから命令をくだしている。が、クロツク・アップはその段階をすっ飛ばすことができる。つまり脳が微調整の為に働こうとする動きを予め封じ込めてしまうことによって大幅に反応時間を短縮するのだ。

（その為のトレーニングをしてきたというのか……）

それをやるにはアドレナリンを意図的に調整することも求められる。それだけではない。恐らく中枢神経や筋肉に命令を伝える末梢神経

なども普通のものではないはずだ。

(……想像以上だな)

C国が必死に隠そうとするのも分かる気がした。

「そういうアンカーさんはどこでクロック・アップの訓練を？」

「……俺か？ 俺は通信教育で学んだ」

「はは。それは嘘でしょう」

チャンはそう笑うが半分は本当だ。はじめてこの能力に気付いたのは七歳ぐらいの時だったか……。何十年も前のことだから正確には覚えていないが。

「アンカーさんは一秒間に何回ぐらい出来ます？」

そう言っただけでチャンは手のひらを握ったり開いたりする仕草を見せた。

「僕は7回か8回が限界です。10回ぐらい出来る奴も仲間にはいませんけど」

謙遜してお茶を濁す。

「……君よりちょっと多いぐらいだ」

「やっぱりね。あのスピードは上位クラスですよ」

脳の仕組み、特にリミッターについてはこの三十年で急速に研究が進んだ。もともと人間の身体能力はその30%しか使われておらず筋組織などを痛めることがないように脳が力をセーブしているという考え方は昔からあった。であればこのリミッターを解除すれば人間はもつと身体能力を強化することが可能、と多くの研究者は考えた。とりわけスポーツの分野においては。しかしながら倫理上の問題から人体実験は厳しく制限され、リハビリなどの医学分野でしか実践が許されないという時代が続いた。その禁を破ったのが他ならぬC国である。

きっかけは2046年のナイロビ五輪。この大会の陸上種目においてC国の選手団が表彰台を独占してしまったのだ。しかも考えられないような世界レコード更新を連発して。それ以降、各国は競ってこの分野の研究を進めた。勿論、水面下で……。

「僕たちは3歳になると同時に寮に入れられました。それからずっとです」

「なるほど。で、他にはどんな能力が？」

「爆点反射。中枢神経からの命令を一点に集中して爆発させる能力です。僕は苦手なんです」

チャンの説明ではパンチやキックなどの攻撃やジャンプなどに応用が効くそうだ。しかし、こんな連中が表舞台にゾロゾロ出てきたらスポーツ界はたちまち席卷されてしまうだろう。

（ひょっとしたらバベルの目的は……こいつらの能力か？）

そう考えると国が直接動く可能性も考慮しなくてはならない。

ひとつは秘密を守る為。そしてもうひとつは貴重な実験体を取り返す為…。

（やれやれ。まさに四面楚歌だな）

どの勢力が一番にサアラに接触するのか？

予断を許さない展開になりそうだ。

第12話 待ち伏せ

他にも色々と聞きたいことはあったがチャンの様子を見る限り休ませた方が良くと判断した。目的地まではあと4時間ほどだから睡眠時間としては不足かもしれない。が、この後どういう敵に遭遇するか分からない中では休息も必要だ。

かくいう自分も座ったまま目を閉じる。例え眠らなくとも脳を休めるだけでも大分違う。目を閉じて楽な体勢をとるだけでも睡眠をとった時とほぼ同じ効果が得られるからだ。

* * *

うとうとしているとふいに端末から声が流れ出た。

『おい！ この先で検問だつてよ！』

そんなドライバーの呼びかけで目が覚めた。

「……軍か？」

『わからねえ。けど仲間からの警告だ。間違いはねえ』

「検問まではあと何分ほどで到達する？」

『10分後ぐらいだな』

「分かった。5分後に飛び降りる。少し速度を緩めてくれ」

『おいおいマジかよ。こんな所で降りたって何もねえぞ』

「心配無用。それより我々のことは……」

『分かってるって！ 同胞を売る真似はしねえ』

この男、ああ見えて義理堅いところがある。一杯奢った後に「家族に美味しいものでも」と握らせた礼金が効いているようだ。

「少年！ 起きろ」

揺り動かすとチェンはC国語で何やら呻いた。そして目をこすりながら周りの様子を伺う。どうやら自らが置かれた状況を把握しようとしているようだ。

「こ、ここは……あれ？」

「5分後に飛び降りるぞ。準備しろ。この先で検問がある」

「え、あ……はい」

お互いに大して荷物は無い。チャンは買い込んだお菓子の残りを眺めながらちよつと迷う素振りを見せた。

「これはどうしましょう？」

「そんな物はそのへんの箱に突っ込んで。また買えばいいだろう」「すみません」

検問なら当然ここも調べられるだろう。そこでサーモグラフィーを使われると厄介だ。なのでドライバーに指示をする。

「冷風を強くしてくれ。熱源が残っていると余計な詮索をされる可能性があるからな」

『了解！ けどホントに止めなくていいのかい？』

「ああ。下手に停車したりするとかえって怪しまれる」

『気をつけなよ同胞！ それじゃスピード落とすぜ』

「色々とすまん。それじゃ後は頼む」

ドライバーに礼を言っただけで荷台の扉を開く。そしてスピードが緩むのを待つ。後方に流れ行く夜の路面を見てチャンが不安そうな顔をする。

「ほ、本当にここから飛び降りるんですか？」

「ああ。お前さんの能力なら楽勝だろ？」

「……そ、それはそうですね」

そこで遠慮なくチャンの背中を突き飛ばす。

「ほれ」

「あっ！」

短い叫び声を残してチャンが転がり落ちる。

すかさず自分も飛び降りる。

（おっと！）

慣性に引きずられて思わず尻餅をつきそうになる。それをなんとか堪えて振り返ると荷台の自動扉を閉めながら加速するトラックが目

に入った。遠ざかっていくテールランプを見送ってからチャンの様子を確かめることにした。

彼は数十メートル手前で路面に転がっている。どうやら着地に失敗したらしい。やれやれと思つてゆっくり歩み寄る。

「ケガは無いか少年。C 国人は体操が得意なんじゃなかったか？」するとチャンは真顔で抗議した。

「それは偏見です！ ていうかいきなり突き落とされたら誰だつて転びますってば！」

「それは失敬。次からは事前に断りを入れることにするよ。『これから突き飛ばしますよ』つてな」

「まったくもう……で、これからどうするんですか？」

「少し遠回りになるが迂回する」

しばらく夜道を歩き、わき道が無いかを探す。しかしどうやら進行方向は真つ直ぐな一本道のようにだ。道幅は車2台がすれ違える程度。路肩は左右それぞれ2m程ジャリが敷いてあつてその先は大人の背丈ほどの葦がびっちり茂っていた。これを掻き分けて進むとなると骨だが止むを得ない。

「あまり気は乗らないがこの中を進むしかないようだな」

「本気ですか？ うええ。嫌だな。大丈夫ですかね？ 暗いし、寂しいし……」

確かに月明かりがなければ辺りは真つ暗に違いない。それに夜風が葦を微かに揺らせる以外に音をたてるものは何も無い。

「なに。歩いているうちに夜は明けるさ」

「いえ。虫とか蛇とかが居そつで気味が悪いんです。アンカーさんは平気なんですか？」

「毒が無ければ問題はなかるう。行くぞ」

適当な場所を選び、葦の茂みに半身を差し込んだ時だった。

(チッ！)

目が眩む。いきなり強い光を当てられた。マルチ・スコープに警告が出る。

『手を上げる！ そっちは道じゃないぜ！』

光源の方から怒鳴り声が聞こえた。ポルトガル語だ。

『こんな所で何をしている？』

（検問はもつと先のはずだが……そうか。手前で待ち伏せか）

大々的な検問はフェイクでその手前で網を張っていたということなのだろう。

『どうした？ 外国人のようだが？』

質問の主は銃を構えたB国軍らしき兵士だ。他に兵士は……ライトの所に1人。

この場から逃げるだけなら簡単だ。が、問題はその後だ。こんな何も無い場所ではアシが無いと話にならない。

やがて前方から軍用車がやってきて兵士は5人に増えた。

チャンはそわそわしている。落ち着かせる為に小声で指示する。

『まだ動くな。車はいつでも奪える。ここは奴らの言いなりに……』

『何を話している！ おとなしくしてろ！』

『いや。別に』

『本部から指示があるまで待て。動くとならんならぞ！』

『どうぞお構いなく』

そんな具合で15分程度待たされた。幸い武器は持っていないかったので手を下ろすことは許されたものの、銃口は突きつけられたままだ。

（この音は……ヘリか）

やがてヘリコプターの爆音が上空に達し、1台の中型ヘリがライトで地上を照らしながら降下してきた。

ヘリは道路の真ん中に着陸する。

『ふん。通行の邪魔だな』

嫌味でそう言ってみた。するとB国軍兵士がご丁寧に答える。

『心配するな。通行止めにしてある』

『ほう。随分と手回しが良いことで……』

中型ヘリからは4人の軍服姿が現れた。そのいでたちは張り込ん

でいた連中とは明らかに違う。

(こいつらは…… B国軍じゃない)

新手の出現に妙な胸騒ぎがした。

『大佐。お待ちしております!』

と、B国軍兵士の1人が敬礼をする。するとヘリから降りてきた中で最後に降り立った人物が「ン」と頷いた。そしてアゴをしゃくする。

「おい。そのガキ! サアラ・タゴールはどこに向かっている?」
(英語だと? しかもこいつはサアラの名を……)

改めて大佐と呼ばれた男を眺めてみる。その軍服。どこの国の軍隊でもない。アズキ色のベレー帽に付いたエンブレムは見たことが無い形だ。

「俺の要件はそれだけだ。質問に答えろ」

そう言つてベレー帽の大佐は鼻下の髭先を撫でた。

趣味の悪い『チヨビ髭』だ。カタカナの『ハ』みたいに見える。

「知りません」

チャンがはつきりとそう答える。こいつらがサアラの行方を尋ねてくるということは裏を返せば彼女達はまだ捕まっていないということ。しかし、この大佐はどういう勢力の輩なのか?

「正直に言え。さもなければ隣の若造にも死んでもらわねばならん」
大佐の脅しにチャンがちらりとこちらを見た。

(やるなら今のうちだな)

そう決心してチャンに軽く頷いてみせる。チャンが息を飲むのが分かった。

恐らく勝負は一瞬。B国軍兵士の背後を取つてうまく盾にするこ
とが出来れば……。

敵の配置を確認する。まず正面には大佐を含めて4人が一列。後
ろにはB国軍兵士が5人。我々は丁度両軍に挟まれた形になる。

(……うまく合わせてくれよ)

目標設定・反転・ダッシュと予め動きをイメージする。チャンの

言うところの『クロック・アップ』だ。

(よし！)

1……右足を軸に反転、銃口を避けるようにダッシュ、距離を詰める。

2……兵士の背後に回り、左手で首を、右手で銃身を押さえる。
『グッ！』

兵士がうめき声を出した時には予定通り。後ろから兵士を羽交い絞めにして大佐たちに対峙するポジションを確保した。見るとチャンも同じように別な兵士を捕まえている。

(よし。いいぞ)

人質にした兵士を盾に大佐に迫る。

「このままお引取り願おうか。こちらとしてもこのまま殺られる訳にはいかないんでな」

いきなりの形勢逆転と我々の俊敏な動きに敵は動揺を隠せない。

大佐の部下は銃口を向けたまま、あんぐりと口を開け、目を丸くしている。ただし大佐だけは別なようだ。

彼はまたしてもチョビ髭を撫でながら感心した。

「ほほう。なかなかの動きだ」

その口ぶりに驚いた様子は無い。むしろ嬉しそうに見える。

「なるほど今の動き、報告通りだな」

(報告？ こいつ何を知ってる？)

こちらが不審そうな顔をしたからかもしれない。大佐はニヤリと笑って説明を始めた。

「ドールの報告で聞いている。瞬身の男だな貴様。フフ。その節は部下が世話になったそうだな。一応、礼は言っておくぞ。」

(ドール？ ナミのコードネームか？ だとするとこいつ……あの女の一味か)

「しかし、なぜ貴様がC国の小僧と行動しておるんだ？」

「こっちはこの少年を連れて出国したいだけさ。だからあんたらが望むような情報は持ち合わせていない」

「ほお……」

大佐はじつとこちらの表情を観察している。明らかに疑っているようだ。

「なるほどな。しかし、どのみち黙って見過ごすわけにはいかんな。第一、B国軍が許さんだろう。なんせ基地をあんな風にしてしまったんだからな」

それを聞いてチャンの表情が少し強張った。それと同時に大佐がすつと右手を挙げた。

「撃て！」

（何?!）

大佐の横で兵士が声を上ずらせる。

「し、しかし大佐！」

「構わん。俺が許可する」

それを受けて大佐の部下達が一斉に銃を構えた。

（しまった！ こいつらB国軍兵士ごと……）

第13話 逃走

チャンに向かって怒鳴る。

「左に飛べ！」

同時に自らも右へ跳ねる。

それと同時に銃口がストロボの連続発光みたいに弾けるのが見え
た。

眼前で銃声と火花と血しぶきがゴタ混ぜになる。

転がりながら騒乱の中心部から距離を取る。

起き上がってチャンの様子を伺う。チャンも何とか避けられたよ
うだ。

「車に乗れ！ 全速だ！」

B国軍車両に向かうよう手で合図する。

チャンはこちらの意図に気付いたらしい。上手い具合にこちらの
真似をして素早く起き上がると反転して車両にダッシュする。路面
を削るような音が背後に迫ってくる。

振り返る余裕は無い。クロック・アップ全開で回避行動を取る。

(まさか本当に撃つてくるとは！)

大佐の部下達が一瞬、躊躇したおかげで何とか避けられた。が、
盾にされたB国軍兵士は銃弾を浴びるほど喰ったようだ。

間一髪、車両に飛び乗り、取りあえず銃弾の嵐からは逃れられた。
ワンテンポ遅れて助手席にチャンが転がり込んで来る。

B国軍車両は屋根つきの四人乗りだった。ある程度の装甲は施さ
れているようだ。が、銃弾に打たれ続けている防弾ガラスは既に白
く濁り始めている。この様子ではあと数秒しかもたないだろう。

(しめた！ すぐ出せる！)

ハンドルを握り、ギアをバックへ、アクセルをベタ踏みする。軍
仕様の車両なので乱暴な運転もOKだ。

「頭を下げる！」

前につんのめりながら車を急発進させる。

加速にものをいわせて十数秒間やみくもにバックする。が、真っ直ぐ下がったつもりが道路から大きくはみ出してしまふ。そこで今度はギアを前方にチェンジ。進路を右に。

「行ける所まで突っ走るぞ！」

迷わず葦の茂みに突っ込む。

スピードは緩めない。足場が悪いので車体は跳ねる。次から次へと葦が体当りを食らわせてくる。視界は最悪。ヘッドライトは気休め程度。

先がまったく見えない中での暴走は自殺行為かもしれない。が、銃で蜂の巣にされるよりはマシだ。それにイザという時は飛び降りればいい。

「ドアは開けとけ。いつでも飛び降りられるようにな」

「ま、またですか？ けど、こんなスピードで……」

「一応、SCはオンにしてある。致命的な衝突は避けられるだろう」
SCのレーダー機能はコウモリが超音波で障害物を避ける仕組みから作られたという。最もこの障害物だらけの中でどれくらい役に立つかは怪しいものだが。

その矢先にモニターが警告音を発する。

「ちよっ！ 赤ですって！」と、チャンが動揺する。

ハンドルが勝手に右に回避しようと動く。逆らわずにハンドルを右へ。

(木！)

視界に朽木が映った、と同時にガツンと左を擦った。尻が浮くほどの反動。スピードを出しているので避けるのもギリギリだ。

チャンが懇願する。

「や、やっぱり危ないですって。もうちょっとスピード落としましょうよ」

「情けない声を出すなよ。もうすぐ降ろしてやるから」

奴らはへりで追ってくるはずだ。このままでは確実に追いつかれる。

(ここいらでチャンを降ろして目的地に徒歩で向かわせるか)

少しスピードを落としてチャンに指示を与える。

「そろそろ下りていいぞ。歩いて西へ向かえ。町までは2時間程度だ」

「ちょ、ちょっと待ってください！ ここで降ろされたって……」

「俺は困になって奴らを反対方向へ引き付ける」

「でもそれじゃ……後で合流するんですよね？」

「出来ればそうしたいところだが奴らがそれを許してくれるかどうか」

そう言っている間にもレーダーに反応あり。後方の上空に機影が現れた。

目一杯ブレーキを踏んで車を止める。

「早く降りろ！ すぐに追いつかれる」

チャンを助手席から追い立てて再び車を発進させる。進路は南東に変更だ。

(出来るだけ奴らを引き付けておかないと……)

1秒でも長くチャンとの距離を広げなくてはならない。

見たところ奴らのへりは『ストライク・ホーク(1)』だ。武装は定かではないが、もし30ミリのガトリング砲を積んでいたとしても太刀打ちはできない。こちらも装甲車とはいえ直撃したら2秒で火だるまにされてしまうだろう。それまでに飛び降りないと……。(クソツ……もう少しなんだが)

SCの設定変更がうまくいかない。SC付きの車は無人だと自動操縦が出来ずに止まってしまふ。裏設定にするには手元端末と連動させてウィルスで錯覚させるしかない。

レーダー上ではみるみるうちに敵が接近してくる。奴らの射程圏内まではあと数秒……。

(駄目だ！ もう間に合わん！)

堪らず車外に身体を投げ出した。

置き去りにされる感覚よりも先に強い慣性に自由を奪われ、弄ばれ、同時に葦の激しい洗礼を浴びる。と、同時に信じられない光景が視界を過ぎった！

(ミサイル!?)

去り行く車両の後部に何かが突っ込む。そして大爆発！

(近すぎだ!)

クロツク・アップしていてもさすがに爆風は避けられない。

(熱っ!)

なすすべも無く熱風に身体ごと持っていかれる。

その勢いで背を地面に叩き付けられ息が詰まる。葦のクッションなどクソの役にも立たない。左わき腹に激しい痛みが走る。

爆炎と轟音を茫然と眺めながらわき腹に手をやる。手のひらに受ける圧力で只ならぬ出血を知る。

(この出血はまずい。破片でも喰らったか……)

痛みで気が遠くなりそうになる。この場から高速で離れなくてはならない。が、身体がまるでいうことをきかない。

(ここで気を失う訳には……)

奴らがこのまま諦めるはずが無い。なにしろ予想に反していきなりミサイルをぶっ放してきたぐらいだ。はじめから我々を消すつもりだったに違いない。恐らく各種センサーを駆使してこちらの居所を必ずつきとめ、止めを刺しにくるだろう。

(時間稼ぎをするつもりが……このままではチャンも危ない)

薄れ行く意識の奥底で焦りばかりが虚しい抵抗を続けていた…。

【用語】

1「ストライク・ホーク」…21世紀半ばまで活躍したブラック・ホークの後継機。ふた周りほど小型化された機体は定員6名と少なめであるが各種センサー・高機能レーダーを搭載し、また武装へり並みにロケット砲や対戦車ミサイルを装備することができる。

第14話 病室にて

うつすらと目を開けるとその隙間をこじ開けるように白が視界に押し入ってきた。

自らの輪郭が呼び起こされ、外界との境界を知覚する。どうやらここは病院らしい。

(……まだ生きている)

正直、安堵感は無かった。あるのは違和感だけだ。これと似たような状況は商売柄、一度や二度ではない。なのでやることは決まっている。まずは途切れた記憶を辿る。次にその後どうなったのか想像する。最後にどこが痛むのかを確認する。そしていつもため息をつくのだ。

(まだ、生きている……)

『歳をとらない』という事と『死なない』という事はまるで意味が違う。自分の場合、切られれば血が出るし撃たれば酷く痛む。それに限界を超えた損傷を受ければ恐らく死ぬだろう。つまり不老ではあるが不死身ではない。そういう意味で実に中途半端なのだ。

最も不老不死を望む人々は少なくない。しかし自分は時々思う。永遠にこの世に存在し続けるということは死んでいるのと大して差はないんじゃないかと。

そんな風に考え事をしていると病室に誰かが入ってくる気配がした。

「具合はどうですか？」

そう言うチャンは元氣そうだ。

「そっちは無事だったようだな。ところでここは？」

「K町の病院です」

「……どうやって運んだ？」

「手伝ってくれた人がいるんです。多分、日系人だと思いますよ」

「あんな時間にあんな場所でうるついていた人間がいるとは驚きだ

な

「旅行者のようにもみえましたけど。スーツケースを持っていたから。なんでもレンタカーで移動中だったみたいです。で、あの爆発を見て事故かと思っただけで近付いてきたって言うてました」

「そうだった。奴らはいきなりミサイルを撃ってきた。あれほど明確な殺意を持った連中がそうやすやすと我々を見逃すはずがない。」

「それにしても奴らよくあれで引き下がったな」

「それなんですけど……」

「チャンが顔を曇らせた。」

「どうした？ あの後何があっただ？」

「それが……僕にもよく分からないんです。ただ、突然、戦闘機が西の方から接近してきたんですよ。それでヘリが逃げていったように見えました」

「戦闘機？ 間違いないのか？」

「ええ。それも二機です。暗くて形とか種類とかは分かりませんが、凄くスピードでしたから」

「西の方角から……。ベッド脇に置かれていた自分の端末で地図を表示してみる。」

あの辺りから最も近いB軍基地はN基地だ。そこから飛んできたのか？ しかしそれでは早すぎる。チョビ髭の大佐がB国軍兵士を射殺してからは数分しか経っていない。あるいはB国軍は既に奴らの怪しいヘリをキャッチしていて戦闘機に警戒させていたとか……。

「結果的にはそれに助けられたというわけか」

「やっぱりあれはB国軍の戦闘機だったんですかねえ」

それは後で調べてみれば分かるだろう。B国空軍の航行記録ならジイサンに頼めば何度でも入手できる。しかし、チョビ髭大佐にしても戦闘機にしてもそれぞれがどういう思惑で動いているのがまるで見えない。であれば、なおさらこんなところでのんびりしている訳にはいかないのだ。時計を見るともう夕方4時を回っている。

「少年。すぐ出発するぞ」

「ちょっと！ 何言ってるんですか。2、3日は安静にしないと。幾ら『自己再生（1）』でも定着しませんよ！」

「自己再生だと？」

驚いた。そんなはずはない。この左手の甲に埋められた個体識別情報では『再生膜（2）』は作れないはず……。なぜなら自分の細胞は専門の研究施設でもサジを投げられたほど特殊な型なのだ。こんな田舎の病院でDNA解析ができるはずがない。

「無理ですってば！ 医者が許してくれませんよ。第一、動けるんですか？」

「歩ければなんとかなるさ」

そう強がってはみたものの実際にベッドから下りようとするとわき腹に激痛が走った。

それを見てチャンが顔をしかめる。

「痛むんでしょ？ まだ動かない方が……」

「いつ追っ手がここに乗り込んでくるか分からないんだぞ」

「でも、駄目ですよ。今から行くなんて無茶です」

反対するチャンを制して立ち上がるうとするが下半身に力が入らない。無理やり左脚を伸ばしてわき腹の痛みをやり過ごす。

すると別な誰かが口を開いた。

「止めた方がいい」

いつの間にか見知らぬ男が病室に入ってきていた。その声の主に見覚えは無い。

（誰だ？）と、不審に思っていると、なんとチャンが軽く会釈をするではないか。

「今朝はお世話になりました。まだこの町にいらしたんですね」

長身の男は挨拶を返す代わりに口元を歪めて微かに笑った。細身の黒スーツに赤いシャツ、ネクタイは銀色。まるでマフィアのアジトでダーツでもやってそうな出で立ちだ。それに何より目を引くのがその顔の小ささだ。真ん中で分けた髪を後ろに撫で付けた頭は『イタチ』のシルエットを連想させる。

(この男のどこが旅行者だ?)

どう見ても普通の商売を営んでいるようには見えない。その足元のスーツケースにしたって中に何が入っていることやら……。

が、チャンは特に怪しむ風でも無く笑顔で男を紹介しようとする。

「この方が病院まで乗せてきてくださっただんですよ」

「……そりゃどうも」

「この病院も手配してくださったんですよ。アンカーさんは本当にツイてましたね」

「そうか。そういうことなら礼を言わないとな」

そう言っただけでチラ見したがイタチのような男は無言でこちらの顔を眺めている。

「旅行者だとチャンから聞いているが？」

すると当たり前だという風にイタチ男は頷いた。

「いかにも」

「世話になったようだから何か礼をしたいんだが」

「その必要はない。ただくれぐれも自愛したまえ」

「……自愛？」

妙に違和感があった。この怪しい男、てつきりサアラ搜索の絡みで接触してきたのではないかと思っただが……。

イタチ男は神経質そうな目つきでじつとこちらを見つめた。まるで

こちらの思惑をすべて見透かしているかのような表情だ。

沈黙を破ったのはイタチ男だった。

「言っておくが、我々はどちら側でもない」

(どういう意味だ?)

その言葉の真意を測りかねているとイタチ男は淡々と話を続けた。「君達を襲った『ヘーラー』。それからB国軍を操っている『バベル』。我々はそのどちらにも属していない。むしろ中立と言って良い」

「『ヘーラー』……はじめて聞く名前だな。ギリシャ神話からとったのか？」

「恐らくは。そもそも彼らが表立って行動することは皆無。よって詳細は不明。だが何を目的にしているのかは分かる」

「目的、ね。まさか物騒なヘリを使ってまで若い女の子のケツを追いかけることじゃないだろうな」

「彼らは『バベル』と同じ秘密組織。恐らく規模も同等、若しくはそれ以上。一度、調べておいた方がいい」

だが、あいにくその手の話には興味が無い。自分は秘密組織の存在などハナから信じていないからだ。そんなものは「カップ」だとか「幽霊」だとかと同じぐらいの信憑性しかないと思っている。

「ご忠告、感謝するよ」

「とにかく深入りはしないように。あまり手間をかけないで欲しい」
(何だと？ その口ぶりだと俺の保護者気取りじゃないか……)
ストレートな質問だが仕方が無い。

「あんた何者だ？」

「……強いて言えば『バベル』に近い。もし、君が我々を理解したいと願うなら「クロード・F・アーシエンジャー」の『輪廻』を読むといい。恐らく絶版になっているだろうが」

聞いたことが無い名前だ。それは小説なのか？

「さて。我々はここで失礼する。いずれまた会うだろう」

そう言っただけでイタチ男は足元のスーツケースを手に取りクルリと背を向けた。

「あ、待って」と、それまで黙っていたチャンが声を掛けようとする。しかし、イタチ男はそれには耳を貸さずそのまま病室から出て行った。

それを見送ってからチャンが大きく息をついた。

「ふう。やはりあの人も関係者なんでしょうか。サアラはどうして色んな連中に狙われるんでしょう。僕にはさっぱり……」

「少なくとも『ヘーラー』とか『バベル』とか妙な組織がサアラを奪戦を繰り広げようとしているわけだ」

「あの人は中立って言ってましたよね？」

「あの男が何者なのかは分からん。第三勢力なのかどうかも」

思ったよりもややこしいことになりつつあるようだ。

まず我々を始末しようとした『ヘーラー』という連中。恐らくナミは連中の仲間だ。それはあのチヨビ髭大佐も仄めかしていた。となると連中の装備を見る限りかなりの資金力がある集団とみていい。それが本当に巨大な秘密組織なのかどうかはともかく、敵に回すと厄介であることは容易に想像できる。

一方の『バベル』。こちらも資金力や政治力という点ではただの犯罪組織ではない。何しろB国軍を意のままに動かしているぐらいだ。その規模や実力は計り知れない。ただ、分からないのは飛行機ごと誘拐しておきながらなぜサアラ達をみすみす逃してしまったのかだ。いったい何が目的なのか？ まったく不可解な奴らだ。

そして今のイタチ男……。こいつは第三勢力なのだろうか。それになぜ自分を助けたのか？

(これ以上、登場人物を増やしてもらっては困るんだがな……)
とにかくモタモタしている暇はなさそうだ。

【用語】

1 「自己再生」：再生医療の一種。本人のDNAと同じiPS細胞を使って損傷部分を治療する方法。

2 「再生膜」：移植することで身体と同化して損傷部分を補うもの。通常はDNA解析情報をプリントしたiPS細胞を培養して作られる。温冷加圧ドラム方式の設備があれば数時間で10センチ四方の膜を作ることが可能。

第15話 監視カメラ

この町を選んだのには理由がある。

もし、チャンの情報通りにサアラ達が米国に向かうのだとしたら国境に近く、また大きな日本人街があるという点でこの町に立ち寄る可能性が高いと思われるからだ。

「日系人が多ければ我々東洋人が目立つこともあるまい」
それを聞いてチャンが膝を打つ。

「なるほど！ 葉っぱを隠すなら森へ、ですね」

「ああ。それに逃走資金を調達する為にはいつかは端末を使わなくてはならないだろう」

「そうですね。確かにサアラも端末は安全な所に避難するまで使うなど言っていました」

「万が一、アシがついた場合でもここなら大きな町からは離れているし国境も近い」

「でも……寄るとしたら本当にこの町なんでしょうか？」

「それは賭けだな。ただ、ある程度ルートは予想できる。例えば飛行機は乗る時のチェックが厳しい」

「ええ。それに大の『飛行機嫌い』が彼女に同行してますしね」

「貨物船はいったん乗ってしまうと海上では逃げ場が無い。となる。やはり陸路を最短で行くのがベストだ。俺ならそうする」

「だとしたら……サアラ達が次に目指すのはベネズエラですかね？」

「恐らくは。ただしその後、メキシコ・ルートに行くかドミニカ方面から島を伝って行くかはファイティ・ファイティだな」

「心配だなあ。治安が悪い国もあるから……」

それは杞憂だと思う。恐らく彼らの特殊な能力をもってすれば銃弾が飛び交う戦場ですら突破してしまうに違いない。

（そんな無駄な心配よりも彼女達と接触する方法を考えなくては）
こうしている間にもサアラ達がこの町を通り過ぎてしまいかもし

れない。そこで端末を開けて子機を3つばかり取り出す。

「これを監視カメラの近くにセットしてくれ。場所は……そうだな。貸金業者が集まっている区画がいい」

「これはスパイ・インセクトじゃないですか。『てんとう虫』型ですわね」

「これを街中の監視カメラに忍ばせて映像を覗かせてもらおう」

この国では普及度はまだ低いものの街中なら数台は設置されているはずだ。なぜなら昔と違って今では「モーション・ジャッジメント（1）」が主流なので人間が映像と『にらめっこ』する必要は無く、貧しい自治体でも低コストで監視システムを導入できるからだ。

チャンが疑問を口にする。

「カメラの映像が見れるようになったとしても、どうやってサアラの姿を拾うんですか？」

「一応、彼女の3D D（2）は幾つか持っている」

「な、何でアンカーさんがそんな物を？」

「身内からオフアーを受けているからな。前にも言ったはずだが？」

「でも、身長とか体型とかは照合できても、もし彼女が変装したら監視カメラの画像で判別するのは難しいでしょう？」

「分かっている。だから『歩き方』でも照合する」

「歩き方ですって？」

「ああ。人間が無意識に歩く時のクセは人それぞれだ。こんなこともあろうかとサアラの歩き方は既にインプットしてある」

手のひら静脈や指紋など身体の特定位で個人を判別する方法は昔からあった。その後、歩き方にも個人差があることに注目して歩行パターンから個人を特定するシステムが開発された。今から半世紀ほど前のことだ。しかし一時はテロリスト達を監視カメラで自動的に捕捉できる技術として導入が図られたものの、数秒間全身が映らないと照合できないという欠陥から次第に廃れてしまった。それでも当時設計されたクロウリー（6つのスパイ衛星が一団となって

地表を監視するシステム)にはこの技術が使われているとの噂だ。

と、そこまでかいつまんで説明したのだがそのことをチャンは知らなかったようだ。

「すごい技術ですね！ それなら指名手配犯を片端から登録しておけばきつと…」

「この世界に何台カメラがあると思っっているんだ？」

「ああ、そっか」

それに犯罪者の数を考慮すれば莫大なコストを要することは容易に想像できる。とはいえターゲットの行動範囲をある程度を絞って網を張る分にはやってみる価値がある。

「サアラの場合、僅かながら左足の方が歩幅が長くて踵の浮くタイミングが遅い」

「ちょ、ちよつと！ 彼女の事どんだけ詳しいんですか！」

「なんだ。嫉妬しているのか？」

「べ、別にそういうワケでは……」

そう言っ顔を背けるところなどほとんど自白しているようなものだ。実に分かりやすい。そのあたりはまだまだ子供なのだろう。

* * *

病院のベッドで出来ることといえばたかがしれている。せいぜい眠ることが眠る努力をすることぐらいだ。

それなのでチャンが帰ってくるまでの間、『ヘーラー』や『バベル』について少し調べてみることにした。とはいえ実在するかさえ怪しまれる類いのものをネットで普通に検索したところで真に有用な情報は集められない。こういう場合はサーチ・エンジンのカスタマイズ(3)が肝になる。そこで経験上、情報源の相対評価やエコー・レベルは控えめに、文脈判定とダブト&シミュミラークルは高めに、そして時系列補正は緩めに設定すると自分好みの情報が効率的に表示され易い。

検索結果を順番に眺めながら考える。やはり、取り止めの無い話が多すぎる。ということは、恐らく『ヘーラー』や『バベル』といった呼び名はごく限られた人間の間に使用される俗称に過ぎず本当の名称は別に存在するのではないか？ 或いはそもそも名前が無いという可能性もある。いずれにせよ次に会った時は『名を名乗れ！』と文句を言つてやることにしよう。

ふいにベッド脇で短いメロディが発せられ「まもなく回診です」のアナウンスが入った。

（今ごろ回診？ 夕飯の時間じゃないのか？）

医者は五分ほどでやって来た。

パーティカル・CTとディテール・エコーの装置を引っ張ってきたところを見ると患部の定着具合を調べるのだろう。

医者がにこやかに尋ねる。

「痛みはありますか？」

有るに決まっているだろう。定番とはいえ下らない質問をするものだ。

「で、あと何時間ぐらいで出られるんだ？」

「な、そんな無茶な。2、3日は入院ですよ」

「予定が詰まっているんだ。何とかしてくれ」

どのみち抜け出すつもりだからあまり良い答えは期待していないが、どうせダメと言うに決まっている。

「無理ですよ。いいですか？ あなたはわき腹を抉られているんですよ。火傷や打撲も全身に数箇所。いったいどういう状況であんな大怪我を……」

「ノーコメント」

「……そうですか。いやそれだけ酷い状態で運ばれて来たもので何事かと驚きましたよ。まあ良いですけどね。色々と事情もありでしょうし」

「良い答えだ。それ以上詮索するならばっ飛ばしているところだ」

医者とたわいも無い話をしている間も看護師はせつせと検査を続

けた。「てきぱきと」と表現すれば聞こえはいいものの半ば「やつつけ」のようにもみえる。多分、残業はしたくないのだろう。

医者が装置のモニターを見て目を丸くした。

「これは?! ……驚きだ。信じられない!」

(医者が患者の前でそんなリアクションをするなよ……)

「いやはや驚きました。はじめてですよ。もうこんなに定着している。自己再生とはいえこれは……」

そうだった。そのことで訊いておかなくてはならなかった。

「ところで自己再生のiPS細胞はどうやって用意したんだ? 俺の個体識別情報ではどうにもならないはずだが?」

すると医者はきょとんとした顔をする。

「おや? お聞きになっていない?」

「何をだ?」

「いえ。DNAデータを頂いたんですよ。あなたのお兄さんから」

(何だと? 何を寝ぼけたことを……!)

まさか! 嫌な考えがよぎった。が、往々にしてそういう想像は当たっていたりするものだ。

……イタチ男!

状況から考えてあのイタチみたいな男がそれを取り寄せたに違いない。どういうルートでどこから入手したのかは分からない。しかし、あいつは自分のことを知っていたということは紛れも無い事実だ。

最悪な気分だ。しかも何が『兄』だ。よくもまあそんな見え透いた嘘をいけしゃあしゃあと……。

「お兄さんは明日も見えられるの?」

医者がのん気にそんなことを聞くので思わず「知るか!」と、返してしまつた。

そして改めて深刻な事態であることを理解した。

(俺はヤツのことを何一つ知らない。だがヤツは……) 往々にして嫌な予感ほど当たっていたりするものなのだ。

【用語】

1 「モーション・ジャッジメント」：引ったくりや喧嘩など普通とは違う動きを予めパターン化しておき、映像に映った対象者の動きから危険や犯罪を機械的に察知する仕組み。

2 「3DD」：3次元デジタル・データのこと。

3 「サーチ・エンジンのカスタマイズ」：検索エンジンのロジックを予め細かく設定しておくこと。例えば、類似語をどこまで辿って対象とするのか、内容をどれくらい疑いながら解釈し選択するのかが等、あたかも自分が実際にネット情報を取捨選択したかのような思考ルーチンで検索を行う事ができる。

第16話 自己再生

医者の診察が終わったところで早速ジイサンに連絡する。

「ジイサン。またちよつと頼みたいことがある」

「急ぎか？ 今日孫の買い物に付き合わされて疲れているんだがのう」

「あまり手間はかけない」

「お？ なんだ。お前さん今どこに……」

ジイサンはこちら側の異変に気付いたらしい。そして画面に顔を近づけて顔をしかめた。

「病院にいるのか？ 珍しいこともあったもんだな！」

「でかいのを喰らった。おかげでわき腹を抉られて自己再生中だ」
「な……」

自己再生と聞いてジイサンは絶句した。驚くのも無理は無い。なぜならジイサンが八方手をつくしても無駄だったのだ。自己再生が出来ないことが判明した時、ジイサンは自分の為に必死に情報を集めてくれた。それこそ世界中のありとあらゆる研究機関のホスト・コンピューターを駆使しても解決方法は見つからなかった。

ジイサンは呻いた。

「い、いったいどうやって？ 信じられん」

「俺も信じられないことだが、ある男が情報を提供したらしい」

自分のDNAデータをプリントしたiPS細胞は培養が不可能だった。必ず細胞分裂の段階で、まるで細胞自身に意思があつてある一定以上の大きさになることを拒否しているかのように自滅してしまふのだ。

「お前さんの細胞は、まあ、ちと特殊だからな。しかし……ある男とか言つたな。そいつはいったい何者じゃ？」

「それが分からないから困っている」

「是非会つてご教授願いたいもんじゃな」

「ところが謎の多い男だね。まあ無駄だとは思うが一応、正体を探つて欲しい。後でこの病院の監視カメラにアクセスしてくれれば顔が拝めるだろう」

『ホイきた。で、それが急ぎの用かい？』

「いや。そつちは暇な時でいい。急いでいるのはターゲットの方だ。俺の予想では彼女は必ずこの町に現れる」

『それで？』

「ジイサン特製のスパイ・インセクトを町なかの監視カメラに忍ばせておいた。前に送った3DDデータで自動捕捉してくれ」

『了解。いつものでいいんじゃない？』

「いつもので頼む」

ジイサンにはチャンに仕掛けさせたスパイ・インセクトを媒体にして監視システムに侵入してもらう。それでうまくサアラを見つければ奴らより先に接触できるはずだ。しかし本当はまだ早いという思いも捨てきれずにいる。任務の性格上、直接サアラに接触するのが良いことなのかどうかはまだ分からない。とはいえ彼女を得体の知れぬ連中に連れ去られてしまうわけにはいかない。

(難しいところだな……)

とりあえず用件は済んだので通信を切ろうとするとジイサンが尋ねてくる。

『ところでその傷はB国軍にやられたのか？』

「いいや。別な勢力だ。どうやらあの女の上司らしい」

『あのナミとかいうべっぴんさんの？ やっぱりタダモノじゃなかつたってことか！』

「よほど金が余ってる連中のようだ。素人相手に平気でミサイルをぶっ放してくるぐらいだからな。コスト意識が欠如している」

『なんとも！ で、どういう経緯でそんな目にあつたんじゃない？』

いちいち説明するのは面倒なのだがジイサンがしつこく聞いてくるので簡単に昨夜のちよつとした冒険談を披露してやった。

話を聞き終えてジイサンがため息をつく。

『やれやれ。そいつは災難だったな』

「ああ。しかし、まさかあそこで『チヨビ髭』がB国軍まで巻き添えにするとはな……」

確か、あの時チヨビ髭はB国軍兵士に『大佐』と敬礼されていた。ということは少なくともあの時点では連中はB国軍と繋がっていたことになる。しかしそうなると大佐がナミを部下だと言ったことと矛盾が生じる。なぜならナミはC国航空機を拉致したのは『バベル』という組織だと断言していたからだ。そして彼女はその陰謀を暴く為に行動しているのだという風に振舞っていた。

（B国軍を操っていたのは『バベル』ではないのか？ そもそも本当に『バベル』なんて組織が実在するのか？）

それはナミが自分の正体を隠すためにでっちあげた嘘に過ぎないのかもしれない。

（しかし、何の為に？）

もし、ナミが本当に大佐の部下でB国軍と繋がっていたとするなら、わざわざB国軍基地に潜入する必要は無いはずだ。果たしてあの時の彼女に何か怪しい行動は無かったか？

そんな具合で彼女の記憶を辿っていると病室にチャンが転がり込んできた。

「遅かったな、少年。観光でも楽しんできたか？」

するとチャンは肩で息をしながらこちらを睨んだ。

「な、何のん気なこと言ってるんですか！」

「どうした。そんなに慌てて」

「慌てるも何も町で噂になってましたよ」

「……昨日のことか？」

チャンは息を整えながら大きく頷く。

「ええ。この町の近くでB国軍兵士が殺られたって」

「報道されたのか？」

「いえ。そうではなさそうです。情報統制されてるようですから」

「だろ。軍にとっては大失態だから」

こんな田舎町で自国の軍人が何者かに惨殺されたなんて、とてもじゃないがニュースには出来ないだろう。恐らくレベル3ぐらいのフイルタがネットにもかけられているはずだ。
チャンが顔を曇らせる。

「じゃあ、いずれここにも軍が……」

「来るだろうな。遅かれ早かれ」

「マズいじゃないですか！」

「確かに。歓迎は出来ないな」

しかし、軍が本気で犯人を捜すつもりならとくにこの町に兵士を派遣しているはず。だが今のところそんな様子は無い。もし、彼らがこの町に乗り込んで来たら、いの一番にここを訪れるだろう。何しろ爆風でボロボロにされた素性の怪しい人間がここに居るのだから……。

「で、どういう風に噂されているんだ？」

チャンが不安そうにこちらの顔を見る。

「詳しくは分かりませんが、兵士が5人殺されて車が爆破されたとか」

「5人だと？」

（まさか、あの大佐……口封じに残りの兵士も片付けてしまったというのか？）

「僕らが逃げた後にみんな殺されちゃったんですね……」

分からない。考えれば考えるほど混乱する。

（B国軍は大佐の仲間ではないのか？ だったらなぜあの時、発砲させたんだ？ いや……待てよ！）

嫌なことに気付いてしまった。それを確かめる為に昨夜の軍用車から拝借してきた物を使ってみることにした。

「少年。そこにかけてある俺の上着を取ってくれ」

「え？ はい……どうぞ」

「こういうこともあるのかと思って取っておいたんだ」

奪った軍用車のSCを裏設定にする際にチップを抜いて上着の内

ポケットにしまっておいたのだ。

「あつた」

チャンが不思議そうにそれを覗き込む。

「何ですか？ それは」

「奴らの車をいじった時に失敬したパスワード・キーだ。これでB国軍の暗号通信を傍受する」

B国軍の通信方法は信号にスクランブルをかけて送受信し、仲間内で共有するパスワードを使って解読するという至って単純なものだった。その際に使用するパスワードは時間ごとに変化する方式を採用しており、送受信者それぞれが持つチップがその時々パスワードを決定する仕組みとなっている。この時、独立した各チップに共通のロジック、例えば演算等と同じタイミングで実行させることでパスワードの共有化を図っている。いわゆる『合言葉』だ。

「問題はこの合言葉をどう設定しているか……」

ジイサンの解析プログラムは強烈だ。乱暴な言い方ではあるが、多くの解析プログラムが対象の外的要件を観察・分析して推測を重ねていくのに対して、ジイサンのそれは初めから対象の懐に手を突っ込んで自白させるというコンセプトが徹底されている。その証拠に今回もわずから分ほどで彼らの合言葉を突き止めた。

「円周率か！ なるほどな」

独りで納得しているとチャンが申し訳無さそうに口を挟む。

「あの。さつきから何を？ ちよつと理解できないんですけど」

「簡単に言つと彼らは円周率を時計代わりに使っているんだ。このチップの中ではずっと円周率が計算されている。つまりそれぞれが持つチップすべてに同じタイミングで円周率を計算させ続けることで他者を排除している訳さ。例えば、今この瞬間における5桁の数字は彼らにしか分らない」

が、チャンは引きつった表情で首を傾げる。

「なんだか理解出来たような、出来ないような……」

「いいか。例えば、俺と君がお互いの時計を15時8分30秒にわ

ざと設定する」

「はあ。わざと正確な時刻とずらすんですね」

「そうだ。それで我々の合言葉、つまり共有のパスワードは『今現在、自分の時計が指し示す時刻』というように取り決めておく」

「そうか！ それなら他の人間には僕らのパスワードは分からないですね」

「そういうことだ。彼らはそれを円周率の演算でやってるってことだ。随分、古いやり方だな」

実際には彼らの場合、数列をらせん構造に並べ替えて縦軸に拾った5桁をパスワードにしている。

「とりあえず……これで傍受できるはずだ」

若干の設定修正をして早速、端末から翻訳後の音声が出るようにした。

チャンが興味深そうに端末から流れ出る音声に耳を傾けた。が、しばらく待つていたものの反応がまるで無い。

「本当にこれで合ってるんですかね？ 何も聞こえませんか？」

「仕方ないさ。奴らだって四六時中交信している訳じゃないからな」
そして、諦めかけていたチャンが大きな欠伸をした直後だった。端末から音声が発せられた。

「先ほど通報があった。犯人は ×町のファルカン病院に入院している模様！」

「こちらオールド隊。現場へは30分かかる見込み。どうぞ」

「よし。ジュニーニヨ隊は真っ直ぐへ向かえ」

「了解。10分で到着します。どうぞ」

「遅い。5分で行け！ そして到着後すみやかに病院を包囲せよ」

「了解！ 仇はとってやりますよ！」

「焦るな。オールド隊の合流を待て」

「敵はたった2人じゃないですか！ 俺達だけで十分ですよ」

「油断するな。一瞬で5人もやられたんだ。敵武装に注意せよ」

B国軍の通信を聞いてチャンの顔色がみるみる青ざめていく。確

かに知らないうちに噂されるのは気分が良いものではない。

「い、いつの間にか僕らが殺ったことにされちゃってますよ?」

「……仕方ないな。これもチヨビ髭大佐のシナリオなんだろう」

「ど、どうするんですか? 早く逃げなきゃ……」

「もう遅い。今から町を飛び出したら出会い頭にやられるぞ」

「じゃあどうするんです? アンカーさんの傷だつてまだ……」

「さっきより痛みはマシだ。それより脱出するから準備しろ」

「準備? 僕は何を?」

パニック気味のチャンを落ち着かせる意味でもここは冷静に行動しなくてはならない。

「まずは着替える。話はそれからだ」

「は? き、着替え? 何に?」

そこでチャンに耳打ちして作戦を指示する。

「非常にベタな方法ではあるがな」

そう断っておいてから自分も準備に取り掛かることにした。

第17話 陽動作戦

準備が整ったところで作戦を決行する。

「少年、なかなか似合うじゃないか」

「ちょっと止めてくださいよ。何で僕がこんな格好を……」

「そうボヤくなよ。サマになっているぞ」

「だって恥ずかしいですよ。女装なんて」

「心配するな。知人に会わなければ大丈夫だ」

「そりゃそうですけど……何でアンカーさんが白衣で僕はスカートなんですか！」

お世辞抜きにチャンの女性看護師姿は板についている。元々華奢な体つきのせいかわピンクの制服を着ているとても男には見えない。ちよつと目の悪い患者なら間違つて恋心を抱いてしまうかもしれないレベルだ。

しかし本人はあまり乗り気ではなさそうなので少し言い聞かせる。

「いいか。この作戦の成否はお前さんの演技力にかかっている。とにかく役になりきることで」

「分かりましたよ。その代わりにヤケクソでやらせてもらいますからね！」

「いいだろう。熱演を期待してるよ」

そろそろB国軍の体制も慌しくなってくる頃だ。この5分あまり彼らの通信をチエックしたところジュニーニヨ隊はすでにこの建物の出入口すべてを抑えていて応援部隊を待っているようだ。また、突入予定時刻はイチ・マル・ニ・マル時、つまり10:20ということも分かった。それに兵士達のだいたいの配置も把握している。正面玄関に3人。裏の非常口、職員出入口、中庭への出口にそれぞれ2名。肝心の急患口には2人。あとはトラックに隊長込みで3人といったところだ。が、作戦中は端末が使えないので通信を傍受するのはここまでだ。

「さてと。我々も始めるとするか」

ここで一旦、チャンとは別れて4階の給湯室を目指す。

消灯された院内の廊下を早足で進む。ところどころから音が漏れてくるのはまだ起きている人間が少なくないことを意味する。階段を下りて4階へ。

* * *

予め下見した際に目をつけておいた古新聞を拾って給湯室に入る。そこで迷わず加熱機の上に古新聞を広げる。別に放火犯になるつもりはないので量的にはこれぐらいで十分だ。換気扇はオフにして加熱器は強に。その間に余った新聞紙を燃えやすいように丸めて適当に散らす。直ぐに焦げ臭い匂いが漂ってくる。そこから煙が出るまでにそう時間はかからなかった。

(少し調整するか……)

煙探知機にうまく煙が触れるように広げた新聞紙を左右に揺すってみたが、どうもうまくいかない。止む無く丸めた新聞紙に火を移して直接、天井に近づけてみる。

(反応が悪いな。ちゃんとメンテナンスしてるのか?)

そう思った矢先に廊下の方でけたたましい警告音が発せられた。

しかし、いざ火災報知機が作動しても人間の動きは往々にして鈍いものだ。恐らくそれは、非日常的な場面に遭遇してしまった場合に人間にはそれを疑ってしまう心理が働くからだ。そこでチャンと手分けして「火事だ!」と、触れて回る。かといって2階の重症患者達までパニックにしてしまうのは気の毒なので比較的傷の浅いと思われる4階5階の患者だけを煽る。が、この場合「逃げる!」という叫び方ではダメだ。「中庭に逃げる!」というように具体的な場所を示してやらないと人は動かない。なにせ冷静になれば誰でも気付くレベルのボヤ騒ぎで比較的元気な患者を外に誘導することが狙いなのだ。

とにかく努力の甲斐あって、何事かと廊下に顔を出した患者達が動き出した。はじめは半信半疑でも彼らも実際に避難する人間を目の当たりにするとそれに同調せざるを得ない。その結果、はじめはパラパラとやがてドタドタと、うまい具合に数十人の入院患者を中庭に誘導することに成功した。

患者達を中庭に送り出してからチャンは不満を口にした。

「なんだか真面目にやるほどアホみたいですね。こんな格好のせいだろうけど」

確かにくだらない行為ではあるが取り敢えず第一段階はクリアした。が、ほっとしている時間は無い。次のステップに向けてチャンを急かす。

「ボヤボヤするな。次は急患口だ！」

* * *

ストレッチャーの上でもがき苦しむ医者を見てチャンが顔を強張らせる。

「幾ら何でもやりすぎでは……」

「気にするな。単なる『お仕置き』だ」

自らの担当医をこんな目に合わせるのは自分の趣味ではないが、こいつを締め上げた結果、軍の照会に対して我々を売ったことを認めたので止む無くこういう措置となってしまった。憐れ密告者は拘束具に自由を奪われ、あまりの痛みにも身もだえしている。まあ痛みとはいつても乳首に『辛子』をたっぷり塗ってやっただけなのだが。その時丁度良い具合に救急車が急患口に到着した。予め搬送を依頼しておいたのだ。す巻きにする前の担当医を脅して。

「さて。ここからが本番だぞ」

「はい。分かってますよ」

「さておいでなすつたな」

救急車の後部が開いて緊急隊員2人が降りてくる。

「搬送する患者はそれですか？」

そこで間髪入れずに救急隊員にストレッチャーを押し付ける。そしてわざと切羽詰ったような声で訴える。

「頼む！ さつき連絡した通りこの医院ではもう手に負えない。一刻を争う。すぐ出してくれ！ さあ急いで！」

こちらの迫力に押されたのか救急隊員は後ずさり気味に了承する。

「わ、わ、分かった！ 急いでK町の総合病院に搬送する！」

その時もう一方の救急隊員が『す巻き』状態の患者に触ろうとしたので注意する。

「触るな！ 下手に拘束を解くと舌を噛み切ってしまうぞ。口の部分は向こうの病院に着くまで絶対に外すな！」

「は、はい。了解しました！」

そんな会話が聞こえているのかどうかは分からないがストレッチャー上の密告者は恨めしそうな目で我々を見上げた。救急隊員が慌しくストレッチャーを車に乗せるのを手伝っているとそこで予定通りB国軍兵士が割り込んできた。

「おい！ 何をしている？」

それにチャンが応える。

「重体の患者を移送するんです」

「なんだと？ それはダメだ。勝手に出るな！」

兵士の命令にチャンが反抗する。

「何を言ってるの？ 命がかかっているのよ！ 今すぐ運ばないと患者が死んでしまうわ！」

チャンの熱演に兵士がたじろぐ。

「し、しかし……今はちよっと」

そこで後ろから近付いて兵士の首筋に2倍速のチョップをくれてやった。

「ぐ……」と、手刀を喰らった兵士が崩れ落ちる。

すかさず現れた別な兵士が状況を見て絶句する。そして我々の顔を見て何かに気付いたような素振りを見せる。

「お、お前ら……」

(よく見ておけ。後でしっかり報告しろよ)

兵士は驚いた表情を一変させて銃を構えようとする。無論、そんな猶予は与えずにクロックアップで間を詰めて手刀をお見舞いする。「ムッ……」と、こちらの兵士も同じようなリアクションで戦線離脱。

兵士2人を片付けたところで落ち着いて救急車の扉を外から閉める。そして運転席に回って運転手に声を掛ける。

「全速で頼む！ とにかく飛ばせ！」

「りよ、了解！」

「よし。行け！」

それを合図に救急車はとても人の命を預かる車とは思えないようなハンドル捌きで急発進、急カーブで病院を出て行った。

猛スピードで走り去る救急車を見送りながらチャンが息をつく。

「ふう。うまくいきましたね」

「ああ。中々の演技だったぞ」

「やめてくださいよ。それよりこの人たちが目を覚ます前に僕たちも移動しなくちゃ」

「そうだな。このまま町外れに向かおう」

「え？ 着替えちゃダメですか？」

「そんな余裕はない。歩きながら脱げ」

「……ホント勘弁してくださいよ」

そんなチャンの情けない抗議は無視してさっさと病院をあとにすることにした。

* * *

人目を避けながら病院を離れ、町中を東へと移動する。万が一、誰かに見られたとしても元々荷物は無いに等しいから夜の散歩を装える。病院を出るまで文句の絶えなかつたチャンは着替えだけはし

っかり持ってきたらしく、道端で脱ぎ捨てた看護師の制服をどこかの家のゴミ箱の中に叩き付けていた。よっぽど女装が気に食わなかったのだろう。記念に取っておけば良いのに。

30分ほど歩いたところで一息つく。コンビニがあったので飲み物とタバコを補給する。チャンは相変わらず甘い物を買って入っている。

時計を見ると11時を少し回ったところ。B国軍の通信を傍受する限り、今のところ我々の動きは掴まれていない。しかもこちらの狙い通り、彼らはダミーの救急車を追跡することと院内で情報提供者を捜し回ることに熱中しているようだ。さつきなど隊長が「これは陽動作戦だ。奴らは救急車で逃げたに違いない」と、ほざいていたので噴出しそうになった。この調子では救急車に追いついた時にかかりすることになるだろう。

(さてと。問題はアシをどう調達するかだな)

そう思って店外を見た。すると駐車場の一角にバイクが数台、その傍らに柄の悪そうな連中がワンセット。

(お！ こいつはツイてるぞ)

彼らなら少々強引なお願いをしても問題はない。あの手のタイプは話が早くまとまるから嫌いではない。それに違法なバイクを乗り回しているということは警察に通報される可能性も低い。実に好都合だ。

早速、チャンを連れて店外に出る。

駐車場を横切り、騒いでいる連中のところに向かう。

我々の姿に気付いた男が怪訝そうな表情を浮かべる。そこで挨拶代わりに声を掛ける。

「今時ガソリン車に乗っているとはな」

なるべく気さくな感じで話し掛けたつもりだったのだが彼らには歓迎するつもりは無いようだ。

「何だ？ あっち行けよ！」

バイクにまたがっていた男がアクセルを回して一際大きな音を出

した。威嚇のつもりか？ 動物みたいな奴だ。

その爆音を聞いてチャンがバイクに興味を持ったらしい。

「へえ。バイクって凄い音が出るんですね。僕、初めて生で見ました」

「今では骨董品だからな。しかし高価なガソリンを無駄遣いするのはよっぽどのおぼっちゃんか只の物好きだな」

「は？ オレらは心底好きだから乗ってるんだぜ！」

そう言いながらこの中で一番『イカレポンチ』……もとい、一番多く頭に付属品をごちゃごちゃぶら下げた男がズイツと前に出てきた。そしてしきりに身体を揺する。かなりカツカきているらしい。しかし男があまりに貧乏ゆすりをするものだから趣味の悪い耳飾りがぶつかり合う音がマヌケに響く。

「ジャラジャラうるさいな。お前は歩く鍵束か？」

「何だお前！ 喧嘩売ってんのか？」

「お前さん達じゃ無理だ。まるで相手にならない」

「な！ てめえ……ブツ殺す！」

と同時に右拳が飛んできたので軽いなす。避けるだけというのも何なので2倍速のビンタを返してやる。

心地よい乾いた音が響く。

何が起こったか理解できないのか男は一寸、間を置いて今度は左拳を突き出してくる。これもスルーして同じくビンタでお返し。

またしても皮を張る明快な音。

普通の人間ならこのへんで異変に気付くはずだ。が、このジャラジャラ男はよっぽど理解力が無いらしい。

「このヤロー！」と、性懲りも無く頭から全力で突っ込んでくる。

止む無く次の瞬間に左手で頭を抑えると同時に右の手のひらと甲でまんべんなく頬を3往復してやった。すると流石にジャラジャラ男も動きを止めた。

そしてきよとんとした表情で尋ねる。

「てめえ……。な、何しやがった？」

「……ジェット・ビンタ」

と、適当に思いついた技の名前を口にしてみた。だがそれが火に油を注いだらしい。男は物凄く顔を歪めたかと思つたと先程より大きく振りかぶり右のパンチを繰り出してきた。学習能力の無い奴はこれだから苦手だ。

(遅い)

呆れると同時に、つい掌底(手のひらの下半分を当てる打撃技)を放ってしまった。

(まずい。今のは3倍速……)

打撃の威力は速さの二乗に比例するのでクロックアップを使う時は加減をしないと自分の拳を痛めてしまっただけでなく相手に致命傷を与えてしまう。案の定、今の一撃でジャラジャラ男は白目を剥いて仰向けに倒れてしまった。

「すまん。やりすぎた」

直ぐに謝意を示したのだがジャラジャラ男の仲間は固まったままだ。

「1台貸して貰いたかったただけなんだが。悪かったな」

ジャラジャラ男の仲間達はまるでバケモノを見るような目でこつちの動作を見守っている。随分と失礼な奴らだ。

「何。用が済んだら乗り捨てておくから適当に回収してくれ。ただし、念のために断っておくが警察に言ったら……殺す」

それを聞いた途端に彼らは首をカクカクと縦に振った。何だ。皆、素直で良い子じゃないか。

バイクにまたがり、チャンを呼び寄せて後ろに座らせる。

「バイクなんて久しぶりだからな。少々、荒っぽいかもしれん。しっかり捕まってる」

「安全運転なんか期待していませんよ。もう諦めています。とつくにね」

「フン。良い答えだ」

早速、アクセルを回してみた。が、加減が分からずいきなり急発

進ってしまった。

（なるほど。チャンの言い分も一理あるな……）

「で、次はどこに向かうんですか？」

「そうだな。やはり国境に近い町を目指すべきだろう」

であれば進路は東に。そしてB国軍の注意が正反対の方向に向かう救急車に注がれているうちに少しでもこの町を離れておこう。

第18話 真相

初めのうちは慣れないバイクの運転に戸惑った。が、高速で走行するうちに安定するようになった。

町を出てからは周りの景色が急速に寂しくなり、ほぼ真つ暗な荒野の一本道を延々と辿る旅路となった。単調なエンジン音を耳にしながらライトに照らされる路面を目で追っていると単純作業をやらされているような気分になってくる。時折、車とすれ違う以外は何の変化も無い。

「少年。そろそろ事件のことを話してくれないか」

よくよく考えてみればチャンと知り合ってからまだ丸一日しか経っていない。しかもそのうち半分は自分が眠っていた勘定になる。なので、例の件をゆっくり聞いていなかったのだ。

「え？ よく聞こえないんですけど」

「親機に繋がればいいだろう」

「あ、はい」

チャンに装着させている携帯翻訳機は耳たぶに装着する型で音声受けは骨伝導、出力は『声帯信号感知タイプ』になっている。いずれも親機の端末を通して翻訳を行うのでチャンネルを切り替えれば直接会話ができる。これなら周りの雑音は関係ない。

「飛行機ごと拉致された時のことを聞かせてくれ」

「分かりました……」

その後続いた『間』が、記憶を辿っている時特有のものなのか躊躇いなのかは分からない。もしかしたら思い出すのが辛いことがあったのだろうか。

「……あの時、僕は疲れていました。結構きつい日程でしたから。半分ぐらいの人が寝てたんじゃないかな」

「乗る前にパイロットが変更になったことは知らされたのか？」

「え？ そうなんですか？ それは聞いてないな」

「乗務員はついていなかったのか？」

「2人……かな。チャーター便でしたから」

機内サービスがあるわけではないので必要最小限の乗務員しか乗っていないかったのだろう。

「乗っていたのは君ら修学旅行の生徒108人と引率の教師5名か」

「はい」

「で、何か異変に気付いたのか？」

「実は僕も少し、ウトウトしてて良く覚えていないんですが、前方の席が騒がしくなっただんです。それで何だろうと思って目が覚めました」

「それで？」

「何人かが窓の外を見て「戦闘機だ」って言うんですよ。僕も窓際だったんで外を見ようとしたんですが僕の位置からは確認出来ませんでした」

戦闘機というのは恐らくミラーージュのことだろう。彼らの座席から見たということとはかなり接近して飛んでいたと思われる。

「不思議に思いましたよ。何で戦闘機がこんな所につて。その時は冗談半分で自分達の飛行機に何か問題があるんじゃないかって話してたんですよ。まさかあの後あんなことになるとは誰も思ってたせんでしたから」

「……ミサイルのことだな」

「え？ ミサイル……あれはミサイルだったんですか。でもなぜアーカーさんがそれを？」

「調べれば分かることさ。で、揺れたのか？」

「ああ、そうですね。確かに揺れました。というよりカミナリかと思いましたが。ピカピカって時間差で光ってそのあとグラグラってきましたから」

「機長は？ 機内放送はしなかったのか？」

「特に何も。代わりに乗務員の人と先生たちが「落ち着け」「座つてろ」と」

「窓の外は見たか？ 何か変わった物……例えば粉末状の物が浮遊していたとか黒っぽい霧が出てたとか」

「夜ですからねえ。それは気がつきませんでしたけど窓が濡れていたのは覚えています。雨でも降ったのかなあつて」

それは電磁波吸収素材が付着したものだろう。航空機の前方で爆発したチャフ・ミサイルから出た吸収素材が霧状になって機体を濡らせたのだと考えられる。

「君らにはその時何が起こっていたかは分からなかったろうが、B国軍は旅客機をレーダーから隠すために特殊なミサイルを撃つただ」

「隠す？ なんの為に……」

「単なるハイジャックならそこまでする必要はなかるう。だが、その工作の結果、君らはレーダーから突如消えた。つまり行方不明になったつてわけだ。ニュースでは墜落したことにされているがね」

「そんな……」

そう言つて絶句したチャンは少なからずショックを受けているようだ。或いはこの信じられない事実を聞かされて戸惑っているのかもしれない。なぜ自分達がそんな目に遭うのか、誰が何の目的でそんなことをするのか、どう解釈して良いのか分からないに違いない。「ところでその時機内は？ パニックにならなかったのか？」

「その時、初めて機長から緊急着陸することになったと放送がありました。で、ベルトと酸素マスクを装着するよう指示が……でもその酸素マスクに催眠ガスが仕込まれていたんですね」

「それで皆眠らされてしまったと」

「いえ。サアラが……あ、彼女は僕の斜め前に座っていたんですがサアラが突然マスクを外するのが見えたくんで僕も何となく真似してみました。周りの何人かも同じように」

「ほお。匂いで気付いたか」

「みたいですね。甘い香りがしてましたから。それで結果的にサアラの周りの何人かは眠らされずに済んだんです。でもそのおかげで

そこからの数分間は地獄でした」

「で、海上に着水したんだな」

「外は真つ暗でどこに降りるのか分かりませんでしたし、何が何だか分からなかつたです。本当、生きた心地がしなかつたです」

代打に指名された機長の名は『パウロ・イルニシヨス』。さすが元空軍のエース・パイロットだ。夜の海面に着水させるとは実に大した腕前だ。

「それから10分ぐらいでしたか。すぐにライトが幾つか近付いてきたんです。はじめは救助船だと思つたんですが……違つていました」

「B国海軍だな。予めポイントに待機してたつてわけか」

「海軍かどうかは知りませんが機内になだれ込んできたのが兵士だと分かつて驚きましたよ。とても助けに来たぞつて風には見えませんでしたから。銃を構えてるわ、眠つてる生徒を叩き起こすわ、とまあ、凄く乱暴でした」

「それで外に出されて船に移つたんだな」

「ええ。けど、その前にあまりに兵士が乱暴なんで眠つてなかつた生徒の一部が怒つて立ち上がるうとしたんですけど、先生たちが「抵抗するな！」つて叫んだんです」

「なんだと？」

教師達は眠らされていなかった……だとすると彼等は始めから計画のことを知つていたとでもいうのか？

「サアラも制止したのでその場は収まりましたけど本当に一種即発つて雰囲気でした」

「賢明な選択だな。幾らクロック・アップ出来るといっても狭い機内で戦つたらどうなることか」

「ですよ。さすがサアラだなと思ひましたよ。それに彼女はその時に不審に思つたようですし」

「……事故じゃないことに気付いたんだらうな」

「監禁されている時にサアラは、先生たちが冷静だったのは変だと

言っていました」

やはり頭のキレる子だ。その状況下で冷静に、しかも限られた情報から正確な判断をしている。もし、教師達がこの計画に加担しているとなるとただのテロではなく、もつと根が深い問題に違いないであれば下手に抵抗するより大人しく従う振りをした方が賢明だ。

「サアラは他に何か言っていないかったか？ 君等なりに推理はしてみたんだらう？」

「……それは」

「今さら隠す必要はあるまい。君等の存在自体がC国の国家機密だということとはもう分かっている。それにある程度自覚していたんじゃないか？」

その質問にチャンは即答しなかった。チャンは仲間に配慮しているのだらう。ということはまだ自分のことを完全には信用していないのかもしれない。そもそも昨夜聞いた特殊訓練の話を聞く限り、彼等は幼い頃から宿舍暮らしで世間をまるで知らない。ある意味、仲間こそが家族であり外の世界の住人は未知なる存在に過ぎないのだらう。

少し質問を変えることにした。

「恐らくサアラも迷っていたんじゃないか？」

「え？ サアラが……迷う？ どういうことですか！」

「ふん。サアラ絡みになると途端に反応が変わるな」

「な！ そ、そんなこと……」

「いいだらう。これはあくまでも俺の推測なんだが、もしも第三者がC国の国家機密を狙って君らを拉致したのだとすれば、なぜ教師達がそれに加担する必要があるのか？ 彼等はC国の息がかかった人間のはず。仮に第三者に懐柔されて裏切ったのだとしても5人同時に、それもC国諜報部がその前兆をまったく把握していないのは不自然だ。そこで考えられる可能性はひとつ。君等の学校はC国の中でも特殊な存在で、ある程度独立していたのではないか。それが何らかの理由で本国に反旗を翻した、というのが真相じゃないか」

チャンはまだ黙って聞いている。

「君等の学校が軍の系列かどうかまでは分からないが、国上層部は焦っただろうな。大使が右往左往するのも分かる」

チャンがぼつりと口を開いた。

「目的は……何だったんでしょ」

「さあな。一芝居つってまで君等を隠すということはその先に何か目的があるんだろう」

「やはり僕らは戦争の道具にされるんでしょうか」

チャンの口ぶりは半ば自暴自棄になっているようにも聞こえた。

彼等が学校で受けていた訓練の大半はどう考えても健やかな『社会貢献』に備えたものとは言い難い。そのことは彼等も十分承知して、いてそれなりに胸を痛めているのだろう。

「慰めになるかどうかは分からないが……君等はまだ若い。それに道はひとつだけではないと思う。現に自分達の力だけでB国軍基地を脱出してみせたじゃないか。絶望するのはまだ早い」

長い間があいた。後ろに座るチャンの様子は分からない。が、心なしに自分の腰に回した彼の腕に微かな力が加わったように感じられた。

「ありがとうございます。サアラと同じですね」

サアラと同じと聞いて少し驚いた。

「彼女も同じようなことを君等に話したのか？」

「……ええ。それでバラバラに逃げようってことにしたんです」
「なるほどな」

「彼女の言うことに反対する奴は一人もいませんでしたよ。それに「これからは一人ひとりが強く生きていかなくてはならない」とも言っていました。これまでの自分達は一心同体で育てられてきた。でも、いずれは外の世界に出なくてはならない。今こそその時だと。僕もその通りだと思います」

やはりサアラという女の子は大した人間だ。とても14歳とは思えないリーダーぶりだ。チャンが彼女に心酔するのも頷ける。

「ところでB国基地で監禁されている間に8人が連れ去られたと言ったな？ そいつらはどうした？」

「残念ながら彼らを助け出そうということにはなりませんでした。作戦を成功させるには仕方がありませんでした。彼らの居場所を特定して救出するとなると余分に時間と労力を使ってしまうから……」

「それもサアラが判断したのか？」

「ええ」

「なるほど。情に流されない、か」

「でも！ それは決して彼女が冷たいとかじゃなくって！」

「分かってるさ。時にはそういう決断も必要だ。むしろその歳でそれが出来るなんて尊敬に値するよ」

それは本心だった。とにかく間接的な情報ながらサアラ・タゴールという少女の人物像が少しずつ判明してきた。その面からいうとチャンを連れて来たのは正解だったといえる。勿論、ここまでの情報だけで『決断』をすることは出来ないが……。

『おい！ アンカー、起きてるか？』

突然、ジイサンのだみ声が通信に紛れ込んできた。

「起きてるよ。今、ツーリング中だ」

『早速だが良い知らせと悪い知らせがある。どっちから聞きたい？』

「勿論、良い方からだ」

『やはりそう来ると思ったわい。良い知らせというのはだな、お前さんに頼まれた娘っ子のことなんだがな……』

「サアラが見つかったんですか！」

『なんぞいな？ お前さんは確か』

「チャンです。アンカーさんに同行させてもらっています。で、サアラは？」

『直接、話するのは始めてかいの。ワシは……』
そこで堪らず口を挟む。

「ジイサン。悪いが自己紹介は後にしてくれ」

『スマン、スマン。で、その娘なんだが、確かにカメラに写ったぞ』

「え！ ほ、本当ですか！ 良かった。無事で……」

「で、時間と場所は？」

『お前さんが仕掛けたより前だったな。今から10時間ほど前じや』

「何？ 俺が病院に居る間にもう到着していたのか」

「そんなあ。じゃあもつと早く町を探索すれば彼女に会えてたかもしれないのか……」

『写っていた場所は銀行、量販店、それからバイク屋じゃの』

銀行や量販店はともかくバイク屋とは……意外な所に現れたものだ。

「アシを確保するつもりだったのか。となるとやはり山越えを考えているようだな」

それを聞いてチャンが不安そうに呟く。

「大丈夫かな……」

『決済情報も調べておいたから送っておくぞい。それとついでにここで買ったバイクが走っている映像も見つけておいたぞ』

流石はジイサンだ。それは助かる。

「で、彼女達はどっちに向かった？」

『今、おまえさん達が向かっている方向で合ってると思うぞ』
途端にチャンがはしゃぎ出す。

「本当ですか！ やった！ サアラに会えるかも！」

「やれやれ。で、ジイサンよ。一応、悪い方の知らせも聞いておくか」

『ああ、そうじゃったの。悪い方というのはだな。ワシがあの娘の電子決済情報を照会してた時に気付いたんだが、先約があったみたいだ』

「先約？」

それでピンときた。元はといえば彼等の端末情報はナミから入手

したものだ。

『直前に何者かがシステムに侵入した形跡があったわい』

「分かった。敵もサアラの居場所を特定したということだな」

喜びも束の間、チャンが慌てる。

「て、敵ってどういうことですか？ サアラは大丈夫なんですか！
どうなんですか！」

「そう喚くな。逃走資金を得る為に端末を使うのは仕方ない。それを使った時のリスクぐらい彼女も想定してたはずだ。だからそう簡単には捕まりはしないだろう」

『水を差すようで申し訳ないんだが……悪い知らせというのには続きがあつての』

「なんだよジイサン。まだあるのか？」

『お前さん達が向かってる方向じゃがの。得体の知れん武装ヘリが6台向かっておる』

「なんだと!？」

そんな事なら先に悪い方を聞いていれば良かった。これは急がないとまずい。

「チャン！ しっかり捕まっている！」

それと同時に車体が浮き上がるぐらいにアクセルを全開にした。

第19話 漆黒の森

走る。走る。ただ、ひたすら前へ。

漆黒の間を切り取る明かりに向かってひた走る。風を置き去りにして。

『バカな！ また反応が……』

突然、ジイサンのすつとんきような声が入った。

『どうしたジイサン。急に大きな声を出して』

『いやな。見間違いかと思っただが……間違いない。お前さん達が追ってるお譲ちゃんだかの。端末を使っておる！』

『何？ この状況でか？ それじゃ居場所が奴らに……』

『どうやら移動しながら通信しとるようじゃ』

『ジイサン。そっちで見てる映像をこっちにもくれ！』

『よしきた！』

我々の会話にチャンが口を挟む。

『どうということなんです？ 敵はサアラ達の端末情報を拾って追跡してるんですよね？』

『ああ。しかし、なぜ自らの居場所を教えるような真似を……』

マルチ・スコープの左側で位置を確認する。我々の現在地は青い三角で表示されている。その35キロ先に国境に最も近い町がある。その町から少しずつ離れていく緑の三角形が4つ。それに向かうように8時の方向から6つの赤い三角！

赤の物体は衛星で拾ったエネルギー反応を表しているのだが、その移動速度からするとジイサンの報告通りヘリである可能性が高い。

緑の三角形は国境に向かっている。だが……道を外れている？

『ジイサン！ サアラ達はどこに向かっている？ この先は国境ゲートじゃないぞ』

『川と……森じゃな。ぼつんと森が広がっておるわい』

地図を拡大してみる。確かに荒地の中にぼつんと森がある。まる

で大海原の無人島のような具合だ。その森の右側に沿うような形で川が流れている。

「森を突っ切って行くつもりか？ ジイサン！ 森の先から国境まではバイクで行けそうな地形か？」

「ちと待つてくれい。ウウム。山岳地帯には違いないが……直ぐには出んぞ。クロウリーなら簡単に高低差も出せるんだろうが」

さすがのジイサンでもクロウリーに侵入する訳にはいかない。他の衛星ならちよくちよく映像を拝借することが出来てもクロウリーは別格だ。

『出たぞい！ こりゃ車は厳しいが、バイクならなんとか行けるかもしれない』

やはり、サアラ達はこれを狙ってモトクロス用のバイクを購入したのだろう。しかしそのコースを取ることで車での追跡は逃れられてもヘリまではやり過ごせまい。だとしたらなぜ居場所知られてしまう危険を冒して端末を使う？

(……いや！ 逆だ！)

これはサアラ達の狙い通りなのかもしれない。

「まさか！ 誘い込んでいる？」

その言葉にチャンが驚いて尋ねる。

「ど、どうしたんです？ 誘いこむって？ サアラ達は何を？」

「端末を使えばいずれ敵が追ってくることは計算済み。恐らく自分達が追跡されていることも気付いているはず。あとは国境に辿り着くまでにどう障害を取り除くか……」

「む、無茶ですよ！ だ、だ、だって相手は武装ヘリなんでしょ？」

サアラ達の端末機能は不明だがちよつとでも警戒していれば追っ手の存在に気付くだろう。ましてやこんな辺鄙な所で……。

「森に逃げ込めば直ぐには捕まらん。だが、そこで迎え撃つつもりだとしたら……危険すぎる！」

「早く行きましょう！ サアラを助けなくちゃ！」

「バカを言え。俺達が行った所で何の助けになる？ 相手は武装へ

りだぞ」

「そんなこと言ったってサアラが危ないんですよ！　なんとかしてくださいよ！」

もしも追っ手がナミの一味だとすればサアラの命を奪うような真似はしない……とは思う。少なくとも彼女はサアラのことを『大事なミラクル・クロップ』と言っていた。しかし相手があの残酷なチヨビ髭大佐だとすると……その保証は無い。

「ジイサン！　ヘリのスペックはまだ分からないのか？」

『これ以上は無理じゃ！　情報が少なすぎる。B国軍じゃないことは確かなんだが』

武装ヘリの戦闘力を把握したところで何の対策にもならないことは分かっている。しかし……。

（いったいどうするつもりだ？）

このままのスピードで行けばあと15分ほどでサアラ達には追いつく。が、その前にヘリの方が彼女達に追いついてしまう。

（それまでに森へ入れるのか？　ギリギリだ）

「まだですか！　もっとスピード上げてください！」

「これ以上は無理だ。どのみち奴らの方が先に追いつく」

「そんなのダメですっ！」

「お前が駄目と言っても……」

こんなスピードで舗装されていない道を爆走するのは自殺行為に近い。下手をすればどこが道なのかさえ判別できない。それでも集中しながら暗闇に突っ込んでいく。頼りはマルチ・スコープの表示だけだ。

（川！？）

辛うじて進路を調整して古い石橋へ誘導する。これを見過ごしていたら危つく川にドボンするところだった。とにかく川を越えれば森まではあとわずかだ。

「あ！　森が！　森が見えてきましたよ！」

ここからでは目を凝らしても夜の森は黒山のようにしか見えない。

「ああつ！ あの光は！」

後ろでチャンが騒ぐ。

見れば分かる。複数のライトが低空で移動している。合わせて爆音が響いてきた。

ヘリの集団、と思われる光と音の群れは迷うことなく森の上空に侵入していく。

スピードを維持したまま森へ向かう。足元は益々不安定になり、ハンドルを押さえつけるのも一苦労だ。

前方の黒い輪郭が視界に広がっていく。夜の森はまるで今にもこちらを飲み込まんとするクジラのように見えた。

流星にこの速度では突入出来ない。急ブレーキをかけながら木と木の隙間にタイヤを差し込む。その途端に次の障害物が目に入る。

右へ左へ、ライトの前に次々と現れる木の幹を必死に避ける。枝が次々と高速ハイタッチを求めてくる。

落ち葉が執拗にスリップを誘う。
根っこがしきりにタイヤを跳ね上げようとする。

（駄目だ！）

このバイクでは限界だ。深く入れれば入るほど前への推進力が奪われる。これではサアラ達に追いつくどころか離される一方だ。

いったんバイクを止めてサアラ達の位置を確認する。

（……おかしいな）

マルチ・スコープの表示から緑が消えた。それに対して赤はいつの間にか分散して陣形を整えている。速度は落としているようだ。

（降下ポイントを探しているのか？）

もし、サアラを捕らえるのが目的なら奴らは必ず兵を投入してくるはず。その為には一度はヘリを降下させなくてはならない。

「アンカーさん！ あれ！」

チャンが指差す方向を見ると上空に一等星よりふた周りくらい大きな赤い光。リーダーと比べて位置を把握する。

（意外と近いな。迂回するか）

左前方に少し段差が厳しいが雑草が少な目の場所を発見した。

「よし。もうちょっと近付いてみるか。いくぞ！」

「お手柔らかに」

「あまり喋らない方がいい」

「何で？」

「舌を噛む」

バイクを急発進させる。加速の力を借りて段差を越えようとしたが、勢い余って飛び石が水面を跳ねるように車体を持っていかれてしまう。バイクごと倒れないようにするには何度も足で地面を蹴飛ばさなくてはならない。そのうち靴底が磨り減ってしまうに違いない。とにかくバイクにしがみつきながら道を掻き分け、赤い光に近付いていく。

（もうすぐだ！）という所まで来て、またもや行き場に迷って足止めを食らってしまった。

（おや！？）

マルチ・スコープに再び緑の表示が出た。意外な事にここからそう遠くない場所に反応がひとつ。他の3台は北西へ移動している。

（二手に分かれたのか？）

1台だけ止まったということはこの辺りでゲリラ戦を仕掛けて敵を足止めさせるつもりなのだろうか。しかし相手のへりは6台。しかも既に先回りされている。

「ツーリングはここまでだ」

バイクはここで諦めることにした。

慎重を期して周りの様子を伺いながらゆっくりと前進する。恐らく敵も地上に兵を降ろしているはずだ。いつ遭遇してもおかしくはない。

「少年。準備はしておけ」

「はい」と、頷いてチャンがスプレー缶を取り出す。そして軽くそれを振ってから顔をしかめる。

「もうあんまり残ってないや」

「またそれで眠らせる気か？ イザという時は殺す気でやらんと殺やられるぞ」

「でも、ぼくには……」

「格闘技は習わなかったのか？」

その問いにチャンは答えなかった。

我々に武器は無い。基本はクロック・アップでの回避だ。

が、迷った。多分、この子には無理だ。B国軍基地を脱出した時とは訳が違う。あの時は油断している相手を不意打ちすることで何とかなったかもしれないが今回は違う。敵は殺したくない。でも守りたい。それはきれいごと過ぎない。サアラを助きたい一心だけではどうにもならないだろう。

(チャンをここに残すか……)

そう思って後ろを振り返らずに伝える。

「殺す覚悟が無いなら……ここで待ってろ」

返事は無い。チャンがどういう表情をしているかは想像できた。彼が何を考え、どういう行動を取るのか、それは分からない。が、草を掻き分ける音は途絶えることなく自分の後について来る。

その時、前方で怒号と光の点滅が！ あの音は自動小銃……。が、それは数秒で収まった。

(近い！)

……が、その後の静寂が不気味だ。誰かが発砲したということは敵がサアラ達を発見したと思われるのだが。

マルチ・スコープを暗視・赤外線モードに切り替えて音のした辺りをズームしてみる。しかし、木々が邪魔になって人影らしき物体はキャッチできない。

ザッ、と背後で草が乱暴に踏み潰される音がした。

驚いて振り返るとチャンではない何者かの姿が目に入った。

(しまった！)

よく見るとチャンよりふた周りほど大きな体格の主がチャンの頭を片手で掴んで木の幹に押し付けている。

(3倍速掌底で頭を狙うか……)

右手に力を貯め、ダッシュ体勢をとろうとした矢先だった。

「チャン？ チャンじゃないか！」

「え？ ダアシンシン！」

という会話が聞こえた。その場違いで奇妙なやりとりを聞いて動きを止めた。

「チャン！ なぜ君がここに？」

「僕しか残らなかつたから……あの人に連れて来て貰ったんだ」

チャンがこちらの方を見たのでダアシンシンと呼ばれた大柄な男もこちらに顔を向けた。やけに上半身の発達したいかつい少年だ。

坊主頭に眉間の深いシワが特徴的だった。

彼はチャンに尋ねる。

「味方なのか？」

「うん。サアラを敵から守る為にここまで追つて来てくれたんだ」

「そうか。君がそう言うなら信じるよ」

マルチ・スコープの集音センサーが反応した。9時と2時の両方向からこちらに向かってくる物体あり、と出た。

「奴らが来るぞ。再会を喜び合うのはその後だ」

二人に声を掛けて迎撃の体勢をとる。迎撃体勢といってもせいぜい心の準備をするぐらいなのだが。

「俺とチャンは2時からの敵を叩く。君は9時方向の敵を静かにさせてくれ」

大柄な少年は自信ありげに手の甲で鼻の下を擦る。

「いいですよ」

二手に分かれようとした時、先に9時方向の敵が我々に接近してきた。

そして叫んだ。

「投降しろ！」

その距離、50m前後。

少年は迷うことなく走り出した。そしてジクザグに跳ねながら標

的に近付き、あっという間に一撃を加えたようだ。敵は発砲することなく静かになる。この少年も大柄ながら動きは中々のものだ。それに跳躍力が凄い。まるで3段飛びの陸上選手のようにジャンプする。しかも大して助走もせずに、だ。

(感心している場合じゃないな)

右斜め数十メートル前方で別な連中の怒号が響く。

「そこに誰か居るのか！ 撃つぞ！ 出て来い！」

その声はちよつと上ずっている。仲間がやられたという情報は彼らにも入っているのかもしれない。

が、ここは敢えて心を鬼にしてチャンをいかせることにした。

「チャン。お前が行け。だがスプレー缶は置いていけ」

そう言っただけで、こぶし大の石をチャンの手に握らせた。

「……そ、そんな」

チャンは情けない程にうろたえた。そして哀願する。

「許してください……僕には無理です」

土壇場にきても駄目か。というより、この子には根本的に向いていないような気がした。

チャンをけしかけるのは諦めて敵に向き直る。

(1、2、3人か。左から順番に……)

イメージを浮かべる。あの木とその先の木を縦に左から回り込んで最初の敵を叩く。

敵との距離が縮む。標的があポイントに到達したらスタートだ。

(来た！ 1……)

1 …… 6歩で手前の木の裏へ。

2 …… さらにその左手の木へ。盛り上がった根っこはジャンプで越える。

3 …… 標的の右側から近付き、右の掌底を首とヘルメットの間打ち付け！

「ぎっ！」と、首を曲げながら標的が呻く。

そのままスピードを緩めずに右へ流れながら次をイメージする。

二番目の標的は仲間がやられたことに気付いた様子。その隙に畳み掛ける。

1 …… 標的の左側から接近。

2 …… すれ違いざまに左の手刀を首筋に打ち込む。

3 …… 標的の横をすり抜け5歩先へ。すかさず反転。二番目を視界に捉える。

三番目は状況が掴めずオロオロしている。仕上げは後ろからの急襲だ。

1 …… 姿勢を低くしながら反時計回りに標的の死角から背後へ。

2 …… 方向修正、標的の背後に向けて直進。

3 …… 左ひざを突出し標的の腰にぶつける。吹っ飛ぶところに追いついて右腕で首をフック。体重をかけて地面に叩きつける。

……終わった。

右腕に残るは骨を砕いた時の名残り。その感触は何度経験しても気持ちのいいものではない。

この一部始終をチャンは目を逸らさずに見ることが出来ただろうか。残酷なようだが殺さなければ殺される。修羅場というものは冷酷に人を分類するものなのだ。

(銃声!?)

振り返ると背中をこちらに向けた兵士らしき姿が2つ。

(あの方向には誰も居ないはずだが?)

チャンと少年は後ろに居るはず。不思議に思ってダッシュする。

「ぎゃっ!」「ぐぎっ!」

ほぼ同時に悲鳴が発せられた。思わず足を止め、マルチ・スコープの暗視・赤外線モードを解除した。

目を閉じてゆつくりと数を数える。目を開けて暗闇に目を慣らす。視界を支配していた漆黒が徐々に薄れ、草木の輪郭が黒く縁取られていく。

無の世界のように辺りは静まり返り、時は息を潜めた。

見られている、という気配。

……無言で互いの存在を探っている状態か。

(間違いない……)

その落ち着き、殺気、雰囲気。冷たい感触が背筋に触れる。手探りの空間に居ながら確信した。今、目の前に対峙している人物。

「……サアラ・タゴール」

自然とその名を口にしていた。

第20話 先の見えない世界

静寂に包まれた森に緊張感が漂う。

月光が木々の隙間を縫って差し込んできた。雲の位置が変わったのだろう。地表に落ちた月明かりは目の前に立つシルエットを青白く照らし出す。おかげで顔が判別できた。

(……サアラ・タゴール)

インド人の父と中国人の血を引く少女。映像で見ると随分、印象が違う。黙ってこちらを眺めるその顔……その大きな瞳は哀しさを宿しているように見える。まるであらゆるものを諦めざるを得なかった人のような哀しい目だ。全体的な目鼻立ちはインド人特有のものに近い。だが肌の色や目元には東洋人の血が反映している。パーツのバランスは申し分なく美少女といっても誰も異論はあるまい。髪は後ろで縛っているのだろう。白っぽい『つなぎ』を着ているが、首から肩にかけてのしなやかなラインに女の部分が感じられた。むしろ彼女の体つきはネコ科の動物を連想させた。

どのぐらい無言で対峙していただろうか。沈黙を破ったのは追いかけてきたチャンの声だった。

「サアラ！ 良かった！ 無事だったんだね」

前へ出ようとするチャンを制する。

「待て。まだ味方と決まったわけでは……」

すると直ぐに反応があった。

「チャン？ その声はチャン・バステン？」

低く抑え気味ではあるものの、それは女の子特有の声だった。

「うん。君のことが心配で心配で。ここまで……」

が、彼女の言葉がチャンの訴えを遮った。

「なぜここに来たの？」

彼女のテンションは低そうだ。その反応にチャンが戸惑う。

「え？ な、なぜって、僕は……」

「仲間はどうしたの？」

サアラの問いにチャンは黙って首を振った。

「……そう。残念ね。でもあなたがここにいる理由が分からない」
サアラの冷たい言い方に少しチャンが気の毒になってきた。助け舟を出す義理は無いが……。

「話の途中で申し訳ないが、ちょっと自己紹介をさせて貰えないか？　そこに転がってる連中みたいにされたくないんでね」

「あなたは？」

「通りすがりのジャンク屋さ。依頼を受けて君に会いにきた」

一寸、妙な間があいた。やはり『ジャンク屋』という商売は自己紹介の時にウケが良くないようだ。次からはもっとポピュラーな職業を選択することにしよう。

サアラは美しい形の眉を少しだけ動かして言う。

「どうやら敵ではないようね」

無難な答えが返ってきた。最も彼女が『依頼』という言葉をどう受け止めたのかが重要なのだが彼女の表情からその心中は何い知れなかった。

ちょうどその時『ダアシンシン』と呼ばれた少年も追いついてきた。

「サアラ。こっちは6人片付けたぞ。けどこの調子じゃキリが無いぜ」

サアラは足元に転がる死体を眺めて「そうだね」と呟いた。

先ほどの手際を見る限り彼女もかなりの戦闘能力を持ち合わせているらしい。まるで不要になった枝を切り落とすみたいに彼女は敵をあっさり排除した。まさか慣れているわけではあるまい。だが今の様子からは自らの犯した結果に対する感情の変化は微塵も感じられなかった。

「迷いが無いな」

彼女に向かって試しにそう言ってみた。

すると興味無さそうに死体を見下ろしていた彼女がはっとしたよ

うに顔をあげた。この明るさでは細かい表情までは読み取れない。が、彼女は何か言おうとして言葉を飲み込んだようにも見えた。

チャンが少し苛立った口調で彼女に尋ねる。

「ねえサアラ。ここからどうやって脱出する気なんだい？ 幾ら戦ったところで武装ヘリ相手に……」

「もうすぐ霧が出る」

サアラは即座にそう答えた。

なるほど霧か……確かにこの辺りは山岳地帯だ。山、森、川と条件は整っている。

「霧に乗じて敵のヘリを乗っ取る気か？」

「こちらの質問にサアラは軽く頷いた。

「そうね。でもヘリが無理なら最初の予定通りバイクで山越えをするわ」

それも無茶な話だ。霧の中で山を下りるなど正気の沙汰ではない。しかし、彼女達の場合はもしかしたら不可能を可能にする能力を持ち合わせているのかもしれない。

「サアラ！ 準備が出来たよ！」

ふいに別な誰かが声を掛けてきたので驚いた。

（もうひとり居たのか……）

声が出た方を見るとメガネの少年が立っている。

それで気がついた。マルチ・スコープのさっきの反応だ。最後に見た時の表示では緑の三角形は3つと1つのグループに分かれていた。「残る1人のほうが困だったんだな。そいつが3人分の端末を持って走り回っている訳か」

これはわざと自分達の位置を敵に知らしめることでミス・リードを誘う作戦。つまり、取り残されたように見えた1台は敵の足止めを狙ったものではなく実はこちらが主力だったのだ。その間、敵は3台の端末を持った囷を本体だと思って深追いしてしまうという寸法なのだ。

良く見るとメガネの少年は敵の戦闘服に身を包んでいる。

「あつちに降下ポイントがある。負傷者の救出を要請しておいたからもうすぐヘリが降りてくるはずだよ。さあ急いで！」

「わかった。私たちも着替える」

そう言うやいなやサアラは服を脱ぎだした。月明かりの下とはいえ、女の子が男達の目の前でいきなり服を脱ぐとは随分と唐突だ。

しかし彼女はまったく躊躇することなくつなぎのチャックを下ろし、まるで脱皮するかの如く肌を露にした。丸みを帯びた身体の線や青白く輝く小ぶりなバストは夜の砂丘を連想させた。我々はただ茫然と見守るしかなかった。それは一瞬だったとはいえ目を奪われてしまったのは事実だ。言い訳するわけではないが視線を外す間が無かったのだ。

(ここで敵の戦闘服に着替えるということとは……)

彼女達が何をしようとしているのかは大体想像できる。敵の服を着て兵士に成りすますということなのだろう。負傷者が出たと報告をしてヘリを着地させればしめたものだ。相手が地上にさえ下りてくればそれを奪うことなど彼女達にとっては容易いことだろう。

サアラ達の狙いを察して援護に回ることにした。

「チャン。俺達は邪魔が入らないようにフォローするぞ」

が、チャンは何か考え事をしている。

「え、いや、僕は……」

「どうした？ 何をモタモタしている？」

するとチャンは意を決したような素振りを見せてからサアラに向き直った。

「僕も一緒に行つていいかな？」

しかしサアラは返事をせず淡々とベルトを締めている。

「サアラ！ お願いだ。僕も一緒に連れて行つてくれないか！」

もう一度チャンが懇願した時、サアラは静かに口を開いた。

「駄目よ」

「な、なんでだよ？ 僕は、僕は君を……」

「昨日の夜に私がいみんなに言った言葉を覚えてる？」

「覚えてるよ……だから僕は」

「そう。だったら自分で考えて行動して欲しい」

サアラはきつぱりとそう言った。そしてじつとチャンを見つめた。まるで反論を許さないような強い瞳だ。

その視線に耐えかねたようにチャンがうな垂れる。

「……分かったよ」

そんなチャンの落ち込む姿を見てサアラは微笑んだ。

「大丈夫。また会える」

柔和な顔をしている。まるで子供への愛情を再認識した母親のような顔つきだ。

(そんな表情も見せるのか……)

クールな立ち振る舞いから一変して、少女とは思えないような母性を垣間見せる。これが14歳の女の子なのか？ そのギャップがチャン達を惹きつけて止まないのかもしれない。

「そろそろ降下ポイントに向かわないと」

メガネの少年に急かされてサアラが力強く歩き出す。

その背中に向かって尋ねた。

「バイクで逃げ回っている囹役はどうするんだ？ 連れて行かないのか？」

「彼なら大丈夫よ。次の合流地点は決めてあるから」

それにメガネの少年が付け加える。

「もともとヘリには乗りたがらない奴だから。まあ、奴の腕前ならこの霧があれば逃げ切れるはずですよ」

そして3人は颯爽と去っていった。

サアラ達3人が降下ポイントに向かうのを見送って我々も移動することにした。先ほど倒した敵兵から銃と通信機を拝借して来た道に戻る。

「銃は撃てるか？」

「はい。何度か訓練しましたから」

「なるべく時間稼ぎをするぞ。適当にぶっ放せ」

「分かりました」

チャンと二人で少し移動しては発砲を何度か繰り返した。

はじめは自分の真似をして遠慮がちに撃っていたチャンも段々慣れていくうちに豪快に発砲することを覚えたようだ。

「慣れると気持ちいいですね！」

「あまり離れるな。相討ちは勘弁してくれよ」

我々が徐々にサアラ達から離れていくことで敵を混乱させる。その間、敵の交信にも注意を払う。しばらくして聞き覚えのある声が入った。

『こちら3号機。どうぞ！』

この声は先ほどのメガネの少年だ。

『どうした？』

『かなり危険な状態だ！ 急いで病院に搬送する』

『勝手に持ち場を離れるな！ 隊長の指示を待て！』

『そういう訳には……いかないんですよ』

そこで少し間が空き、続いて狼狽する様子が入る。

『な、何を……？ や、やめる！』

その直後、大きな雑音で音声が乱される。それとほぼ同時に上空で爆発音が響いた。

(派手にやりやがったな……)

恐らくメガネ少年がミサイルをぶっ放したのだろう。

「あつちは上手くいったようだ。今のは完全にへりを奪ったという合図なんだろう」

チャンは上空を見上げながらほっと息をつく。

「……このまま国境を越えられればいいんですけど」

マルチ・スコープで見える限り他の4機との距離は開いている。敵の通信も混乱しているようだ。今すぐ全速で国境に向かえば追いつかれることは無いだろう。

(やれやれ。これで一安心か)

後は奴らが引き上げるのを待つて我々もこの森を脱出することにしよう。

かなり霧が濃くなってきた。

歩きながらふと、ある疑問を思い出した。

「ところでひとつ分からないことがある」

「……………何ですか？」

「『ダアシンシン』というのは本名じゃないだろう。どういう意味だ？」

「……………ゴリラ」

「ああ。なるほど」

あの少年の風貌と人並外れた動きを思い出して笑いがこみあげてきた。笑っては可哀想なのだが妙にマツチしているではないか。

独りで笑いをかみ殺しているとチャンが呆れたように言った。

「ちよつと……………ひとりでウケないでくださいよ。こっちはそんな気分じゃ……………」

突然、マルチ・スコープから警告音が発せられた。

反射的にチャンを突き飛ばす。

「危ない！」

するとチャンの立っていた辺りの雑草が轟音と共に激しく千切られた。

銃声のする方向を見ながら暗視・赤外線モードに切り替える。

（敵は一体だけか！）

次の銃撃に備えて木の影から敵の出方を伺う。1人だけならさほど骨ではない。

しばしの沈黙。

こちらの位置はバレているはず。仲間を呼ぶのか？

「見事にハメられたわね」

（！？ その声は……………）

「正直、想定外だったわ。あなたがここに居るなんてね。まさかピ

クニツクに来たなんて言わないでよ」

その声は『ナミ』か？ 半信半疑ながら答えてみることにした。

「なに。単なるゲストさ。最も我々が参加するまでもなかったがな」

「我々？ ああ。あの男の子も一緒なのね」

「なんだ。上司からは聞いていなかったのか」

「上司？ もしかして大佐のことかしら」

「ああ。あの妙なチヨビ髭を生やしたおっさんだ。奴には貸しがある」

「そう。あまり興味無いわ。それよりあの子たちがどこに向かったかヒントを貰えないかしら」

「無理だな。我々も聞いていない」

「あら。困るわね。拷問は好きじゃないんだけど」

チャンに袖を引つ張られる。

「どうします？ 僕もやりますけど」

「いや。お前さんには無理だ」

それが向こうにも聞こえたらしい。

「なにか言った？」

「いや。こつちの話さ」

敵の位置及びそこに至るまでの細かい地形は把握した。接近パターンは二種類。どちらでも3倍速なら4秒でカタが付く。

（右か、左か）

「貴方たちが知らないって言うならまだ逃げ回ってる子を捕獲してもいいんだけど。どうも無理そうだし」

半ばやけっぱちな調子で女は続ける。

「誰が呼んだか知らないけどB国空軍がこつちに向かって来てるし。踏んだり蹴ったりだわ」

（B国空軍？ ジイサンが通報してくれたのか？）

「だったら早く引き上げた方がいいんじゃないか？」

「そうね。だけど手ぶらじゃあね……一度、貴方とお手合わせしてみたかったし」

「本気か？」

「ええ」

「そうか。なら仕方ないな」

「いつでもいいわよ」

大きく息を吸って目を閉じる。イメージは出来ている。

(よし！)

1……右へ3歩、斜め前に4歩進む。

2……銃弾にさらされる空間を回避して右横に4歩、さらに木の陰へ向かう。

3……スピードを殺さないよう木の幹に左手を引っ掛けて方向転換、前に3歩。

4……重心を下げながら5歩で距離を詰め、銃を左脇に抱え込むと同時に右手のナイフを首に突きつける！

標的を見失った銃口がしばらく虚しい咆哮を続けたがすぐに沈黙した。

ナイフの先端を2ミリ食い込ませる。が、敵は声ひとつ上げない。やはりこの女、相当場数を踏んでいる。前の時もそうだった。

「観念しろ」

そう言いながらナイフの刃先で脅迫する。

すると彼女は表情を変えずに両手を銃から離れた。

銃が足元に落ちる音を聞き届けて質問する。

「聞かせてもらおう。『miracle crop』とはどういう意味だ？」

それを聞いて彼女は目だけ動かした。そして微かに口元が…。

(なっ!?)

ヒュツと風を切る音と同時に彼女が両腕を交差させた。

反射的に仰け反る！

次の瞬間、両腕がこちらに向かってくる。

無意識に最大速度で後退、尻餅をついてしまった。

(何だ？ 今のは！)

こちらが距離を取ったところで彼女が動きを止めた。その表情は歪んでいる。

(その手は!?! 刀か?)

素早く立ち上がりながら身構える。これは殺らなければやられる! が、彼女は攻撃を完全に止めてしまった。そして両腕をぶらんと下げて諦めたような表情を見せた。

「参ったわ。それでも貴方を殺せないなんて」

彼女の手を見て息を飲んだ。刃物を持っているのではない。刃渡り30センチほどの刃物は彼女の手の甲から生えているように見える。

(仕込み? 両腕にあんな物を? しかしどう見ても……)

彼女の手の甲と刃は一体化しているのだ。

(ということは両腕とも義手?)

そこで思い出した。そういえばキツチンで銃を向けられた時に彼女の手首を掴んだ。あの時の違和感はこれだったのだ。

「とっておきを交わされたんじゃ、もう私には貴方を殺す手段は無いわ」

「いや。油断した。まさかそんなトリックを仕込んでいたとはな」

「我ながら情けないわ。尻餅をつかせるので精一杯だなんて」

「いや。左腕と右脇腹に少し喰らってる。今回は運が良かっただけさ」

「なぐさめはよしてよ」

そう言っただけで彼女は下げていた腕を少し持ち上げ、手の甲で自分の腰の辺りをノックした。すると刃先が綺麗に引っ込んだ。

「さあ……殺してよ」

彼女は無愛想にそう言い放った。

「そうか。なら遠慮なく……」

その言葉を聞いて彼女も覚悟したのだろう。目を閉じて軽く息をついた。

そこでクロック・アップ。

高速で彼女に近付き、その唇を奪った。

1、2、3秒……

彼女が抵抗したので顔を引く。唇に残る柔らかな余韻を楽しみながら。

「な、な……」

彼女の狼狽した表情を見ていると続きが欲しくなってしまった。

が、それは許されそうにない。

「な、なんてことするの？」

「今日のところはこの辺でやめておこう……教育上、よろしくないからな」

そう言っただけでチラリとチャンの方を見た。チャンはすぐ側まで来ていたのだ。

気まずい雰囲気のところ上空で轟音が尾を引いて響いた。どうやらB国空軍のお出ましだ。

ナミはキツとこちらを睨みつけると唇を噛んだ。そしてくるりと背を向けると足早に去っていった。

チャンがその様子とこちらの顔つきを見て訳が分からないという表情をみせた。

チャンに尋ねてみる。

「さて。どうする？　へりに乗れなかった仲間を追いかけるか？」

マルチ・スコープで緑の三角形はまだ捕捉出来ている。ここからの距離は絶望的に開いているが。

しばらく考え込んでチャンは首を横に振った。

「いいえ……帰しましょう」

彼の表情は疲れきっているように見えた。あるいはサアラに同行を断られたショックをまだ引きずっているのだろうか。ここまで追ってきたというのにあんなにあっさり拒否されてしまうとは気の毒としか言いようが無い。しかしサアラの判断は正しいと思う。チャンを連れて行ったところで彼には人を殺めることは出来ない。それだけ危険な旅路なのだ。

気がつくとも一段と霧が濃くなっていた。まるで月明かりをすべて飲み込んでしまうように神秘のベールが漆黒の森を侵食している。方向も時間も見失ってしまいそんな空間がどこまでも続く。先の見えない世界。それは何かを象徴しているような気がしてならなかった。

第21話 黒神父

2079年の幕開けは雪だった。

まるで上空で待機していたかのように雪たちは暦が変わると同時に一斉に降り始めた。しかし灰色の町に降る雪はどこか投げやりで一斉に身投げしているように見える。そうかと思えば誇らしげに色を変えながらネオン街を徘徊するものもいる。

新年を迎える人々の反応も両極端だ。ある者は「地球がまた1年歳を取った」と祝杯をあげ、また別な者は「地球の寿命がまた縮んだ」と手酌をする。前向きに捉えるか悲觀的に構えるか……。それはここ数十年の傾向だ。何しろ『地球はもうすぐ終わると思うか?』という質問に実に40%以上の人間が『YES』と回答するような時代なのだ。また、すぐには終わらないとしても『危機的状况にある』という回答はもはや人類共通の認識になっている。そして誰もがその事実をどう受け止めるべきなのか迷いながら日々を送っている。

そんな風に世界は複雑な思いを抱いて2079年という時代に足を踏み入れた。

雪の密度は先程より濃くなったものの相変わらず勢いは無い。

(この様子じゃまず積もらないだろうな……)

それなら今帰っても朝まで居ても大差は無い。どのみちチャンはアルバイトで徹夜だ。独りで過ごすよりも朝まで飲んでいた方が『光熱費』も安上がりだ。

店内は似たような境遇の人間がそれぞれのテーブルで寛いでいる。このバーの良いところはどんな時でも満席にならないところだ。なにしろヤンキースがワールドシリーズで4連覇した時ですら客席は半分しか埋まらなかったくらいだ。だが自分は気に入っている。恐らくこの時代に置いていかれたような雰囲気は自分にはしっくりく

るのだらう。

* * *

予想通り明け方に雪は止んでしまった。

NYに大雪が降らなくなっても何年ぐらいたつただろう。だが海面上昇や水害に比べれば雪が積もらないことなんて大した問題ではない。何しろ世界には住処を失った人々が数千万単位で存在するのだ。そういう気の毒な人々の実感に比べたら我々の危機意識など潜在的なものに過ぎない。それが『終末的感觉』という得体の知れない不安となつて少しずつ将来への意欲を削ろうとしているにも関わらず、我々はそれをずっとやり過ごしてきた。もう何十年も…。そんな事を考えながら家路につく。

酔いと寝起き特有の浮いた感覚で通りを歩いていた時だった。ふいに舞い降りた『概視感』に感覚が呼び起こされた。

(あの女は……『ナミ』！)

車道の向こう側に行く女の姿。それをきっかけに記憶が甦る。

「何でこんな所で……」

戸惑いながらも、つい反射的に彼女を追ってしまった。これも一種の職業病か。

彼女を尾行しながらB国での事件を思い出した。

あれから2カ月近く経った。結局、C国旅客機の件は墜落事故として記録され、人々に忘れ去られていった。世間とは冷たいもので、どんな大事件であつても他人にとってのそれは掌に掬い取った砂に過ぎない。例えそれが残された関係者達に一生の傷を残したとしても世間はそれを簡単に過去形にしてしまう。多様化した情報は高度に括られ瞬時にあまねく行き渡る。その分それは一過性に過ぎず、まるで過保護に栽培されたレタスのように鮮度が長持ちしないのだ。(彼女がNYに居るということは……サアラ達はもうこの国に入っ

たのか？)

C国航空機の件では『ヘーラー』という組織がサアラ捕獲の為にB国でやりたい放題だった。その中心にいた彼女がここに現れたということはサアラ達が無事この国に辿り着いた事を意味するのではないだろうか。

ナミとの遭遇が酔いを一気に冷めさせてくれた。

彼女が向かったのはダウンタウンの教会だった。

NYの教会は周りの風景から浮いているものが少なくない。古い町並みにぼつんと新しいのが建てられたかと思うと逆に再開発から取り残されたように古臭いものがいつまでも残っていたりする。彼女が入っていったのは後者だ。

(まるで人の気配が無いな……)

不審に思いながらタイミングを遅らせて教会の門をくぐる。

そのまま入口に向かおうとすると急に肩を引っ張られた。

「おい。今日はやってねえぜ」

振り返ると警備員が2人。いかにも身体が大きい事だけが取り柄のような大男ふたりが警棒片手にニヤついている。

「待ち合わせだ。知り合いが中に居るんでね」

と、用件を告げてみたのだが警備員は納得しない。

「ダメだ。帰んな!」

気安く触られるのは不愉快なので肩に乗せられた手を払いのける。

「放せ。あんたらに許可を貰う筋合いは無い」

「おめえ……言っても分からねえなら」

太った警備員がそう言いながらこちらの手首を掴みにきたのでクルリと1回転して相手の背後に回る。そして警備員の腕を後ろ手に捻じり、警棒を奪って首に引っ掛けてやった。

「はあん?」と、警備員が犬の欠伸みたいな声を出す。

遅い。何が起こったのか理解するのに数秒も要している。こんな反応の鈍さでよく警備員が務まるものだ。

「クソツ！ 相棒を放せ！」

先にもう一方の警備員が状況判断して銃を構えた。こちらはアメフトの選手のような体格ながら帽子からはみ出した天然パーマが妙に素人くさい。

「い、痛てえ！ 畜生！」

と、太った警備員は暴れようとする。

無駄に足掻くと余計に腕が締められるというのに太った警備員は無駄な抵抗を続ける。

（暴れると逆効果なんだが……）

半ば呆れていると天然パーマが声を上ずらせながら叫んだ。

「撃つぞ！ いいのか？ 本当に撃つからな！」

やれやれ。完全に舞い上がっているようだ。それでは『死亡フラグ』が立ってしまった雑魚キャラクターではないか。

そこで太った警備員が「ちょ、ちょい待ててば！」と、慌てる。そりやそうだ。自分が盾にされてしまうのだから相棒をなだめなくては自分の命が危ない。

（面倒くさい奴らだな……）

どうしたものかと思つた矢先だった。

「止めなさい！」

背後で女の声。しかもこの声は……。

「その人は知り合いよ。中に入れて構わないわ」

その言葉を聞いて天然パーマが戸惑いながら銃口を下げる。そして銃のやり場に困つたようになりアクションを見せる。

そこで太った方を解放してやる。すると太った警備員は相棒の所まで撤退してこちらを睨んだ。そして喉をさすりながら舌打ちする。
「チッ！ 命拾いしやがったな」

その台詞に吹いてしまった。どこまで定型なリアクションなんだ。太った警備員の負け惜しみを聞いて彼女が呆れたように首を振る。
「逆よ。あなた達の方が助かったの。彼に銃を向けるなんて自分のこめかみに銃口を押し付けるようなものだわ」

彼女の言葉に巨漢ふたり組は揃って首を捻る。その様子ではまったく理解出来ていないようだ。

そんなマヌケ・コンビは放っておこうといった感じで彼女がチラリとこちらを見る。

「さあどうぞ中へ」

彼女に促されて遠慮なく縦長の扉の向こうへ入る。

古びた教会内は思った以上に薄暗かった。

(……随分と閉鎖的な空間だな)

それが素直な感想だ。朝日はおろか朝の空気すら入り込む余地が無い。その原因は壁や天井をびっしり覆う歴史的な装飾の数々にあるような気がした。それらはひとつひとつに意味があるのかもしれないが、先鋭的なデザインの首飾りとの違いを判別する自信がない。それにいちいち光源を装飾品で囲って明かりをぼやけさせるのは何故なのだろう？ 権威付けとか演出とかにはそれが必要なのかもしれないが、この異空間はまるで時の流れを受け入れることを拒否しているようにさえ思える。

やけに天井の高い礼拝堂を眺めながら進んでいると、祭壇の右手から何者かが現れた。恐らくそれは神父なのだろうが何しろ薄暗くて良く分からない。こんな調子では礼拝の時に単に説教好きな酔っ払いが紛れ込んでも分からないのではないかと余計な心配をしてみよう。

「よく来てくれたね。朝早くからご苦労さま」

張りのある声が無人の礼拝堂に響く。ゆっくりと歩み寄るその姿は紛れも無く神父だ。

彼女は立ち止まって静かに頭を下げる。

「おや。そちらのお方は？」

神父の問いに彼女は答えない。ただチラリとこちらを見て意味深な笑みを浮かべるだけだ。が、神父はその様子を見てウンウンと頷

く。

「なるほど。貴方がそうでしたか。B国ではこの子がお世話になったように」

その言葉に嫌味っぽいニュアンスは感じられない。にこやかに話す神父の表情はまさに聖職者のそれだ。おでこが突き出ているのか眉から下の部分が窪んでいるのかは分からないが特徴のある顔の骨格。目尻のシワはそれなりの年齢を感じさせる。ややアゴが発達しているが醜いという程ではない。とても秘密組織の幹部には見えな

い。
(こう見えても裏では……さしずめ『黒い神父』というところか)
やはり先入観があると自然とそういう目で見てしまうものだ。

しかし神父は少しもそんな素振りを見せることなく逆に次々と質問をしてきた。最も天気だとか今日の予定だとかどうでもいいような質問ばかりだったので返事は適当にするしかなかった。それでも神父はいちいち目を細めて「そうですか」を繰り返し、嫌な顔ひとつ見せない。そんな調子で一通り社交辞令的な会話を終えたところで神父が彼女に向かって尋ねた。

「ところで今日は直ぐに出発するのですか」
「……いえ。午後一番の便で向かう予定です」
と、彼女は神妙に答える。

「そうですか。それではまだ時間がありますね」
「はい」

「それではこの方と十分にお話しすることができますね」
「え？ でも……よろしいのですか？」
「ティンバーさんのお店なんかどうです。いつも通り営業しているはずですよ」

「はい……」

神父の言葉ひとつひとつに彼女が身構えるのが分かった。明らかに彼女は緊張している。だとすればこの神父は相当、上の位に位置する人間なのだろうか。

(しかし組織のトップがそう簡単に姿を現すものなのか?)
そんな疑問がわいた。

「それでは御二人で行ってらっしゃい。何を話すかはお任せしますよ」

最後の台詞の部分の時だけ神父は真顔をみせた。その目つき……それは聖職者のものではない。どちらかといえば軍人やマフィアに近い。

(どういってもりだこの神父……)

神父の目つきはこちらの情報を探れという彼女への命令なのだろう。そう解釈した。

「楽しい時間が過ぎせると良いですね。あなた方に神のご加護があらんことを」

(それが満面の笑みで言う台詞か……)

随分と狡猾な祝福だ。しかし、彼女と話せるのはこちらにとってもチャンスではある。ここは黒い神父の作戦に乗ってやることにしよう……。

* * *

黒神父おすすめのカフェは元旦の朝から普通に営業していた。

『ティンバーさんの店』というだけあって個人商店らしい雰囲気のお店だ。広さの割に客は少なく、落ち着いて話するには都合が良さそうだ。ただ、これから話す内容が内容なだけにオープン・テラスを選択することにした。

「少々寒いが……あまり大っぴらには出来ない話があったら？」
まずは軽くジャブを打つ。

「そうね。でも大して期待はしてないわ」と、彼女も軽く返す。

お互いに腹の探り合いとなるか、適当にお茶を濁して終わるのかは分からない。聞きたいことは沢山あるが、彼女が素直に真実を話

してくれるとは思っていない。

ウェイトレスが注文を取りに来る。朝食を摂る習慣は無いのだが彼女がセットを注文したので「同じで」ということにした。

「意外ね。朝食、食べるのね」

「いいや。注文が面倒だから君の真似をしたただけだ」

「そう。私も普段は食べないんだけど」

「ダイエットの必要があるようには見えないが？」

「そうでもないのよ。必要以上にエネルギー摂取できないから」

「エネルギー摂取？ それじゃ飯を食う楽しみが無いんじゃないか」

「そうね。そういう意味では損をしているかも」

そこにウェイトレスが注文の品を運んできた。テーブルに置かれたプレートには山盛りのスクランブルエッグにベーコンが3枚、野菜は申し訳程度で大き目のベークルが鎮座している。その量を見て食べる気が失せた。やはり慣れないことはするもんじゃなと思うた。

「ところであの神父は君の上司かい？」

「上司……そうね。もっとも階級が全然違うけど」

「君等の組織。確か『ヘーラー』と聞いたが」

B国の病院でイタチ男から聞いた名称を口にするると彼女は一瞬、手を止めて顔を上げた。

「……知ってたのね」

「そもそも正式な名称なのか？ 『ヘーラー』というのはギリシャ神話の女神だろう」

「特にその名前が正式ってことではないわ。内部では『組織』で通称するし。だから好きなように呼べばいいわ」

「そうか。いや。君がサアラのことを『miracle crop』
と言ったことを思い出して組織の名前と関係があるのかと」

「クroppだから？ 豊穡の神なら『デメテル』なんじゃない？」

「神話に興味は無いからそのへんは知らないが……クroppの意味は？ まさか野菜とか穀物とかではないだろう」

cropは直訳すると農作物だ。つまりサアラは『奇跡の作物』
ということになる…。

「クロップの意味？ そうね。農作物とはニュアンスが違うわ」
「君等が言うクロップとは何なんだ？」

すると彼女はカップから立ち上る湯気を眺めながらまるで独り言
のように呟いた。

「私たちは『ラスト・クロップ』なのよ……」

ラスト・クロップ？ 聞いたことがあるような気もするが……待
てよ！

「それは競走馬の話じゃないのか？」

優れた競走馬は種馬となつて毎年多くの子供を残す。その種馬が
最初に種付けして誕生した世代の馬達を『ファースト・クロップ』、
最後に種付けした世代を『ラスト・クロップ』というのだが……。競
走馬の話を人間に当てはめるというのも妙な話だ。

そう思つて疑いの眼差しを向けると彼女は仕方ないといった風に
軽く首を振った。

「うまく説明できないんだけど……意味としては近いわ」

その諦めの表情にも似た顔つきを見る限り嘘を言っているように
は見えない。

（額面どおり受け取るなら我々は最後の世代という意味なのか？）
妙にしんみりとした雰囲気になつてしまった。人類が共有する『
終末的感覚』は時々こうやつて人を無口にさせる。

しばらくして彼女が話題を変えた。

「ところで貴方はまだ追つてるの？ サアラ・タゴールのこと」
「いや。追つてはいない。待っている」

「へえ……待っていればあの子の方からやつて来るとでも？」

「いいや。そうじゃない。だが、元々追いかけることが目的ではな
い。どちらかというと保護者の代理だな」

「保護者？ だから私達の邪魔をしたのね」

「邪魔はしていないだろう。俺は職務上、彼女を見守る義務がある」

「そう。でも……これ以上、関わらない方が良いわ」

「……それは忠告か？」

すると彼女は静かに首を振った。そして何か訴えるような眼差しで呟いた。

「お願いよ。私からの……」

とび色の瞳が微かに潤んでいるように見えたのは気のせいか…。

ふいに雪がひとひら、どこからか紛れ込み、テーブルの上に着地した。雪の粒は地に足をつけると一息つく間もなく溶けてしまった。はぐれものの末路を見届けながら彼女が言う。

「それにしてもあの子は大したものね。未だに捕まらないなんて。うちの組織があれば躍起になってるっていうのに」

「君等はB国を出てからも追っていたんだろう？ 相当な経費がかかっているんじゃないか」

「まあね。でも、未だに捕まえることが出来ないわ。端末情報に頼り過ぎたのかもしれない。断片的に端末を使ってる形跡はあるんだけど」

「これから飛ぶのもサアラの件か？」

「さあ。それはノーコメントよ。だからと言って尾行しないでね。今度はお断りするわよ」

「その心配は無い。懐に余裕が無いんでな」

恐らく彼女達はサアラがクロウリーに興味を持っていることを知らないはずだ。このチャンからの情報があるおかげで無駄にサアラを追い回す必要がない分、こちらが有利だ。最も、今後はヘーラーがこちらの動きをマークしてくることは覚悟しておかなければならない。

「どうせならうちの組織も貴方のことを研究すればいいのにね」

突然、彼女が妙なことを言い出したので驚いた。やはり彼女は自分の秘密を知っていてそんな事を言うのだろうか。

「それは遠慮しておくよ」

「そう。貴方にその気が無いなら無理ね。貴方を拉致監禁するなんて危険すぎるわ」

「人を熊か虎みたいに言うなよ」

「けど、やっぱり組織が必要としているのはあの子なの。あの子は特別よ。貴方以上に」

(……ということはサアラも？ まさか！)

「その顔。『まさか自分と同じなのか？』って感じね」

「やれやれ。凶星だ。顔に出ってしまったか…。」

「たいした観察眼だ。いい探偵になれるよ」

すると彼女は含み笑いを浮かべて答える。

「それは遠慮しておくわ。でもそのくらい簡単よ。大人の顔色ばかり見て育った子供なら誰でも出来るわ」

その言葉が何を意味するのかは分からない。別に深い意味は無いのかもしれない。とはいえ、やはり『ヘーラー』はサアラを捕らえて研究の対象にしようとしていることは間違いないようだ。ただ、その理由が理由だけに……それは依頼人から聞かされていなかった。何か理由があるのは薄々勘付いていたが、こうもはつきり聞かされると逆に戸惑ってしまう。

(サアラが俺と同じ身体を持っているなんて……)

こちらの思いに関係なく彼女は時計を見てすっと立ち上がった。

「そろそろ行くわ。続きはまた今度……」

「最後にひとつだけ教えてくれ。君の本当の名前は？」

「ジェーン・ギデオン」

彼女はそう言い残すといったん店内に戻り支払いを済ませて店を出て行った。

結局、朝食にはほとんど手をつけていない。すっかり冷めてしまった二つのプレートを眺めながらぼんやり考えた。

『性悪な女は時々嘘をつく。だが、いい女は時々本当のことを言う』

目を閉じると彼女の顔が浮かんでくる。このモヤモヤとした違和感。それは歓迎すべきものではない。

しばらくして人の気配を感じた。

「ここ。座って、宜しいかな？」

わずらわしく思っ顔を上げた。

「悪いが他の……?!」

見覚えのある顔にはっとした。

(……イタチ男!)

やれやれ。今日は知った顔によく遭う日だ……。

第22話 イタチ男

イタチ男…… B国の病院に現れた謎の男。

彼は我々が八方手を尽くしても手に入れられなかったiPS細胞を無償で提供してくれた。普通なら大恩人だ。だが、どうしても無条件で彼の存在を受け入れる気が起きない。なぜなら、まずあの状況で突然現れたというのが怪しい。仕事柄、自分が知らないうちに何者かにマークされるのは珍しいことではない。しかし、イタチ男は自分の事をあまりにも知りすぎている。そのくせ何がしたいのがまるで読めない。その為に薄気味悪さばかりが先行する。それにその風貌も怪しさ全開だ。細身の黒いスーツは3ピース。濃紺シャツに黄色のネクタイ。足元には黒のスーツケース。切れ長の目に小さな頭は、まさにイタチを連想させる…。

イタチ男はゆっくりイスに腰掛け、しげしげとこちらの顔を眺めた。

そしておもむろに口を開いた。

「アーシエンジャーの『輪廻』は、読んだか？」

開口一番がそれだ。前に会った時もそんな名前を口にしてはいたが、なぜそれを読むように薦めるのが分からない。

「いいや」

「それは感心しないな。何かを理解する為には努力が必要だ」

「探るのが面倒だね。そんなに薦めるんなら貸してくれればいいじゃないか」

「……生憎、手元に無い。それに言っただろう。何かを理解するには努力が必要だと」

「勿体ぶるなよ。名前も告げずに病院から去った『慈善家』さんならそれぐらいサービスしても良いんじゃないか？」

こちらの嫌味にイタチ男は少し首を傾げる仕草をみせた。が、何事もなかったかのように会話を続けようとする。

「ところで……仕事を頼みたい。報酬は、これで」
そう言つてイタチ男は指を3本立てた。

(何を言い出すかと思えば……どういふつもりだ?)
唐突な申し出に戸惑つた。何を考えているのかまるで見当がつかない。

「30……人探しか？」

試しにそう尋ねてみたのだがイタチ男は即座に否定する。

「違う。桁が」

「冗談だろう。たったの3だとすると探し物は猫か犬か……」

「違う。300、000だ」

「三十万!? 正気か？」

Eドル(1)で三十万! 豪邸が何軒買える値段だ? 『口トくじ』じゃあるまいし。本当にそんな報酬の仕事があるのか……。いや、あつたとしても命が幾つあつても足りないような仕事なのだろう。

「絶望的な金額だな。それだけ危険ということか?」
するとイタチ男は澄ました顔で否定する。

「いいや。それは妥当な報酬。それだけの価値があるから」

「……ほう。では一応、聞いておこうか。内容は？」

「彼等、つまり『ヘーラー』と対決すること。出来るか？」

「対決? 奴らを潰せ、ではないのか？」

「君が失敗しても報酬は固定。結果は問わない」

イタチ男のリアクションは妙に淡泊で、まるでマネキンを相手にしているような気分になつてくる。それに言葉の区切り方が普通ではない。言語障害があるのだろうか。

「泣けてくるぐらい『うまい話』だな。誰がそんな話を信じる?」

「大事なのは決心すること。報酬はそのきつかけにすぎない」

「そもそも『対決』の意味が分からない。俺に何をしろと?」

「特別なことはしなくていい。今の任務を遂行すれば自然とそうなる」

(今の任務……サアラの件か。そんなことまで調べられているのか？ こいつ、一体どこまで俺のことを知っている？)

「やれやれ。あんたが何者で何を目的にそんな依頼をするのかは分からんが、つまりB国の時と同じように普通に仕事をしてれば良いんだな？」

「そういうことになる」

「あんたは『バベル』でも『ヘーラー』でも無い。中立だと言ったな。だがその依頼内容からするとあんたはバベル側の人間じゃないのか？」

「違う。強いて言えばバベルに近い。が、バベルではない」

「……その二つは対立しているんじゃないのか？」

「そうではない。彼等の目的は同じ。ただプロセスが異なる」

「同じ目的……プロセスが違う……さっぱり見当がつかないな」

「そのうち理解できるはず。その為にもアーシエンジャーの『輪廻』を読むべきだ」

「しつこいな。読書はあまり好きじゃないんだ」

「必ず読め。自らを知ることでもあるから」

(何……?)

自らを知る？ 妙なことを言う。

奇妙に思っているとイタチ男がすっと立ち上った。

「では、また」

「おいおい用件はそれだけかよ。そのスーツケースの中味は手付金じゃないのか？」

「違う。報酬は後ほど」

そう言い残してイタチ男は黒いスーツケースを拾い上げるとクルリと背を向けた。

「期待しないで待ってるよ」

まったくもって奇妙な奴だ。イタチ男の後姿を眺めながらつくづくそう思う。そこで気がついた。

(あいつ……また名乗らなかつたな)

部屋に戻ると既にチャンが帰っていた。

B国から戻る時についてきたチャンは現在、事務所に居候をしている。最も何部屋借りても家賃が変わらないようなボロいビルなので空いている部屋を自由に使っている分には邪魔にはならない。

「あ、おかえりなさい」

「帰っていたのか。寝なくていいのか？」

「ええ。大丈夫です。訓練してますからね。それより、店から貰ってきたんですが食べます？」

そう言ってチャンは食堂のテーブルを指差した。

「今度は何を持って帰ってきたんだ」

「お正月用の日本料理です。確か『OSECHI』って言うんですって？」

「ああ。おせちか。何年ぶりかな」

チャンはスシ・レストランでアルバイトをしている。日本人だと言ったら即、採用してくれたらしい。

「アンカーさんは日本を出て何年になるんですか？」

「そうだな。もう二十年以上になるかな」

「時々恋しくなったりしませんか？」

「どうだか。たまに仕事で寄ることはあるが……当分戻るつもりは無い」

別に日本が嫌いになった訳ではない。知り合いもまだ大半は生きている。しかし、皆それなりに歳をとっている。それに比べて自分は未だに見かけは二十代のままだ。事情を説明して回ったところでは何かとやりにくい事は分かり切っている。自分のような人間にとって日本は狭すぎるのだ…。

「すぐ食べますか？」

「そうだな。折角だから少し摘むとするか」

「分かりました。じゃあ準備しますよ」

チャンが持ち帰った料理は決して見栄えの良いものではなかったが、余り物を寄せ集めたにしては上出来だった。しかも、煮物に牛肉のゴボウ巻き、伊達巻、かまぼこ、栗きんとん、ブリの照り焼き等などおおよそ一通りの品は揃っている。

ビールをチマチマやりながら久々のおせち料理を堪能しているとチャンが突然、改まって頭を下げた。

「実はお願いがあります」

「なんだ急に？」

「旅費を貸して欲しいんです」

「おいおい。遊びに行くぐらいの金ならバイトで充分に貯まってるんじゃないのか？」

「観光に行くんじゃないやありませんよ。中東に行くんです」

「中東？ それはまた随分と遠いな。だが、俺にそんな金があるように見えるか？ この事務所に居れば分かるだろう。ここ一ヶ月間で何人客が来たことか」

「でも昔は凄腕の調査員だったんでしょ？ それぐらいの貯えは…」

…

「そこは過去形か？ まあいいだろう。それで目的は何だ？」

「例の組織です。この一ヶ月間、色々調べてみたんですが、ついに『バベル』の手掛かりを見つけたんです」

「なんだと？」

思わず箸を止めてチャンの顔に見入ってしまった。随分と自信が有りそうな表情だ。

「バベルか。そいつは立派な目的だが……なぜ組織のことを？」

「自分で考えて行動すること。サアラの言葉通りです」

チャンは随分と遅しくなった。NYに来た頃はサアラに連れて行って貰えなかった事でウジウジと考え込んでいたようだが、いつの間にか立ち直ったらしい。

「中東まで行くのはいいが、行ってどうするつもりだ？」

「……まだ分かりません。正直言って。でも、バベルが僕たちを狙った理由を知りたいんです。もしかしたらサアラもそれを望んでるんじゃないかって思うし。今、自分にできることをやる。それだけですよ」

バベルのことは自分も一応、調べてはみた。が、結論としてジイサンの力を借りても大した情報は集められなかった。むしろ調べれば調べる程、情報の海に飲み込まれてしまえばかりで「やはり秘密組織なんてものは存在しないのではないか」とさえ思っていた。それに引き換えチャンはその存在を信じて根気強く調査を続けていたのだ。

「頭が下がるよ。諦めずにずっと調べていたんだな。じゃ、折角だからその手掛かりとやらを聞かせてもらおうか」

「はい。分かりました。まず、最初はバベルという秘密組織の実体を『See・Show』（2）で探ろうとしてたんですが途中で諦めました。『See・Show』のリアクションがあんなに微妙なのは初めて見ましたよ。それだけ実体がべールに包まれてるんでしょうね。そこで、ちよつと視点を変えて彼らのルーツを探ってみようと思いついたんです」

「ルーツ？ 昔の情報を漁ったということか」

「はい。偶然に発見した古い記録が突破口になりました。とても幸運だったと思います」

「で、その記録とは？」

「ええ。それ自体は些細な事件なんです。順番に説明すると始まりは古代史マニアのマーク・クラウンという英国人男性が2048年3月にぱったり消息を絶ってしまったという記事でした。この人は民間人なんです。超古代文明の研究ではちよつとした有名人で、彼のサイトはそれなりに注目されていました」

「超古代文明？ メソポタミアとかシュメールとかその類か」

メソポタミア文明といえば人類最古の文明ということでは有名だが、バベルのルーツとしては流石に古過ぎるだろう。

「まあそれに近いといえば近いんですが、彼の専門は『オーパーツ』だったんです」

「オーパーツ？」

「はい。例えば『バグダッド電池』って知ってます？」

「いや。特に……」

「アンカーさんは紀元前より前に電気が利用されてたって信じられます？」

「なんだそりゃ。そんな昔に電気が？ 馬鹿馬鹿しい」

「ところがですね。超古代文明の存在を信じている人は少なくないんですよ。紀元前数千年前に現代文明を遙かに凌ぐテクノロジーが存在していたってね」

確かにその時代に作られたにしてはその背景が説明できない物が世の中には存在する。それらを総称して『オーパーツ』と呼ぶというのは聞いたことはあるが、個人的にはオカルトの類だと思っている。

チャンは自分の端末からリビングのモニター壁に映像を転送して説明を続けた。

「バグダッド電池は1937年にバグダッドで発見された壺で、世界最古の電池ではないかと言われています。ところが発見されてからも150年経ちますが未だにこれが電池かどうか諸説が入り乱れている状態です」

「まあこの際、そんな骨董品の真贋はどうでもいいだろう。で、その古代史マニアの失踪が『バベル』とどう繋がってくるんだ？」

するとチャンはその質問には答えずに飲み物に手を伸ばした。そしてゆっくりと喉を潤す。

「勿体ぶるなよ。続きはどうした？」

「すみません。ここからが核心なので。それで、ですね。実はこのマークという人は『バベルの塔』について並々ならぬ関心を持っていたんです」

「なんだ。それだけか……」

『バベルの塔』という単語が出た時点で正直、拍子抜けした。

(組織の名前が『バベル』だから『バベルの塔』だと？ そんな短絡的な…)

が、チャンは構わず説明を続ける。

「知つてのとおり『創世記』のバベルの塔に関する挿話はバビロニアのジググラト(聖塔)をモデルにした伝説というのが一般的です。つまり実在した物ではないってことですね」

「創世記……旧約聖書だな」

「ええ。だけどマーク氏はバベルの塔が実在した証拠を掴んだとブログに書いていたんです。そして、あるルートのコネクションで現地に向かうという記述を最後に音信不通になってしまったんです」

「……それは大口を叩いて何も出なかったから恥ずかしくなったんじゃないのか？」

「いえ。彼が失踪したのは事実です。実際に彼の支援者が調査したところイラン入りしたまでの記録はしっかり残っていますから。最後に彼が電子マネーを使った場所も特定されています」

「イランか。その頃のイランだとまだ外国人は目立つだろう。事件が事故に巻き込まれたとしたらすぐ分かりそうなものだがな」

「ところが彼の消息はパツタリそこで途絶えてしまった。そして何の調査もされなかった。彼はどこに行ったのでしょうか？」

「そんな30年前の話なんか知るか。記録は無いのか」

「ほとんどありませんでした。情報化システムが幾ら発達したといつても当時の人間が誰も記録をしてなければ手も足も出ません。幾ら遡つても始めから無いものはどうしようもないですから」

「話が脱線しているぞ」

「すみません。前置きが長すぎましたね。で、ここからは大分、僕の憶測が入るのですが、多分、マーク氏は消されてしまったのではないかと。彼は確かに調査団の一員としてイランの奥地に入ったんですが、そこで……」

「ちよっと待て。調査団だと？ 何の調査団だ」

「勿論『バベルの塔』の残骸を調査する団体ですよ。これは実在しています。記録にも」

（30年前とはいえ本気でそんな調査が行われていたというのか？）
確かに中東の一部は長らく政治的に鎖国に近い状態だったから未開の地は残されていたのだろうが…。胡散臭い話ではあるがチャンは確信があるらしい。

彼は一段と目を輝かせて話を続ける。

「そして驚くべきことにそのメンバーの中にある人物の名前が！
誰だと思えます？」

「さあな」

「それが『アル・ハシリド』、イスラム経済連合の元会長です」

「アル・ハシリド！？ 大物じゃないか」

「ええ。アル・ハシリドは30年前にバベルの塔探索チームに名を連ねていたんですよ」

それが事実だとすると……まんざらオカルトではないのかもしれない。なぜ元経団連の会長がそんな怪しげなプロジェクトに参加していたのかは分からないが。

そこで念押しする。

「なるほど。それは本人に間違いはないんだな？」

「はい。証拠は揃っています」

「で、調査報告書は入手出来たのか？」

「いえ。残念ながらそれは……」

「ジイサンに頼めばどこかから出てくるかもしれないぞ」

「あ、そうか。そうして貰えれば助かります」

「最も、お前さんが言うように最初から無いものまでは手に入らないが」

「そうですね。で、ここからが本題なんですけど、僕の推理ではこの時の調査団に加わった人物が『バベル』の創設者ではないかと」

「アル・ハシリドがバベルに係しているというのか？」

「いえ。彼は表舞台の人ですから。でも無関係では無いと思います」

「つまりバベルはイスラム系だ？」

「そうではありません。恐らくはもつと広い繋がりにあると思います」

「その根拠は？」

「はい。そう思って調査団のメンバーを出来る限り調べてみました。そして怪しい人間を発見したんです。まずはこの写真を見てください」

そう言っただけでチャンがモニター壁に映した映像、すなわち鮮明なデジタル写真の背景は、どこかの遺跡のようだ。そこに6人の姿が映っている。そしてその端っこにいる人物……それを見た瞬間、思わず手元のビールを落としてしまった。

「こ、これは……まさか……」

間違いない。そこに映っていた人物。それは今朝会ったばかりの『イタチ男』そのものだった……。

【用語】

1 「Eドル」… この時代の1ドルは現在の円に換算すると約7500円。赤字国債の乱発と国内経済の停滞により米国債の相対的価値が暴落した結果、米政府は2035年にハイパーインフレ政策を余儀なくされ、その結果、2回のデノミを実施せざるを得なかった。

2 「See・Show」… 書き込まれた質問に対して誰かが回答するというスタイルを極めた世界最大のサイト。G社の「集合知プロジェクト」により、各サイトでそれぞれ運営されていたものが完全統合されて誕生した。2023年に日本の情報処理協会が開発した文脈判定、傾向分析、取捨選択等の革新技術を採用したことから「師匠」とも呼ばれている。

第23話 バベルの塔

30年前の写真に今朝会ったばかりの男が写っている。それも今朝会った時とまったく同じ外見で…。

写真の男は30歳前後に見える。イタチ男と同じ位の年齢、となると考えられる可能性は2つ。

(クローンか……俺と同じ……)

よく似た親子という可能性もゼロではない。しかし、この相似は只事ではない。

「アンカーさんも気付きましたか？」

「ああ……あの男にそっくりだな」

わざと『そっくり』という単語で遠まわしにコメントした。にわかには信じられないという思いと(こんな考えは馬鹿げている)という戒めを含めて。

が、チャンは眉をひそめて呟く。

「というより本人じゃないですか？ アンカーさんと同じで歳を取らないのでは？」

「……嫌な事を言ってくれるな」

「でもこれはもう、そうとしか考えようの無い一致ですよ。それにこの人がもし、そういう体質だったとしたらB国の件も納得できます」

「iPS細胞か？ つまり俺に移植されたのは奴のiPS細胞だ？」

それを聞いてチャンは大きく頷いた。

「そんな特殊な体質の人が何人もいるはずないですからね」

……ぞつとする。得体の知れない違和感が体中から湧き出してくる。それをチャンに悟られないようにわざとタバコの煙を天井に押しやっ

つた。
「実は今朝、奴と会った」

「え！ どこで、ですか？」

「ミスター・ティンバーの店」

「なんですかそれは？」

「教会公認のカフェだ。そこに奴が現れた。相変わらず趣味の悪いスーツケースを持っていたよ」

「はあ……それで何か話したんですか？ B国の際はらくにお礼も言っただけで済んでしょ」

「そうだな。お礼に一杯おごってやれば良かったかな」

「そんな一杯ぐらいじゃとても……」

「世話になったのは事実だが、どうも信用できん。第一、名前すら名乗らないのはなぜなんだ？」

「ああ、そういえばそうですね。僕も名前を聞いていないや」

「俺達は奴の素性どころか名前さえ知らない。なのに奴は俺のことを知りすぎている。必要以上にな。今朝の件もそうだ。奴はいきなり目の前に現れやがった」

「……それはアンカーさんに用があったのでは？」

「まあな。仕事を頼まれた。無論、断ったが」

「仕事ですか。何の仕事を？」

「ヘーラーと対決しろ、だとさ」

「……そんな無茶な。けど、目的は何なんでしょう？」

「さあな」

なぜイタチ男が自分をヘーラーと対立するよう仕向けるのかは分からない。B国では自分の任務を遂行する過程でたまたまヘーラーと利害が対立したに過ぎない。サアラを追う彼等と彼女を見届けなければならぬ自分が無意味に『対決』する必要性は無いはずだ。

(だがもしサアラが奴らに捕まってしまったら……)

その場合、自分が取るべき行動は必ずしも彼女を救出することではない。その点において今回の任務は難しい……。

チャンが軽く咳払いをして注意を引こうとする。

「話がそれてしまいましたね。では本題に戻しましょう。そもそも、

この写真を見せたのはここに写っている面子が只者ではないことを知って貰いたかったからです」

「面子……アル・ハシリドは分かるが他の5人は？」

「順番に行きましょう。左から順番にプロフィールを出しますね」
チャンが発掘した写真に写るメンバーは確かに皆、大物だった。

まず20年前にノーベル物理学賞を受賞したカール・パウリ。まあノーベル賞を貰ったぐらいだからそれなりの功績はあったのだろう。だが、受賞理由を見てもその内容はさっぱり分からない。

「おい。このニュートリノ振動が何とかで測定モデルがどうたらと
いうのはどういう意味だ？」

「僕も調べてみましたけど挫折しました。ただ、素粒子の間にあるニュートリノは質量が軽すぎてもともと測定が難しいんですが、特定の条件でグラビトン（重力子）と干渉させることで振幅が変化……」

「で、それが何の役に立つんだ？」

「……さあ？」

「まあ、いいだろう。で、左から二番目が……トレース社の副社長であるエメリツヒ・コーツ」

「はい。で、真ん中がスタンフォード大学のジヨナサン・ホフマン教授ですね。人工知能の父とも呼ばれる有名人です」

この2人には共通項がある。他人の記憶をリアルに体験できる『トレース』の技術はホフマン教授の協力なしには開発できなかっただろう。なぜならトレースの技術でキモとなるのは、被験者の脳にいかにも正確な電氣的刺激を与えるからだ。人工知能に関する特許を200以上取得しているというホフマン教授の得意分野は、人間の脳神経が感情を示す構造を数理的に解明・モデル化してプログラムでそれを再現することだ。つまり彼は脳機能を知り尽くしているのだ。

「確か15年ぐらい前だな。トレースが世に出てきたのは。市販化されたのはここ最近だな」

「僕は体験したこと無いですけど、やっぱり凄いですかね？」

「まあ、そうだな」

「え！？ アンカーさんは経験あるんですか？」

「ほんの少しだな」

「そ、それで、どうでしたか？ やっぱり快感とか幸福感とか凄いでしょ！」

「妙なところでチャンが食いついてきた。」

「やめとけ。子供にはまだ早い」

トレースそのものは違法ではない。が、過剰にドーパミンを放出するような記憶、例えば覚せい剤を使用した女性の性的な快感の記憶などは麻薬と同じ理由により法律で禁止されている。現にトレースのやりすぎで廃人同然になった者も少なくない。

話題を変える為に最初の男、すなわちイタチ男に似た男を指さす。

「ところでこの男。プロフィールは本当なのか？」

「え？ それは拾ってきた資料のままなんで本当かどうかはなんとも……」

「瀬戸源一郎。24歳。日本人。T大医学部生。特に実績は無し。」

現在は消息不明……か」

イタチ男の情報を見てもいまひとつピンと来ない。もしも本当にこの時に彼がこの歳であったなら現在は54歳。やはり今朝見た男がこの写真の人物とは到底、信じられない。

チャンはこの男の写真を見て『バベル』とこの調査団を結びつけて考えたようだが、それにしてもメンバー構成がてんでバラバラだ。

財界人のアル・ハシドに物理学者、会社経営者、人工知能の研究者、医学生。残る一人はガイド役の青年アシムということになっている。

「しかし……こいつら何の集団だ？ とても話が合うとは思えんが」

「ハハ……確かにそうですね」

チャンも苦笑する。

「確かに個性的なメンバーだが、結局こいつらは何がしたかったんだ？」

「そこなんですよ。僕が興味を持ったのは」

「だが調査結果のレポートはおろか本当にバベルの塔があったかすら記録に残っていないんだらう」

「そうなんですけど……何らかの成果はあったはずだと思います。で、彼らはそれを隠したんじゃないかと」

「憶測だな。所詮」

「証拠が無い状況ではそう言われても仕方ありませんね。けど思いついてください。創世記の挿話を」

そう言ってチャンは再びモニター壁にバベルの塔の絵画を映した。作はピーター・ブリューゲルとなっている。渦巻状にそびえる塔は上の部分が作りかけで、未完成であることは一目でわかる。その「色合い」に「整然と並ぶ穴」……その形はスズメバチの巣を連想させた。

「この食べかけのソフトクリームみたいな画はやはり空想なんだろうよ」

常識的にはそうだ。そんな大昔に天まで届く塔を作ろうという試みが本当にあったとは思えない。ピラミッドみたいにその残骸が実在するならまだしも、バベルの塔はその痕跡すら認められない。ということとは所詮、空想で描かれたものに過ぎない。

が、チャンはなおも食い下がる。

「でも、これほど巨大ではないにしろ小さなジツグラト（聖塔）は現存しますし、どんな神話や挿話にも意味があるはずなんです。バベルの塔は、人々が天まで届く塔を造ろうとしたことに神が腹をたてて人々の意思疎通ができないように異なる言語を与えたという話ですよ。僕にはこれが何かを象徴しているように思えてならないんです」

「分かった。少年。仮にこの調査団がイランにあるバベルの塔跡地を幸運にも発見したとする。で、彼等はそこで何かを見た。彼等の価値観を根底から変えてしまうような何かを。そこで衝撃を受けた彼等は秘密結社を作りあげたということだな？ 何のことはない。」

まるでカルト教団じゃないか」

チャンは唇を噛んで黙って聞いていた。が、その目つきはこちらの嫌味に対して少しも怯むことは無い。チャンは本気でそれを信じているらしい。

であれば尚更言わずにはいられない。

「秘密結社だか秘密組織だか知らんが、馬鹿みたいに大掛かりな、それも長い期間それを続けていくには絶対的なベクトルが必要だ。集団内で共有するベクトル、いわば『共通の価値観』で奴だな。営利目的の法人ならともかく、大多数の人間が同じ価値観を共有するなんざ宗教的な……」

そこまで言つて、はたと気付いた。

(いや……無いことはない、か)

共通の価値観。それで連想したのは次世代インターネットで特定のコミュニティ(nationと呼ばれる)に存在する『総意』だ。いわゆる『the general will』は、ある意味でそのコミュニティに属する人間の共通する価値観といえる。例えば新たな情報が入った時に、nationに所属する個々の住人はそれぞれ感情や感想を持つ。そしてその反応は言葉ではなく、脳神経の動きとしてダイレクトにネットワークで繋がる。ニュースの内容に一喜一憂したり一緒に考えたり、まるでネットワークで繋がった住人達の心が一体化したかのように自然と『総意』が形成されていく。それはスポーツ観戦で同じチームを応援する観客の一体感によく例えられる。その総意に自分の感情がシンクロした者は至高の満足感を得ることができ一方で総意に合わない者はそこから排除されていくからだ。

個々人の価値観や心の動きをネットワークでまとめあげるシステムを築くこと。それこそバベルの塔を作ろうとした古人と何ら変わりはない。

「今のネットこそ『バベルの塔』なのかもしれない」

「え?」

「いいや。独り言だ。気にしないでくれ」

そう考えるとバベルの塔が実在するか否かなどは大した問題では無いような気がしてきた。チャンが行きたいと言うのなら彼の自主性に任せてみるのも悪くないだろう。

「よし分かった。少年。だが、本当に中東まで行く価値があるのか？」

「あると思います」

と、チャンは力強く頷いた。

「どうせ行くならもう少し調べてからの方が良いんじゃないか」

「ですが今行かないと……」

「いいのか？ サアラ達はもうこの国に上陸しているようだか？」

それを聞いてチャンの表情が一変した。

「良かった！ 無事に上陸したんですね？ で、サアラ達は今どこへ？」

「恐らくコロラド州だ。今朝『ナミ』にも会ったんだ」

「ナミってB国で会ったあのですね……」

そう言ってチャンは顔をしかめた。無理もない。額に二度も銃を突きつけてきた相手なのだ。あまり良い印象は持っていないのだろう。

「そうだ。今日は良く知った顔に会う日だね。それに運がいい。多分、教会に行つたからツキが回ってきたんだろう」

ナミこと『ジエーン・ギデオン』は現在、コロラドに向かっている。その動向はさつき端末で確認した。彼女のコートに忍ばせたスパイ・インセクトがそれを教えてくれるのだ。

「俺はこれからコロラドに向かう。お前さんはどうする？」

そう尋ねられてチャンはしばらく考え込んだ。そして顔を上げる。「やはり僕はイランに向かいます！ 今の僕に出来ることを優先させたいです」

やれやれ。どうやら意思は固いようだ。一人で行かせるのは大いに不安だが普通の子でないことも確かだ。ある程度の装備を与えてジイサンのフォローをつければ何とかなるかもしれない。

「分かった。で、幾ら必要なんだ」

「200、せめて150あれば何とかなると思いますが」

「大金だな。まあ、時間がかかっても返してくれるなら文句は言わない。50年ローンでもいいぞ。お前さんは若いからな」

「幾らアンカーさんが長生きでも長すぎですよ。出来るだけ早く返しますから」

「さてと。金を工面しないとな。かき集めても足りるかどうか……」
端末で預金残高を確認する。よく「体重計を見るのが苦痛だ」という女性が居るが自分の場合、残高を確認する行為はそれに近い。ある意味、人生とはそういった軽い絶望の連続なのだ。

「な!？」

残高を見て仰天した。何かの間違いだろうと疑った。あまりにも桁が違いすぎる。表示された数字は『300、240』その後には小数点以下の端数が4桁並ぶ。

(まさか! これはイタチ男が?)

送金元の欄には見慣れぬ単語が……。

(Inpw……なんて読むんだ?)

試しに検索をかけてみる。

「インプウ? これは……エジプト神話だと?」

「ど、どうしたんですか? インプって聞こえましたけど」

「いや。どうやら奴は俺の懐事情も把握しているらしい」

「奴……奴って誰です?」

「瀬戸源一郎、のそっくりさん。奴が前払い金を寄越してきやがった」

「は? 分からないなあ。なぜあの人か?」

「仕事は断ったんだがな。こっちの事情はお構いなしか。やれやれ……報酬ですか。ふうん」

「ま、おかげでお前さんに貸してやれる資金は出来た。とりあえず200、いや500ぐらい持っていくか? 足りなきゃ追加で」

「ちょ、ちょっといいですよ。そんなに。200で十分です」

いずれにせよ、こちらはサアラに近付かなくてはならない。そう
なればイタチ男の望むように『ヘーラー』と対峙することもあるだ
ろう。無論、こちらから積極的に仕掛ける必要は無いが。

「さて。のんびり正月気分を味わっている場合じゃなさそうだ。早
速、出かけるとするか」

「サアラを追うんですね。彼女のこと、よろしくお願いします」

「何か伝言はあるか？ 彼女に会ったら伝えておいてやる」

「いや、まあそれは……いいです特に。ありません」

そう言っただけ頬を赤らめるチャンを見てると何だかむず痒いよう
な気がする。もう何十年前も前の微笑ましい記憶。それがまだ僅かな
がら残っているということに少しほっとする。

「少年。気をつけて行ってこいよ」

「ええ。アンカーさんこそ」

こうしてチャンは中東へ。自分はコロラドへ。しばらくは別行動に
なる。

と、その時に警告音が鳴った。監視カメラが異常を知らせる。モ
ニター壁にカメラの映像をウィンドウで開く。4つ並んだ映像が順
に消えていく。

「どうやらお客さんのようだね」

「それって……クライアント、じゃないですよね？」

「ああ。招かれざる客だ」

監視カメラの映像は断たれたがもうひとつのカメラは……。

(何だ。こつちのカメラには気付いてないのか。ド素人か?)

切り替えたのは通りを挟んだ他所のビルからこちらを映す画像だ。
黒塗りの高級車が1台にしょぼいライトバンが1台。見たところ銃
を持った男が……5人。

「教会で見た顔があるな。こいつら警備員か？」

「何で警備員がここに？ ひよっとして教会で何か悪さしたんじゃ
ないでしょうね？」

「バカを言え。それにしてもなめられたもんだな」

やはりナミも自分と同じような手を使ってきたようだ。

「少年。ここは任せる。一人で撃退しろ」

「ええっ？ そんな無茶な！」

「練習だ。これをクリア出来ないようではこの先、一人で行かせるわけにはいかない」

ここは心を鬼にしてチャンの覚悟を確かめてみることにした。

第24話 来るべき世界

顔面蒼白なチャンを叱咤する。

「しつかりしろ！ これぐらい一人で切り抜けられなくてどうする！」

少なくともB国の空軍基地を制圧した時に実戦は経験しているはずだ。

「で、でも……僕にはとても」

「空軍基地での立ち回りはどうした？」

「あれは暗かったから……それに無我夢中だから出来たんです。それに相手は油断してましたから」

そう言っただけ口を尖らせるチャンを見て頭が痛くなってきた。

(どうやらこの弱さは精神的なものだな)

クロックアップという武器がありながら、この調子では戦う前から結果は見えている。

「いいか少年。何も皆殺しにしると言っている訳じゃない。気絶させるだけでいい」

「そんな器用なこと出来ませんよ。催涙スプレーを使っちゃダメですかね？」

「馬鹿を言え。そんな悠長なことを言っている場合じゃないぞ」

向かいのビルに設置したカメラ映像はまだ続いている。ビルの入口で待機しているのは3人。残りの2人は裏口に回ったとみられる。さすがに上からの迎撃はなさそうだ。

「心配するな。見る限りチンピラに毛が生えた程度の連中だ」

ここで奴等の装備がお揃いだったなら多少の訓練は受けているとも思えるが、服装はバラバラなうえに手にしている銃にも統一感はない。その点は恐れるに足らずだが、逆に素人すぎるとむやみに発砲してくる可能性が高い。

「ガス銃を持っている奴がいるな。注意しろ。殺傷能力は劣るが跳

弾が厄介だからな。なるべく撃たせるな」

「はい」

「それから分かっているとは思うが、正面からは掌底でアゴを狙え。それ以外は頸動脈に手刀が基本だ」

手刀のところでチョップの要領で手の平を水平に動かしてみせる。クロックアップで打ち込んだ打撃なら確実に相手を気絶させることができるはずだ。

それを見てチャンはゴクリと唾を飲み込む。

チャンの緊張を解いてやろうと思つて背中を乱暴に叩く。

「なに、相手はカボチャだと思えばいい。緊張した時のセオリーだ」
「ですね……」

そう言つてチャンは自らの手のひらをじつと見つめた。そして唇を噛むと自分を奮い立たせるように大きく頷いた。

自信を持つてやれば十分にやれるはずだ。その為にはもう一工夫あつた方がよい。

「待つている間にトラップを作つておけ。突入する連中は極度の緊張状態にあるからな。それを逆手に取るんだ。視覚か聴覚。そのどちらかに強い刺激を与えてやれ」

「……分かりました」

チャンは室内を見回してから一寸、考えるような仕草をみせる。そしてすぐさま動き出した。

（何か思いついたらしいな。まあ、じつとしているよりは良いだろう）

チャンはグラスを使ったトラップを仕掛けるつもりのようなうだ。テーブルの端にわざと不安定になるようにグラスをセットしている。恐らく、ちよつとした振動でグラスが落下するようにしたいのだろう。

その間にも敵は入口付近で中を覗いたりビルを見上げたり所在無さそうにお預けをくつているようだ。しばらくして黒塗りの車から一人の男が降りてきた。そして待機している連中に何やら指示を出す。

その様子をカメラ映像で確認した。

(そろそろか……)

敵はタイミングを見計らうように一呼吸置いてビル内になだれ込んできた。

「少年！ 来るぞ！」

「はい！」

正面の入口を入ってすぐの所は階段になっている。階段を駆け上がる足音から上ってくるのは2人と判断した。指を2本立ててチャンに合図する。

その数秒後に事務所の入口を乱暴に開け放つ音が響く。

が、敵もさすがに直ぐには飛び込んではこない。素人ながら一応は警戒しているらしい。

半身で室内の様子を伺いながら一人目が姿を現した。

こちらの位置からはチャンの姿が半分だけ見える。

(焦るなよ……)

一人目に続いて二人目が恐る恐る室内に足を踏み入れる。二手に分かれて室内を物色にかかるつもりのようなようだ。

そこでチャンが屈みこんだ。

(皿?)

白っぽい物体が床を滑り、テーブルの脚にぶつかった。その拍子に卓上のグラスがバランスを崩す。

静寂に包まれた室内に突如、グラスの碎け散る音が響く。

「な、何だ!？」

ふいを突かれた敵に隙が生じる。

(今だ!)

と、思ったベストのタイミングでチャンが飛び出した。

1……ダッシュで4歩前へ。やや、つんのめり気味に一人目に接近。
2……さらに3歩進むと同時に手刀を敵の首筋に打ちつける。

3……そこで立ち止まってしまふ。

(バカ！ 止まるな！)

手刀を喰らった一人目が膝から崩れ落ちる。その音を聞いてもう一人の注意がチャンに注がれる。

(まずい！)と、こっちが焦った。

が、幸い、チャンは立ち直った。彼は残る敵に突進、顔を背けながら身体ごと相手にぶつかつた。決してスマートではないが、掌底が敵の顔面に辛うじて当たっているのが救いか。

掌底を喰らった二人目はスローモーションのように斜めに倒れた。チャンは打撃の手応えに戸惑っているように見える。

そこで足音が廊下から聞こえてくる。

「増援だ！ 気を抜くな！」

その一声で我に返ったチャンが慌てて身構える。

次の瞬間、今度は入口から同時に2人が何やら叫びながら室内に飛び込んできた。が2人とも銃を構えながら一杯一杯の様子だ。完全に目が泳いでいる。

(今朝の警備員か)

天然パーマと太った警備員。体格だけが取り柄のような2人組だ。

「や、野郎！ で、出て来い！」

「ど、ど、どこだ？ 畜生！」

2人は背中合わせで入口付近を動かこうとしない。これでは個別に倒すことが出来ない。モタモタしていると他の連中も上がってきてしまう。

(参ったな。2人同時の場合は教えていなかったぞ……)

すると突然、明かりが消えた。分厚いカーテンはいつも閉めたままなので昼間でも室内は薄暗くなる。

「な、何だ？」

と、2人が同時に天井を見上げる。すると今度は反対にフラッシュのようなまばゆい光が一面に広がった。

目を刺すような光だ。不覚にもつられてしまった！

が、それがチャンの仕業だということは分かっている。片目を薄

つすらと開けて2人組の様子を伺う。と同時に鈍い音がしてうめき声が発せられた。

そして目を開けた時には既に勝負は付いていた。床に転がる2人組とそれを見下ろすチャンの姿が目に入った。

「やれば出来るじゃないか。一発も撃たせなかつたな」

そう声を掛けてやったのだがチャンは浮かない顔をする。

「……でも、何だか後味が悪いです」

「フン。慣れだよ。慣れ」

「まさか、死んでないですよね……」

「気にするな。それより下に行くぞ。こいつらの雇い主にクレームをつけてやる」

「え？ 逃げた方が良くないですか？」

「バカ言え。損害賠償を請求しないと。グラスと皿を弁償させてやる」

「そんな……」

渋るチャンを従えてゆっくり階下に向かう。あと2人ほどビル内に侵入しているはずだが問題は無い。出てきたら張り倒してやればいいだけの話だ。

階段を下りて屋外へ出た。そして黒い車に向かおうとした時だった。

（後ろか！）

今出てきたビルの入口から敵の残党が飛び出してきた。

敵は我々の姿を見るなりいきなり発砲してきた。

- 1 …… 左斜めに7歩。直角に方向を変えて前へ。
- 2 …… 歩幅を伸ばしつつ一気に残りの間を詰める。
- 3 …… 側面から接近、右腕を敵の首に巻きつけながら背後に回る。
- 4 …… 捕まえた敵を盾にして、もう一人の敵を牽制。
- 5 …… ぐいっと盾を押し出し、突き飛ばすと同時に手刀で首を払

う。

6……残った敵に向かって加速、左で銃を持つ手を払いのけ右の掌底をアゴに叩き込む。

他に敵が無いか周りを確認して一丁上がり。

銃弾を避けていたチャンが苦笑いを浮かべる。

「さすがですね……」

「慣れだよ。慣れ」

「そんな。僕には真似できないですよ」

「さて、と。残るは……」

そう言いかけて気付いた。いつの間にか車の後部座席の窓が開いている。

「そんなところで高みの見物とは良いご身分だな」

わざと聞こえるようにそう言っただけだった。すると、足踏みするようなりズムで手を打つ音が返事の代わりに聞こえてきた。

(随分と余裕な拍手だな……)

少しイラついた。それは気分を害するような類の拍手だった。明らかにこちらを見下している。

拍手が止み、後部座席の扉が開いた。一応、警戒はするが車から降りてくる人物の動きを見る限り、攻撃を仕掛けてくる感じではない。

車から降りてきた人物を見てすぐに悟った。

「あんたは……」

大げさな拍手の主は今朝、教会で会った黒神父だった。

黒神父はゆっくりと歩み寄ってくると満面の笑みで話しかけてきた。

「いやあ、素晴らしい。実に見事だ。なるほど。あの子が言った通りだな」

「忘れ物でも届けにきてくれたのか？　こんな大勢で」

嫌味っぽくそう言ってやると黒神父はニヤリと笑う。

「単刀直入に言おう。どうかね。我々の手伝いをしてくれんか？」

勿論、それなりの対価は保証しよう」

「断る。ちよつと先約があつてね」

「我々は君を歓迎するつもりなのだが。なんせ君には資格がある。ラスト・クロップとしての資格が」

「悪いがそれも辞退させてもらう」

「なぜだ？ 君ほど相応しい人間は居ないのに！ もしかして金か？ くだらん。金などまるで意味を持たない」

吐き捨てるようにそう言うってから黒神父はやれやれといった風に首を振った。

そして意味深な笑みを浮かべる。

「いいかね？ 例え今どんなに金を持っていようと、そんなものはもうすぐ無意味になるのだよ。『来るべき世界』では」

「フン。そういう説教は自分の縄張りでやってくれ。こつちは間に合っているよ」

「なぜ背を向ける？ 『Heaven's entrance（天国への入口）』は今まさに開かれつつあるというのに」

「ヘヴンズ・エントランス……か」

呆れたものだ。益々、カルトの匂いがする。

チャンが隣で顔をしかめる。

「誰がそんなものを信じるかつて！」

黒神父は大げさに首を竦める。

「だが、残念ながら狭き門をくぐる事が出来るのはほんの一握りの人間だけなのだよ」

つまり天国に行きたければ仲間になれということなのだ。別に『天国』という概念を積極的に肯定すること自体は問題ではない。しかし、それを商売にするのはいただけない。

「要約すれば『信じるものだけ救われる』ということか」
「が、こちらの反応などお構いなしに黒神父は続ける。

「すぐに分かる。現世と来るべき世界では価値観がまるで違つのだ。善悪の概念すら異なるといつて良い」

珍しくチャンが噛み付く。

「そんなのは理由にならないよ！ サアラを誘拐しようとしたクセに！ 自分達の理想の為になら何をしたっていいんですか！」

「おやおや。何もそんなに興奮しなくても。君は勘違いしているのではないかな？ 我々は来るべき世界の為に『サアラ・タゴール』を犠牲にしようなどとはこれっぽっちも考えていないのだよ。むしろ逆だ。彼女は『miracle crop』だからね」

やはりこいつもサアラのことをミラクル・クロップと言った。先ほどのラスト・クロップは『選ばれし者』に近い意味だと解釈したが、彼等のいうクロップとは『人類』とか『人間』の意なのか？

チャンが黒神父を睨みつけながら断言する。

「サアラは絶対にそんな考えには同調しない！」

「ほお。別に我々は彼女の同意は必要としていないのだが？」

「な！？ そ、そんなの許されるもんか！」

「彼女は『来るべき世界』の中心に居なければならぬ。だから我々は彼女を迎え入れるのだよ。全力でね」

「と、とにかくサアラに手を出すな！」

そんなチャンと黒神父のやりとりを見守りながら或る事を思い出した。最初に会った時にチャンが言っていたことだ。サアラは皆に『カウントダウンはもう始まっている』『狭い世界になる』と謎のメッセージを残したという。それを聞いた時は（何やら予言めいた言葉だな）とは思っていたが、今の黒神父の話の聞いているとまんざら無関係では無いような気がしてきた。

（狭い世界……狭き門）

こじつけではあるが、サアラの言葉と黒神父が口にした例えは同じ意味合いのように思える。それに考えようによってはサアラの『カウントダウン』というのも黒神父が仄めかしている世界の終わりとリンクする。

チャンと黒神父は無言で対峙している。チャンが興奮を抑えきれない様子なのに対して黒神父は笑みを絶やさない。が、その笑みは最

初のものとは比べると幾分か冷徹さを孕んだものに変化しているように見えた。

このままでは埒が明かないので念押しする。

「とにかく、あんたらの仲間になるのはお断りだ」

黒神父は残念そうな表情で首を振る。

「残念だよ。実に残念だ。君にその意思が無いのなら仕方がない。

素直に諦めよう。だが……くれぐれも邪魔はしないでくれたまえ」

最後に釘を刺す部分だけは黒神父の笑みが完全に消えた。それは聖職者とは程遠い凄みのある表情だった。

(やはりその顔が本性か……)

表向きはひなびた教会の神父。そしてその裏の顔は秘密組織『ヘーラー』の幹部。この神父がヘーラーという組織の中でどの位の地位にいるのかは分からない。少なくともナミの態度からして、それなりの地位にはあるのだろうが…。

「それでは失敬」

黒神父はそう言い残すとさっさと車に乗り込もうとした。

「おいおい。待てよ。こいつらを置いていくつもりか？　うちは宿屋じゃないぞ」

歩道に転がる男達をアゴで指す。

「フフ。好きにしたまえ」

黒神父は気に留めるでもなく後部座席に乗り込むと悠々と車で去っていった。

走り去る車を眺めながらチャンが憤慨する。

「カルト教団のくせにサアラを捕まえようとするだなんて、とんでもない奴らだ！　あんな奴、ボコボコにされちゃえ！」

「カルト教団……『ヘヴンズ・エントランス』か」

卑しくも神父という立場にありながらその名を口にするとは…。

「有名なんですか？　その天国の入口っていうのは」

「ああ。随分、昔に世間を騒がせたカルト教団の名だ」

『ヘヴンズ・エントランス』というのは21世紀のはじめに集団自

殺をして消滅した宗教団体の名前そのものだ。彼等は10世紀ごろに忽然と消滅したマヤ文明の遺跡で発見された石に刻まれた暦が2012年12月で終わっていることから、その時に世界の終わりが来ると信じていた。当時は「アセンション（1）」とか「フォトンベルト（2）」とかのオカルト的な言葉を妄信した人々が大騒ぎをしたものだが、その極めつけがヘヴンズ・エントランスの集団自殺だったという。

（あの神父……わざとその名を言ったのか？）

それともその教団が『ヘーラー』のルーツだともいうのだろうか。チャンが『バベル』のルーツが創世記の挿話にあるのではと言い出した時は馬鹿馬鹿しいと思ったのだが、あのような狂信的な気がある集団の実体を知るには案外、有効な手段なのかもしれない。

「さて、後でもう少し調べてみるか」

「あれ？ じゃあ『ヘーラー』の件はアンカーさんにお任せして良いんですか？」

「仕方がない。手分けするしかないだろう」

チャンは『バベル』のルーツを解明する為にイランへ。そして自分分は『ヘーラー』の後を追ってコロラド州デンバーへ向かう。

（やれやれ。忙しくなりそうだ……）

それは楽な旅路ではない。『ヘーラー』の実体を探りつつ、付かず離れずの距離でサアラを見守らなくてはならないからだ。せめてもの救いはイタチ男のおかげで飛行機代の心配をしなくて済むことぐらいか。

【用語】

1 「アセンション」：何らかの外的要因で人類がより高次元のものに進化するという一部の新興宗教などで用いられる概念。

2 「フォトンベルト」：銀河系に存在するフォトン（光子）の濃度が高い空間。その実在性については長く議論がかわされてきたが、

素粒子の研究が進むにつれて21世紀中頃に存在が確認された。しかし「高エネルギーであるが故に地球に様々な悪影響を与える」というオカルト的な諸説は否定されている。

第25話 クロウリー

西はロッキー山脈、東にはグレートプレーンズ（大平原）が広がるコロラド州は全米で最も平均標高が高い。その州都デンバーはロッキー山脈の東側に位置し、その標高が丁度1マイルであることから『1マイル・ハイシティ』と呼ばれている。このように州全体が山岳地帯なのでこの時期の寒さは厳しく、『山籠り』が目的でもない限り観光で訪れたいと思うような所ではない。だが、意外なことに覚悟していたほど寒くはなかった。空港の外に出た時、肌に触れた冬の日差しに熱がこもっていたのだ。

（冬のコロラドといえば雪原のイメージしかなかったが……）
確かに空から見下ろしたコロラドの大地は、まるで銀世界の足元から黒が染み出しているように見えた。それに分厚い白の衣をまとった山々の存在感は、否が応でもこの地が空に近いことを実感させた。地理的にはアメリカの中央にありながら他の都市とは一線を画する空間、うまくは言えないがどこことなく浮いたような感覚が漂う町。それがデンバーの第一印象だった。

タクシーを拾ってホテルに向かうことにする。その間に端末をチエックしてみた。

（やはり表示は出ないか……）

恐らく、ナミは仲間と合流して真っ直ぐ目的地に向かったに違いない。反応が無いところをみると彼女に張り付かせていたスパイ・インセクトは排除されてしまったらしい。だが焦る必要は無い。最終的にサアラが姿を見せる場所は見当がついている。

「旦那。デンバーには観光ですかい？」

ふいにタクシーの運転手に話しかけられて返答に窮した。年明け早々にこんな真冬の高地に、しかも大した荷物も持たずに旅行というのも不自然すぎる。

「ああ……まあ一種のビジネスさ」

ビジネスの中味はともかく、それは嘘ではない。取り敢えずそう言っておけば間違いは無い。

「旦那はどこから来なすつたんで？ こっちは寒いでしょう」

「NYも似たようなもんだ。日差しが強い分だけこちらの方が暖かいかもな」

「そりゃ旦那、まだ昼間しか体験してないからですぜ。ここいらの夜は半端じゃなく冷えますから」

「だろうな。それは覚悟してるよ」

「仕事するなら日が出ているうちですぜ。夜は出歩かないことですよ」

「出来ればそう願いたいものだね」

そうは言ってみたものの、こればかりはサアラ達の行動次第なので自分ではどうしようもない。

「旦那、アレでき。お泊りになるホテルは」

運転手に言われて前方を見ると黒っぽい建物が目に入った。

(さて、どれぐらいここに世話になることやら……)

見た感じではまあ悪くないレベルだった。大金が入ったのでもう少し奮発しても良かったのだが、つい安いホテルを選んでしまった。これはもう条件反射と言って良い。年季の入った貧乏性は、まるでネクタイに染み付いたソイ・ソース(醤油)のように中々落ちないものなのだ。

* * *

一息ついたところで早目の夕食を取ることにした。ホテル内にはレストランが一軒しか無く、選択の余地は無い。座席数はやや少なく感じられたが、程好い寂れ具合が田舎のドライブ・インを連想させる。薄っぺらなメニューもちよつと気の利いた五歳児なら簡単に丸暗記できるぐらいシンプルだった。

ステーキにスープを注文して黙々とそれを食することにした。が、直ぐにこの席を選んだことを後悔した。なぜなら隣席のテーブル・マナーが気に触ったからだ。食事は素早く済ませる主義の人間にとって隣のテーブルでお喋りに夢中になっている輩は酷く邪魔な存在のように思える。せめて噛みながら口を開くことだけは遠慮して貰いたい。だがその願いも虚しく、隣席の2人組はずっと喋り続けている。

「そろそろ限界なんじゃないかな」

そう言って首を振るダンゴ鼻の男はさっきから皿の上でつけ合わせ野菜を弄んでいる。

「いいや！ まだまだイケるぞ。心配ないって！」

甲高い声の主は太った男。こちらは常に食べ物に口を含んでいる。多分、こいつはリスの生まれ変わりなのだろう。

「だけど先月の指数を見たかい？ 0.21ポイントの下落だぜ」

「そんなのは一時的なもんだ。また直ぐに値上がりするさ」

「そうかな。営業部がばやいてたよ。もう一巡したんじゃないかって」

「それは売り方が悪い。ターゲットを間違えているんだ」

「だったらどうしろと？」

「大型案件をでっちあげるのさ。国の事業が始まるって」

「国の事業？ 『space elevator（軌道エレベーター）』とか『space plane（宇宙往還機）の空港』とか、かい？」

ダンゴ鼻の相棒がそう尋ねると太った男は肉を頬張りながら首を振る。

「いいや。そんな他所にあるものじゃダメだ」

「だったら何を？」

すると太った男は勿体ぶって小声で囁いた。

「……shelter（避難所）さ」

「シェルター？」

「しっ！ 声大きい」

「いや。しかし幾らこの辺りが高地だからって……」

「知ってるとは思うがコロラド州の土地の三分の一は国有地だ。そこに政府が本気でシエルターを建設するとなれば……分かるだろ？」
「けど、ある程度は情報操作できるとしても、みんな信じるかな？」
「いいんだよ。シエルターが出来るか出来ないかなんて。いいかい。大事なのは地価が上がり続けると信じさせることなんだ。金持ちの数には限りがある。だが、人間の欲には際限が無いからね」

太った方はそう言っ得意げにフォークをかざしてみせた。口の横にソースを着けながら……。

（やれやれ。どうにも下品な奴だ）

会話の内容から察するに隣席の2人組は不動産関係の仕事をしているのだろう。一応、機内で下調べはしておいたのだが、確かにここ30年の間にコロラドには随分と資本が投下されたらしい。2037年の『ティファナ』以降6年間続いた大型ハリケーンの大量発生で、地球温暖化がいよいよのつぴきならない状況だということに気付いたアメリカ人が「海面上昇から逃れるには高地だ！」という発想で土地をこぞって買い漁ったのだ。彼等は『ノアの箱舟を仕立て上げる浅ましき者たち』と揶揄されながらも投資を止めなかった。このような投資家を食わせるが為だけに作られるバブル経済はこれまでに幾つも作られ、そして弾けていった。J.M・ハラデイの著書『資本主義の終着駅』でも指摘されたように、もはや近代資本主義は無理やり成長させる為の市場無しには存続し得ない、つまり『焼き畑農業』みたいなものだ。

太った男はダンゴ鼻の反応などおかまいなしに自説をぶった。しかし、幾らコロラド州が全米で標高3000mを超える高地の75%を占めるといっても、政府が大陸の水没を想定してこの地にシエルターを作るなどというのは空想に過ぎない。だが一方で、そんな『ヨタ話』が、妙なりアリティを捨てきれないところが今の世相を反映している。

少しずつ蝕まれているという実感……それが人々の潜在意識に蔓延している。そして誰もが半信半疑な未来にうんざりしながら日々をやり過ごしているような気がした。

* * *

部屋に戻ってジイサンに連絡を取る。

「ジイサン。正月早々申し訳ないが、また一仕事頼む」

「何だ。もう直ぐ晩飯なんだがの……まあ良からうて」

「まずは『モーシヨン・ジャツジメント』でサアラ・タゴールを捜してくれ」

日が暮れる前に街中の監視カメラ数台にスパイ・インセクトを仕込んでおいた。あとはジイサンがカメラ映像を拾って、道行く人々の歩き方からサアラを割り出してくれば良い。

「あいよ。お安い御用だ。で、他には？」

「そうだな。じゃあ、ついでに『クロウリー』の基地でも探ってもらおうか」

「な！ やっぱりそう来たか。お前さんがそんな所に居るから嫌な予感はおったが……難儀だな」

流石のジイサンでも尻込みするぐらいだから、やはりセキュリティは並大抵のものではないのだろう。無理も無い。スパイ衛星群『クロウリー』は軍の最高機密なのだ。

「とりあえず基地のありそうな場所を調べてくれ」

「んむう……だが危険すぎる。軍に目をつけられると後々厄介じゃぞ」

「それは覚悟の上さ。それに第一、うら若き乙女が勇敢にもアレに挑もうとしているというのに、大の大人が外野で見物というのも情けない話だと思わないか？」

「確かにそうじゃが……あの『娘っこ』は本気でクロウリーを乗っ取るつもりなのかい？」

「チャンの情報が確かならな。何でも確かめたいことがあるらしい」
「……盗み見するだけなら何とかなるかもしれないが、それでも危険なことには変わりないぞ」

「ああ。ターゲットがお転婆だとお守り役は苦勞する」

『クローリー』とは6つのスパイ衛星で構成される地表監視システムの名称だ。米政府は長らくその存在を認めなかったが12年前にはじめてその存在を公表した。公式発表では開発計画の着手が2018年。2035年に初号機打ち上げ。2048年に6機体制が完成し、50年代半ばから実用化されたことになっている。ただし「国際的対応を要する事案の情報収集に用途を限定」という米国の説明に納得するものは無く、あからさまに不快感を示す国も少なくなかった。何より各国が恐れたのはその優れた解析能力だ。このシステムでは6つの衛星のうちいずれか3つが連携して地表の対象物を追跡し高性能カメラで捕らえ続ける。そしてその時に3台のカメラで同一物を撮影することによって精密な3D映像を再現することが出来るのだ。さらにそれぞれの衛星には赤外線をはじめ多様な機能を併せ持つカメラを搭載しているので対象物を捕らえる精度の高さは他の追隨を許さない。つまり、その気になれば対象物をずっと見張ることが可能なのである。そのため、クローリーを巡る各国の諜報活動や破壊工作の可能性などが度々噂されてきた。だがこれまでにクローリーの全貌はおろか、それをコントロールする基地がどこにあるのかさえ漏れ伝わってくることはなかった。

(サアラはどういう手を考えているんだ……)

クローリーの基地は米本土の数箇所に分散しているというのは前から言われてきたことだが、コロラドもその候補のひとつに数えられている。そこにサアラが現れたということはある程度の目処がついているのだろう。しかしこれまで各国のスパイやテロリストが軒並み失敗してきたこの米国のトップ・シークレット暴きにサアラ達がどう挑むのかは非常に興味深い。

そこで想像してみる。もし自分が同じ目的を持ったとしたら、や

はりオーソドックスな手を使うだろう。

「クロウリーに関わった人間のリストが欲しいところだな。できれば今どこで何をしているかを含めて」

『それもまた厄介な注文だのう。ガードは固いだろうからな』

「流石に現役の連中に接触するのは難しいだろうからOBを中心に過去に関わった人間だけでいい。恐らく、サアラ達もそれを狙ってくるはずだ」

『みんな考えることは一緒じゃ。だがこれまで何人の人間が消されたことか……』

「分かっている。クロウリーのこととなるとやたらと張り切る輩がくさるほどいるからな。一説によるとこれのおかげでCIAが復権したっていうじゃないか」

クロウリーは国家機密の保守という雇用創出にも貢献しているのだ。

『少し時間をくれんか。明日の午前中までには何とかする』

「今生きている人間を優先的に」

『わかっておる。この2、3年だけでも結構な犠牲者が出ておるからな。あぶりだすのは骨じゃぞ』

ジイサンの言うとおり過去にクロウリーに関わった人間は皆そのことを隠してひっそり暮らしている。各国のスパイに狙われる者が後を絶たないからだ。しかも国は彼等を積極的には守ってくれない『秘密さえ漏れなければ良い』という絶対的な価値観の前では人命よりも確実性の方が尊重される。つまり、無かったことにされてしまふのだ。

「色々注文してしまったが頼むよ。ジイサン」

『せいぜい努力するわい。ところで弟分はまだ出発しないのか？』

「弟分？ ああ、少年のことか」

『そうだ。やたらと歳の離れた弟じゃ』

「冷やかすのはよせ。説明が面倒だからそう言っているだけだ」

『はは。まあ、忙しいお前さんに代わって弟分のお守りはワシに任

せとけ！」

「……いつから愛想も売るようになったんだ？」

「そりゃあ、あんだだけ前金を貰ったら張り切らんわけにはいくまいて」

「そう思つて、その分こき使つてやれとチャンには言つてある」

『おいおい。年寄りをいじめるな』

「俺より5歳上なだけじゃないか」

『フン。一緒にするな』

「それだけあんたを信頼してるのさ。だからチャンに、ああ見えても『良い仕事』をするから信頼しろとも言つてある」

『ほう。良い仕事とな。辛口のお前さんに言われると何だか気持ち悪いな。急に持ち上げおつて』

「別におだてるつもりはない。事実を言つたまでだ。まあ、自慢の冷製パスタだけは頂けないがな」

『な！ 失礼な！ アレはお前さんの味覚がおかしい』

「見解の相違だな。あれ以来、冷たいトマトがトラウマになつちまつた」

『ふざけるな。お前は元々トマト嫌いだったろうが！ だいたい学食でお前さんが……』

ジイサンとは長い付き合いになる。その学食の話にしても30年以上前のエピソードだ。

ひとしきり昔の話を一方的にした後でジイサンは急にしんみりした口調になつた。

『……今度はかりは相手が悪すぎる』

「ああ。分かっている」

この国で『クロウリー』はタブーだ。ましてやそれに触れることは軍とCIAと警察をいつぺんに敵に回すことを意味する。

『くれぐれも用心しろ。只でさえ国に喧嘩を売るようなものなのに、おまけに妙な組織まで絡んできた日には、幾ら命があつても足りんぞ』

「心配するな。人よりは長生きだから」

『そういう問題じゃあるまいに。確かにお前さんは『不老』かもしれないが……』

「『不死』ではない。多分な」

『……』

ジイサンはそれ以上、何も言わなかった。だが言いたいことは良く分かる。付き合いが長いからこそ無駄な言葉よりも伝わることもあるのだ。

* * *

第26話 狙われた男

翌朝、早速ジイサンから情報がもたらされた。条件に合致した男が居るといふのだ。

その男が現れるはずだということ朝の7時から二十四時間営業のスーパーで待機している。店の片隅に設けられた赤と黄色でおなじみのバーガー・チェーンは何時間でも居座ることが可能だが、子供番組のスタジオみたいな雰囲気は自分のような年配者にはやや居心地が悪かった。

待ち伏せする相手の名は『ヘンリー・ホイットマン』43歳。システムエンジニア。郊外の住宅街に一人暮らしをしているという。勿論、本人は経歴を隠しているので彼がクロウリーに関わっていたかどうかは定かではない。

(この30%というのは当たりの確率か……)

辛抱強く待つこと二時間半、幹線道路に面した駐車場にお目当ての車が侵入してくるのが目に入った。ジイサンが指定した車種だ。時計を見ると9時半を少し過ぎていた。

「遅いぞ。待たせやがって……」

別に待ち合わせをしているわけではないので文句を言う筋合いではないが。

「ジイサンよ。やつこさん来なすつたぞ」

ジイサンは寝起き丸出しの様子でのん気に答える。

『おう。やっと来たようじゃな』

目的の車が駐車場に停止。しばらくして男が降りてきた。端末の映像と見比べてみる。

「……間違いないようだな」

ヘンリー・ホイットマンは実年齢より若く見えた。小太りであまり背は高くない。膝下まですっぽり隠れるモスグリーンのロングコ

トに旧型のマルチ・スコープらしきゴーグルを装着している。

彼はしきりに周囲を警戒しながらゆっくり店の入り口方面に向かった。

それを見届けてから自分も席を立ち、店の出入口に向かう。

「随分、落ち着きの無い奴だな。挙動不審だぞ」

「人付き合いは苦手らしい。外に出るのはスーパードでまとめ買いくる時ぐらいだよ」

「そうなのか？ だとしたらよく調べたな。なんで今朝ここに来ると分かったんだ？」

「いや、まあ、たまたま……ちょっとな」

「随分齒切れが悪いな」

珍しくジイサンが言葉を濁す。しかしその理由は程なく分かった。なぜなら駐車場に停まっているワンボックスから降りてきた男達が目に入ったのだ。明らかに場違いな3人組の構成はアラブ系2名に東洋系が1名。皆、それなりに目つきが悪くそれなりに服装のセンスが悪かった。とても仲良く食料を買い出しに来た雰囲気ではない。

自分が店の外に出た時、ヘンリー・ホイットマンはまだ200メートルほど先に居た。さらにその後方100メートルに怪しい3人組が続く。

それを見てピンときた。

「ひよっとしてあいつらの情報をそのまま拝借してきたんじゃないのか？」

「まあ、そういうこともある」

「おいおい。これじゃ奴等の計画と被ってしまっただろう」

「実は奴ら前回は前回も前々回も拉致に失敗しているようなんじゃない。で、今回は念入りに下調べしておいたみたいだよ」

「奴等、何者だよ？」

「そこまでは分からん。だが、成功すれば大金が入るとは言っておったが……」

「少なくともプロではないな。あんなに殺気を丸出しにしていたら

動物園の象にだって警戒されてしまっただろうよ」

標的にされたヘンリー・ホイットマンはキョロキョロしながらゆつくりと歩いている。それを追うように3人組が標的までの距離を詰め、二手に分かれる。たぶん挟み撃ちにするつもりなのだろうが、まずい攻め方だ。というよりマルチ・スコープを着けている標的にはとつくに察知されていることが分かっていないのだろうか。

突如、標的は入口とは違う方向に向かってダッシュした。

標的の後方につけていたアラブ人が慌ててそれを追う。

東洋人はどう動いて良いのか分からずに慌てふためいている。

もう一方のアラブ人が先回りを試みるが、標的は途中で直角に曲がり、駐車してある車の間を巧みにすり抜ける。そしてその先には彼の車が待機している。来た時は違う場所に停めてあったはずなのに……。

(うまい！ 駐車位置をオート運転で変更していたのか！)

少し距離を取りながら彼等の追いかけてここに付き合ってみたのだが、ここまでは標的の方が上手だ。

が、敵も諦めない。別な方のアラブ人がタッチの差で標的の前に立ち塞がった。

対峙する2人。どちらかといえば銃を手にしているアラブ人の方がオタオタしている。単に余裕が無いのか経験が浅いのか……。一方の標的はコートのポケットをまさぐっている。

(ここで撃ち合いはマズいな。仕方ない……)

2人の位置までは車3台分……。

1 …… 停車中の車を避けて前へ5歩。

2 …… 4歩進んで左肘をアラブ人の側頭部に当てる。

3 …… 右手でアラブ人の銃を払い、残りの敵の位置を確認。

4 …… 近付いてくる東洋人に向かって5歩、カウンターで右膝をわき腹に食らわせる。

5 …… 右の手刀で首筋に追い討ち。振り返ってもうひとりのアラブ人の動きを見る。

(危ない！)

7……ヘンリーの襟首を掴んで引き倒す。と同時に立ち上がりながら距離を測る。

8……手前のボンネットに飛び乗り、隣、そのまた隣の車を踏み台にして距離を詰める。

9……最後のジャンプで腰を捻り、貯めた力で半回転の蹴り。敵の頭を刈る。

これで完了。一発だけ撃たせてしまったが標的は無事だ。

見ると標的が腰を抜かした状態で目を丸くしている。

「す、凄いな……でも助かった」

標的の手を取って立たせてやる。

「取り敢えずここを離れるぞ。車に乗せてくれ」

* * *

運転しながらヘンリーが尋ねてきた。

「アンタもパスワード狙いかい？」

「……パスワード？」

「いや。違ったのなら済まない。昨日の子たちと同じかと思って」

「昨日の子達？ それはC国人の女の子か？」

「……そうだよ。ひよっとして知り合いかい？」

「まあ、そんなところだ」

(遅かったか……)

昨日の時点でサアラはこの男に接触していたのだ。

ヘンリーは指先で鼻を擦って呟く。

「凄い子だったな……あんなの初めて見た。アンタの動きも凄かったけど」

「どういう状況で彼女達と知り合ったんだ？」

「さっきと同じさ。実は昨日も買出しを邪魔されてね。さっきの連中に。それを助けてくれたんだ」

「ほう。で、今日も買い損なつたと」

「そうだね」

「狙われているのが分かっているなら配達を使えば良いのに」

「だね。だけど配送は怖いから。爆発物やら毒やらが仕込まれてるかもしれないし」

「信用できる人間に頼めないのか？」

「そんな友達とか家族とかが居ればいいんだけど」

「しかし、一般人の君がなぜそこまで危険に晒されてるんだ。一体、何をしたんだ？」

「別に。二ヶ月前に会社をクビになるまでは只の勤め人だったさ」

そう言つてヘンリーは鼻水をすすり、指で鼻を擦つた。

「ずばり核心を突いてみる。」

「クロウリーだな？ 君が前の会社をクビになつた理由は」

「……お察しの通りさ。後悔してるよ。余計なことに首を突っ込んでしまつたつて」

彼が勤めていたエドモンド・シナプス社はクロウリーの運用に間接的に関わっていたらしい。どうやらクロウリーは完全分業で運用されているらしく、何百もの会社または団体がそれぞれの役割を担っているという。よつて、ひとつひとつのユニットは完全な下請けか孫請けで単体では何を行つているのかがまるで分からない。それから全体がひとつにまとまつて初めて意味を成す仕組みだというのだ。「中には自分達がクロウリーに関わつていないことを知らされていない人間も多いんだ」

ヘンリーはそう言つて首を振つた。

それは意外だった。国家機密に等しいクロウリーの運用を幾ら分業とはいえ民間会社に委託するとは……。逆転の発想といえば聞こえが良いが大胆な策に違いない。

「けどね、本体のスペックは桁違いだと思つよ。うちの会社がやつてた演算だけでも相当に複雑だったから」

「その本体はやはり軍の施設内にあるのか？」

「たぶんね。ただ、普通の基地ではないと思うよ。恐らく公表されてない中継基地がどこかに存在してるんだと思う」

「で、君の予想は？」

「ロッキー山脈のどこかだと思う」

「その根拠は？」

「アンテナが必要だろ？ だってクロウリーは空の上にあるんだぜ」
「なるほど。ダイレクトで受けるにしても他所から割り込まれないようにするには、なるべく高いところの方が望ましいということか」
「あの子も同じことを言ってたな。大した子だよ。まだ十代に見えたけどね」

「十四歳だと聞いている」

「へえ！ そうなんだ。けど何でそんな子がクロウリーの基地を探っているんだろ？」

「さあな。確かめたことがあるらしい。恐らく、校長先生の頭の『てっぺん』でも確認したい年頃なんだろう」

するとヘンリーは「は？」と、こちらの顔をアホ面で眺めた。

（ここは笑うところだろう。やれやれ。冗談の分らない奴だ）
気を取り直して尋ねてみる。

「それで大体の見当はついたのか？」

「いいや。とてもじゃないけど無理。はじめは挑戦してやろうと思っただ。エンジニアの端くれとしてね。けど甘かった」

「具体的には何を？」

「自分のパートをこなしながらこっそりスパイウェア（スパイ・プログラム）を送り込んだ。組み立て式でね。少しずつ少しずつパーツを送ったんだ」

「なるほど。スパイウェアを送り込んで本体から情報を発信させようとしたわけか。ただし、一時に送ると弾かれる可能性が高いから組み立て方式で工夫したと」

「そう。それでも何度も失敗したさ。で、やっとひとつだけ送り込むことに成功したんだ。でも、肝心な本体情報がまるで流れて来な

かった。というよりボクの技術じゃそれを拾えなかったんだ」

「そうこうしてるうちにクビになったというわけか。そういえばさつきパワードがどうか言っていたな」

「ああ。それね。スパイウェアのパワードだよ。あの子たちが挑戦したいから教えてくれって言ってきたんだ」

「で、教えたのか」

「教えたよ。ストレートに聞いてきたから、かえって清々しい感じだったし」

何が『清々しい』だ。こいつは単にサアラが気に入っただけじゃないのか？

「そうか。なら案内してもらおうか。君の元勤め先に」

「え？ 今からかい？ 嫌だよ」

「面倒なことになってもいいのか？」

「ど、どういう意味？」

「さっきの奴等は下っ端だ。だがコテンパンにやってやったから敵も本腰を入れざるを得ない。つまり、このままじゃ済まないってことだ」

「い、嫌なこと言っなよ。そんなこと……」

「いいや。流石に下っ端が殺られたら敵も本気になるだろうよ。なんなら今から戻って試しに止めを刺してみようか？」

「ダメ！ ダメだって！ 止してくれよ！」

「なら黙って俺に付き合え。エドモンド・シナプス社までな」

「酷いな……それじゃ脅迫じゃないか」

「いいや。これはれっきとした交渉だよ。なぜなら選択肢を与えたじゃないか。命がけで戦うという選択肢を」

それを聞いてヘンリーは観念したのかそれ以上は文句を言わなかった。

(何だ。話せば分かる奴じゃないか)

* * *

年始ということもあって人の気配はまるで無い。当然のようにエドモンド・シナプス社も閉まっていた。周りには個性的なビルが点在している。中には明らかに狙いすぎのものも混じっているがそれらの建物は、まるで程々に距離を取りながらおのれの個性を見せ付け合っているような印象を受ける。所々に配置されている植木にはまんべんなく雪が被さっていて、頭を押さえつけられた緑達は一樣にうんざりしているように見えた。

ヘンリーの案内でシナプス社の社員出入口に向かう。

当たり前のことだがここも開いていない。ヘンリーがシャッター脇の装置と監視カメラを見比べて（ほらね）といった風に首を竦める。

「ご覧の通りさ。ボクはクビになった人間だからね。当然、中には入れない」

「そっちはそうかもしれんがこっちは違う。俺はクビになっちゃいない」

「はい？ 何を言って……」

シャッター脇の認証システムに端末をかざすこと数秒。シャッターが舞台の幕のようにスルスルと開いた。これぐらいのセキュリティなら楽に騙せる。

「え？ 嘘だろ！」と、ヘンリーが目を丸くする。そして怪訝な顔をする。

「アンタ何者だい？」

「通りすがりのジャンク……」と言いかけて「怪盗だ」と訂正した。それを聞いてヘンリーは首を捻る。

（ここは笑うところだろう。やれやれ。やっぱり冗談の分からない奴だ）

* * *

誰に咎められる訳でも無く堂々と中に入る。

無人の廊下には非常灯しか点いておらず、窓から入る明かりが無ければ昼なのか夜なのか判別が出来ないだろう。

「で、ホスト・コンピューターはどこだ？」

「え？ ああ、そこを左に曲がるとエレベーターがあるんだ。それで地下2階に」

ヘンリーの案内でB2に下りる。

エレベーターの扉が開くと一段と殺風景な廊下とのっぺりとした壁が現れた。

次のルートを促すとヘンリーが自信無さそうに答える。

「たぶん、奥の扉がそうだと思う」

「たぶん？」

少し咎めるように言うとヘンリーが言い訳する。

「こ、ここには一回しか来たことが無いから……」

暗い廊下を道なりに進む。他に部屋は無さそうだ。

(ここで行き止まりか?)と、思った場所がどうやら最深部のようだ。

「これはまた金庫の扉みたいだな」

呆れるほど大きな扉が行く手を妨げている。その脇には当然のように認証システムのモニターがこちらを睨み付けている。試しに先程と同じように端末をかざしてみた。すると突然、警告音が発せられた。

「や、や、ヤバイって!」と、ヘンリーが後ずさりする。

「問題ない。外には伝わらないから」

「な、なんでそんなに冷静なんだ? 直ぐにガードマンがすっ飛んでくるぜ!」

「大丈夫だ。監視システムはお休み中だ」

「はあ? どういうこと……」

「入口で一杯飲ませただろ? 強烈なのを」

ようやくそれでヘンリーも理解したらしい。入口の認証システム

が読み込んだのはジイサン特製の幻覚剤「コンピ」だったのだ。これを喰らうと大抵のシステムはまるで夢遊病患者のように表面だけ活動している状態に陥るのだ。

「しかし、流石にここのは簡単にはいかないようだな」

「そりゃそうだよ。ここは企業秘密の宝庫だもの」

「所詮、民間レベルのセキュリティだ」

その気になればこの端末ひとつで銀行の金庫ぐらいなら開けられる。仮に軍などの特別仕様のシステムが相手だったとしても、ジイサンに遠隔操作して貰えばそれも恐らく突破できるだろう。ジイサン曰く「現代のセキュリティは電子化に頼りすぎている」よほど昔ながらの『鍵』みたいに物理的な物の方が厄介だというのだ。それは同感だ。

「これでどうだ」

もう一度、端末をかざしてみる。が、またしてもこちらを威嚇するような警告音が発せられた。

「意外に手強いな。ならこれで……」

今度のはかなり強力だ。今までのが『目くらまし』だとすれば、こちらは直接メイン・システムに侵入して積極的に操るタイプなのだ。

「ほら開いた」

所要時間25秒。

ヘンリーがしげしげと端末を眺めながら感心する。

「マジで凄いね。そんなのどこで売ってるんだ？」

「AKIHABARA（秋葉原）」

「ええっ！ 本当かい？」

「冗談だ」

分厚い自動扉を経て室内に入る。

即座に照明が点き、空調が動き出した。どうやら我々をゲストと勘違いしているらしい。さっきまでの拒否反応とはえらい違いだ。まるで他人を寄せ付けない番犬が人懐っこい犬ころに生まれ変わっ

たようだ。

「この調子だとケーキとコーヒーが出てくるんじゃないかな」

「冗談はさておきホスト・コンピューターの中心部に向かう。

高層ビルのような箱型が立ち並ぶ中で一箇所だけスペースが開いて、そこに戦国武将の兜のような黒い塊が鎮座していた。その正面には8つのモニターが、それと向かい合うような格好でイスが配置されていた。おそらくこの席で作業を行うのだろう。

(これは……)

見るとコントロール席の足元にお菓子の袋が散乱している。

「どうやら先客が居たようだな」

それを聞いてヘンリーが振り返る。

「え？ それってもしかして昨日の子たちが？」

「ああ。遠足に来たらしい」

そう言つてゴミの山を示す。チョコレートやらマシュマロやら甘いものばかりだ。

ヘンリーがカップ麺の食べ残しを見つけた。

「ねえ。ひよっとしてこれも……」

「どれ。……まだ乾燥しきっていない。昨日の夜に侵入したか」

恐らくサアラ達は昨夜のうちに目的を達成したに違いない。ヘンリーが仕込んだスパイウェアを使ってクロウリーの基地がある場所を特定することに成功したのだろう。そうなるとこちらもグズグズしてられない。

「ジイサン。こいつが見えるか？ どこに端末を繋げばいい？」

しばらくしてジイサンが返事をする。

『そうじゃの。まずは向かって右の真ん中あたり……そう、そのRJK3のところに1番を繋いでくれ。で、2番は……』

ジイサンの指示に従つて自分の端末と予め用意していたサブユニットをセットしていく。

『さてと。そんじゃ始めるとするか』

ここからはジイサンの独壇場だ。我々は待つしかない。

「ジイサン。いけそうか？」

『当たり前じゃ！ ガキどもには負けられんワイ』

ジイサンが作業に集中している間、ヘンリーは物珍しそうにモニターを覗き込んでいた。30分ぐらいはジイサンの仕事を観察していた彼は、とうとう諦めたように首を振った。

「参ったね。レベルが違う。とてもじゃないけどついていけないよ」
ヘンリーの説明によると、クロウリーの基地にある本体から大量に放出された命令はランダムに振り分けられダミーを織り交ぜながら一方通行で下請け会社に送られてくるという。この一方通行というのがミソなのだそう。下請け会社はその時に流されてきた命令だけを淡々とこなす。そしてその結果を来た時とはまったく別なルートで送り返す。これも一方通行で、送る先もその都度異なる。そしてそれらの結果は幾つかの会社を経由して基地の本体に流されてくるのだが、これも本体側の入口に特殊なフィルターがかけられていて余計な情報はカットされる。最終的にはこれらの結果が本体に集約・再構築されてクロウリーは制御されているというのだ。

その解説を聞いて思った。

「なんだか血液の流れみたいだな……」

本体の心臓から出た血液が動脈を通って体中を巡り、最後には静脈を通って戻ってくるのを連想したのだ。

「そうだね。もしかしたら人間の身体をモデルにしてるのかもね。」

セキュリティも人間の免疫システムを参考にしたっていう噂だし「それにしても何でわざわざこんな手間のかかる仕組みにしているんだ？ 自前で処理すれば良いものを」

「確かにね。けど、たぶん攻撃された時のことを考えてるんじゃないかな」

「一箇所に集中しているとリスクが大きいということか？ だが、リスクを分散したとしても下請けが多いということは、どこかひとつが欠けてしまったら……」

「それは当然考えてるみたいだよ。ひとつの命令に対して最低でも

5回以上は色んなところに同時に演算させて、最後に戻ってきた答えを照合してるようだから」

「ひとつやふたつ欠けたところで問題は無いと。それに間違った解答、例えば悪意のあるものなども排除できるといっわけか」

なるほど良く出来たシステムだ。各国のスパイがこぞってクロウリーの秘密を暴き、あわよくば自国の為に利用しようとしてことごとく失敗するわけだ。

ジイサンが作業に取り掛かって4時間が経った。時計を見ると15時を回っている。ジイサンがこれだけ苦労するのも珍しいことだ。「どうだいジイサン。今日中に終わりそうか？」

そう声を掛けてから10分後『お！ やったぞい！』と、いうジイサンの声。

「やったなジイサン。ごくろうさん」

『しかしなあ……ちょっと悔しいのう』

「何が？ 中継基地の場所は特定できたんじゃないのか？」

『いや。あの子らの中にはとんでもない天才がおるんじゃない』

「サアラ達のことか。どういうことだ？」

『あの子らの痕跡が無ければこうはいかなかったらうよ。ワシ一人でゼロからやろうとしたら恐らく一週間は徹夜だったらうな』

「……そんなに大変なのか」

ヘンリーも隣で口をぽかんと開けている。

「あの子たちそんなに凄いの？ いったい何者……」

「我々とは住む世界が違うんだらうよ」

サアラ達の場合は単なるエリートではない。C国が極秘裏に推進する国家プロジェクト、さしずめ『超人計画』とでもいおうか……。

『ま、何とか中継基地のポイントを掴んだんで表示するぞい』

地図に表示された場所はまさにロッキー山脈の中央だ。こんな険しい山岳に基地があるとはにわかには信じられない。

『ロシアのスパイ衛星『スミヤノフ』の映像を拝借したのがこれじ

「や
」

映像を見た瞬間、憂鬱になった。解像度はいまひとつながらその場所が絶壁にあることが一目で分かったからだ。

「やれやれ。山登りの趣味は無いんだがな」

『この時期に登山するのはあまりに危険じゃぞ』

「しかしこれで分かった。なんであんなまどろっこしいシステムを採用しているのかが」

それを聞いてヘンリーが興味を持つ。

「そ、それってどうということ？」

「中継基地は断崖絶壁にある。ということは大規模な設備は望めないということだ。つまり本体を極力、身軽にするためなのさ」

「ああ、なるほど……」

どつりで誰も手出しできないわけだ。だが、サアラ達はここを指している。

(やれやれ。お守りする人間の身になって欲しいものだ……)

「さてと。そろそろ引き上げるか……ん？」

油断した！

何者かがこの会社に侵入していることに気付いた。この会社のセキュリティ・システムは完全に掌握していたので外への警戒を怠ってしまったようだ……。

「また、あなたなの？」

聞き覚えのある女の声にゆっくり振り返る。

「お互いに一足遅かったようだな」

「そのようね。まったくあの子たちはいつもこちらの想像を超えてくるわね」

「同感だ」

「ところでそちらの方は？ 新しい相棒なの？」

「いや。この元社員さ」

「そう。本当はここで何をしてたのかゆっくり聞きたいところだけど……そうもいかないみたいよ」

そう言ってナミはやねやねといった風に首を振ってみせた。

第27話 共同戦線

ナミは入口のところで腕組みしながらこちらの様子を伺っている。ゆっくりしていられないという彼女の言葉に疑問を持った。

「どういうことだ？」

「何者か知らないけど攻撃を受けてるのよ。ワタシの部下が上でドンパチやってるわ」

「攻撃？ なぜ君等が攻撃されるんだ？」

「こつちが教えて欲しいわよ。目撃情報を辿ってここまで来たらのザマよ」

我々がクロウリーに接触していたのがバレたのか？ それなら相手は軍かCIAだ。

「ねえ。どういうこと？ この会社は何なの？」

「さあな。会社概要を調べてみればどうだ？」

「ケチね」と、口を尖らせると同時に彼女が振り向きザマに発砲する。

それに呼応するかのように銃声と銃弾が跳ねる音が飛び込んでくる。

彼女は扉の陰に隠れて応戦した。

様子を見るために入口まで移動したものの、このままでは援護できそうにない。

「予備の銃は無いのか？」

「無いわ。でも意外ね。あなたでも銃を使うの？」

「時と場合による」

「それよりいつもので片付けてくれないかしら」

「無茶言っな。こんな狭い廊下で出来るわけ……」

「うんっ！」

敵の弾道が彼女をかすめたように見えた。

端末でジイサンに依頼する。

「ジイサン！ 部屋の入口を閉めてくれ！」

それを受けて分厚い扉がゆっくり閉じられる。その間にも2、3発流れ弾が飛び込んできたが、敵が廊下を突っ切ってくる気配は無い。

「扉を閉めたところで一時凌ぎだが……」と、話しかけようとしてギョツとした。彼女が左腕を押さええて険しい顔をしていたのだ。

「当たったのか？」

「みたいね」

血は出ていない。

右手をあてがっている箇所は左の二の腕付近だ。彼女の両腕が義手が機械手だということは気付いていたが……。

（肩から下が義手ということか……）

彼女は軽く息をつくと閉まった扉を眺めながらボヤいた。

「……敵は続々と集まってるみたいね。どこから湧いてくるのかしら」

「奴等がこれだけ張り切っているのは多分、クロウリーのせいだ」

「クロウリー！？ それって……」

「この会社はクロウリーに関係しているんだ」

「嘘でしょ？ あの子たちはそれを知ってここに現れたとでも言うの？」

「他に何かある？ 健全な青少年が興味を持ちそうなものがこの会社にあるとは思えんが」

「……信じられない」

そう言ったとき彼女は絶句した。クロウリーがどういうものなのかはそれだけ十分に理解しているのだろう。

「どつりで……ね。とんだ『とばかり』だわ」

「タイミングが悪かったようだね」

「参ったわ。完全に囲まれたようね」

「だが、ここに籠城したところで何の解決にもならんな」

「さっき応援は要請したけど……遅いわね」

そう言って彼女は端末を取り出してどこかに連絡する素振りを見せた。

「大佐。応援はまだなの？」

（大佐？ 大佐というのはひょっとしてB国で遭遇したあのチヨビ髭の……）

彼女は少し苛立ったような表情でまくしたてる。

「早くして！ このままじゃ全滅よ。完全に囲まれてるわ。敵も素人じゃないし。え？ ワタシの居る所？ 目標地点の地下よ。足止めされてるの。え？ ……いいわよ」

彼女はしびしび端末をシナプス社のホスト・コンピューターに向けた。するとしばらくして8つあるモニターのうちの一つが反応して画像が切り替わった。

そこに現れた顔は、やはりB国軍兵士ごと自分を蜂の巣にしようとした男だった。ついでに言うとミサイル一発分の借りがある相手でもある。

モニターに写るチヨビ髭は相変わらず趣味の悪いベレー帽を被っていた。

『ほほう。なんだ。箱だらけの部屋じゃないか。妙な所に逃げ込んだものだな。で、標的はどうした？』

「一足遅かったわ。情報が古かったみたいね」

『フン。標的は見逃すわ敵に囲まれるわで散々だな。ん？』

「言い訳はしないわ」

『おや？ 後ろのお前……』

チヨビ髭が自分の存在に気付いたらしい。

「その節は世話になったな」と、社交辞令で挨拶する。

それに対してチヨビ髭大佐はニヤリと笑う。

『そうか。そいつは好都合だ！』

それを聞いて彼女が眉を顰める。

「大佐は今どの辺りに……」

『あと9分でそっちの上空に到達する。フム。アレを持ってきて正

解だな』

大佐の言葉に彼女は一瞬、首を捻ってから何か思い出したようだ。「まさか！」

『掃討作戦は豪快でないとならん。オレはチマチマした作戦が嫌いだね。分かるだろう？』

(おいおい。B国でのやり方を見てれば想像できなくもないが……) 彼女がモニターを睨む。

「建物ごと吹き飛ばすつもりね」

『フフン。すぐ楽にしてやる。幾ら神父のお気に入りで……もうお前は用済みだ。それにそっちの厄介者も消せるとなれば一石二鳥だ』

「そう。大したお手柄ね。後始末が大変だろうけど」

『何とでもほざけ。さらばだ。ドール！』

その台詞と同時にモニターが消えた。

試しに尋ねてみる。

「つまりあのオッサンは敵を片付けるついでに我々の墓穴も掘ってやると言いたかった訳だな？ 見かけによらず随分、サービスが良いなだな」

彼女は首を竦める。

「みたいね。バンカー・バスター（地下貫通爆弾）でも積んでるんじゃないかしら」

手元端末でバンカー・バスターを検索すると『GBU-70F』と出てきた。何でも10m前後のコンクリートを貫通して地下施設を破壊する為の爆弾だそうだ。

「あのオッサン、とんだ浪費家だな。早くクビにした方がいいぞ」

「前からそうなのよ。今度、上司に進言しておくわ」

「それがいい」

するとそれまで黙っていたヘンリーが「ちよつと待ってよ！」と、立ち上がった。

「な、何で2人もそんなに冷静なんだよ！ 死ぬかもしれないん

だぜ。怖くないの？」

「……別に」

その台詞が重なった。

思わず顔を見合わせる。

彼女の目を見る。まるで澄んだ泉の水面のような、ゆらぎの無い瞳だ。

その潔さ、諦めの良さに妙な笑いが込み上げてきた。

それが彼女にも伝染する。

意味も無く笑い合う我々に蚊帳の外だったヘンリーが訴える。

「ちよつ、何、笑ってんのさ！ 諦めちゃったのかい？ 何とか脱出方法を考えようよ！」

「いやスマン。何も考えてない訳じゃないんだ」

そう断っておいてから部屋の奥を指し示す。

「ジイサンが作業している間にこの部屋の中を回っていて気付いたことがある。この部屋の奥にでかいケーブルがあった。おそらく壁の外に繋がっているんだろう」

部屋の奥へ移動して改めて問題の箇所を検証する。

奥の壁には穴が開いていて、そこからケーブルが何十本も吐き出されている。

「何よこれ。全然スマートじゃないわね」

「表に見える部分は小綺麗にしても裏を返せばこんなもんだ」

熱心にケーブルを観察していたヘンリーが何かを思い出したようだ。

「もしかしたら……これって外部に繋がってるかも！ 確かこのビ

ルから300ヤード離れた所に太陽光発電があるんだ。この会社もそこから電気を引いてるはず！」

「それにしても太すぎない？」

確かにナミの言う通り壁から出ているケーブルの束は全部合わせると直径30cm近くにもなる。

「いや。他のケーブルも混じっているんだろう。例えばクロウリー

の中継基地にデータを送る専用回線とか」

「うん。その可能性は大だね。でも、これをどうしようっていうんだい？」

「こいつを引っこ抜いて壁の向こう側に行く」

「このケーブルを？ 無理っばいよ」

「いいわ。下がってて」

そう言って彼女が右腕を振り上げた。そしてそれをケーブルに向かって振り下ろし、稲でも刈るような動作をみせた。時折、火花が跳ねる音が混じる。

「お見事」

そうとしか言いようの無い手際だ。もし、今のをまともに食らっていたら自分はB国でカラスの餌になっていただろう。

壁から出ていたケーブルはナミのブレードですべて切断された。

ヘンリーが彼女の腕を見て悲鳴をあげる。

「ひよっ！ そ、そ、それは？」

彼女が右手の甲から伸びたブレードをチラリと見て澄ました顔をする。

「どう？ 便利でしょ？」

「ど、どうなってるんだい……」

ナミの義手に仕込まれたカラクリを見たら誰でもはじめは驚くだろう。

彼女は刃を納めながら次の作業を促す。

「さ、行くわよ。早くこのケーブルをどけて頂戴」

言われるままに、まずは切断されたケーブルをヘンリーと手分けして次々と穴の向こう側に押し込む。これで丁度、壁に穴が開いた形となる。

穴に首を突っ込んで光を当ててみる。思ったよりは隙間が大きい。「何とかいけそうだ。少し前進していったん下がる形になるな」
穴から顔を出して二人に尋ねる。

「誰から行く？ ここはひとつレディ・ファーストということだ」

この期に及んで後ろからブスリということは無いとは思うが、あのブレードを見せられた後で無防備に尻を晒すほどの勇氣は自分には無い。

「いいわ。それじゃ遠慮なくワタシから」

「俺が続く。君は最後でいいな？ この中では君が一番太っているからな。途中で詰まったら困る」

「ああ……そりゃ、しょうがないけど、あと時間はどれくらい残ってるんだい？」

「あと2分ぐらいかしら」

そんな彼女の冷静な答えにヘンリーが慌てふためく。

「だ、だ、だったら急がないと！ 早く行ってよ！」

あまり勿体ぶってヘンリーをパニックにしてもいけないのでナミを促す。

「さ、奥へどうぞ」

彼女に続いて狭い穴をくぐる。

匍匐前進の要領でナミはケーブルを押しやって隙間を広げながら前進していく。自分もそれを真似して前へ進む。

前方で彼女が声をあげる。

「ねえ、ケーブルが下に向かってるんだけど？」

「下りられそうか？ 多分、そこがメンテ用の通路に繋がっているはずだ」

丁度その時、ジイサンから朗報がもたらされた。

『アンカー、設計図があつたぞ！ うまくいけばその部屋の奥から外に出られるかもしれんぞい』

「……貴重な情報、ありがとよ」

『ん？ なんじゃ。その冷めたりアクションは』

「遅かったな。たつた今、モグラの真似事をしてるところだ」

『ああ、そうか。そりゃスマンかった』

しかし、ジイサンから転送されてきたデータには、この辺りは計画的に作られた区画でケーブルや水道を地下で集約していることが

はつきり示されていた。そして期待していた通り、彼女が降りた縦穴がまさにその地下ネットワークに通じていたのだ。

先に縦穴に降り立ったナミが横穴を照らしながら安堵する。

「何とか助かったみたいね」

自分も降りてみると高さ2メートル、幅は1メートルぐらいの細長い横穴が左右に伸びているのが分かった。壁はコンクリで出来ている。

ワントンポ遅れてヘンリーが尻から落ちてきた。

と、同時に猛烈な爆音と地響きが近くで起こった。立ってられない程の揺れ。

「走れ！」

彼女の背中を押しながら、足元を踏ん張って前へ進む。

背後では何かが落下してくる音がする。熱気を帯びた空気を背中に受ける。

一瞬、炎が迫ってくるかと思っただが熱気はすぐ収まった。

……どれぐらい走ったろうか？

明かりで照らす余裕も無く、とにかく横穴をいけるところまで進んだ。

もういいだろうと思って走るのを止めた。

「……本当に落としてきやがったな」

ナミはすっかり息が上がっていた。

「……そういう……奴よ。……前から、大嫌いだったわ」

「自分の上官が好きな人間が世の中に居るのか？」

すると彼女が息を弾ませながらもたれかかってきた。

(……ん?)

様子が変だ。ライトで彼女の顔を照らす。

(真っ青じゃないか！)

彼女の身体を支える左手に粘性を帯びた触感が伝わる。

「血!？」

手探りでその出所を探す。いつの間に怪我を負ったんだ？ 恐ら

くこれは衣類から染み出しているのだろうが、この状況では確認できない。

（まさか今の爆発ではないだろう。たとしたらさっきの銃撃戦か？）

「歩けるか？」

「……何とかね」

そう言う彼女は辛うじて自力走行が可能な状態のようだが足元は覚束無い。

「背負ってやろうか？」

「……よしてよ。歩けるわ」

ナミに肩を貸してやる。狭い通路なのでほとんど後ろから彼女を抱きかかえるような格好になる。

丁度、後方からヘンリーが追いかけてくる。

「おっ！ 待ってくれよう……」

「なんだ。無事だったのか」

「酷いよ。置いていくなんてさ。天井が崩れてきて大変だったんだから」

彼はナミの状態を見て目を丸くした。

「え？ 彼女どうしたの？ まさかさっきの爆発で？」

「いや。撃たれていたのを我慢していたらしい」

とにかくここでほっとしている場合ではない。

* * *

横穴を抜け、地上に出ると爆発の影響で辺りは大騒ぎになっていた。

粉塵が酷くて視界は良くない。怒号とサイレンが鳴り響き、警察や消防、報道の車が現場を取り囲んでいる。

ヘンリーは車が気になるので現場に残ると言うが、この様子では恐らく彼の車は巻き添えを食ってバラバラになっているだろう。

この混乱に乗じてタクシーを拾ってホテルに戻ることにした。

第28話 手負いの人形

ホテルの部屋に戻ってまずはナミをベッドに座らせる。

何か飲むかと尋ねると「冷たい水」というのでミネラル・ウォーターを与えた。それで幾分、落ち着いたようだが彼女の消耗は相当なものだろう。

「横になった方が良い」

「ありがとう……助かったわ」

そう言って彼女はゆっくりと仰向けでベッドに横たわった。

「医者を呼ぶか？」

「……止めとくわ。どうせ再生治療は出来ないし」

普通の人間なら左手の甲にチップを埋め込んでいるからDNAデータはすぐ読み取れる。が、彼女の左腕は義手だ。

彼女の左わき腹辺りが血に染まっている。

「顔色が悪いぞ。輸血ぐらいはした方が良くないか？」

「いいえ。医者は呼ばないで」

「分かった。無理強いはしない。しかし、その傷はいつ出来たんだ？」

「あの部屋に行く前に撃たれたの。わき腹をかすっただけよ。応急手当はしたんだけど」

「血圧が上がって出血してしまったようだな」

彼女は無言で頷いた。

「ゆっくり休め。部屋は自由に使っていていい。俺は当分帰らんからな」

「どこに行くの？」

「登山帽を買いに行くんだ」

「え？」

「冗談だ。サアラ達を追って山登りしなければならないんだ」

「山……そうなの」

少し考える素振りを見せて彼女はじっとこちらを見上げる。

「ワタシも連れて行って」

「……けが人に山登りは無理だ」

「仕事抜きでもダメかしら？」

「組織にはどう言い訳するんだ？」

「……死んだことになってるわ」

そう言っただけで彼女はモニターに目をやった。

ニュースでは先ほどの一件が『事故』として扱われていた。しかも休日でも出勤していなかったたので死者およびケガ人は無かったということになってるらしい。

「真相は闇の中か。まあ当然といえば当然だな」

少なくともナミの部下と攻撃を仕掛けてきた連中があの瓦礫の下に埋まっているはずだ。或いはピンポイント爆撃で粉々になったか……。いずれにせよ事実が公になることはあるまい。只でさえクロウリーが絡んでいるのだ。おまけにチョビ髭が使用したのが本当に『バンカー・バスター』だったとしたら軍の威信も損なわれる。

彼女は天井を見上げて呟いた。

「もう十分だわ……」

それはまるで自分に言い聞かせているようにも聞こえた。

窓の外は雪だった。雪は音も無く夜の底に沈んでいく。それに対して分厚いガラスを挟んだこちら側では沈黙が漂い続ける。

もう一度、彼女の方に視線を移した時、その涙に気付いた。

それを直視することが出来ず、今度は目を閉じた。

「ね。明日でいいでしょ。準備をするのは」

「いや。できれば今夜のうちに……」

「冷たいのね。けが人を放っておくつもり？」

彼女は訴えるような目でこちらを見る。

どこまで本心なのかは分からない。だが、その目……。

(そんな悲しげな目をするのか……)

ベッドに腰掛けて彼女の顔を眺める。

「じゃあ、どうしろと？」

「続き、なんてどうかしら」

「続き？」

すると彼女は目を細めて呟いた。

「森の中であなたがした事」

「……なんだ。てつきり脈が無いと思っていたんだがな。一昨日、再会した時にスルーされたから」

「いやとは一言も言っていないわ」

顔を近づけて唇を上からそつと被せる。B国の時は奪った形だったが今度は違う。

彼女の唇はそれを受け入れた。やわらかさの中にぬくもりが広がり、まるで開花寸前の花びらに付いた朝露のような湿り気に触れる。

雪が地表に降り注ぐように、そつと身体を重ねる。

彼女の首筋に唇を移そうとした時だった。

「待って」と、彼女が声を漏らした。

「電気を消すか？」

「ううん。そのままでもいいんだけど……」

不思議に思つて身体を離す。すると彼女はゆっくり身体を起こしてベッドの端に座った。

「見てて欲しいの」

そう言つて彼女はチャックを下ろした。

彼女が戦闘服のような『つなぎ』を脱皮するように脱ぐとスポーティなグレーの下着が現れた。予想以上に白く美しい肌を目を奪われる。左のわき腹に貼った応急テープには血の乾いた跡があった。

次に彼女は座ったままの姿勢で両腕を自らの太ももの間に深く差し込んだ。

何かのロックが外れる音……。

彼女が腰を引く。その瞬間、彼女と彼女の脚がすつと離れた。

(な!?)

残された両足がまるでベッドの端に立て掛けられたように見える。

彼女の胴体、丁度、太ももの付け根に当たる部分には肌の色に合わせたリングがはめ込まれている。恐らくここに足を繋ぐのだろう。彼女は下着姿でじつとこちらを見た。何を言いたいのかは分かる。しかし、期待が高まっていた鼓動が突然停止してしまったような気がした。まるで身体の内部で冷たい汗が流れるような感覚に支配されてしまう。

何かを訴えるような目。それは今まで彼女が見せてきた姿とは正反対の弱さを感じさせた。

さらに彼女は胸の前で腕を交差させると今度は自らの脇の下に指を潜らせた。

再び鳴る乾いたその音……。なぜかそれは処刑台のスイッチを連想させた。

「はずして……」

そう言われて彼女の左腕にそつと手を伸ばす。二の腕と肘をそれぞれ掴み、恐る恐る引いてみた。ほとんど抵抗も無く左腕が肩から外れる。同じように今度は右腕を外す。その重みが『生身』の物と比べて重いのか軽いのかは分からなかった。

「……下着も取って」

流石にそれは躊躇した。が、自力で脱ぐことが出来ないのは明白だった。意を決して下着に手をかける。

胸を覆う下着は少しずらしただけで簡単に外れた。下着を取り去った瞬間に露になった彼女の上半身はあまりにも無防備だった。

「これで全部よ。残りは生身だから」と、彼女は言った。

彼女の手足は驚くほど精巧に作られていた。が、切り離されてしまった今となつては用済みになったオブジェのように見えた。

彼女はわざと明るいい口調で微笑む。

「これでもいいなら……どうぞ」

そんな彼女を愛おしく思う衝動が半分、戸惑いが半分の状態で抱きしめた。そして彼女の頭と背中を支え、そつと寝かせた。その流れの中でもう一度、口付けをする。彼女の唇は一回目の時よりもず

つと柔らかかった。

何度も唇を重ね合わせてから胸に手を伸ばす。新雪をまとった丘のように形の良い乳房は、手のひらで触れるとわずかに震え、押すと遠慮がちに押し返してくる。その触感を確かめるように何度か膨らみをなぞった。そしてその中心にある頂点に口付けをする。

(……駄目だ……集中できない)

目の前には美しい乳房がある。が、その隣に……その付近にあるべきものが無い。まるで断崖絶壁に切り取られた山肌のように彼女には腕が無かった。たったそれだけのことなのにどうしても罪悪感が拭い去れない。触れてはいけないものを対象にして性的な欲求を露にすることは酷く躊躇われた。

「……どうしたの？」

「……いや。何でもない」

「ひどい汗……」

(頭では分かっているのに！ 身体がいうことをきかない……) 胸の奥にべったりと張り付いたトラウマが吐き気すら引き起こそうとしている。

「……すまない」

こんな形で中断することがいかに彼女を傷つけることかは分かりきっていた。だが、彼女は何も言わなかった。かえってそれが胸をしめつけた。

「……ある女の子を思い出してしまった」

思わず本音が出てしまった。さつきから何度もフラッシュ・バックする女の面影。それがどうしてもナミと重なってしまう。

「……どういう人だったの？」

「君と同じだ」

その言葉に彼女は目を見開いた。

「……話して」

この話は封印した記憶だ。ジイサンにすらしたことがない。だが、もしも誰かにこれを話すとしたら恐らく今しかないのだろうと思っ

た。

「……分かった。ただ長くなるからな。このままだと冷える」

彼女に毛布をかけてやる。それからあの忌まわしい出来事について話すことにした。

「あれは2050年代前半、今から25年ほど前の話になる。当時の俺は探偵の仕事も無く、プライベートでも行き詰っていてな。少々荒っぽい仕事を好んでこなしていた。そうやってブラブラしていた時分に元海兵隊のカイルという男に誘われた。なんでも俺の能力を聞きつけてきたらしくて「是非、作戦に参加して欲しい」と言われてな。一旦は断った。俺は傭兵はやらないと。だが、カイルは諦めなかった。「これは人命救助だから」と言っただけでも事務所に足を運んできた。とうとう根負けした俺は一回限りという条件でカイルの作戦に参加することになった。

仕事の内容は単純明快。武装集団が守る別荘を襲撃して囚われている女を救出することだった。ただ、問題はその場所だ。向かったのはT国の高級別荘地だ。妙だなと思った。なぜこんな所にわざわざ傭兵を20人も送り込むのかと。しかも助けるのは女一人。どういふ事情があるのか？ それと現地でカイル中尉の部隊に合流して妙なことに気付いた。どう見ても軍隊筋ではない人間、恐らくは一般人なんだがそいつが同行するという。カイル中尉の態度からこのアメリカ人がスポンサーだということは分かった。ただ、どこかで見た覚えのある顔だなとは思った。いずれにせよ私設で軍隊を組織してわざわざ東南アジアの敵地にまで乗り込もうつていうんだから金はたんまりあるんだなと理解した。

敵の別荘は入り江のような場所にあった。三方を険しい崖に囲まれて正面だけが海に面している。俺の役目は門を閉めさせないように門番を素早く片付けることと別荘の主が逃走するのを防ぐことだった。

夜になって作戦は直ぐに実行された。まず、我々本隊は闇に紛れてボートで入り江に侵入して別荘の外壁付近の茂みに身を隠した。

そこへ予定通りの時刻にヘリが近付いてくる。依頼主のアメリカ人が「商談」と称して別荘主を訪問するようアポを取っていたんだ。本当は別荘の敷地内にヘリポートがあるんだが「エンジントラブル」だと偽って、わざとヘリを門の外に着陸させる。そこで門が開いた所が勝負だ。

門から出てきたのは自動小銃を持った警備員達だった。何をそんなに警戒しているのかは分からなかった。多分、マフィアかなんかだとは思ったが。とにかく俺は淡々と役目をこなした。門番4人の首を掻き切り、門を開放した。その足で別荘の正門を突破して、予め頭に叩き込んでいた間取り図に従って真っ直ぐ3階に向かった。途中で何人が敵に遭遇したが問題は無かった。正直、あの頃の俺はこの能力を使うことを得意がっていたからな……。多分、5分ぐらいで目的の部屋に到着したと思う。部屋の前に居た敵は銃を構えるヒマも与えずに殺した。で、扉を破って部屋の中に入った。そこは一目見て寝室と分かった。何しろ部屋の真ん中にバカでかいベッドがでんと構えていたからだ。

ベッドの上では予想してた通り、別荘主がお楽しみ中だった。主の顔を確認して、俺は奴に拳を一撃喰らわせた。殺すなど言われていたから手加減はした。それで……」

そこまで話して喉の渇きに気付いた。いったんビールで喉を潤し、ひと息をついた。

自分が話をする間、彼女は黙って聞いていた。

彼女が何を思うのかその表情からは読み取れなかったが、その目は続きを促しているようにも見えた。そこで続きを話す。

「別荘主の他にベッドの上には2人の女が居た。救出する女は一人と聞いていたが、同じような境遇の人間がもう一人居るのだろうくらいに考えていた。だが、その2人を見た瞬間、我が目を疑った……。はじめ、それが人間だとは気付かなかった。ひとりは白人、もうひとりは東洋人だった。2人とも裸で……。2人とも手足が無かった。それを見て、一瞬、ギリシヤとかローマの古い彫刻を連想した。正

直言つて作り物ではないかと思ひ込みたかつた。だが目の前の2人は共に生きている……どれぐらい茫然としたことか。

やがてカイル中尉達が部屋になだれ込んできた。続いて依頼主のアメリカ人が入ってきた。彼はベッドの上の女を見た途端、その場に泣き崩れたよ。彼が変わり果てた娘を抱きしめてやるまで俺達は黙つて見守るしかなかった。これが現実の出来事なのかどうか疑いながら……」

手足を失つた美しい娘2人がシーツの上で並んでいた姿。その時の光景は20年以上経つた今でも鮮明に脳裏に焼きついている。

ナミがぼつりと言葉を發した。

「その子達はなぜ？」

「人身売買。後でそう聞かされた。T国には人身売買をする組織があつて、中には若い女性を誘拐して売り飛ばす奴等がいたらしい。

彼女達はその犠牲になつたんだ」

「……酷い。本当にそんなことが……」

「金持ちで変態のリクエストがあると、たまにそういうことをするようだ。とても人間のやることとは思えんが」

「それで、その子たちはどうなつたの？」

「白人の子は『キャサリン』といつて依頼主の一人娘だつた。もうひとり日本人で名前は『ミキ』といつた。アメリカでも十本の指に入る大金持ちの依頼主は極秘裏に2人を連れ帰り大邸宅でケアすることにした。専門の医師、技師、それからカウンセラーをつけてな。それからなぜか俺もキャサリンに請われてしばらく依頼主のところへ厄介になることになった。多分、俺がミキと同じ日本人だつたというのもあるんだろう」

「彼女たちと話したの？」

「キャサリンとはよく話した。だが、精神的に不安定だつたミキは何もしゃべらなかつた。そばに居てやるよう言われていたからそうしていたんだが一度だけだつたな。彼女が口を開いたのは」

「一度だけ……それはどんなこと？」

「監禁されていた時のことだ。手と足を奪われて寝返りもうてない中、彼女はずっと天井を眺めていたそうだ。身体の大半を失っても、なお生き続けることの意味をずっと考えていたと。その時、彼女は手や足が痒いのにあるべきものがそこがないという感覚に随分と悩まされたらしい。そしてこう言っていた。それを絶えず思い知らされることで身体の境界が曖昧になってくる。そのうちまるで自分がベッドと同化してその一部になってしまったような気分になってくる。そして最後には、どこからどこまでが『自分の境界』なのか自信が無くなってしまふんだと言っていた」

ナミは今にも泣き出しそうな顔で話に聞き入っていた。

「それからミキはこんなことも言っていた。その時に不思議な体験をしたと。独りで居る時は気付かなかつたが、キャサリンが近くに居る時に彼女の感覚が伝わってきた。例えばキャサリンがあの手を握る時に別荘主に身体を触られた時の感触や嫌悪感。それに共鳴するようにミキにもそれがはつきりと感じられたという。ひよつとしたらそれは錯覚かもしれない。だが、キャサリンも同じことを言っていた」

手足を奪われた者同士が完全に隔離された空間で共有した感覚。それがどういうものなのかは分からない。しかし、あの2人は確かに一心同体のように、ある種の通じるものを持っていたと思える。

「それで彼女たちは立ち直ったの？」

「結局、俺は二カ月後に邸宅をあとにした。キャサリンとミキは最高の医師と技師で構成されたチームによって最高級の腕と足を与えられ、社会復帰を果たそうとしたらしい。キャサリンが時々手紙をくれてね。字の上達具合で回復の度合いが分かった。はじめはミミズがのた打ち回ったような文字だったのが見るからに進歩して2年目ぐらいには普通の字がかけられるようになっていた。ところが事件から3年後、俺の元に訃報が届いた。ミキが死んだという知らせだった。それからまもなくキャサリンも亡くなったと聞いた。かけがえの無い仲間を失った悲しみに耐え切れなかったのかもかもしれない」

「……そうなの」

そう呟いたナミの顔を見てミキと話した時のことを思い出した。

「彼女……ミキはその話をしてくれた後、ある頼みごとをした。それがすべてを物語っていたような気がしてならない」

「彼女は何て？」

「……私を殺して、と」

二ヶ月一緒に居ながらミキは一度たりとも笑顔を見せなかった。また、自分から何か語ることもなかった。結局、自分は彼女に何もしてやることが出来なかった。にもかかわらず、彼女はたったひとつだけ願いを口にした。あの時のミキの言葉……すべてを諦めてしまったような表情、それらがトラウマとなって自分を苦しめる。

「……彼女のこと愛してたの？」

「いいや。同情はしていたが……そうではない」

「もし、彼女のことを愛してたら……殺してた？」

「なんでそんなことを？」

ナミは何を望んでそんな質問をしたのだろうか。

「ううん。いいの」

こうやって毛布から顔だけを出しているところなどはまだ十代と言っても通用するぐらいにあどけない。なのに時折見せる不安げな表情には決して拭えぬ哀しさを孕んでいるようにも思える。

「ねえ。その別荘の主はその後どうなったの？」

「分からない。だが、傭兵達の噂では特別に酷い拷問を受けて死んだことになっていた。それと奴に彼女達を売った人身売買組織はカイル中尉の隊に全滅させられたそうだ。誘拐の実行犯から彼女達を手術した闇医者、組織のボスまで一人残らず生きてまます足をもがれて見せしめにされたとのことだ」

あまりにも残酷な話に気分が滅入ってしまった。

ナミの顔を眺めながら考える。

(この話をして良かったのかどうか……)

寝るにはまだ早いがそろそろ眠らせた方が良さそう。そう思って明か

りを小さくした。

「長々と済まなかったな。もう休め」

すると彼女は小さく首を振った。そしてか細い声で訴える。

「……わたしの話も聞いてくれる？」

第29話 告白

ナミが身体を起こしてくれと言うので、枕を縦にしてそこにもたれかかるような姿勢にしてやった。が、そのままでは乳房が露出してしまっているのでガウンを肩からかける。

「ありがとう。一度外してしまうと自分では何も出来ないの……」
そう言っただけ頬を赤らめる彼女は普通の女の子と違って何ら差し支えない。

話を聞くのにベッドに腰掛けたままというのも何なので椅子をベッドの脇に引っ張ってきて彼女と向き合う。

「いいぞ。じゃあ聞こうか」

「うん」と、小さくひとつ頷いて彼女は自らの生い立ちから語り始めた。

「ジェーン・ギデオーン……前に言ったかしら。本当の名前は」

「ああ。覚えてるよ。変わった名字だなと思った。ヨーロッパの出なのか？」

「そう。祖父が伯爵家の血を引いているそうよ。今となっては関係ないけど」

「家族は？」

「みんな亡くなったわ。私が11歳の時に。父、母、妹……交通事故故よ」

「そうだったのか。ひよつとして君もその時一緒に？」

「そうよ。私だけ生き残ってしまったの」

「この時代に交通事故とは……」
すべての自動車にSCセフティ・コントロールを搭載することが義務化されて半世紀がたつというのに不幸な事故は無くならない。

「相手は違法車に乗っていたの。上院議員の息子だって。有り得ないスピードで突っ込んできたわ」

「酷い話だ」

「意識が戻った時はすべてを失ってたわ。家族も。手も足も。何もかも……」

そう言って彼女は目を伏せた。その時のことを思い出してしまったのだらう。

枕元の薄明かりが淡々と彼女を照らす。

「孤独だったわ。親類は居なかったし、学校の友達も面会させてもらえなかったみたい。病室に来るのは弁護士だけだったわ」

「弁護士？」

「ええ。加害者の弁護士。というより弁護団ね。それから父の知人だつていう弁護士。両方とも最低だったわ」

「大体、想像は出来るな。被害者そっちのけで賠償金の相談というわけか」

「そうよ。父の知人は賠償金のほとんどを持ち逃げしちゃったんだけど。でも私にはまるで興味が無かったわ。加害者は憎かったけれど」

「加害者は罰せられたんだろう？」

「それがどんな裁判をしたのか知らないけど数年で出てきちゃったわ」

「やれやれ。この国の裁判制度はどうなっているんだ」

「結局、私は病院を放り出された後、行くところがなくて施設に入られたの。でも、どこの施設にも敬遠されたわ。たらい回しよ。仕方がないけれど」

彼女は「仕方がない」と言うがあまりにも惨い話だ。手足を失った天涯孤独の少女に誰も手を差し伸べてやらないなんて…。

「一番酷かったのは『マスコミに紹介してもらえば誰かに助けってもらえるかもしれない』って言った教会系の施設ね。絶対に嫌だつて断っただけ」

「何のための宗教だ。実に嘆かわしい」

「それで最終的に助けしてくれたのが神父様だったの」

「黒神父か」

「黒？」

「いや。勝手にそう呼んでるだけだ」
彼女が怪訝そうな顔をする。

「どういう意味？」

「表向きは神父だが裏では秘密組織を牛耳っているから。気を悪くしたなら謝る」

「……別に怒りはしないけど」

そう言っただけで彼女は少し考えるような表情をみせた。そしてポツリと漏らす。

「でも、私も時々分からなくなるわ。神父様の教えが本当に正しいのかって」

「……その迷いはいつから？」

「最近よ。それまでは何の疑問も持たなかったわ。神父様の言う通りのことを一生懸命こなしながら育ったから。毎日、必死だったし」

「あの『仕込み刀』も神父さまの希望か？」

「……そうね。神父様が用意してくださった手足はどれも最高級の物だったけど普通の物じゃなかったわ。人を傷つける道具が仕込まれてるなんて最初は変だなんて感じてたけど、そのうち自分に求められている役割はそれしかないんだって考えるようになってきたわ。

今から思うと神父様は最初からそのつもりで私を拾って訓練してたのかもしれないけど……」

「訓練は厳しかったのか？ 義手と義足を使いこなすだけでも大変なのに」

すると彼女は苦笑いを浮かべる。

「厳しいなんてものじゃなかったわよ。あれに比べれば軍隊の訓練なんて子供のお遊戯だわ」

訓練の厳しさがどれ程のものかは見当がつく。例えば、車の運転の件だ。B国ではじめて会った時、彼女は改造車を平気で運転していた。普通に考えれば、交通事故で生死を彷徨った経験のある人間なら誰でも恐怖心やトラウマを持つはずだ。しかし、彼女は平然と、

いやむしろ命知らずともいえる無謀な運転を披露してくれた。今となって思うと、あの乱暴な運転は「いつ死んでも構わない」と覚悟した上でのものだったのか…。

「今でも神父に恩義を感じているのか？」

「多少はね。神父様は手や足を与えてくださった方だし、身寄りの無い私を実の娘のように可愛がってくれたから」

「おいおい。普通、実の娘に殺し屋まがいの真似はやらせないだろうに」

「それはちつとも気にしないわ。あの頃の私は神父様の期待に応えることが唯一の希望だった。それに事故の事とか人の冷たさとか色んな事に絶望してたから」

「すべて神父の言う通りか。確かにNYで会った時、神父の前では随分と神妙だったな」

「絶対服従なのよ。傍から見たらただの『操り人形』だけど……」

「そういえばチヨビ髭大佐が君の事を『ドール』と呼んでいたな」
彼女が黒神父の『人形』だということは妙な連想をさせる。それは裸同然の彼女を目の前に行っているせいかもしれない。

(何だ？ この厭な気分は……俺は嫉妬しているのか？)

それはあまり歓迎すべき類の感覚ではない。そのような感情はこの身体の宿命に気付いた時に捨て去ったはずだ。それなのに彼女が黒神父に弄ばれている姿を想像して勝手にイラついている自分に心底、嫌気が差した…。

「え？ ……何？」と、彼女が上目遣いでこちらの表情を伺おうとする。

「いや……何でもない」

「どうしたの？」

「気にするな」

「……もしかして大佐から何か聞いたの？」

「いや。確かに奴とはB国で会ったが……」

彼女は眉を顰めて微かに首を捻った。

「もしかして大佐と同じ誤解をしてるんじゃない？ 私の身体が『おもちゃ』にされてるとか？」

「な……そ、そんなことは」

凶星だ。情けないことに顔に出してしまった。

彼女はそれを見てやれやれといった風に軽くため息をついた。

「やっぱりね。でも、言っておくけど神父様は若い頃に去勢なさってるのよ。トップ・シークレットだけどね」

「去勢……だと？」

それを聞いてほっとしている自分が情けない…。

「どうしてそんな風に考えるのかしら。男の人って。だいたい、こんな身体の女なんて……」

彼女は、はじめ幾分、怒ったような表情で首を傾げ、続いて寂しそうに俯いた。その言葉の後に続く言葉は彼女に口からは発せられなかった。そのせいで「そんなことないさ」と、言えない自分の思いは行き場を無くしてしまふ。

駄目だ。話題を変えよう…。

「そもそも君らの組織の考え方というのはどういうものなんだ？」

「そうね。簡単に説明するなら」と、彼女は前置きして言葉を選んだ。「神に召される為に出来るだけの準備をしなければならぬってところかしら」

「出来るだけの準備……か。それは神父個人の教えなのか？ それとも……」

「組織の考え方よ。正直、私には理解できないっていうか、ついていけないというか」

「君達のベースはキリスト教なんだろう？ ただ、原理主義も行過ぎるとただのカルトだが……」

「カルトではないと思うわ。自信はないけど」

「問題は何を準備しようとしているかだな。具体的には何の準備をするつもりなんだ？」

「さあ。それは私には分からないわ。そもそも私なんて組織の末端

の人間よ。神父様だって幹部には違いないけど『上のお方』は他に
いるようだし、組織の規模とか実態とかはまったく知らされてない
のよ」

「まあ、かなりデカいことだけは間違いないな。でなきゃ最新鋭の
戦闘機をタクシー代わりに乗り回すなんて芸当は出来まい」

「いったい、どんなスポンサーがついているのか教えて欲しいものだ。
(キリスト系の巨大秘密組織か……)」

チャンの話にヒントを得て、あれから『ヘヴンズ・エントランス』
というカルト教団が『ヘーラー』のルーツではないかと思つて少し
調べてみたのだが、まず彼等の特徴を一言で表現するなら『神に選
ばれる為に個を捨てよ』という教義を徹底的に実践した集団である
ということだった。その実現の為に彼等は集団生活を営み、その果
てには捨て去るべき『個』とは『器』すなわち肉体であると解釈し
て自ら命を絶つた。彼等が好んで用いた『アセンション』という概
念は、メンバー全員が同時に肉体を捨てることで肉体から解放され
た『精神』が一体化・進化し、神に召還されるに相応しい存在にな
れるというものであったらしい。恐らくその末路だけをクローズ・
アップすれば、彼等は単なる過激な集団ということになるが、そ
の一方で「天に召される為に何かをする」という考え方そのものは
宗教上、別に特異なものではない。要は程度の問題なのだ。

また、このカルト教団に関係した人間が『ヘーラー』を作つたので
はないかという視点でも調べてみたのだが、結論として断定は出来
なかった。確かにこの教団には彼等が2012年11月に集団自殺
する直前に破門された残党が居た。その数少ない生き残りの中でも
サイモン・スプリングフィールドという学生はその後教団の教え
を独自に改変しながら宗教活動を続け、それなりの信者を獲得した
と記録されている。しかし、サイモン本人は40年前に亡くなつて
おり、また彼の信者達がその後、表立つて活動していたという記録
も無い。それなので、サイモンの教えが『ヘーラー』という組織に
何らかの思想的な影響を及ぼした可能性は否定できないものの、逆

に彼の信者がヘーラーに関わっているという証拠もない。

（黒神父が去勢しているというのは、まさに『ヘヴンズ・エントランス』の考え方そのものなんだが……）

カルト教団の思想がそれなりに浸透しているということは、やはりそれだけ世間は病んでいるのだろう。資本主義経済の終焉、もはや手遅れである環境問題、要因は幾つかある。しかし、最大の問題は個々人の中で『諦め』が『希望』を駆逐してしまうことだ。あと何年後に終わるのかは分からない。が、近い将来に駄目になるのは間違いない。その漠然とした不安が世界に蔓延しているのだ…。

そういえば彼女はティンバーのカフェで「私たちは『ラスト・クロップ』なの」と言っていた。その辺りを彼女にぶつけてみる。

「前にラスト・クロップという言葉を使っただろう。それは種馬の最後の世代という意味じゃないかと指摘したら君はそれに近いと答えた。つまり、君達の組織は、もうすぐ世界が終わると信じているのか？」

すると彼女は「ええ」と、力強く頷いた。

「じゃあ聞くが、それとサアラにどんな関係があるんだ？ 君はサアラを『miracle crop』とも呼んでいたが、奇跡の作物とはどういう意味だ？」

その質問に彼女は少し考えてから答える。

「さっきも言ったように私は末端の人間だから組織のすべてを知っているわけではないわ。でも組織の目的達成の為にあの子の身体が必要なのよ。サアラ・タゴールはあなた以上に特別な遺伝子を持っているから」

「俺と同じ細胞を不死化するDNAか……」

「そうよ。あなたのDNAの特徴はテロメアが特殊なこと。簡単に言えば制限無く細胞分裂を可能にするスペックを持ってることよ。だから全身がいわゆる「不死化細胞」なのよね」

「よく調べたな。俺もその事実を知った時はピンとこなかったよ。医者に全身が『がん細胞』で出来ているようなものだと言われても

な」

「ただ決定的に違うのは、あなたのDNAは一代限りだけど、あの子のDNAに含まれるテロメアは他人のテロメアに影響を及ぼすことができるのよ。それも遺伝ではなくて、移植によってね」

「な、なんだと……」

何という事だ！ そんな事があり得るのか？

そもそもテロメアというのはDNAの末端を保護する蓋のようなもので、DNAそのものが毀損したり不安定化することを防いだりする。また細胞の老化や不死化をコントロールするのもこのテロメアの役割だ。

「恐らくあの子のテロメアは他人の細胞に移植されるとその人のDNAに同化して細胞を不死化させるんだと思うわ」

「同化するだと？ サアラのDNAは他人のDNAに寄生してその一部に成りすますとも言うのか？」

「そうね。それに近いかも。そこがあなたのDNAと違うところよ」「バカな。テロメアにそんな運動機能があるとは思えないが……」

「テロメアにはタンパク質をコントロールする力があるでしょ。だったらあの子のテロメアは移植された先で新しい環境に適應する為にDNAを書き換えていると解釈できるんじゃないかしら」

「DNA、それもその一部であるテロメアがまるで生物がウイルスみたいに自らの存在を守るような動きをとるだと？ にわかには信じがたいが……」

「それだけ彼女のDNAは特殊なのよ。しかも相手を選ばない。万能なの」

「だとしてもそれが……待てよ！」

読めた。なぜヘーラーがサアラを狙っているのかが。

「組織の目的はiPS細胞だな？ サアラのテロメアをiPS細胞に移植してから再生治療の要領で培養するつもりなんだろう」

「そういうことでしょうね。あなたのような身体を欲しがる人間は沢山いるわ」

「まさか！……まだ試した訳じゃないだろう。誰でも俺のような身体になるだと？ そんな空想じみた話……」

神話などにおいては特別な生き物の血を飲んだり肉を食べたりするとその者は不老不死となるというものがある。その生き物は人魚、ユニコーン、フェニックス、ドラゴンと、その時代その場所によって異なるが、それはあくまでもフィクションだ。

「だからあの子は奇跡のクroppなの。何百億分の一の確率で生まれる奇跡の遺伝子」

「そんなバカな……」

（不老不死を手に入れる為。それがサアラを必死で追う本当の理由だと……）

彼女は神妙な顔で続ける。

「過去に一人だけ、あの子と同じ奇跡のDNAを持つ人物が存在したわ」

その言葉に思わず目を見開いた。

「なに！？ だ、誰だそれは？」

すると彼女は誰もが知るその名を口にした。

「ジーザス・クライスト」

「な！？ ……イエス・キリスト……だと？」

第30話 miracle crop

彼女はサアラのDNAは奇跡の遺伝子だという。そして同じものを持つ唯一の人物がよりによって『イエス・キリスト』だと…。

その名を聞いてすぐさま疑問が生じた。

「冗談はよせ。誰がキリストのDNAを保管していたんだ？」

「バチカンよ。封印された倉庫に眠っていたらしいわ」

「幾らバチカンでもそれは無いだろう。二千年以上も前の品を完璧な状態で保存していたとでも？」

「どついう風に保存されていたかは知らないわ。でも彼等がそれを使つて一時期、本気でイエス・キリストのクローンを作ろうとしていたのは事実よ」

「信じられん……何という馬鹿げたことを……」

「結局、計画は中止されたみたいだけど。それが技術的なものだったのか倫理的なものだったのかは今となっては分からないわ」

「仮にキリストのクローン人間が出来たところで必ずしも救世主になるとは限らないだろう。本人はパン屋になりたがるかもしれないし」

「その辺りはバチカンも色々準備してたらしいわよ。なんでもイエス・キリストと同じ経験を積みせるとか……」

「ほお。じゃあ台本は聖書か。だったら当然『羊飼』のオーディションも開催したんだろうな？」

「そこまでやったかは知らないけど、とにかくイエス・キリストのDNAを解析することには成功したのよ。でも残念ながら細胞の培養には成功したけど、そこから先がうまくいかなかったようね」

「幾らiPS細胞が万能といえども臓器を丸ごと作れないからな」
DNAを解析して作ったiPS細胞は再生治療として実用化はされているものの、それはあくまでも既存のパーツを修復するレベルでしかない。指や歯は何とかなるが、大きなパーツとなるとやはり

成形が難しくまた神経ネットワークの構築に難がある為、例えば手首から先をまるごと再生というわけにはいかない。つまり臓器のスペアを作ったり手足を生やしたりするまでには至らないのだ。

「でもね。その過程でエイスのDNAに欠陥が見つかったの。要はテロメアに異常があったわけ。で、それを調べている時に偶然、発見された特性がそれよ。誰のDNAにでも適応して、しかも不死化させる能力。世界中のどんなDNAとも違う特別なもの……」

「まさにキリストの奇跡だな」

「ええ。ただし限界はあるわ。人工的に再現したDNAのテロメアでは少ししかiPS細胞が作れないの。所詮、無理やり復活させたものでは、やはり現役には敵わないってことね」

「……そこでサアラか？」

「そうよ。あの子からなら新鮮なのがたくさん採れるでしょうから」
「DNAが採取できれば良いんじゃないか？ だったらサアラの唾液でもフケでも集めれば良いんじゃないか？ 最もそれじゃ組織ぐるみの変態だが」

「そうはいかないわよ。1人の人間を不老不死にするには大量のiSP細胞が必要なのよ。身体中に何度も移植しないとならないでしょうから。だから組織はあの子を確保しようとしているの」

（やれやれ。とんでもない話だ。それでヘーラーはサアラのことを『miracle crop』すなわち奇跡の作物と呼んでいたのか……）

遺伝情報の解析においては『ノンコーディング領域』と呼ばれる部分が、いかに身体的特徴を決定付けるのかを解読することが重要だ。所詮、実用化されている再生医療のほとんどはDNAをまるごとコピーしただけに過ぎず、DNAのどの部分を変化させると記憶力が良くなるとか手先が器用になるとかというところはまだ完全には解明されていないのだ。最も某国のように秘密裏に人体実験を重ねることでその一部分を把握している連中も居ないわけではないが、おかげで『ヘーラー』がなぜサアラを狙うのかは分かった。だが、

奴等の目的はそれだけではないだろうか？」

「……それは否定しないわ。ただ、私にはその全貌は分からないの」「そうか。信じよう」

あれだけの組織が単に不老不死を得ることを目的としているはずがない。恐らく連中はそれ以外にも何か企んでいる……。

「ところで君は組織には戻らないのか？」

「……ゆっくり考えてみるわ」

「それがいいだろう。さ、もうこんな時間だ。そろそろ眠った方がいい」

すると彼女は何か言いたそうに少し口を尖らせた。まだ話し足りないとも言うのだろうか。或いは……。

彼女が何を求めているのか、それはその潤んだ瞳を見れば何となく分からないではない。しかし自分はここでひと時の感情に身を任せるほど若くは無い。「身体が」ではなく、精神が……。我ながら不毛だと思わざるを得ない。が、どうしてもそれに気付かない振りをしてしまうのだ。

「どうした。目が冴えてしまったのか？」

冷たいように思われるかもしれないが自分にはそういう言い方が出来ない。

「そうじゃないけど……」

彼女はそういつて視線を落とした。

「何なら子守唄でも歌ってやろうか？ M・ジャクソン三世の『月を抱いて眠れ』なら少々、自信がある」

すると彼女は苦笑いを浮かべた。

「……遠慮しておくわ」

「そうか。じゃあ、明かりを消すぞ」

そう宣言してから彼女の姿勢を眠り易い体勢にしてやった。その間、彼女は目を閉じてされるがままだった。その無防備な美しさについ触れてしまいたくなる。敢えて事務的に、感情を表に出さぬよくな素振りでも布団をかけてやる。

そして明かりを消してベッドに背を向けた時だった。背後から、
か細い声で彼女が尋ねてきた。

「あなたはどこで寝るの？」

「いや。一杯、引っ掛けてくる」

「そう……じゃあ寝る前に1つだけ聞いていい？」

「答えられる範囲でいいなら」

「不老不死ってどんな気分？」

（やれやれ。そう来たか……）

少し考えて正直に答える。

「気味が悪い」

「え？」

「もしかしたら歳をとらないのは外見だけで臓器だとか脳はそれなりに老化しているのかもしれない。自分の身体がどうなっているのか、これからどうなっていくのか、まるで分からないっていうのはあまり気分が良いものじゃない。そもそも前例が無いからな」

それを『不安』と言ってしまえば多分そうなのだろう。だが、そんな生易しいものではない。かといって死が怖いとは違う。まるで夢の中で得体の知れない敵から逃れられないような感覚。この身体の特異性を知ってからの数年間、それがずっと頭を離れることは無かった。そして未だにそれを受け入れることが出来ない。

「もう寝ろ……」

それだけ言い残して部屋を出る。

彼女がどんな反応をしたのかは分からなかった。そして彼女が何を思うのかも……。

* * *

端末の呼び出し音で目が覚めた。

いつの間にかホテルのロビーで寝ていたらしい。どうやら昨夜は飲みすぎたようだ。

『アンカーさん。おはようございます』

呼び出しはチャンからだった。

「何だ少年？ まだ早いぞ」

『すみません。早く報告したくてそっちが朝になるのを待っていました』

「今どこだ？」

『昨日、サウジ経由でイランに入国しました。で、早速、今回の情報提供者と会ったんですよ』

「情報提供者？」

『ええ。前に写真を見せましたよね？ イランでバベルの塔を調査する一団の。あれに写っていたガイド役のアシム青年。その息子さんでハマド君というんですが』

「それで？」

『やはり匂いますね。あの調査団には秘密があるんだと思います。現にハマド君が言うには彼のお父さんは以前から何者かに怯えていたと。やはり彼のお父さんは口止めの為に殺されたんですよ！』

どうやらチャンは30年以上前に結成された調査団が『バベル』の前身だという説を立証したいらしい。

「……殺された？ それは初耳だがどういう状況で？ 証拠は？」

『水死です。証拠はありませんが……でも、アシム氏の部屋は荒らされていたんですよ。きっとアシム氏が密かに持っていた情報を回収する為でしょうね』

「あのなあ。証拠隠滅を謀る人間が今時、家捜しするか？ 普通そういう情報はWeb上に保存されているだろう」

『そ、それは……でもあまりにもショッキングな内容だからアシム氏が手元に持っていたとも考えられますよ！』

「まあいい。それで？」

それを受けてチャンは、アシム氏に異変が生じたのは31年前の体験談を公開しようとしていた矢先だった事、その内容が考古学の歴史をひっくり返すものと予告されていた事などを力説した。

『なので僕らの手でバベルの塔があつたと思われる場所を特定するつもりです』

「おいおい。仮にその情報が命を狙われるような代物なら、その息子にも危害が加えられる可能性が高いんじゃないのか？」

『ええ。二時間ほど前に襲われましたよ。それが何よりの証拠ですよ？』

「何!？」

『襲ってきた人間は「命が惜しければ首を突っ込むな」と脅してきましたけどね。おかげさまで簡単に撃退できましたよ』

チャンはしれつとそんなことを言うが危険極まりない。

「少年。甘く見るなよ。お前はまだ『ひよっこ』だ。とにかくヤバいと思つたらすぐに引き返すんだぞ」

『でも、僕には……』

「だつたら言わせて貰うが、襲ってきた相手をなぜ捕まえなかつた？ 誰に頼まれたのかを聞き出す必要があつたんじゃないのか？」

でなければ敵は何度でも襲ってくるぞ」

『ごめんなさい。ちよつといい気になっていました。用心します』

「無理はするなよ」

『はい……』

浮かれているところをたしなめられてしょんぼりしていたチャンだが、すぐに「あ!」と、何か思い出したようだ。

『ところでサアラは？ サアラには会えましたか？』

「いや。まだだ。これから山登りをしなければならぬ」

『山登り？ 何でまたこんな真冬に？』

そこでチャンに経緯を説明してやった。それを聞いてチャンが納得する。

『さすがというか、もうそんなところまで……凄いなあ』

「しかし相手はクロウリーだぞ。まったく無茶をする。だが、あのジイサンですら舌を巻くぐらいだからな。あの子達なら本当にクロウリーを乗っ取りかねないな」

「いえ。きっと成功しますよ。何しろワンのハッキングは只者じゃないですからね」

「ワンというのはメガネの少年か。B国軍基地のシステムを乗っ取ったのも彼の仕業か」

「ええ。あれぐらい彼にとつては楽勝ですよ。なんせ」大統領の尻を火傷させた男ですからね」

「何だそれは？」

「C国を侮辱したF国の大統領の家にハッキングしてウオシユレットを熱湯に変えちゃったんですよ」

「……絶対に敵に回したくない奴だな」

「そつかあ。サアラ達は本当にクローリーを乗っ取るつもりしてるんだ。うん。でもアクセスさえ出来ればそれも可能だと思いますよ」

「このクソ寒い中、冬山に登る身にもなつて欲しいもんだ」

それは嘘偽りの無い感想だ。幾らなんでも素人である自分がたった一人で冬山に挑むなど随分と費用のかかる自殺行為だ。しかし「ヘーラー」がサアラを狙う目的を知ってしまったからには行かないわけにはいかない。

チャンはチャンで危なつかしいながらイランで「バベル」に繋がる情報を集めようとしている。それが成果となるかどうかは不明だが、二つの巨大組織が何を指向しているのか、我々は否が応でも見極めなくてはならないのかもしれない……。

第31話 ロッキー山中

デンバーの南西にある『クライマックス』は20世紀後半にゴーストタウンになってしまった鉱山町だ。その後、レアメタル価格の高騰で今世紀前半に再開発が進められたのだが、それが一段落した現在ではまた寂れつつあるという。しかも標高3400メートル以上の高地に存在する町であるので冬場となれば野生動物でさえ下山するような場所に成り下がってしまう。そんな所にこれから登ろうというのだから、まずガイドを頼もうということ事態が間違っている。それにロッキー山脈の国立公園を見物したいというのならともかく誰も近寄らないような場所をピンポイントで指定するのだ。いくら『雪山マニアだ』と説明しても誰も取り合ってくれなかった。そこでようやく見つけたガイド兼ヘリの操縦士がこの極めて金に困っているという中年男だった。

「旦那。4度目のチャレンジでやっとですな」

「この辺りは降雨量が少ないと聞いていたんだがな。思わぬ足止めだ」

悪天候のせいでまる一日損をした。結局、準備が出来てから目的地に向かうまでに丸2日を要してしまった勘定になる。サアラ達がどういうルートであそこを目指しているかは分からないが遅れを取り戻さないとならない。その為には少々無理をしなくては…。

目的地の位置は、はっきりしている。ここまではへりで真っ直ぐ予定の時間内で来られた。町を越え鉱山を越え、いよいよ目的の山頂に接近する。

端末表示と肉眼で見える位置を照合しながら操縦士に指示を出す。

「もう少し右。あれだ。あそこの山頂に出来るだけ近付いてくれ」

「ええっ？ そいつは勘弁！」

「何の為に2倍の料金を払っている？」

「ちよっ、ちよっと待った。横風で流されちまうよ！」

「じゃあ風の無いところを通ればいい」

「簡単に言ってくれなせ。畜生！」

文句を言いながらも操縦士はまるで素手で『どじょう』を掴もうとしているみたいに操縦桿と格闘する。それでも何とか山頂まで100メートルぐらいの所まで多少フラつきながらへりを寄せることに成功した。

「よし。良くやった。ここで待機しろ。これなら何とか届きそうだしへりをホバリング（空中停止）させておいて荷物からワイヤー発射装置を取り出す。」

「旦那。それは何ですかい？」

「見れば分かるだろう。こいつを撃ち込んで……」

説明する時間が勿体無いので早速、山頂めがけてワイヤーをぶっ放す。

手元の発射装置から放たれたフックは、やや左に流されながらも山頂の岩になんとか届いた。先端のフックが目標を越え、向こう側へ到達したのを見計らってワイヤーを強く引っ張ってみる。

「うまく引っかったようだな」

そこで発射元のワイヤーをへりの機体に固定する。これでへりから山頂までワイヤーで繋がれた。ワイヤーはグラフエン（1）で出来ているので途中で切れることは無い。通常、へりからワイヤーを伝って降下する際には到着地点の形状が問題となる。この場合は足場が不安定だと思われるので上から垂直には降りられない。なので、ここからロープウェイの要領でワイヤーにぶら下がって滑車で山頂に飛び移るのだ。

「俺があっちに降り立ったら合図をする。そしたらこれを外していいぞ」

「ほ、本気ですかい？ 落ちたら死にますぜ！」

「分かりきったことを言うなよ。見れば分かる」

こういう時は勢いが大事だ。決して躊躇してはならない。失敗は成功の母と言うが、ためらいは失敗の母だ。勿論、ここでの失敗は

死を意味するからそんな悠長なことは言っていられないのだが。

そこで操縦士に念押しする。

「頼むから高度だけは下げるな。30秒間だけでいい」

「へ、へい。何とかやってみます」

「言っておくが俺が死んだら残金は支払えないからな」

「そ、それは勿論」

そう言っただけで操縦士はごくりとつばを飲み込む。

「それじゃ行くぞ。じゃあな」

と、まあ勢い良く飛び出したはいいのだが初端からガクンと上下に揺さぶられる。

ワイヤーの振動に弄ばれ、重心が上下左右に振り回される。それが思わぬ方向へ大きく持つていかれそうになり、必死で抵抗する。が、それも加速することで徐々に体勢は安定してきた。

しかし今度は風の襲来が半端ではない。目を開けるのにも苦勞する。無謀な綱渡りは、終わってみれば長いような短いような時間だった。

ワイヤーを引つ掛けた岩場は思いの外しつかりしていて着地後は何とか立ち直ることが出来た。

約束通りヘリに合図を送って、ヘリ側のワイヤーを外させる。するとヘリは広場で解放された犬ころみたいに嬉しそうにこの場を離れていった。実にビジネス・ライクな奴だ。

ヘリを見送ってから改めて回りを見渡してみる。長々と連なる口ツキーの山々は実に壮観で、まさにアメリカの屋根といった具合だ。空に最も近い場所ではるか彼方まで続く頂きの群れは、まるで世界の果てまで伸びる架け橋のように見える。その一方で黒と白で構成された周辺の景観は、生き物はおるか『ぺんぺん草』も生えないような不毛の地に思える。

(さてと。だいたいこの真下辺りなんだが……)

ズルをしてきた手前、山頂でガッツポーズをする訳にもいかない

ので早速、行動に移ることにした。まずはこの下の状況を把握しなくてはならない。とはいえ下を覗き込んだりしたら文字通り『転がり落ちて』しまいそうなので、スパイ・インセクトを送り込むことにした。

カナブン型のスパイ・インセクトを飛ばして斜面の様子を撮影させる。

(やれやれ。ものの見事に直角だな)

端末に送られてきた映像を見てうんざりした。

が、しばらくして気になる箇所を発見した。

(これは……)

そこで送られてくる映像をジイサンに転送して解析してもらおう。

「どうだジイサン。やっぱり穴だよな？」

『みたいじゃの。しかし、よくもまあこんな場所に……』

「見たところ元々あった穴を人工的に広げたとところか」

幅は8。高さは4メートルぐらいか。長方形の穴が開いている。

奥行きは分からない。そこにスパイ・インセクトを近づけて中に侵入させる。が、数秒後に画像が激しく乱れ、反応が途絶えた。

『かなり強力な電磁波が出ておるな』

「やっぱりここが発信元か」

この一帯に電磁波が出ているのはヘリからも確認出来た。やはりその中心はこの穴のようだ。

「さてと。それじゃ中に入るとするか」

『これだけ強い電磁波だと遠隔で監視システムを麻痺させるのは難しいぞ』

「分かっている。ま、わざわざこんな所まで来た来訪者を門前払いするようなことはないだろうよ」

今立っている場所は位置的には穴の真上にあたる。だが、この辺りは穴のある斜面より3メートルほど出っ張っている。このままワイヤーを伝って降りても穴には入れない。となるとワイヤーにぶら下がり、勢いをつけて振り子の要領で穴に向かうしかない。

頂上の岩に引っ掛けたワイヤーを頼りに下に30メートルほど降りる。ここまでの傾斜角は80度ぐらい。つま先で雪を払えば足元は何とか確保できた。問題はここからだ。

この先5メートルでこの斜面は出っ張りの頂点に達し、切り立った形になる。そこからさらに真下に6メートル、穴までの距離が3メートルとして必要な長さは…。

(12メートルちよいあれば足りるか)

ワイヤーの長さを設定して縁の部分までの5メートルを慎重に降りる。ここはもう直角に近い。よく中途半端な高さの方が怖いとは良くいうが足元にこれだけ巨大な空間が口を開けて待っていると逆に現実感が無い。遙か下方の雪も岩肌も何かの模様にしか見えない。まったく『笑うしかない』ような高さだ。

出っ張りの縁に留まって穴までの距離を肉眼で確かめる。

(結構、あるな……)

これは相当、勢いをつけなければ届かない。3倍速で岸壁を蹴つて、その反動で穴まで到達したいところだ。出来れば一回で決めた。こんな場所でブランコをするのはごめんだ。

「さて。それじゃ……」

大きく息を吸ってから壁を強く蹴る。と、同時に身を宙に放り出す。

岸壁からダイブ。そしてワイヤーに引き戻される。

真下への重力と振り子になった時の遠心力と続けざまに強い力に翻弄される。

(今だ！)

ワイヤーとの接続部分を外す。が、離すタイミングが遅れた！

(しまった！ 穴まで届かな……)

距離が足りない！

穴が頭上にヒュウと逃げようとする。それを捕まえようと必死で手を伸ばす。

(痛っ！)

辛うじて左手の指先を引っ掛けた。

右手を上げて両手でぶら下がる。穴の下にへばりつくような格好になってしまった。そこから懸垂の要領で身体を引き上げ、ようやく穴の中に潜り込むことが出来た。

（やれやれ。思ったより難しかったな……）

クロック・アップは反応速度を高める能力ではあるが、時間を止められるわけではない。なのでこのような曲芸には向いていないのだ。こうしてみると『ターザン』という職業もなかなかのものだ。

穴の中は思ったよりも広く感じた。

一見すると大きめの地下室のように見える。4×8メートルの室内サイズは穴の大きさと変わらない。ただし奥行きは結構ありそうだ。

中央部分にレールが敷いてあるのが目に付いた。丁度、入口から穴の奥に向かうような形になっている。

（これは何のレールなんだ？）

光の届く範囲には何も見当たらない。そこでマルチ・スコープを暗視にチェンジする。

（これか！）

直径3メートルほどのアンテナの存在を確認した。

「ジイサン。見えるか？」

『……ああ。しかし……ちょっとなあ』

「何だ。その微妙な反応は」

『思ったより貧相じゃの……』

「確かにな。それに場所が悪すぎる」

ここは衛星と交信するアンテナの設置場所としては大いに問題がある。余計なお世話かもしれないが仮にこのレールぎりぎりにアンテナを前に出したとしても、この穴倉から放射できる範囲はかなり制限されるのではないかと思う。衛星からの通信を受けるにしても同様だ。

(しかし、こんな『ちやちな』アンテナで6機のクロウリーを本当にコントロール出来るものなのか?)

アンテナの後ろに回ると何やら機械やら配線だかがゴチャゴチャと入り組んでいる。それらは一塊の物体として台車の上に鎮座していた。その台車を支える車輪がレール上を移動することでアンテナを出したり引つ込めたりする仕組みになっているようだ。今のところ活発な動きはみせていないが…。

『それにしても静かじゃな。監視システムも作動しておらんぞ』

「ああ。トップ・シークレットという割には守りが薄いな」

幾らこんな辺鄙な場所にある中継基地とはいえ、国家機密に関わる施設を軍が守っていないはずが無い。

『あの娘っこ達の仕業かの?』

「多分な。この様子じゃ、あらかた片はついているんだろう」

『だが、奥に進む時は用心はしろよ』

「分かつている」

アンテナを搭載した台車裏の先は壁になっている。この穴倉はそこで行き止まりという格好だ。が、この壁は自然の物ではない。それに大きな穴が開いていてアンテナ台からのケーブルがその中に続いている。

(……別室があるようだな。この裏か?)

暗視カメラでは色合いがよく分からないのだが壁の右手に扉らしきものが見える。

「あそこから中に入れそうだ」

思った通りそれは内部に繋がる扉だった。

扉を開けて中に入る。

(これは……元々は坑道だったのか?)

扉を出ると左手が縦横2メートル程のトンネルになっている。アンテナが設置されていた穴とは垂直になるような方向だ。ざっくりと切り取られた壁面は出っ張りがそのまま放置されていて洞窟を連想させる。足元も成らされている程度で数メートルおきに膝ぐらい

の高さに照明が設置されているが油断すると躓きそうだ。

(この先は少し下がっているようだ……)

アンテナ部屋から出た扉を起点に通路が続いている。一本道をし
ばらく進むと左右に扉が幾つかあるのに気付いた。

(他にも部屋があるのか……)

一番手前にある扉を開けてみた。

「……動力系か」

最初の部屋は発電装置らしき物体が並んでいた。ここは活発に動
いている。続いて幾つかの扉を試しに開けてみることにした。

食料倉庫、燃料倉庫、宿直部屋等、それらしき施設が揃っている。
そして奥まった所に大きな扉があった。ここがこの秘密基地の重要
地点であることは直ぐに分かった。なぜなら入口付近に何者かが転
がっていたからだ。幾ら寝相が悪いからと言ってこんな所で横にな
っていたら流石に風邪をひく。

「これは軍の防寒具だな」

『じゃの。こりゃあ、やつぱり……』

「ああ。ここに違いない」

早速、扉を開けて中に入る。

「この部屋は一際大きいな」

天井はそれほどでもないが明らかに他の部屋とは一線を画する。

一見すると昔の図書館のように棚が整然と並び、本の代わりに大量
の機械がぎっしり詰め込まれている。薄暗いことに変わりはないが
大量の機器が発する様々な色の光がイルミネーションのように光っ
ている。

部屋の奥に足を踏み入れる。そこにはシナプス社の地下で見たメ
イン・コンピュータの4倍はあるうかという巨大な装置があった。
遠目にはここに明かりが集まってきているように見える。

(……やれやれ)

背後に人の気配。直ぐにわかってしまう。とっくに引退したと思
つていてもこればかりは抜けきらない癖だ。

立ち止まり、前を向いたまま話しかける。

「よお。久しぶり」

返事は無い。

「その物騒なものを下げてくれないか？ 自己紹介は前にしてあるはずだが」

少し間が空いて後ろから返事がきた。

「そうね。機械を傷つけても困るし」

（冷たい言い方だ。なら、他の場所でも撃つても構わないということか？）

近くにあつた機器のガラス面でサアラが銃を下ろすのを確認する。

「何時ここに着いた？」

「……5時間ぐらい前かしら」

「君達はどこから入った？」

「エレベーターよ。場所を探すのに手間取っちゃったけど」

「何だ。それを知っていれば苦労しなかったのに」

そこで振り返って文句を言うとサアラは澄ました顔で答える。

「残念ながら今は使い物にならないわ。全部破壊しちゃったから」

「ああ、なるほど」

「そういう貴方はどちらから？」

「上から」

「そう。ご苦労様。で、なんでまたこんな所にわざわざ……」

そこまで言つてサアラが首を竦めた。何か思うところがあるのだろつ。

「仲間はどうした？ まさか君一人じゃあるまい」

するとサアラはチャリとメイン・コンピューターを見やった。

その方向にはコックピットかと思紛うような装置の中心に椅子が三つ並んでいる。その中央に誰かが座っているのは判別できた。だが、何かおかしい。ぴくりとも動かないのだ。

（……妙だぞ？）

椅子に近付いて確かめようとした。そして……絶句した。

(一、これは……)

真ん中の椅子には少年が座っていた。それはB国でサアラ達が森を脱出する際にヘリを操縦していたメガネの少年……のように見える。が、少年はメガネを外していた。

サアラに問わずにはいられなかった。

「何だこれは！ 君達はいったい何をやらかそうとしている？」

てつきり彼がこの装置を操作しているものだと思っていた。しかし、彼は椅子に座ったまま人形のように動かない。その両腕は操作パネルの上に置かれてはいるものの微動だにしない。それと対照的に彼の前に展開する複数のモニターは、次々とウィンドウを開閉しては数列やら文字列を表示しては消え、何かの作業を猛然とこなしているように見える。

正直言つて目を背けずにはいられなかった。彼がどのような手段でこれらの機械を動かしているのかが一目で分かったからだ。

(……なるほど。ジイサンが敵わないわけだ)

ツルツルに剃りあげられた少年の頭部はまるで蜘蛛のように見えた。

少年の後頭部やこめかみから出るケーブルが操作パネルに直接、繋がれている。恐らく彼は目や手を使って操作をするのではなく、ダイレクトに脳波を使ってコンピュータにアクセスしているのだ。

「彼の特殊能力よ」

サアラが呟いた。

「ああ。チャンから聞いたよ。大統領の尻の穴を焼き払ったとか」

「その気になれば誰でも暗殺できるわね」

「なっ！ 本気か？」

確かに今ならそれが可能だろう。目の前には世界最高のスパイ衛星クロウリーの中枢がある。何人たりともこの『目』から逃れることは出来ない。一生、建物の中で過ごすのならともかく、外に出る限り必ずその正確な居場所を特定されてしまうだろう。それに加え、この少年のハッキング能力を發揮すれば……。

「まさか君等の狙いはそれなのか？」

サアラは腕組みしながらじつとこちらの目を見る。そして淡々とした口調で答える。

「まさか。そんな無意味なことはいわ」

(無意味だと……だったら彼女は何を?)

サアラはモニターを眺めながら呟いた。

「この国は必要以上のものを求めすぎてる。エシユロン(2)という『耳』を持ち、その次はクロウリーという『目』を作った。神にでもなるつもりなのかしら」

「耳、目ときたら次は口を出したくなるんじゃないか？」

「口じゃなくて『手』なら出してるわ。昔から」

「確かにな」

思わず苦笑する。彼女が言うように、この国は昔から軍事力という『手』を持ち余している。そんな国が神のような耳や目を欲することに何の意味があるのか……。

その時、慌しく何者かが駆け込んできた。

「サアラ！ 来たよ！」

振り返ると見覚えのある顔。というより一度見たら忘れないその風貌。それは『ダアシンシン(ゴリラ)』と呼ばれていた少年だ。

少年は何やら大げさな銃器を手にしている。

「ヘリがこっちに向かっている！ 奴らだよ。きつと！」

少年の言葉にサアラが反応する。

「分かったわ。応戦する」

到着して早々にまた騒がしくなりそうだ。

1 「グラフエン」… 炭素原子が蜂の巣状のシート構造になっている素材。カーボンナノチューブ以上に軽くて丈夫であるので現在は軌道エレベーターにも使用されている。

2、「エシユロン」： アメリカを中心とした参加・協力各国が運営する通信傍受システム。世界中のあらゆる電波を傍受、情報を分析しているとされる。その歴史は古く20世紀に遡るがその全貌は公にされていない。2043年に大幅なシステム改善がなされたといわれる。

第32話 雪山の攻防

ダアシンスンに続いてサアラが部屋を飛び出す。

その背中を追いながらジイサンに事実を確認する。

「聞いたかジイサン。詳細は？」

「今調べておるわい。ドイツの衛星をちよいと借りてな……お！
確かに来ておるわい」

サアラ達に続いて薄暗い通路を駆け上がる。冷え切ったトンネル内にバラバラと足音が響く。

「4機が真つ直ぐそっちに向かっておるぞ！ 到着予定は……7、8分といったところか」

「スペックは？」

「恐らくは「ストライク・ホーク」軍のお出ましかもな」

「随分と大げさだな。しかし、奴等どうやってこの穴倉に潜り込むつもりだ」

「さあな。そのまま突っ込んでくるんじゃないかい？」

「強制着陸か？ 幾ら小回りが利くとはいえ無茶だろう」

「分からんぞ。そういう訓練を受けておるのかもな」

「いや。奴等にとつてここは重要施設だ。アンテナをぶっ壊すような真似はしないだろうよ」

そうこうしているうちに最初に自分が到達したアンテナ台のある場所に戻ってきた。

穴の縁では既にダアシンスンがしゃがんで何かを準備している。

その隣にもう一人。見知らぬ少年の姿が…。

（あの子は見覚えがないな。B国で何をやっていた少年か？）

恐らくは彼がB国を脱出する時にバイクで森の中を逃げ回っていた少年なのだろう。

サアラが少年達に指示をする。

「2人はここで待機ね。シャッターを半分閉めるから。それを盾に

して応戦して」

「了解！」と、少年達が声を揃える。

見たところ2人が手にしているのは『ステインガー・ミサイル』だ。20世紀生まれのステインガーは形を変え改良が加えられつつ未だに世界中で愛用されている。彼等が手にしているのはミサイルを大幅に小型化したバージョンだ。南ア解放戦争でゲリラ兵が使用したことで有名だが…。

「そんな物をどこで手に入れた？」

ダアシンシンに尋ねてみた。すると彼は真面目に答える。

「シヨップで買いました。けど、ちよつと割高だったかも」

さすがUSA。敵と同等もしくはそれ以上の武器を持たなければ己の生命を守れないと言い張るお国柄だ。

「やれやれ。その武器屋は年齢確認もしなかったのか」

一発目の準備を終えたダアシンシンがステインガーを肩に乗せ、肩膝について構える。それを見てもうひとつ質問をする。

「ところで、そいつを撃つたことはあるのか？」

「ええ。訓練で何度か。それにこれは軽くて良いです。僕らが授業で作ったのは古いタイプでしたから」

そう言つて彼は笑顔をみせた。

(何だ。ゴリラ、ゴリラと呼ばれてはいるがそうやって笑つた顔は愛嬌があるじゃないか。オランウータンそっくりだ)

B国で会つた時は坊主頭に眉間の深いシワが印象的だったが今は少し髪が伸びている。あの時はまだその巨体と少年らしい顔つきにギャップが感じられたが、こうしてステインガーを担ぐ姿はなかなか様になっている。この数ヶ月の間に成長したということなのだろう。一方、もう一人の少年はさつきから一言も発しない。彼は棒付キャンディを口に含んで黙々とステインガーを点検している。切れ長の目と鼻筋を通つた顔立ちが印象的だが少し神経質そうにも見える。チャンの話では確か名前は『リュウ』ということだったが…。

無言で自分の端末を操作していたサアラが顔をあげる。

「さあ。閉めるわよ」

しばらくして穴の入口の左右から扉がスルスルと出てきた。それが穴の入口を半分ほど覆ったところでサアラが告げる。

「これぐらいでいいかしら。それじゃ頼んだわよ」

彼女がそう言い残してこの場を離れようとするので呼び止める。

「君はどこへ？」

「コントロール室のワンを守るわ。それと下からのエレベーターを見ってくる」

「エレベーターは破壊したんじゃないのか？」

「一応は。でも、他に隠し通路があるかもしれない」

「そうか。しばらくしたら俺もそっちにお邪魔するよ」

「協力してくれるの？」

「行きがかり上、止む無く」

「そう。でも私の方は間にあってるから彼等のフォローをお願いしまするわ」

(やれやれ。軽くないなされたな)

仕方がないのでサアラの好きにさせることにした。

サアラがアンテナ部屋を出たところでダァシンシンが声を張り上げる。

「見えたよ!!」

確かに肉眼で豆粒ぐらいの大きさの黒い物体が3つ確認できた。

「おかしいな。ジイサンの情報では4機のはずだが……」

それを受けてリュウが呟く。

「端末の反応は4つ。1台は別行動で上か裏に回ってるんだろうな」
「フン。定石通りだな」

偵察や警戒の為にへりを飛ばす際は大抵、見張り役のへりが本体と距離を取って行動する。万が一、本体が奇襲を受けて壊滅した場合にはこの見張り役が応援を要請したり反撃したりすることでフォーク体制を構築しているわけだ。

ダアシンシンが「左端のを狙う」と、宣言した。

「じゃあボクは右端のを」と、リュウが続く。

「なら俺は真ん中を見てるよ。手ぶらなんでな」

緊張を和らげるつもりでそう言ってみただがまったく相手にされなかった。少年達は一瞥をくれただけで穴の外にステインガーを向けた。

そしてダアシンシンが「お先に！」と、間髪を入れずにミサイルを発射する。

引き金を引く金属音。爆発的に溢れ出る甲高い破裂音。

先端から放たれた物体は、フツと沈んだかと思うとクツと加速し、鎌首をもたげると白く長い尾を引きながら標的へと向かっていった。ミサイルは炎をまといながらへりまでの道程を細い雲でひたすらに繋ぐ。

へりが一瞬、回避行動を取ったように見えた。が、無情にも白の航跡はそこで途絶え、唐突に黒煙の広がり宙に生み出した。

「当たった！」と、ダアシンシンは思わずガッツポーズをとる。

残された2機のへりが余韻を残しつつ落下していく黒煙と炎から離れようと分散する。

「させないよ」と、今度はリュウが狙いを定めるような仕草を見せる。

そして2発目が発射…。

今度もまた同じように白い筋が一発目の軌跡と並行するように伸びて行き、急上昇するへりを下から突き上げた。快晴に恵まれた雪山での撃墜シーン……それはまるで青と白の世界で繰り広げられた黒い花火のように見えた。

(残るは2つ……もう1機はどこを飛んでいる?)

端末表示をアップにしてみる。残念ながら正確な高低差は分からない。が、サポート役のへりは既にこの真後ろ近辺に回っているようだ。

ダアシンスンが次を用意する為にミサイル・ポッド（筒状の先端部）を交換しようとする。ステインガー・ミサイルは一回発射することによりミサイルを収めたポッドを全交換しなければならぬのだ。が、耐熱手袋をしているせい作業に手間取っている。

リュウが苛立った口調で彼を急かす。

「早くしろ。ダアシンスン」

「だってこれ、やりにくいんだよ」

「遅いよ。お前」

ダアシンスンがもたもたしている間に撃墜を逃れた目前の敵が向かって左手の山頂に向かって前進していく。もうヘリ特有のプロペラ音がはつきりここまで聞こえてくる。

リュウの方が先に2発目の準備を終えた。しかし、間に合わなかった。

リュウが顔を歪める。

「クソ！ 距離が足りない！」

見たところ角度も厳しそうだ。生き残ったヘリは既にこの穴から数百メートル先の山肌すれすれに達して山頂まで高度を上げようとしているところだった。そうなるこの穴からは死角に入ってしまう。

ダアシンスンもようやく2発目の準備が出来たらしい。しかし、標的の姿は捉えられない。

（奴等、これからどうするつもりだ？）

1分、2分と厭な感じで待たされる。姿は見えない。が、ヘリの音だけはまわりついてくる。端末表示ではこの真上に1機……。

少年達はステインガーでの迎撃を諦めてマシンガンを持ち出した。「おいおい。君らは戦争しに来たのか？」

それに対してリュウが冷めた目つきでちらりとこちらを見た。それが何か？ とでも言いたげな顔つきだ。

「やれやれ。籠城かい」

大げさに首を竦めてみせると今度はダアシンスンが反応する。

「ワンの作業次第です」

「あとどれぐらいかかる見込みなんだ？」

「……分かりません。けど、それまでの辛抱ですから」

「仮に作業を終えたとしてもどうやってここから脱出するつもりだ？　こんな山奥で」

「それはサアラが考えているはずですよ」

「ダアシンシンはそう言っただけで笑顔をみせる。だが、常識的に考えればこんな所で包囲網を敷かれたら逃げ場が無いように思えるが……」

その時、リュウが我々の会話を遮った。

「静かに！　……動き出した！」

（何！？）

リュウが叫んでから数秒後、まさに目の前に上からへりが下りてきた。

「真正面からだど？」

その距離約200メートル。まるで悪魔が降臨するかのようによろしくトライク・ホークはすつと我々の死角から舞い降りた。

そして間髪を入れず、その本体脇で細かな光が発生した。

「伏せる！」

火の玉が数十発、あっという間に飛来したかと思うと左手のシャッターを破壊した。

……いきなりの機銃掃射。だが、本気でこの辺りを吹き飛ばそうという撃ち方ではない。威嚇射撃なのかもしれない。それでもリュウが居た側の右側シャッターは大穴が開いていた。

続いてへりは何かを発射した。弾速からして機銃攻撃ではない。

（ミサイル！？　いや、これは！）

半壊した右側シャッターの大穴から何かが飛び込んできた。そして激しく煙を撒き散らしながら着弾する。

「催涙弾だ！」

煙の広がり方からそう判断した。クロコホルム特有の甘い香りも

混じっている。

(しまった！ ここでは逃げ場が無い！)

クロコホルムを嗅いだだけでは直ぐには気絶はしないが吸い込みすぎると致命的だ。慌てて携帯用酸素ボンベを取り出す。高山病対策で用意していた装備がこんな所で役に立つとは思わなかった。目はマルチ・スコープで保護される。だが、酸素ボンベを持つ左手は塞がれている。恐らく敵は正面突破で来るはずだ。

(少年達は……ダメか)

右シャッターの所ではリュウがうつ伏せに、左シャッター付近ではダアシンシンが激しく咳き込んでいる。その足取りは重く今にも倒れそうだ。幸い外気に触れる場所に近いので直ぐに死ぬことは無いと思われる。なので、今は敵の侵入に備えることを優先する。

(全速でやるには狭いな……)

クロツク・アップは万能ではない。この状況で銃撃を受けるとなると、どうしても流れ弾や跳弾が出てくる。それなので乱戦は出来るだけ避けたい。穴の入口から入ってくる敵を確実に叩いていかなければ……。

が、甘かった。敵は一斉に穴の入口から侵入してきたのだ。

(バカな！)

マシンガンを持ったガスマスクの兵士が6人。次々と穴に飛び込んでくる。

(ランドセル！)

敵はへりからこの穴までの空白を「ランドセル(1)」で埋めてきた。ランドセルを背負った兵士はロケットの力を借りて突入を図ってきたのだ。

一人目がこちらの存在に気付いた！

敵が着地しながら銃を向けてくる。

ダッシュで横に回避、と同時に間合いを詰め、ナイフを敵の喉に突き立てる。

と、その時、背後で低い爆発音がした。奥からだ。

（通路の方か？ まさか隠し出入り口があったのか？）

恐らくこれは両面作戦だ。サポート役だと思われたヘリはいつの間にかこの基地の裏手に回り別なルートで基地内への侵入を図ったのだろう。その一方で、正面のヘリは我々の注意をアンテナ部屋に引き付ける。

（クソッ！ こっちが手一杯でサアラの方までは……）

気をとられている場合ではない。二人目、三人目に発見されてしまった。止む無くクロック・アップする。

1 …… 左の空きスペースに5歩流れる。

2 …… そこから斜めに6歩、標的へ向かう。レールを飛び越え残りの距離を詰める。

3 …… 標的の真横に到達。ナイフの先端を標的の喉に当て、ぐつと力を入れる。

（視界が悪すぎる！）

次の標的を見失ってしまった。クロック・アップ中はマルチ・スコープの映像には頼れない。思わぬ障害物に躓いてしまうからだ。

敵が闇雲に撃ってきた。こちらの速さについてこられないようだ。が、下手に乱射されると厄介だ。それに片手だと攻撃し辛い。

（左……いや右から攻めるか）

視界がクリアではないので攻撃までのプロセスをイメージするのに余計な時間を要する。完璧ではないイメージでも場当たりのやらざるを得ない。

右に6歩、その先に5歩、敵の裏に回って後頭部に刃先を突き出す。

ようやく二人目を片付けた。が、こんな調子で敵を見つけては個別に撃破しなければならぬので時間がかかりそうだ。連続で倒すことが出来れば6人ぐらい何ともないのだが…。

結局、6人すべてを片付けるのに3分ぐらい要した。外のヘリの

動向と少年達の安否は気がかりだがサアラを援護しなければならぬ。最後に倒した兵士からマシンガンと通信機、ガスマスクを奪う。そして通路へ。

『おいアンカー！ 増援じゃぞー！』

「何だと？ 思ったより早いな」

通路に出ると非常灯が消えていた。敵が電源を落としたのだろう。この施設には自家発電設備が整っているようだが…。

『へりが12機そっちに向かっておるぞい！』

「参ったな。キリが無いじゃないか」

通路の真ん中あたりに岩が崩れたような跡がある。近付いてみると壁に穴が開いている。

（ここが隠し出入り口だったのか……）

中を覗き込んでみたが同じような通路がどこかに続いているようだ。だが今は先を急がなくてはならない。この穴から侵入した敵がサアラに迫っているはずなのだ。

（銃声か！？）

通路の先の方でマシンガンの銃声が響く。

奥に向かって走る。そしてコントロール室に辿り着いた。入口付近の死体は4つに増えていた。

（残りは中で交戦中か？）

室内に入り様子を伺う。案の定、この部屋は優先的に電気が供給されているようだ。機器の発する細かな光と必要最小限の明かりがキープされている。

部屋を入つてすぐ左手にも死体らしきものがひとつ。その先にもうひとつ。銃声はその先からだ。

「サアラ！」

わざと大声を出して敵の注意を引く。

「サアラ！ 無事か？」

コックピットのような巨大装置が、そして兵士の背中が目に入った。

その兵士が対峙しているのはサアラだ。
兵士が何かを突き出すような行動を取った。するとサアラはしなやかな連続バク転でそれを軽く交わす。と、思った瞬間、今度は爆発的な加速で兵士に突進し、勝敗はあっさり決した。
(なんだ。結局、独りで片付けてしまったようだ……)

息を切らすことなくサアラは尋ねた。

「そっちはどう?」

そこで少年達がへりを2機落としたこと、6人の兵士が突入してきたこと等を簡単に説明してやる。

「リュウとダアシンシンは?」

「穴のところで『お寝んね』してる」

「そう。仕方ないわね」

「それより早速、増援が向かってるそつだ。ここからどうやって脱出するつもりだ?」

「それはワンの作業が終わってから話すわ」

「作業……か」

コックピットに座ってメイン・コンピューターとダイレクトに繋がれる少年は本当に生きているのか怪しいものだ。

「少年達を叩き起こしてこようか?」

「……そうね。時間稼ぎをしないと」

「あとどれぐらいかかる?」

「多分、30分もかからないと思う。あともう少ししなだけど」

「この戦力で30分持つかどうか……」

「おいジイサン。敵の到達予定時刻は?」

『約5分、じゃな』

「なんだ。それじゃカップラーメンも食べやしない」

サアラが怪訝そうにこちらの顔を見ている。

「ああ。これか。通信しているんだ。相棒とな」

「増援はどの程度なの?」

「聞かない方がいい。まあ両手の指では足りないくらいだ」

「そう。頼りにしてるわ」

サアラはそう言って笑った。

(……そんな風に、笑うのか……)

その笑顔はまさに少女のそれだった。見ているこっちが表情を緩めてしまうような屈託の無い笑顔だ。

「頼りにしているだと？ 嘘をつけ」

照れ隠しに素っ気なくそう言って横を向く。

その一方で、この後どうしたものか思索した。倒した兵士達の武器があるのでしばらくは抵抗できる。しかし、アンテナ部屋は守り辛い。ステインガーの爆薬を使って通路を塞ぐという手もあるが逆に逃げ場を無くすリスクがある。それに先ほどは催涙弾で済んだが、敵がこの基地そのものを廃棄することになったら次は何を打ち込んでくるか分からない。

(やれやれ。どうしたものか……)

とりあえず少年達を残してきたアンテナ部屋へ戻ることにした。

『マズイぞ！ アンカー！』

「……どうしたジイサン？」

『今度は……戦闘機じゃぞい！』

「何だと？」

『ひいふう……5機じゃ。それにヘリが追加で8機』

「まるでバーゲンセールだな。どれだけ戦力を投入するつもりなんだ？」

これは本格的にまずい事になってきた…。

1「ランドセル」：日本のH工業が開発した携帯型ロケットブースター。基本原理は固体燃料ロケットと同じであるがレーザー技術の発展で制御能力が格段に進歩している。非常に高価なため限られた国の軍でしか利用されていないが、その性能は100キロの人間が使用した場合、最高速度が時速120キロ、最大飛行時間18分

を誇る。

第33話 第三勢力

アンテナ部屋に戻ると視界の悪さは幾分改善されていた。催涙弾によるガスは殆ど抜けたようだ。

兵士の死体を踏み分けて少年達の元に向かう。

まずは『く』の字に転がっているダアシンスンの頬を張る。

「おい。少年。大丈夫か？」

少々、引っ叩いたぐらいでは目が覚めないらしい。顔色を見る限り致死量のガスは吸っていないようだが…。

「仕方が無い。悪いが尻を蹴飛ばすぞ」

予めそう断っておいてから思い切り彼の尻を蹴飛ばした。

「あつっ！」

流石にそれで正気に返つたらしい。彼は一瞬、辺りを眺め回してようやく痛みの源が尻である事に気付く。

「いてて！ なんだか尻が痛いや」

「俺が思い切り蹴ったからな」

「え？ ホントに？ …… 酷いなあ、もう」

「だから先に断っておいた」

「え？ え？」

しきりに首を捻るダアシンスンに指示をする。

「少年。マシンガンの弾装を集めておけ」

「はい？ 集めるって？」

「その辺に転がってる死体から回収しろ」

それを聞いてしばらく目をしばつかせていたダアシンスンが「ひよっ！」と、妙な声を出した。

「お前さん達が『お寝んね』している間にひと悶着あったからな」

「…… スミマセン。役に立てなくて」

そう言っただけは頭を下げる。

続いてもう一人の少年の様子を伺う。

リュウは身体を揺すっただけで目を覚ました。

「う……頭が重い」

彼は顔をしかめながらゆっくり立ち上がった。そして周りの状況を見て何があつたか悟つたようだ。

彼は死体を眺めながら尋ねる。

「これは……あんたがやったのか？」

「まあ、そういうことだ」

「へえ……」

彼はそう呟いて軽く首を竦めた。

その時、突然、ダアシンシンが大きな声をあげた。

「そうだ！ サアラは？」

「無事だ。コントロール室に居る。だが、安心するのはまだ早い。

敵の増援がこちらに向かっている」

「え？ もう？」

そう言つてダアシンシンは顔を顰める。

「もう、そこまで来てる」

リュウは自分の端末で敵の接近を確認している。あくまでも冷静に。

敵のへりが到達したとしても突入には多少のタイムラグがあると思われる。それまでの数分間に守りの体制を固めなくてはならない。「君らにも迎撃の準備を手伝つて貰う。出来るだけ武器を集めてコントロール室に立てこもるぞ」

少年二人が顔を見合わせる。

「サアラに頼まれてしまったんでな。取り敢えず30分持てばサアラが脱出方法を披露してくれるそうだ」

サアラの委任を受けていると聞いてダアシンシンは素直に頷いた。が、リュウは納得していないように見える。しかし、とにかく時間が無い。少年達の手を借りてマシンガンの弾装を死体から出来るだけ回収する。ついでに人数分のガスマスクも拝借してコントロール室へ向かう。その途中で休憩室の簡易ベッドを通路に引っ張り出し

て障害物にする。もしかしたら敵がロボット兵を投入してくるかもしれないと考えたからだ。

ダアシンシンが不思議そうに尋ねる。

「こんなので敵兵を足止めできますかね？」

「いや。ロボット兵対策だ」

「ロ、ロボット兵！？ それって遠隔操作するミニ戦車みたいな奴ですか」

「そうだ。一回目の部隊が全滅したことは奴等も分かっているだろうからな」

それを聞いてリュウが頷く。

「なるほどね。ロボット兵の弱点は足場……一応、考えているわけか」

とにかくベッドや棚など直ぐに動かせるものを可能な限り通路に出しておく。

次にコントロール室の入口に武器を並べて敵の侵入に備える。壁の右手と左手に別れて一本道の通路から向かってくるであろう敵を迎え撃つ。

「少年！ あまり顔を出しすぎるなよ」

「わかってますって！」

ダアシンシンが敬礼で答える。

通路に向かって左側は少年達の持ち場だ。リュウが低く構えて、ダアシンシンが高い位置から発砲するつもりようだ。こちらは右側の壁に隠れる形になるので利き腕ではない方に身を乗り出して撃つ格好になってしまう。そこで試しにさっと半身を乗り出して通路に向かって発砲してみた。

(どうも違和感があるな……)

いまひとつ納得できなかったのもう一度。さっと発砲して素早く元のポジションへ戻る。やはりこんな銃撃のテクニクは普段クロック・アップではやらない動きなので意外に難しい。

「ちょっと！ 何やってるんですか！」

と、ダアシンシンが顔をしかめる。

「練習。それが何か？」

そう答えるとダアシンシンはゲンナリした顔で肩を落とす。

「……お願いしますよ」

そろそろ最初の増援が到着した頃だ。恐らく、アンテナ部屋と隠し通路からの二手に分かれて突入してくると思われる。ただ、直ぐに突っ込んでくることはないはずだ。第一波の全滅を受けて少なくとも慎重に攻めようとするに違いない。連中が教科書通りにやるならばそれだけで20分前後は時間をロスしてくれる、という計算だ。(しかし、その後の増援が気になるな……)

ジイサンの情報ではヘリ12機の他に戦闘機とヘリがさらにこちらに向かっているという。もしかしたら後から来る戦闘機の一派は別な勢力なのではないかという疑いが……。一瞬、ナミの顔が浮かんだ。

(まさか……な)

ナミには山に行くとしか言っていない。仮に彼女がヘーラーに連絡を取ったところでこの秘密基地の場所までは特定できないはずだ。が、もしもヘーラーが軍の動きをマークしていたとしたら……。

(疑い出したらキリがないな)

今はそんなことを考えても仕方が無い。まずは目の前の火の粉を振り払うことが先決だ。

なんとも言えない緊張感が漂う。待つこと十分。ようやく敵が動き出した。まずは通路の奥で爆発音がした。

「ガスマスクを装着しろ！ また催涙弾かもしれん」

まったくもってセオリー通りの攻め方だ。一呼吸置いてから次は先陣が突入してくるはずだ。

「まだ撃つなよ」と、少年達に手で合図する。

アンテナ部屋はここから坂を上る位置にあるので煙がゆっくりと降りてくる。通路の視界が悪くなる。そして銃声が発せられた。銃弾が壁で跳ねる。敵の発砲は牽制に過ぎない。

(まだまだ。もう少し引き付けてから……)

そう思った矢先に何やら物体が転がるような音が聞こえた。

何かと思って足元を見ると手榴弾が！

迷わずクロック・アップでそれを拾い投げ返す。

投げ返した手榴弾は奥のほうで甲高い爆発音をあげた。

(クロック・アップを相手に手榴弾とは随分チャレンジャーだな)

少し間を置いてまたもや銃声が響いた。まるで痺れを切らしたかのように敵の銃弾が激しく壁や床を抉っていく。

「よし！ 撃て！」

ここから反撃だ。とにかく身体を出しすぎないように注意しながらマシンガンをぶっ放す。オート発射だと弾装が空になるまでに3分も持たない。素早く弾装を交換して、とにかく銃撃を途切れさせないように撃ち続ける。

自分達の発する銃撃の音と敵の発するそれが怒鳴り合いのようにトンネル内で延々と響く。途中、二度ほど手榴弾が転がり込んできたが二度とも同じように投げ返して敵の目前で爆発させてやった。

どれぐらい撃ち合っただろうか。いい加減うんざりしかけた時だった。若干、敵の銃撃が弱まったように感じた。

(妙だな。これぐらいの反撃でダメージを食うはずがないんだが……)

突入するからには敵側もそれなりの防弾装備をしているはずだ。

グラフィック製の防弾チョッキが導入された現代では銃撃戦だけで絶命するものが続出することは稀だ。それなのに攻撃の手が弱まったということとは……。

(まさか撤退するつもりなんじゃ……)

今のところ敵はこの基地を奪還する目的で攻撃を仕掛けている。

なのでコントロール室にダメージを与えるような火器は使用してこない。が、もしもこの基地を諦めるとなったら話は別だ。それこそミサイル・ランチャーでも撃ち込んでくるに違いない。

(クソ！ …… サアラの方はまだなのか?)

そうしている間にも敵の銃撃は明らかにその圧力は減り、数秒後にはすっかり収まってしまった。

リュウが銃撃を止めて言う。

「敵が退いた？」

「ダアシンスンも撃つのを止めて首を傾げる。」

「変だな。何で？」

「油断するな。でかいのを準備中なのかもしれん」

それを聞いてダアシンスンが目を丸くする。

「で、でかいのって何なんですか！」

「さあな。方針転換したのかもしれないぞ。ここを丸ごと吹き飛ばすつもりならどんな重火器でも構わないだろうよ」

「そ、それはマズイでしょ！」

そう言っただけで慌てるダアシンスンを見てリュウが叱咤する。

「慌てるなよ！ それも想定のうちだ」

（さて、この状況でお嬢さんにはどんな秘策があるのやら）
何気なしに端末を見て驚いた。そこでジイサンに連絡を取っている。

「ジイサン。外はどうなってるんだ？」

「おお。無事だったかアンカー。いやそれがワシにもよく分からんのだよ」

「へりの数が合わないぞ」

「それがじゃな。後から来た戦闘機がへりを全部落としていきおつたんじゃ」

「……仲間ではなかったということか。ということはヘーラーか？」

「それは分からん」

「第三勢力……だと？」

後から来た戦闘機とへりの混合部隊は何者か？

キツネにつままれたような気分していると前方で呼びかける声があった。

「サアラ・タゴール！ サアラ・タゴールは居るか？」

思わず少年達と顔を見合わせる。

(なぜサアラの名を知っている？ ということは米軍ではないのか？)

「サアラなら奥に居るよ」

試しにそう返すと声の主は淡々と説明を始めた。

「こちらはC国軍特殊外務第三部隊。サアラ・タゴール以下3名を保護する。君達の敵は既に排除した。君達も武装を解除したまえ」

その言葉を信じて良いものか……。少年達が迷っているといつの間にかサアラが我々の背後に立っていた。

それを見てダアシンシンが訴える。

「サアラ！ あんなこと言ってるけど本当かな？」

リュウは腕組みしてサアラの反応を窺っている。

サアラは軽く息を吐くと張りのある声で通路に向かって言葉を投げかけた。

「了解。保護願います」

少年二人はびっくりしてサアラの顔を注視する。こちらにも意外に思った。

(えらくあっさり……いや待てよ！)

まさかサアラの考えていた対策というのはこれだったのか？

そう思って尋ねてみる。

「君が用意していた脱出方法というのはこれだったのか？」

「そうね。勿論これだけじゃないけど」

そうこうしているうちにザツザツと複数の足音が近付いてきて軍服姿の男達が目前に現れた。確かにC国軍の軍服だ……。

先頭に立っていた男が自己紹介する。

「私がコウ中将だ」

そう言った男の身長は190をゆうに越えている。顔が小さく、メガネの奥の鋭い眼光がいかにも……そういう印象の男だ。

コウ中将はニヤリを笑って拍手をした。

「サアラ・タゴール。君は実に素晴らしい。大変な功績だ。特別待

遇で迎えよう」

馬鹿にしているわけではないのだろうが、見下した感が見え透いていて厭な感じだ。

我々がどう反応して良いのか戸惑っているところ、コウ中將は背筋を伸ばしてこう言い放った。

「歓迎するよ。C国軍の中將としてではなく、『バベル』の一幹部として」

(な！ バベル……だと?)

これまで『バベル』が表立って出てくることはなかった。ヘーラーの場合はチヨビ髭大佐やナミがサアラ達を追う為の具体的な行動をみせていた。ヘーラーの幹部である黒神父にも会ったことがある。しかし、バベルが目の前に現れることはこれまで無かった。確かにこの組織がC国航空機を拿捕した黒幕だということは分かっていたが…。

コウ中將は目を細めてサアラの顔を眺めるとアゴをしゃくつてみせた。

「で、クロウリーは確保したのかね？」

サアラが答える。

「一応は。まだ奥でワンが操作しているわ」

「そうかね。では後は我々に任せたまえ。君達はヘリで送ることにしよう」

コウ中將に指示されるがまま、我々は体よく基地を追い出される羽目になってしまった…。

* * *

輸送ヘリに揺られながら我々はクロウリーの中継基地を離れることになった。

ダアシンシンとリュウはぐったりとした様子でお互いの身体にもたれかかっている。一方、サアラは窓際の席で外の景色を眺めてい

る。

「知っていたのか？」

その質問にサアラは答えなかった。彼女は白い大地を眺めながら物思いに耽っているようにも見えた。

もう一度、聞いてみる。

「君は知っていたんだろう？ 『バベル』の存在を」

「……薄々とは」

「つまり自らの関与は否定する、という意味か？」

するとサアラは眼差しをこちらに向けただけで何も言わなかった。問題は『バベル』の片棒を担がされているという自覚が彼女にどの程度あつたのかということだ。そこでわざと挑発してみる。

「大変な功績の対価は何だ？」

それでも彼女は答えない。

「なるほど。否定はしないんだな」

「……あなたには関係ないわ」

実に素っ気ない回答だ。

「君がどこまで知っていたのかは分からない。だが、他の仲間には何と言つてあるんだ？ 少なくともチャンは本気で君のことを信じていたが」

その言葉にサアラは微かに顔を曇らせた。が、すぐに表情を引き締める。

「……すべてを話す必要はないわ」

「やれやれ。これだから指導者というのは……」

「どういう意味？」

「カウントダウン、狭い世界、バラバラになっても直ぐ会える。君が空軍基地を出る前にぶつた演説のことさ」

「……それが何か？」

「抽象的な言葉で誤魔化すなよ。只でさえ年頃の男の子は感化され易いんだ。今回、君に同行してた少年達も同じだ」

14歳の女の子に言うべきことでは無いと思う。が、クール過ぎ

る彼女の内面に波風を立てることは出来たようだ。その証拠に珍しく彼女が感情を露にする。

「関係ないでしょ！　なんで他人のあなたにそんな事！」

「俺には聞く権利がある。チャンに金を貸しているからな」

「どういふこと？」

「旅費だとき。中東へ『バベル』のルーツ探しだよ。君の為にな」それを聞いてサアラは小さくため息をつくとき、やれやれといった風に首を振った。そしてそれっきり口をつぐんでしまった。

(やはり彼女は……)

彼女が『バベル』とグルだったと考える方がしっくりくるのは事実だ。なぜなら幼少の頃からこの国の超人養成機関で軟禁同然の生活を強いられてきた彼女が『バベル』などという如何わしい存在を偶然に発見したとは考えにくいからだ。それに次世代インターネットやハッキング等で、よしんばそれに辿り着けたとしてもその動きや目的まで把握することは出来まい。となると、バベルとこの国の超人養成機関は繋がっていて、彼女はその意向で動いていたと考えるのが妥当だ。

無言で眼下の景色を眺めるサアラの横顔はひどく冷静に見える。そのくせ憂いを帯びた瞳は何かを独りで抱え込んでいるような気配があった。

コウ中将の言葉を思い出す。彼の言った最高の待遇とはサアラをバベルの幹部として迎えるということなのだろうか。そしてそれは彼女が望んだことなのだろうか？　もし、そうだとしたら……。

(……いや。『結論』を出すにはまだ早い)

彼女の横顔を眺めながらそんなことを考えた……。

その後、ヘリはデンバー郊外のショッピングセンターに着陸したが、そこで降ろされたのは自分だけだった。

「何だ。最後まで送ってくれるんじゃないのか？」

付き添いの下士官に文句を言うと彼は表情を変えずに答える。

「あなたはここまでです」

「サアラ達は どうする?」

「彼女達は我々が保護します」

「保護……ほう」

「それでは失礼します」

そう言つて下士官はおざなりな敬礼ひとつ残してさっさとへりに乗り込んだ。買い物客が集まるこんな場所に登山用の防寒フル装備の人間を置き去りにするとは気の利かない奴だ。

「奴は出世しないな」

こんな状況では負け惜しみのひとつも言いたくなる。

止む無くタクシーを拾つてホテルに戻ることにした。

* * *

ホテルに戻ると部屋ではナミが大人しく待っていた。

「おかえりなさい。どうだった?」

「顔を見れば分かるだろう」

「……会えなかったの?」

「いや。その逆だ」

「そう……」

自分がなぜサアラ・タゴールを追うのか、その本当の理由をナミは聞かなかつた。最も、問い詰められたところでうまく説明できる自信は無いのだが……。

ナミのガウン姿を見て思い出した。

「修理はいつ出来るんだ?」

彼女の左腕は現在修理中なのだ。

「あさつてには。思ったより痛んでたみたいね」

「そうか。それは仕方が無い。君のは特注品らしいからな」

「悪いわね。修理代まで出してもらつて」

「気にするな」

そう言つて彼女を抱き寄せキスをする。

彼女も予測していたのか、その過程に違和感は無かった。唇を離れた瞬間、ナミがほっとしたような表情を見せた。

「でも良かった。あなたが無事で」

……なんだか夫婦じみた会話だ。しかし、悪い気はしない。もっともこのような甘い感情に流されてしまうことはもう止めたのだが…。

「そうだ。伝言を預かってるの」

ナミがそう言うので不思議に思った。このタイミングで誰が？

「インプウって変わった名前の人だったわ。あなたに渡したいものがあるんですけど」

その名前を聞いて愕然とした。

（インプウ……イタチ男、だと？）

なぜ奴は自分の行く先々に現れるのか？

「やれやれ。奴はいつたい何を考えているんだ」

バベルの次はイタチ男か。かくいうイタチ男もバベルに関係があるとか無いとか…。

丁度良い機会だ。イタチ男に会ってバベルのことを聞き出してみようと思った。

第34話 天国と地獄

イタチ男が待ち合わせに指定した場所は『羅生門』という日本食レストランだった。

古めかしい作りの看板には漢字で『羅生門』と書かれているが正式な店名は『La-Syomon』というそうだ。恐らくこの店のオーナーが『Ra』を『La』と表記した方がお洒落だと安易に考えたに違いない。それでも一応は和式を踏襲しているようで内装は土壁と木を基調としており、オレンジ色の明かりが壁面の肌色をほんのりと浮かび上がらせている。よく見るとその照明はライトを囲う色紙が送風によってはためいて、『松明』^{たいまつ}に似せているようだ。床には所々に石畳が敷かれていてガラスに囲まれた内庭には小さいながら池や灯籠、松の木などが配されている。客席はすべて個室になっっているようだ。

案内係に待ち合わせだと告げると、名乗りもしないのに『アンカー・S・カイドウ様ですね』と答えられて（なぜフル・ネーム？）と、戸惑った。が、イタチ男が自分のフルネームを知っていてもおかしくはない。何しろ頼みもしないのに口座に入金してきたり、本人ですら知らないiPS細胞の培養方法を熟知していたりと実に薄気味悪い奴なのだ。もし、自分が年頃の娘だったら訴えても良いレベルの粘着ぶりだ。そのところは割り切って案内係についていくことにした。

（何だ？ この怪しげな雰囲気は）

通された部屋を一瞥して驚いた。個室の真ん中には木目の鮮やかな一枚板のテーブル。部屋の中央には提灯をかたどった照明がひとつ天井からぶら下げられている。が、何よりも異様なのはその壁面だった。入って正面の壁には水彩画が一面に描かれている。

（左手に極楽、右手に地獄か……）

それはまさしく天国と地獄の絵だった。それは遠い昔にどこかの寺で見たことがあるような図だ。

テーブルに着きながら待っていたイタチ男に声を掛ける。

「この絵は本物のようだな」

するとイタチ男はちらりと絵を眺めて「ああ」と、頷いた。そして呟く。

「売り払ったのだろう。どこかの寺が」

彼の言う通り、恐らくどこかの寺の経営が立ち行かなくなって売れる物は何でも売ってしまえということになったのだろう。そしてこの壁画は寺の建物を解体して壁ごと輸出されたものと思われる。

「ジャパン・セール（日本の叩き売り）か……」

思わずそんな懐かしい言葉が出る。

日本という国の経済が崩壊してもう何十年になるだろう。きっとだけは国債の暴落だった。簡単に言えば誰も日本の国債を買わなくなったのである。無理も無い。国家予算の半分以上を赤字国債に頼る国を誰が信用するだろうか。当時のIMF（国際通貨基金）のコメントがそれを象徴していた。

「再三の警告にも関わらず借金漬けの生活を改めなかった人間に金を貸したがる者がいるだろうか。信用を無くすのは一瞬だ。だがそれを回復するには相当の時間と努力を要する」

当時の政府も高をくくっていた節がある。確かに「日本には国や地方の借金総額を上回るだけの個人資産があるので大丈夫だ」という意見も一部にはあった。ハイパーインフレや預金封鎖といった『禁じ手』を使えば何とかかなるとも目されていた。だが、金持ちほどそんな政府の思惑を敏感に感じ取り、自らの資産を外貨建てに切り替えはじめたのだ。その動きはあつという間に一般人にも広がり、人々がこぞって預金を解約して外国債や外貨預金を購入した為に預金が出た銀行が幾つも潰れた。また、外貨を得る為に株や土地は叩き売られ暴落した。政府が規制に乗り出した時には既に手遅れで個人資産の約40%が外貨に入れ替わってしまった。その結果、資

産が暴落するのに物価だけ高騰するという最悪の事態が日本経済を
あつという間に崩壊させてしまったのである。

あの頃の状況を思い出しているとイタチ男が尋ねてきた。

「ジャパン・クラッシュの後か？ 君が、日本を捨てたのは。」

「……人聞きの悪いことを言うなよ。一応、留学していたんだ」
「養い親と疎遠になった。それなのに？」

よくもまあそんなことまで知っているものだ。

「別に避けていた訳じゃない。『海堂』の家には感謝してるよ。そ
れなりに」

それを聞いてイタチ男がまるでプロフィールを読み上げるような
調子で『海堂』の情報を披露した。

「君の養父。海堂大貴は国営の養魚場で働いていた。岐阜の国立マ
グロ・センターだ。所属は給排水管理課。26年勤続。最後は課長
職で定年。妻と2人暮らし。君を養子にしたのは彼が30歳の時」

「素晴らしい。パーフェクトだ」

わざと褒めてやった。自分が知らない事柄も含まれていたのでイ
タチ男の情報が正確かどうかは確かめようがないのだが……。

イタチ男は続ける。

「君は、アメリカの大学に進学してから日本には殆ど帰らなかった。
海堂大貴とその妻、美希。そのどちらの葬儀にも出ていない。虐待
されていた訳でもないのに。それはなぜだ？」

最後の部分は耳が痛い質問だ。だが、あの時の複雑な心情を言葉
にするのは困難だし、いちいち他人に説明する必要も無い。

返答に窮しているとイタチ男はなおも追及する。

「なぜ自分のルーツを探ろうとしない？ それが理解できない。私
には。君は、自らのルーツに興味が無いのか？」

「無いね」

それは断言できる。

「なぜだ？ それでは下等生物と同じだ」

「酷い言われようだな。そういえば自分の生い立ちについては養い

親にも詳しくは聞いたことが無かったな」

イタチ男は明らかに苛立った口調で持論を展開する。

「犬や猫。植物や昆虫。下等生物はただ生きていただけだ。彼等が己の生い立ちを嘆いたり生きる事に意味を見出そうとしたりするか？ 本能というものは生命を維持するための機能に過ぎない。そもそも……」

そこで給仕が注文を取りに来たのでイタチ男の話が中断する。

「お飲み物はいかがなさいますか」の問いかけに「ビール」「水」という言葉が重なった。

(水?)

不思議に思つてイタチ男の顔を見るが彼は気にする風でもない。給仕も同じようにイタチ男のことをちらりと見るが直ぐに気を取り直して「かしこまりました」と返事をした。そしてビールの種類について質問する。

「日本産の銘柄もございますか？」

「珍しいな。じゃあ貰おうか」

折角なので懐かしい銘柄を注文した。

直ぐに瓶とグラスが用意される。

ビールはいい。決して生活必需品ではないが長年人々に愛され作る側も熱心に改良を続けた結果、ひとつの文化として一定の地位を築いているからだ。こういうものが身近に存在するということは悪いことではない。どんな店でも100年続けば『老舗』と呼ばれるように、どんな商品でも100年続けば名品になるものだ。

久しぶりに味わう日本産のビールの味にほっとする。

話の途中で遮られたイタチ男が無表情に口を開く。

「アーシエンジャーの『輪廻』は、読んだか？」

その問いにうんざりして首を振る。

「またそれが……まだだよ」

「やはり読んでいないのか。多分そんなところだろうと思つて、用意しておいた」

そう言つてイタチ男は一冊の本を差し出した。

意外に立派な茶色の表紙にはタイトルが金色で記されている。

(これが例の『輪廻』という小説か……)

受け取つてパラパラとめくつてみる。明らかに紙が劣化していて埃っぽい。

「渡したい物というのはいかたつたのか。悪いがあらすじを解説してくれないか？ 読むのが面倒なんでね」

試しにそう言つてみたがイタチ男はゆっくりと首を横に振る。

「それでは意味が無い。必ず読まなければならない。自らのルーツを知る為には」

「フン。仕方ない。そのうち読むよ」

「子供のような言い訳だ。必ず読め。出来れば早急に」

「興味の無いものに時間を割くほど暇ではないんでね。あんたに依頼された仕事もあるしな」

するとイタチ男は微かに首を傾げた。

「果たしてそうかな？ 大して成果を挙げているようには見えないが」

「……報酬に見合うだけの仕事をしていないとでも言いたそうだな」「いや。前にも伝えた通り。方法は問わない」

確かにイタチ男の出した条件は『ヘーラー』と対決するという実に曖昧なもので、また成果は問わないということだった。しかし、そもそもなぜイタチ男は自分をけしかけるのだろうか？ その部分について聞いてみた。

「残念ながら今回の件ではヘーラーは出てこなかった。その代わりにあなたのお仲間初めて会ったよ」

「仲間ではない。それは少し違う」

イタチ男は以前もそんな事を言っていた。自分はバベルに近いがバベルではないと。

「俺がヘーラーと対峙する事でバベルに何らかのメリットがあるんじゃないのか？」

「それは無い」

と、またもや彼は即座に否定する。

「少なくとも俺はそう解釈したんだがな。でなければあんな大金を出す意味が理解出来ない」

が、イタチ男はじつとこちらを見据えながらロボットのような反応しか見せない。

「我々は君自身に興味がある。それだけだ。一連の依頼は、きつかけに過ぎない」

「気持ち悪い事を言うなよ。大体、俺があんたと何の関係が……」
そこまで口にしてぞっとした。イタチ男が僅かに口角を上げるのが目に入ったからだ。

(何なんだ……こいつは……)

柔らかな照明に浮かび上がるイタチ男の表情は、まるでロウソクの明かりを下から浴びた陶器製の人形のように見えた。相変わらずの黒スーツに興味の悪いシャツとネクタイ。今日は紫のシャツに爬虫類のようなネクタイをしている。

「そう言うな」と、前置きしてイタチ男は軽く顔を上げると今度はにっと笑みを浮かべた。そして信じられない言葉を口にした。だが、そのあまりに場違いな単語に我が耳を疑った。

(何……だと？ 今何と……)

ビールを噴出しそうになるのを堪える。動揺を抑えながら尋ねた。
「今、何て言った？」

「聞こえなかったのか。『ブラザー』」

その言葉に対して冗談で返す余裕は無い。声が震えないように質問するのが精一杯だ。

「兄弟だと!? ……バカな。な、何を言っているんだ？」

「やはり自分のルーツにはもっと興味を持つべきだ。その調子だと自分の名前すらよく分かっていないようだ」

イタチ男にそう言われてはっとした。

「名前？ まさか……『S』は何の略だ？」

自らの名前である『アンカー・S・海堂』のSが何の略なのか自分はまだに知らない。養い親が決して教えてくれなかったからだ。その質問は海堂家ではタブーだったのだ。

イタチ男はぼつりと答えた。

「名字の略。『瀬戸』のS」

……何という事だ!!

その名を聞いて思い出したのだ。チャンとの会話を。

忘れもしない。チャンが手に入れた30年前のバベル捜索隊に名を連ねていた『瀬戸源一郎』という日本人。まさにイタチ男に瓜二つの肖像を思い出した。

「あんたは……『瀬戸源一郎』本人なのか？」

恐る恐る聞いてみた。しかし、イタチ男は何も答えない。それどころか「本を読め」とだけ言ってゆっくりと水を口に含み喉を潤した。

(否定も肯定もしないか……)

イタチ男と自分の共通項について思考を巡らせる。が、どうしても拒否感がそれを邪魔する。

そんな自分の葛藤を見透かしたようにイタチ男が急に話題を変えた。

「ヘーラーの情報を幾つか与えておく。詳しいものは後で端末に送るが」

「今さらヘーラーの情報を貰ってもな。知ってるだろう？ サアラがバベルに保護されてしまった事を」

イタチ男は軽く頷く。

「報告は受けている。だから君は別な行動を選択しなければならぬ」

やはり彼はバベルと通じているらしい。それにしても『別な行動』とは何を意味するのだろうか。

「別な行動とはどういうことだ？」

「ヘーラーの目的はバベルと同じと言って良い。ただプロセスが異

なる。彼等のやり方に対して君が何を思い、どう関わりを持つのかに興味がある」

正直、彼の真意を測りかねる。

興味ね……で、俺に何をしろと？」

「ところで『悪魔の口』というのを知っているか？ 7年前にカナダのバンクーバーで発見された地面の裂け目のことだ」

「噂では聞いたことがある。カナダ当局と米国がひた隠しにしているそうだが」

「その通り。公式には地震によって出来た単なる断層と説明されている。だが実際はもつと深刻なものだ」

「何がどう深刻なんだ？」

「海底火山。どうやらそれに直結しているらしい」

「海底火山だと？ それが何だっけ言うんだ。地震にしても局地的なものなんだろう？」

「バンクーバー沖の海底火山にはかなり大きなエネルギーが溜まっている。これは最新の地層観測でも確認されていることだが、これが活性化すると恐らくは急激な海面上昇に繋がると考えられている」

「活性化の規模にもよるだろう。それで？」

「彼等は核を使って人為的に海底火山を噴火させようとしている」

イタチ男の言葉に思わず苦笑する。

「馬鹿馬鹿しい。核爆発で海底火山を？ まるで作り話だ」

「レーザー圧縮の水爆。これを用意している、と聞いてもか？」

「……それは確かな情報なのか？」

核融合の要はいかに高温・高圧の状態を作り上げるかだ。水素を使った核融合の場合はその圧縮技術が極めて高度なのだが、まさかレーザー圧縮という国家機密レベルの最先端技術を彼等が手中にしているとは……。

イタチ男は両方の手のひらを下にして指先を重ねてみせた。そして説明する。

「地震のメカニズムは知っているな？ プレートは絶えず動いてい

る。そしてこのような形でプレートとプレートが重なっている部分にはエネルギーが蓄積される。これが限界に達した時にプレートが跳ね上がって地震が起きる」

「それは知っているが……」

「理論的にレーザー圧縮で爆発させた水爆にはエネルギーの限界は無い。が、所詮は人為的なものに過ぎない。大自然のエネルギーと比較すれば微々たるものだ。だが、プレートの端っこをこつこつやってこの原理』で押し上げてやれば何倍もの圧力を与えることは出来るかもしれない」

そう言つてイタチ男は自らの手のひらを使つて人為的に地震を誘発するメカニズムのモデルを示した。

「にわかには信じ難い話だな……」

実に滑稽な計画だ。もし、ヘーラーが本気でそんなことを実行しようとしているのだとすれば狂つているとしか言いようが無い。

イタチ男は表情を変えずに話を続ける。

「他にも彼等は色々と水面下で工作をしている。例えば、国際ウイルス研究所を支配して空気感染するウイルスを作っている。極めて致死率の高いものを。それと最近、頻発している若き天才と称される各分野の職人の連続失踪事件。あれも彼等が絡んでいる。それから月面基地のストライキも……」

「ちよつと待った。一体、何なんだ？ ヘーラーは何がしたいんだ？」

「パライゾ（キリスト教でいう天国）を作りたいのだから」

「パライゾだと？ 奴等がやるうとしてるのはテロ行為じゃないか」

「そうとも言える」

イタチ男はしれつとそんな風に言つが、それが事実ならとんでもない話だ。

「奴等のテロを俺が阻止しろでも言うのか？ 映画が何本も撮れそうな内容じゃないか。やれやれ。体が幾つあつても足りないぜ」

「……誰も阻止しろとは言っていない。それは君自身が決めればいい」

その時、ふとイタチ男の変化に気付いた。やけに饒舌になった、というよりもまるで別人のように口調が変わった。この男の場合、元々は言語障害を疑っていたくらいだから喋り方は明らかに奇妙だった。それがヘーラーの話になったあたりから普通の話し方になったような気がする……。

イタチ男はコップを口に運び、口元を丁寧に拭ってから言葉を繋いだ。

「世界の終わりについてどう思う？」

そう言っただけはじつとこちらを見た。唐突な質問だと思っただけ「さあ？」と、返す。すると彼は静かに持論を展開し始めた。

「ここ数年の動き。例えば次世代インターネットだ。今のネットワークは言葉ではなく感情をダイレクトに共有することが出来る。これも脳の仕組みが解明され、電気的な刺激で感覚をコントロール出来るようになったおかげだ。その点、トレース社の技術、いや元を正せばジョナサン・ホフマン教授の功績だろう」

脳の特定部位に電氣的刺激を与えることで他人の感覚を体験出来るという『トレース』の技術は確かにネットワークの世界を大きく変貌させた。それは分かっているが彼は何を言いたいのだろうか？
続きを促す。

「それと世界の終わりに何の関係が？」

「多くの人間が感覚や感情を共有するということが、それがどんな結果を生み出すと思う？　そこで生まれるのは『総意』だ。個々人の意識レベルを超えて繋がった全体意志とも言わなければならない」

「……それは分かる」
「うむ。よろしい。では、この『総意』は正しい方向に向かっていくと思うか？」

それは……なんとも言えない。なので首を捻ってみせるしかない。するとイタチ男は（そうだろう）という風に頷いてから話を続ける。

「ネットワーク世界の発達は人類の進化ともいえる。具体的には情報を発信する側の演出・やらせ・虚像の垂れ流しといった作為が通じなくなった。何十年前なら人々はメディアが発信する情報を素直に信じた。しかし、ネットワークというシステムが、嘘や秘密を簡単に暴いてしまうようになったのだ。その代わりにあらゆる事象は『総意』の前に晒されることになってしまった。まるで身包みはがされた子羊のように事象は『総意』によって容赦なく解剖されてしまう。時には美談ですら『総意』の前では偽善と断罪されてしまう。こういった傾向をどう思う？ エゴ、嫉妬、怒り……最近の『総意』というものには人間の悪い部分ばかりが前面に出ていると思わないか？ 叩きはより激しさを増し、ネーションなどというものはファシズムそのものじゃないか。価値の低いものを認めないという傾向は以前からあった。しかしそれがより強くなり、結果、多くの人々が向上心を捨ててしまった。今の倦世感や厭世感はまさにそれだよ」

イタチ男の論は極端ではある。が、認めざるを得ない部分もある。自分には自分なりに考えるところがあつて、確かに現実世界よりもネットワーク世界での繋がり、つまりイタチ男の言うところの『総意』に軸足を置き、自らの感情すら積極的に委ねてしまう人々の多さが今の世の中を象徴していると思う。

「この絵を見たまえ」

と、イタチ男に言われて我に返る。

「……天国と地獄か」

そう呟いて改めて壁に描かれている絵を眺める。天国はともかく地獄の図は典型的なものだ。針山地獄に血の池地獄。釜でゆでられる者、鬼に鞭打たれる人々……。これと似たような絵を見たのは子供の頃だったろうか。嘘をついたり悪いことをしたりすると死んでから地獄に落ちると脅されたのを思い出す。

イタチ男は絵を眺めながら言う。

「あくまでもこれは一般向けだ。分かり易く表現しているに過ぎな

い。仏教的にはこの形で示す方が都合が良かったのかもしれん。正確には死ぬと個体の意識は全体的な意識の塊に還る。統合されると言った方が良いか。つまり個としての意識ではなくなる訳だ。そして全体的な意識は、定期的にその一部を切り取り、新しい肉体に意識を送り込む。肉体という器に分け与えられた意識は、その器の生命活動を通して経験を積む。そして器が朽ちれば元の場所に還る」

「輪廻転生か」

「そうだ。意識を魂と読み替えれば分かり易い。そう考えればこの天国と地獄というのは全体的な意識というのは決して均一なものではなくて、幸福な経験を積んだ部分とそうでない部分があつてそれをビジュアル的に表したものだ」と解釈できる」

「……バベルは仏教をベースにしているのか？」

「一概には言えないが強いていえばこの考え方に近い」

「随分と壮大になつてきたな。俺にはピンと来ない話だ」

人よりもずっと長生きするであろう肉体を持つてしまった人間にとって宗教的な生死観はまったくの他人事のように感じられた。

「これから何をすべきかは自分で考えたまえ」

そう言つてイタチ男が突然、立ち上がった。

「おいおい。まだ前菜しか出てないぜ。水を飲んだだけで帰るのか？」

「用は済んだ。その本を渡すことが目的だったから」

そう言つてイタチ男は、例によつて黒いスーツケースを持って部屋を出て行つた。

（参つたな……）

こんなところで独りで食事というのも落ち着かない。それにイタチ男に聞きたいことは他にも沢山あつたのだ。

このまま帰るといふ手もあつたが、せっかくだから日本食でも摘みながらイタチ男が寄越してきた『輪廻』を読むことにした。

第35話 輪廻

結局、イタチ男に貰った本はレストランでは読みきれなかった。止む無くホテルに持ち帰り読み終わったのは深夜2時過ぎだった。

(酷い小説だ……)

それが読み終えた時の素直な感想だった。一言で表せば気分が悪くなる代物だ。電子化もされず直ぐに絶版になったのも頷ける。それだけ酷い内容だった。イタチ男は熱心にこの本を薦めたが、これのどこに己のルーツを探る手掛かりがあるというのかさっぱり理解出来ない。

『クロード・F・アーシエンジャー』

1994年生まれはこの無名作家は3冊の本を出したという記録しか残っていない。そのいずれも大して売れずに絶版になってしまったようだ。そのうちの1冊がこの『輪廻』という50年前に書かれた小説という訳だ。

この小説、というよりは狂った妄想を要約するとこんな具合だ。

舞台は19世紀のノースカロライナ州。主人公は四つの大牧場を経営するクロフォードという大富豪だ。

ある日、クロフォードは神の啓示を受ける。それは「お前は重要な人物であるから、必ず自分の代わりを作らなくてはならない」という奇妙なものだった。しかし、クロフォードはそれを真に受けずしまう。そんな彼には3人の息子と2人の娘がいた。が、その誰もが自分そっくりではない。彼は一番自分に似ていた二十歳になる次男のカールに期待する。

ところが再びクロフォードの前に現れた神は「似ているだけでは駄目だ。所詮、彼は違う。カールはお前ではない」と告げる。勿論物語の設定がクローン技術開発以前の話だから強迫観念に取り付かれてしまったクロフォードはノイローゼになってしまう。

そんな時に三度、神が彼の前に現れ「お前は創らねばならない。お前自身の手で、お前自身の分身を」と最後通告を行う。そこで追い詰められたクロフォードは、とんでもないことを思いつく。自分の分身を作る為にクロフォードが選択した方法。それは、血を濃くするという忌まわしい計画だった。なんと彼は自分の娘を犯して女の子を産ませたのである。さらに彼はその女の子にも自分の子を産ませればもっと血が濃くなる考えた。彼の行為は正気の沙汰ではない。それは、本編の言葉を借りれば「悪魔ですら顔を背けるような企み」だった。

結局、彼は死ぬまでの間に4度もそのような行為を行った。その過程で奇形児が生まれたり、犯された女の子が自殺したりと凄惨な出来事が一家を次々と起こった。それは天罰としか表現しようのない結果であったが、クロフォード自身は「神の啓示に従ったまでだ」と、最後まで己の過ちを認めることはなかった。

(まったく救いようの無い話だ)

近親相姦を扱った話は無い訳ではない。だが、そもそも幾らフィクションとはいえ、ここまで反道徳的な内容は異常としか言いようが無い。強いてテーマを挙げるとすれば「自らの分身を作ることに取り憑かれた男の狂気」ということになるうが…。

そこで思い出したのが瀬戸源一郎のことだ。『バベルの塔』捜索隊の一員であった彼は確か医学生だった。もし、彼がこの小説の主人公と同じような妄想に取り憑かれていたとしたら？

(有り得ない話では無い……か)

30数年前にバベルの塔を探索していた瀬戸源一郎。その頃の彼とまったく同じ風貌のイタチ男。この2人は同一人物なのか、もしくはイタチ男はクローン人間なのか？

奴が自分と同じ『不老』なら瀬戸源一郎本人である可能性が高い。だが、この本にヒントがあるのならクローンということも考えられる。「あなたは瀬戸源一郎本人か？」と、聞いた時の奴の反応。奴は肯定も否定もしなかった。そして『ブラザー』という言葉

の意味。それが血の繋がりを示すものなのか単に親しみを込めた呼称なのかは分からない。そこまで考えて首を振る。

（兄弟？ それは無いだろう。大体、俺とイタチ男は全然似ていないじゃないか！）

冷静に考えればそうだ。ただ、自分が普通の体質ではないことは分かっている。また、自分の出生に重大な秘密が隠されていることも……。

そこで喉の渴きに気付いた。

冷蔵庫から缶ビールを出して喉に強い刺激を与えることで、もやもやとした気分を追い払おうと思った。が、缶を開けた音でナミが目を覚ましてしまった。

ベッドで眠っていた彼女が気だるそうに上体を起こす。

「……まだ起きてたの？」

「すまない。起こしてしまっただようだな」

ナミは目を擦りながら首を振る。

「眠るつもりじゃなかったけど貴方が熱心に読んでたから……それって面白い？」

「最悪だな。読む人間をもれなく不快な気分させる。ある意味、凄い才能だ」

「それで何か分かったの？」

「いいや。余計に混乱した」

「そう……」

そう言っただけで彼女はベッドから起き上がる。そしてずっと自分の側に寄り添って哀れむような目で顔を覗き込んできた。

なぜか、ため息が出してしまった。彼女にそんな目で見つめられると何だか自分が酷く無意味な存在のように思えてきたからだ。それは以前、生活が荒んでいた頃によく感じた無力感だ。なぜ自分は歳を取らないのか。なぜ人よりも長く生きなければいけないのか。こんな世の中で長生きすることに何の意味があるというのか。そう思った思いが複雑に絡まって、ただ生き続けることに対する嫌悪感が

どうしても払拭できないことがある。

ふと彼女の胸元に目がいった。ガウンの胸元がはだけている。恐らく眠っているうちにずれてしまったのだろう。それを直してやるうと手を伸ばすと、彼女がその手に自分の手のひらを重ねてきた。

目のやり場に困ったので「ガウンが乱れているぞ」と、目を逸らせる。しかし彼女は何も答えなかった。言葉の代わりに手の温もりが伝わってくる。

うんざりするほど時は静かに流れた。意地の悪いことに時はそれを持って余した時ほどゆったりと流れる。

微かに何かが落ちるような気配。

(なんだ?)

そう思った瞬間、目の前に美しい乳房が現れた。

驚いて彼女の顔を見上げる。突然の出来事に言葉を失った。

彼女はガウンの下に何も着けていなかった…。

「下着ぐらい着けたらどうなんだ」

つい口調がぶつきらぼうになっってしまう。

が、彼女はすました顔で答える。

「無いんだから仕方ないでしょ」

「下着が、無いだと?」

「貴方が買ってきてくれないから」

やれやれ。そうきたか。

「風邪を引くぞ。それに俺は……」

彼女の答えは予想外のリアクションだった。

(なっ……)

いきなり視界が塞がれ頭の自由を奪われてしまった。顔全体に受ける触感と温もり。彼女の重みで椅子の背もたれに押し付けられる。そのままの姿勢でしばらく葛藤した。封印していた感情が溢れてくる。

そして……考えることを止めた。

衝動の赴くままに太ももの間に手を滑り込ませた。

「……思ったよりも柔らかいな」

「腿の部分？ そうね。ここがクッションにならないと歩く度に衝撃が腰に来てしまうから痛めてしま……んっ！」

指先で彼女の言葉を遮る。

目の前の無防備な柔らかさに顎を埋める。その弾力に翻弄されながら中心に吸い付く。まるで波間を漂う漂流者が夢中で浮き輪に捕まるように。

彼女の漏らす『すすり泣き』にも似た吐息を耳元に受けながら湧き上がる欲情を解き放つ。もう後戻りは出来ない…。

そう。これでいい。このままで。感情の赴くままに…。

* * *

端末の呼び出し音で叩き起こされて朝の到来を知った。相手は手ヤンだった。

「どうした少年？ こんな朝っぱらから」

『これでもそちらが朝になるのを待ってたんですよ！ 早く報告したくて』

ナミは隣でまだ眠っている。昨夜は少々、無理をさせてしまったようだ。

「分かった。ちょっと待て。場所を変える」

『え？ 何かマズイことでも？』

「そういう訳じゃないが……」

彼女を起こさないようにそっと布団から抜け出し、ガウンを羽織りながら別室に移動する。

「で、その調子だと何か成果があったのか？」

『ええ。大発見ですよ！ でも、最初に発見したのは30年前の探検隊で僕たちはその後を辿っているだけなんですけど』

「ということは……まさか本当に存在したとでも？」

『はい。間違いなくこれは『バベルの塔』です』

チャンは自信満々のようだが俄かには信じ難い。

「そこまで断言するからには証拠はあるんだろうな？」

『そう言うと思っただけじっくり調査しておきましたよ。ところでアンカーさんのマルチ・スコープには『リアル・ビューワ』機能は付いていますか？』

「一応は。あまり使わないが」

リアル・ビューワとは右目用のカメラと左目用のカメラで同時に撮影した映像を視聴者の右目と左目それぞれに送ることで遠近感のあるリアルな映像を見せる仕組みだ。その映像は見る者の目に隣接して左右別々に映されるので臨場感がある反面、自分の首を動かしたわけでもないのにカメラの視点が切り替わると脳が混乱してしまう為、慣れないうちは気分が悪くなるのが欠点だ。

『まずは外観を見て欲しいんです。今僕が見ている景色をダイレクトに送ります。準備はいいですか？』

チャンに急かされてマルチ・スコープを装着する。

「いいぞ。で、ここは……」

ホテルの一室からいきなり緑の世界に飛ばされた。視界を覆う圧倒的な緑は密林の中に居ることを示唆している。

「森。いや密林に近いな。そこは本当にイランなのか？」

『間違いなくイランですよ。この辺りは峡谷だったようです。両サイドが結構な断崖になっているでしょ』

「おい。あまりキョロキョロするな。目が回る」

自分が首を動かしたわけでもないのにやたらと視点が動くので非常に違和感がある。

『あ、スミマセン』

「しかし良くこんな秘境が残っていたものだな」

『現地の人は決して近付かない場所のようですよ。なんでも宗教的に汚れた土地とやらで。方角も悪いみたいです』

「ちよつと待て。その足元……それは住居の跡か？」

チャンの進行方向に壁が崩れたような痕跡があったのだ。

「気がつきましたか。草木で埋もれています。似たようなのが点在しています」

古い遺跡、それもかなり風化が進んでしまったように見える。

「もしそれが遺跡だとすれば何時ぐらいに存在したものだ？」

「5000年前のもんです」

「5000年だと！？年代測定はしたのか？」

「いえ。色々な方法を試した結果です。間違いありません」

「……そんな馬鹿な」

「紀元前3200年頃に栄えたといわれる古代シュメール文明の頃と一致しますね」

五千年前の残骸が現存すること自体、驚きであるが、なぜそんな考古学的に重要な遺跡がこれまで放置されていたのだろう。シュメール文明はメソポタミア文明の前身だと習った記憶がある。メソポタミア文明が発達した場所は現在のイラクだからイランにも遺跡があることは想像できるはずだ。

「なぜこれまで発見されなかったんだ？」

チャンは事前に調べていたようだったのでその質問に簡単に答える。

「イランではではチヨガ・ザンビールというジッグラト（聖塔）が有名ですが、その建造は紀元前1250年頃と言われています。この国で発見された遺跡は年代がずっと後なんですよ。まさかメソポタミア以前にこの地にシュメール人が巨大なジッグラトを作ったとは誰も考えなかったのでしょうか。それにこの土地は放射能汚染されていた疑い濃厚です。地元の人々がこの場所を汚れた場所として長年近付かなかったのはこれと関係しているのかもしれない」

「ちよつと待て。放射能だと？本当にそんな反応が出たのか？」

「ええ。年代測定を幾つか試した時に気付きました。計算では今から約4000年前に重大な放射能汚染があったと思われます」

「……やれやれ。そんな時代に核戦争をやったとでもいうのか？」

何かの間違いだろう」

確かに『ウラン』が自然の力で核分裂反応を起こす可能性はゼロではない。例えばウラン鉱脈に流れ込んだ地下水が減速材の働きをすれば理論的には可能だ。天然原子炉という例もある。だが、その為には核分裂反応をし易いウラン235がウランの中に占める濃度が3〜4%であることが必要だ。現在、自然界に存在する天然ウランは核分裂をしにくいウラン238が99%以上、ウラン235の割合は1%以下でしかない。しかも大多数を占めるウラン238の半減期が45億年であるのに対してウラン235は半減期が7億年と寿命が短いので時間とともにそのシェアは低下していく。つまり何十億年も前ならともかく、ほんの数千年前にウラン235の濃度がこの地で自然に高まり、核分裂反応を起こしたというのは考えられないのだ。

「人為的にウラン235を濃縮するしかない……まさかそんな大昔にそんな技術が？」

思わず唖った。するとチャンが冷静に答える。

「まあ中に入れば分かりますよ。驚くのはまだ早いです」

「中？ 中ってどこの……」

そう言いかけて息を飲んだ。

その質問に答える代わりにチャンが寄越してきた映像。つまり、今現在の彼の視点で見上げた光景に言葉を失った。

「これは……」

ぱつと見は緑に包まれた山のように見える。だが山にしては小さく、立ち位置からさほど離れていない。高さは20メートルぐらい。周りの高い木々に囲まれて一際、濃厚な緑の塊がある。ちょうどピルを見上げた時のような具合で今、緑の塊を目の前にしている。

「これがバベルの塔、だと？」

よく見るとその緑の塊は、蔦のようなものでびっしりと覆われ周りの木々と同化していた。が、その大きさといい、質感といい、見れば見るほど異様な存在感だ。まるで森全体がひとつの生命体になっ
ていてこの緑の塊がその『核』になっているような気がした。

チャンの足取りに合わせてその物体の異様さが伝わってくる。やはりこれは自然に出来たものではない。例えば、巨大な岩がぼんとここに残され、そこを中心に緑が広がって森が出来上がったというものではない。

「確かに岩ではないな……自然に出来たものがこんな形になるはずがない」

認めたくはないが緑の塊は、その形状はどう考えても人為的に作られたものであるように思える。

チャンが解説する。

『らせん状の建造物ですよ。先ほど『ジイサンさん』には大量にデータを送っておきましたので分析待ちですけど間違いないと思います』

らせん状の建造物と聞いてブリューゲルの絵を思い出した。ただ、あれに比べると随分と小ぶりなのだが…。

「想像していたのとは違うな。高さは20メートル。直径もせいぜい30ぐらいじゃないか」

正直な感想を述べるとチャンは首を振った。その拍子にまた視点が揺さぶられたので迷惑する。

『いいえ。これは地表に出ている部分だけですから』

「何!? ということはこれが全部では無いのか?」

『ええ。表に出てるのは一部だけです。あとは埋まっています。というか元々、地下に作られたのかもしれない』

チャンの説明では同行しているハマド少年が所有していた手帳のおかげでこの場所を見つけることができたらしい。ハマド少年は30年前にバベル探索隊のガイドを務めていたアシム青年の息子なのだ、亡くなった父アシムが隠し持っていた手帳には、この場所や建物内部への経路などが細かい文字でびっしり書かれているそうだ。しかも『シユメール文字』を見たことのない記号や図を解読したも

のまで記載されているという。

『おそらく、この手帳が無ければ僕たちはここまで来られませんで

したよ』

チャンはそう言って歩く速度を上げた。そして真っ直ぐに緑の塊に向かう。

「少年。中は……中には何があつたんだ？」

『それは入ってからのお楽しみです』

「勿体ぶるなよ。これでもお前さんのスポンサーなんだぞ」

『分かつてますよ。でも、アンカーさんは疑り深いじゃないですか』！

その回答に思わず苦笑した。

(こいつ……ちゃんと分かっているじゃないか。それにしてもここに何かあるんだ？ あるはずが無いと思っていた『バベルの塔』。それを30年前に発見した連中が居るといふ事実。果たしてそれがバベルという組織にどう繋がるというんだ？)

そこでふと喉の渇きに気付いた。いつの間にか緊張が高まっていたらしい……。

第36話 遺物

ちょうど円を半周するような形でチャンは壁際を反時計周りに歩いた。

初めは緑の『塊』にしか見えなかった目の前の物体は、近くで見ると確かに塔のような建物に見えなくもない。緩やかな曲線を持つ壁面はその表面が苔や植物に覆い尽されている。が、所々見えるその色合いは緑に近い黒のようだ。その姿は植物達のやりたい放題を許しているように見えるが、実はその奥ではじつと息を潜めているゲリラ兵を連想させた。

先に進むに連れ草丈は高くなり、やがては手で押しつけて進まなくてはならなかった。

「少年、この塔はどこから入るんだ？」

半周ほどしたところでチャンが塔から離れるような進路をとったのでそう尋ねてみた。

『残念ながら地上からは入れないんです。なので、まずは隣接する地下施設に向かいます』

その言葉通りにチャンはいったん塔を離れるとさらに奥に向かった。

もうこの辺りは日の光が木々に遮られ、うっそうとした森の中と違った具合だ。

しばらく草木を掻き分け進んだところで少し開けた場所に出る。

『ほら。そこに穴があるでしょう』

確かに石で囲われた入口らしきものがある。まるで地面が口を開けて森の内部へ誘い込もうとしているように見える。

「しかし良く見つけたな。これだけ周りが緑で埋まっていると普通は見つからないぞ」

『でしょうね。アシム氏の手帳のおかげですよ。それでもこの30年でかなり草が侵食していたせいで随分と手間取りましたが』

入口を入ってすぐに急な石の階段がある。ここも例外なくびつしり苔に覆われている。

『マルチ・スコープを暗視モードに切り替えます。手元のライトでは光が足りませんから』

「ああ。そうだな」

石段の幅は2メートルほど。一段ごとの高低差はさほどではないが、勾配は60度ぐらいの急な階段になっている。

しばらくしてチャンが急に立ち止まり、壁に目を留める。

『……この壁画。彫ってあるんですが何か変ですよ』

そう言っただけでチャンは手元の明かりを壁画に寄せた。壁はタイル張りのように同じ大きさの石が隙間無く積まれて作られていた。が、使用されているのは普通の石ではない。苔や土埃で表面はザラついているように見えるが汚れを取り除けば大理石のように滑らかになるのだろう。ただしその色合いは緑が混じった黒で、金属っぽくも見える。

『分かりますか？ 絵になっているのが』

そう言っただけでチャンが示した部分は苔や土が取り払われていて壁に絵が彫られているのが判別できる。

「……目？」

それは奇妙な絵だった。左手に太陽らしきもの、右手にはそれに向かって祈りを捧げる人々の図。だが、その太陽の中になぜか『目』が大きく描かれているのだ。しかも黒目の部分は渦巻状になっている……。

チャンが呟く。

『太陽を信仰の対象にしていたんでしょうね。けど……なんで目なんでしょう？』

「さあな。太陽イコール神、ということなんだろう。だとしたらこの塔みたいな建物は太陽神を祭る為のものかもしれない」

『それはどうでしょう。それより先に進みましょう』

チャンの口調は意外に冷めていた。この塔は宗教的なものではないかと単純に思ったのでそうコメントしただけなのだがチャンは違う考えのようだ。

(儀式でなければ何の為にこの塔を作ったんだ?)
その疑問は取り敢えず胸にしまっておく。

階段を降り切ったところで平らな場所に出る。暗視カメラの映像なので全体像は把握し辛いのだが前後左右に通路が伸びているのが分かる。

『こんな感じで内部はいかにも地下基地といった具合です。とりあえずメインの部屋に向かいますね』

真っ直ぐな通路の途中に出入り口のような穴が見受けられる。

「何だかアリの巣みたいだな」

恐らく先に通路を掘ってそこから枝分かれするような形で部屋を作っていたのだらう。そこでチャンが立ち止まり何気なしに選んだ部屋を覗き込んだ。

『中を見ますか?』

「ああ。ちよつと明かりを強くしてくれ」

チャンが足を踏み入れた部屋は原型を留めていなかった。室内に残された遺物はまんべんなく埃に覆われ、そのシルエツトを失っている。まるで泥を被ったかのように室内は『五千年分の垢』で均されていた。

『このあたりの部屋は食堂とか休憩室だったんじゃないでしょうか』
もしかしたらここには木のテーブルが設置されていたかもしれない。しかし木は腐り、朽ち果てて積もりに積もった土に還っていったのだらう。

この部屋を調べてみようという気は起こらなかった。それは30年前の探検隊も同じだったようである。この部屋は手付かずの様子だ。

(五千年の歴史……か)

気が遠くなるような月日の積み重ねに思いを馳せる。仮に今チャンが持っている端末をここに置いていったとして、五千年後の人間

がそれを手にした時、これが何かを判別するのは困難であることは想像できる。

『次に行きましょう』

そう言つてチャンは先を促した。

チャンの視点で探索は続く。

通路を真っ直ぐに進み、突き当たった所で右折する。すると突然、天井が無くなった。

「……広いな」

そこはとても地下だとは思えないぐらいに広い部屋になっていた。ぼつかり空いた空間を見上げながらチャンが言う。

『僕も驚きましたよ。吹き抜けになっているとはね。おそらく3階分ぐらいに相当するんじゃないですかね』

明かりが不足している為はその高さを実感することは出来なかったが、真っ暗な空間が頭上に存在するのは実に不気味だ。

「少年。この部屋か？」

『はい。驚かないでくださいよ』

そう言つてチャンは手元の明かりを台のような物の上に置いて端末を操作する。そして暗視カメラを勝手に通常モードに切り替えてしまった。

「おい少年。真っ暗だぞ」

何をしているのかと思つたその時だった。

（光！？）

驚いた。ふいに無数の明かりが出現したのだ。その変化を目の当たりにして一瞬、違う場所に移動したのかと思つた。

（床が……光っているのか？）

明かりの正体は床が放つ光だった。床全体が光つているというよりもひし形に輝く光が点在している。それらはランダムに配置されているが床面積の半分、いや、三分の一ぐらいを占めている。ひとつひとつの光量は少なめでどちらかかといえれば青白い。

「……何をしたんだ？ 少年」

『電磁波を当てたんです』

意味が分からず問い返す。

「電磁波だと？」

『発光パネルの一種なんですよ。だけど、ここのは特定の周波数の電磁波2つを交互に当てることでパネルが発光するんです』

なんとこの事だ！ 我々が普段照明として使っている発光パネルは電圧を加えることで光を出す原理になっている。だが、特定の電磁波を当てるだけで発光するパネルとは…。

「いったいどういう原理なんだ？」

『分かりません。アシム氏の手帳には「結局、その原理を解明するのは断念した」となっていました』

「30年前の先客も驚いただろうな。これを持って帰れば売れるぞ」無理ですね。30年前も同じことを考えたようですが、まずこのパネルを剥がすのが難しい。というよりどうやって接着しているのかすら分からないんです』

「そんなバカな……」

呆れるしかなかった。

（五千年前の遺物に現代科学が劣るとでもいうのか？）

淡い光に下から照らされていると何だか深海を漂っているような気分になってくる。浮遊するような感覚。そのせいか足元から生える無数の青白い光は発光するクラゲの群れを連想させた。

『床だけじゃありませんよ。ほら。左手に瘤みたいな塊の一団があるでしょう』

画面左下にチャンの指先が現れた。その先に目を凝らす。

「瘤……確かに岩ではないな」

その一角の幅は3メートルぐらい。人間の背丈ぐらいの高さから膝上ぐらいまでが『すべり台』のようになっている。その斜面にフットボール半分ほどの瘤が幾つも見えている。それはまるで雪の斜面に人為的に設けられた瘤のように見えた。色は少し透き通っているようだが…。

『もつと近くに寄ってみましょう』

チャンが一步一步前に進む。

『これは……ガラス？ いや、水晶か？』

『水晶です』

『こんな大きな水晶が……』

そう言い掛けて息を飲んだ。水晶の中に何かある！ というよりもその内部に建物の骨組みのように整然と並んだ異物が目に入ったのだ。

チャンが解説する。

『どうやらこの水晶は幾つかの塊を加工して繋ぎ合わせたものですよです。天然でこんな大きな物はできませんからね』

『中に何か埋まっているようだが……』

『回路、のようには見えませんか？』

『……まさに回路そのものじゃないか』

立体的な回路。この遺物を残した連中は基盤ではなく立体的に回路を組んでいたのだろうか？ それに細かい部分は判別出来ないが大小様々な部品のようなものが無数に骨組みに組み込まれている。

『これもアシム氏の受け売りですが、中は金で作られた電気回路のようですよ』

『金。確かに金は電気を通し易いが……』

『金で組まれた電気回路を水晶に埋め込む。さぞかし長持ちすることでしょうね』

『まさかこれも動くのか？』

『いいえ。というよりまるで使用方法が分からなかったそうです。』

これが何かの機械装置であることは確かなのですが』

これを単なるオブジェと断定するには無理がある。ひとつひとつの半球内部に詰め込まれたこの電気回路らしき物体に宗教的な意味を見出すことの方が不自然だ。

よく見ると半球型水晶の表面には記号のようなものが並んでいる。「表面には文字のようなものが彫ってあるな」

『ええ。だけどシユメール文字とは少し違っんです。アシム氏の手帳を使えば簡単なシユメール文字は判読出来るんですが、これは解読できません』

水晶のような固い物質に細かい文字や記号を正確に刻むには相当の技術を要するはずだ。しかし考えようによつては極めて長期間、情報を保存するにはこれ以上の方法は無いように思える。ある情報を何千年も保管しようとするなら『紙』では心もとないし、電子化するにしてもそれを読み取る機械を承継していかなければ意味が無い。一見、原始的な方法のように思えるが石に情報を刻むことが最も効果的な記録方法なのだ。

『謎の装置はこれぐらいにして次の部屋に行きます』

チャンはさつさと次の目的地へ向かおうとするが他にも気になる箇所は幾つもある。このデコボコなすべり台の隣、つまり部屋の中央にはゆうに3メートルはあるつかと一枚岩が壁にめり込んでいる。高さといい形状といい多分テーブルとして使われていたのでは思われる。最も壁に向かって宴会をするはずはないので作業台と表現した方が正しいのかもしれない。また右手にはミサイルを縦にして無造作に並べたような一角がある。それにやたらと高い天井にも何か潜んでいるように思える。壁面ひとつとってもどんな材質で出来ているのか実に興味深い。だが、今、自分が見ている映像はチャンから送られてくるものに過ぎない。そこに自分は居ないのだ。チャンが歩けば景色も変わる。少々名残惜しいような気分でチャンの進行方向に従う。

チャンは再び暗視スコープの映像に切り替えると、来た道に戻る形で今度は分岐点の反対側に向かった。

『ここからまた通路が続きます。左右に幾つか部屋があるんですがどれも中は空っぽです』

「何の部屋なんだろうな。先客は何と言っている？」

『手帳には「多分、図書館か資料室だろう」と書いてありました』

「本の無い図書館、か」

『その代わりに文字や記号が壁にびっしり彫られています』

「そりやまた随分と無駄なスペースの使い方だな」

『ひとつ見てみましょうか』

チャンは適当な部屋を選んで中に入った。

(これは狭いな)

トイレぐらいの間口に奥行きは2メートルほど。縦長の小部屋と
いった感じだ。

『ほら。壁にぎっしりと彫られているでしょう』

確かにチャンの言うように壁一面に呪文のような文字が隙間無く彫られている。ひとつひとつの文字はコガネムシぐらいの大きさで、その形はとりとめがなくまるで統制されていない。だが、トイレの落書きにしては熱心すぎる密度だ。恐らく何か意味があるのだろう。

『こういう小部屋が30以上あります。念のために映像で記録して』

『ジイサン』さんに送っておきました』

「少年。そのミスター・ジイサンというのは止めるよ。聞き苦しいから」

『え？』

「ジイサンだけでいい。ミスターは要らない」

『え？ 言ってる意味が分かりません』

「いや。ジイサンというのは日本語で……年寄りを指す敬称だ」

説明するのが面倒だったので適当に答えてしまった。日本語の微妙なニュアンスを外国人に伝えるのは手間がかかるのだ。

チャンは再び進路を奥にとる。

「少年。肝心の塔にはどこから入るんだ？」

『今向かっています。この先、さらに地下に潜る縦穴があるんです』

「どれだけ深いんだ。この地下基地は」

確かに洞窟や地下などで遺跡が発見された例は多い。だが、大昔の人間はそんなに穴倉を好んだのだろうか？

そんな疑問を持ちながらしばらくチャンの足取りに任せる。すると正面に像のようなものがふたつ目に入った。

「少年。それは石像か？」

正面には出入り口がある。その両脇に設置されているのは像のように見える。

「石、ではないです」

「この形……見覚えがあるな。何かに似ている。ちよつと寄つてくれ」

「はい」

そう言つてチャンは左側の像に接近した。台座に乗った1メートルほどの像は、丁度、チャンの身長ぐらいの高さになる。

「……阿修羅像。いや、こつちが元祖なのか？」

一目見て連想したのがそれだ。日本のそれはスラリとしたスタイルに3つの顔、6本の手を持つものに対してここにあるのは頭こそ3つあるがバランスは良くない。頭でつかちで3頭身ぐらいか。手も申し訳程度についているだけで突起のようにも見える。

「アシユール像って何ですか？」

寺の名前が思い出せなかったので手元の端末で検索をかける。あった。これだ。

「……興福寺という寺があつてな。そこの仏像だ」

「日本では有名なんですか？」

「まあな」

情報を眺めながら「修羅の起源は古代メソポタミア文明の」のくだりを発見した。なるほど、シュメール文明と関連があると思われるこの場所にこのような像があつても不思議ではない訳だ。

「リアルな造形ではないが……石でないとするれば材質は何だと思つた？」

「やはりこの地下施設全般に使用されている黒っぽい材質ですね」

「そもそもそれは何なんだ？ 先客は分析していないのか？」

「……断定はしていませんが、セラミックのようなものと。それも金属とグラフェンを組み合わせているとか」

グラフェンは最高の強度を誇る炭素原子素材だが五千年前にそれ

が実用化されていたとはとても信じられない。

「ではその阿修羅像の出来損ない……もとい原型みたいなのもバリアの現役ということか」

『ええ。おそらくは五千年前から変わらずこの門番をしていたのでしょうね』

なるほどチャンが言うようにふたつの像は入口を挟む形で立っている。ということはこの奥が塔に通じる重要な場所ということか……。徐々に興味が湧いてきた。というよりも正直、はじめは半信半疑だった。だが、次々と突き付けられる事実を前にしては考え方を改めざるを得ない。この先に何かがあるのか。今はそれを知りたいという衝動が優っている。

「それじゃ先に行ってくれ少年」

入口を入って直ぐに『らせん階段』があつた。手すりなどはついていない。まるでDNAのモデルのように足場だけがらせん状に連なる実にシンプルな階段だ。

『ここからは結構、時間がかかります』

「エレベーターは無いのか？」

『怪しい部分はあるんですが残念ながら起動しないんですよ』

「そうか。30年前の先客も自分の足でここを上り下りしたという訳だな」

五千年前に作られた階段を下りるとなると普通は強度に不安があるものだがチャンは平気なようだ。ということはそれだけ材質が安定しているのだろう。

長い階段を下りる間にチャンが塔について分かったことを話し出した。

『アンカーさんに地上で見てもらった部分は全体の四分の一ぐらいです。なので高さは300フィート（約90メートル）近くになります』

「計ってみたのか？」

『ええ。この端末のレーダーで測定しました。中は空洞なんですよ』

「空洞？ 空っぽなのか？」

意外だった。さも意味がありそうな佇まいの割には中味が空っぽとは…。

中は空洞と聞いてなぜかパーティで被るトンガリ帽子を連想した。下から見上げた感じでは上の方は尖っているようだったが。

「少年。形はどうなっているんだ？」

「強いて言えばソフトクリームみたいな形ですね。外壁がこの階段みたいならせん状になっているんです。内部は吹き抜けになっているんですが、壁にくつつく形で『パイプ』みたいな物がらせん状にっぺんまで続いているようです」

「まさか『飾り』というわけでもないだろう」

「僕はアンテナなのかと思いましたがね」

「先客の見解を聞こうか」

「残念ながらアシム氏の手帳にはそれらしき記述が無いんです。おそらく探索隊の人たちも戸惑ったんじゃないでしょうか」

「目的はバベルの塔を見つけることじゃなかったのか？ なぜこんな塔が建てられたのかを調べなかったとしたら探索隊の意味がないじゃないか」

「確かにそれは……でも彼らは十分すぎるぐらいの成果を得たんじゃないでしょうか」

「この技術か？」

「ええ。まだ分析は完了していませんが、さっきの図書館。もしもあそこに記されている情報が今の技術を凌駕するものだったとしたら……」

「つまり奴らはこの技術をパクったということか！」

可能性はゼロではない。いや、むしろそう考える方が妥当だ。30年前にここを訪れた連中はいずれもその後、成功している。カール・パウリは素粒子の研究でノーベル物理学賞を受賞した。ホフマン教授は脳科学の分野で第一人者になり、エメリツヒ・コーツはその技術を応用してトレース社を世界的な企業に成長させた。アル・

ハシリドにしたってイスラム経済連合のトップに登り詰めたぐらいの人物だ。何らかの恩恵を受けた可能性が高い。しかし、瀬戸源一郎だけは表舞台に出てこなかった…。

厭なことを思い出してしまった。昨夜読まされた『輪廻』の内容とイタチ男の顔がダブった。

（瀬戸源一郎はここで何を得たんだ？）

流石にこの話は今チャンに伝えるべきものではない。

チャンが最下層に降り立つまでの間、様々な憶測が脳裏をよぎっては消えていった。

『さあ。着きましたよ。ここが塔への入口です』

チャンは前方の入口を見ながらそう言った。

と、その前に左手にも入口が見える。

「左手にも部屋があるようだか？」

『ああ……ここは最後に見せようと思っていたんですが……』

チャンのテンションが下がる。

「どうせ塔の内部は空っぽなんだろう。だったら見ても仕方がない。それにいい加減、目が疲れてきた」

『そうですか。では仕方ないですね』

チャンはあまり気乗りがしないような様子だ。どうしたのだろう？

チャンは渋々といった足どりで左手の入口に向かった。そして室内に入ると先ほどの大部屋の時のように暗視スコープを切り替えて端末を操作した。すると今度は上から光が降り注いでくる。

「ここは上からか……」

目が慣れるのを待つて室内の様子に注視する。はじめに目に付いたのは水槽かバスタブか水を貯めておくような形の物体だった。

「あれはバスタブか？」

『いいえ』

と、チャンが首を振る。それに連動して映像も揺れたのでまた目が回りそうになる。

『ちよつと寄つてみますね』

チャンはバスタブのような物に近付くとある箇所に注目した。それは水晶のプレートだった。

「何だそれは？ 何か書いてあるのか？」

「ええ」

そう頷いてからチャンは水晶版に刻まれた記号を指差す。

『これをC、こつちをH、それからこれをOと置き換えたら……何になると思います』

「……何だかパズルみたいだな。で、答えは？」

『ブドウ糖です。これはブドウ糖の化学式なんです』

「な……それは……」

『偶然ではないですよ。他にもグルタミン酸とかロイシンとかアミノ酸の化学式がありましたから。それに中には見たこともない化学式がありました。検索してもヒットしないような謎の物質がゴロゴロと』

チャンの口ぶりは驚きを通り越して半ば呆れているような風でさえあった。

（間違いない。やはり五千年前にここで何かをやらかしていた連中はある程度の科学知識どころか今以上の科学力を持っていたのかも（しれない）

まるで夢でもみているようだ。これまでの常識が覆される瞬間というものは常に軽い目眩を伴う。絶対だと思い込んでいたロジックが揺らぐ時、人は混乱する。それは脳が葛藤しているのだと思う。

自分はオカルトの類は信じない部類だと思い込んでいた。だが、現に今その自覚は脆くも崩れ去ろうとしている…。

『問題は次の部屋です』

チャンがそう言いながら隣の部屋へ移動する。

「問題って何が？」

そう尋ねてもチャンは返答しなかった。どうもさつきからチャンの様子がおかしい。顔は見られないが声の調子や反応が妙に冷めて

いるのだ。

『ここです。もしかしたらここがこの施設の目的なのかもしれないませ
ん』

チャンが足を踏み入れた途端にこの部屋にも明かりが点いた。

「これは……寝室、という訳では無さそうだな」

部屋の中央にはベッドのような台座が3つ並んでいる。壁際には
正体不明の造形が並んでいる。

『手術室だと思われませう』

そう言われてみれば手術室に見えなくはない。台座上の発光パ
ネルは周りよりも強い光を放っているからだ。

「しかし、こんな地下で手術をするものか？ 何か他の……」

『もっと恐ろしいことですよ』

チャンに言葉を遮られた。その口調には明らかに怒りが含まれて
いる。彼は吐き捨てるように呟いた。

『脳幹結合……』

チャンが口にした言葉。その意図が掴めずに困惑した。

「それはどういう意味だ？」

『他人同士の脳幹を結合することです。さっき見たアシユラ像のよ
うに』

「なっ！ なんだと？」

いきなりチャンが突拍子も無いことを口にしたので啞然とした。

「正気か？ ……少年」

思わずそんな言葉が口をついた。

第37話 忌まわしき痕跡

(脳幹を……結合するかと?)

確かに『シヤム双生児(結合双生児)』という例はある。身体の一部が繋がって生まれてきた双子のことだ。が、それは受精卵の分裂が遅れることが原因であり後天的なものではない。そもそも身体の一部を他人に移植することはあっても身体を共有するような施術などは有り得ない。ましてや中枢神経の塊である脳幹に手を加えるなど正気の沙汰ではない。

「少年。それは違うぞ。脳を繋ぐなんて危険な事をするはずがないだろう。幾ら阿修羅像を見たからといって……」

「いえ。間違いありません。その痕跡も幾つか確認しました」

「……バカな。そんなことをして何のメリットがある?」

「分かりません。もしかしたら複数の人間の脳を結合することで『普通ではない能力』、例えば神がかり的な知力を得ようとしたのかもしれません」

馬鹿馬鹿しい。だがもしそんな事が本当に行われていたのだとしたら狂っているとか言いようが無い。

「想像を絶する世界だな。どう考えても成功するはずがない」

そうは言ってみたものの同時にホフマン教授のことを思い出した。脳の機能、とりわけ脳幹の機能を細部にわたって解明したホフマン教授は、マウスの脳幹にドーパミンを注入してそれがどの部位にどのように作用するのかという実験を繰り返し、画期的な成果をあげたことになっている。だが、それは表向きのものかもしれない。もしも教授がここの情報を密かに手に入れていたとしたら? マウスの脳と人間のそれではまるで複雑さが違うはず、という疑問も解決できる。

(教授の功績には昔から人体実験の疑惑がついてまわる……確かに辻褄は合うな)

それにしても脳と脳を結合するなんて試みは常軌を逸している。

『僕も始めは信じられませんでした。アシム氏の手帳を見た時にまさかと思いましたよ。五千年前にこの人間は脳のことを『頭の芯』と表現していたようです。それに『根』という語がくっついて『脳幹』の意味になるのではないかと』

「頭の芯の根。なるほど分らないではないな」

『それに結合させる、繋げるという意の語を加えて現代語に訳すと『脳幹結合』になるわけです。手帳にもはっきりそう書かれていました』

「……先客もこの事は把握していたという訳か」

『はい。手帳には結構なページが割かれていました。その情報通り、この部屋の奥にはさっきの図書館のような小部屋があって脳に関する情報がびっしり刻まれていました』

「だとしても本当にそんな馬鹿げた手術をやっていた証拠にはならないだろう?」

『いいえ。あつちの部屋に生々しい痕跡がありましたよ。何なら見ますか? おすすめはしないけれど』

「痕跡……まさか! 骨か?」

『そうです。酷いものですよ。不自然な穴が開いた頭蓋骨が幾つも残っていました』

やれやれ。何という事だ。気分が悪いなんてもんじゃない。

「じゃあ少年。こつは考えられないか。ここはその時代に最先端の脳外科だった。で、穴が開いた頭蓋骨は死んだ患者の物だった、と『不自然に接着している頭蓋骨が、ですか?』

その言葉とほぼ同時に左目の画面に画像が挿入された。

(……これは)

絶句するしかなかった。それはチャンが言うところの『接着している頭蓋骨』だった。その物体は地中から掘り出したせいなのか茶色すぎて一見すると土器のようにも見える。しかし、その時代に悪魔グッズを生産・販売しているはずもないので恐らく本物なのだろ

う。よく見ると、ちょうど延髄から後頭部にあたる部分が垂直に削り取られた頭蓋骨がふたつ、それが背中合わせにくっついている。それはまさに先ほどの阿修羅像を連想させる。

「こんなのがゴロゴロしているのか？」

「ええ。探検隊が30年前に発掘してそのままにしておいたと思われます」

日本でも縄文時代の人骨が出土してその頭蓋骨に穴が開けられているのが発見されたことがある。それは手術の跡ではないかとする説もあつたが、ここのはそんな生易しいものではないようだ。

「どうですか。これが動かぬ証拠です。でも、これで分かりました」

「……分かつたって何がだ？」

「実は、僕が脳幹結合という言葉聞いたのはこれが初めてではないんです」

(なんだって!?)

チャンの告白に驚きつつ説明を求める。

「それをどこで聞いた？」

「……学校です。ご承知の通り僕らは幼少の頃から特殊な環境に置かれていました」

チャンやサアラ達が育つた学校。一応、全寮制の学校ということになってはいるが実体はC国の超人養成機関に過ぎない。それは以前チャンの口から聞いた…。

「僕らの学校は、表向きはスポーツ・エリートを育成する為の学校ということになっていました。実績もありましたし。でもスポーツで芽が出なかった生徒は皆、兵士になるものだと思われていました。なので、事故やケガで亡くなる生徒も少なくありませんでした。実弾を使った戦闘訓練を毎日のようにやっていましたから。ところが不思議なことに学校内ではお葬式をやらないんです。追悼式みたいなことも一切ありませんでした。仲間が死んだのにはです。それをみんな不審に思っていて、ある噂がたったんです。「葬式をやらなないのは死体が見せられないからだ」と」

段々と話がみえてきた。しかしそれは明らかに後ろ向きな、いわゆる『悪い予感』というやつだ。

「だが……親御さんに遺体を引き渡すだろうか？」

「はい。でも遺骨だけです」

「それだと文句が出るんじゃないか。子供を預けている立場としては」

『どうでしょう。あまりそういう話は聞かなかったですけど……』

チャンの台詞にはどことなく投げやりな気持ちが含まれているような気がした。

「それも寂しいもんだな。幾ら離れて生活しているとはいえ家族には変わりないだろうに」

『……でも僕らの場合は大方そんなものですよ。もともと年に一回会うか会わないかの関係ですから。僕らにとっての家族は仲間だけなんです』

「年に一回？ それ以外はずっと寮生活か？」

『ええ。旧正月の時だけです。帰省するのは。でも半分ぐらいの生徒は家に帰りたいがらないんです』

「なぜ？」

『居場所が無いんです。スポーツで成功した人間はいいですよ。歓迎されますから。でもそんなのは一握りです。それ以外の人間は両親にも歓迎されず、親戚にも奇異な目で見られ、寂しい思いをして学校に戻ってきます』

……酷い話だ。自分は人の親になったことは無いしなる可能性もゼロなのだが全く理解し難い。年端もいかぬ子を寮に預けっぱなしにしておいてよく平気なものだ。

「なるほど。それで？」

『話がそれました。で、その噂なんです。僕らの学校の敷地内には必要以上に大きな病院があったんですね。しかもその病院のほとんどは立ち入り禁止で、何の為にそこまで立派な病院施設を作っているんだらうと皆、疑問に思っていました。多分、それがあったか

ら消えた死体イコール『人体実験』という噂になったんだと思います」

「人体実験、ね。なるほど……」

ある意味、チャン達の存在そのものが大掛かりな人体実験といってもいい。DNAをいじくって超人的な能力を引き出すなどという試みを国家ぐるみでやること自体が異常だ。

「それで一度だけ病院に侵入したことがあるんです。どうしても確かめたいことがあって……」

「どうしてまたそんなことを？」

「訓練中にエンという子が大ケガをしたんです。彼とは特に仲が良かったので心配していたんですが、命に関わるほどのものでは無かったはずなんです。なのにエンが死んだと聞かされて居てもたっても居られず死体を確かめてみようと思っただけです」

「で、遺体とは対面できたのか？」

「いいえ。院内は広すぎるし訳の分からない装置やら複雑な設備やらで結局迷っただけでした。それでその時、病院内の人が喋っているのを聞いてしまったんです。「今回の脳幹結合は成功しそうだなっつて……」」

「何かの聞き間違いってことはないのか？」

「いいえ。間違いありません。僕も（え？）って驚きましたから」

「脳幹」と「結合」という単語が合体するだけで恐ろしい意味になる。確かに普通では考えられない組み合わせだ。

「あの時はどういう意味なのかまるで分かりませんでした。今ようやくその意味が分かりました。やはりあの病院では人体実験が行われていたんです！そしてあそこでやっていたことは、ことまったく同じ。つまり、あの病院。いや、学校も含めてあそこはバベルと何らかの関係があると思われれます」

サアラがバベルと繋がっていたかもしれないという件はまだチャンには話していない。だが彼はここの『忌まわしき痕跡』を目の当たりにして自分達の学校とバベルに関係があることに気付いたようだ。

『これから学校に行ってみようと思います』

「何？ 早まるな」

『いえ。改めて気付いたんです。自分たちのルーツをこの目で確かめるべきだって』

(ルーツ……厭な言葉だ)

一瞬、イタチ男の顔が脳裏を過ぎった。

「待てよ、少年。自らのルーツに興味を持つのは結構だが今、学校に戻ることはリスクが高い。それにまだ君等の学校がバベルと繋がっていたかどうかは分からないじゃないか」

『だから確かめに行くんです』

「落ち着け。もし本当にバベルが君等の学校を支配していたのならなぜ航空機を誘拐したんだ？ 説明がつかないだろう」

バベルが演出した『狂言誘拐』。それはまだ自分でも解決出来ない問題だ。バベルはなぜ自らが支配する学校の生徒を拉致する必要があるのか？ バベルがその気になればチャン達をいかにほどにも利用することは簡単に出来たはずだ。それなのにわざわざ大掛かりなマジックを披露したその意図が分からない…。

とにかく、バベルの息がかかったところにチャンを行かせるのは危険だ。必ずしもサアラ達の時のように歓迎されるとは限らない。むしろチャンがバベルの秘密を嗅ぎまわっていることがばれてしまつたら、それこそ命に関わる。

「いいか、少年。単独行動は慎め。俺が合流するまで待つてろ。いいいな？」

『……アンカーさんがついてきてくれるのなら心強いです。でも、できれば今すぐにでもC国に行きたいです』

「相手は得体の知れない巨大組織だぞ。下手に動いて俺達がやっていることを察知されたらそれこそ殺し屋が飛んでくるかもしれない」

それにロッキー山脈で遭遇した特殊部隊のコウ中将みたいな連中もゴロゴロしているかもしれない。サアラがコウ中将に連れ去られたことはチャンには伏せておくが、少なくとも今は十分に注意を呼

びかけなくてはなるまい。

「焦るなよ。なるようになるさ」

『正直、もどかしいです……』

その時、我々の会話にジイサンが割り込んできた。

『チャン！ 気をつけな！ 何者かがそっちに向かっておるぞい』

「なんだジイサン。寝てたんじゃないのか」

『お！ その声はアンカーか。なんだ。お前さんもおったんか』

「叩き起こされたんだ。で、現場を案内してもらっているところだ」

『そうかそうか。いやいや、それどころじゃないぞい！ いつの間

にか外に車が停まっておるんじゃない！』

そこでチャンがジイサンに尋ねる。

『敵……ですか？ ひよつとして入国した時に僕らを拘束しようとしていた連中でしょうか？』

『それは分かんない。だが、こんな場所に目的も無しには来んじ

やろつて』

「おいジイサン。監視をサボっていやがったな？」

『失礼な！ チャンの送ってきたデータを徹夜で分析しておったわ

い。それで気がつかんかったんじゃない』

『いずれにせよ注意が必要だな。少年。ところで相棒はどうした？

確かハマドとか言ったな』

『あ、ハマドでしたら塔の方でデータ収集しています。もうすぐ終

わると思うんですが』

『すぐに呼び寄せろ。で、隠れる場所を探せ』

『え、で、でも、もし敵がセンサーを使ってきたらどうしましょう？』

『ぶん殴れ』

『そ、そんな……』

『その隙に逃げるしかなかるつ』

『……分かりました』

もし相手が敵だった場合、チャンに戦えというのは酷な話だ。は

は

は

つきりいつてチャンは戦闘には向いていない。どんなに厳しい戦闘訓練を受けたとしても根本的に人を殺めることが出来ない人間はごまんという。なぜなら良心というやつには頑固な根っこが生えていて、それをごっさり抜いてしまうには相当の覚悟ときっかけが必要なのだ。

チャンは通信でハマドに合流を呼びかけた。そして彼の到着を待つ。

それから五分ほどして現れたハマドは息を弾ませながら尋ねた。

『本当に敵なのかい？』

チャンは自身無さそうに答える。

『分からない。でも普通の人間はこんな所に来ないと思う』

『弱ったね。とにかく隠れた方がいいんじゃない？』

そう言うハマドはチャンと年齢がさほど変わらない普通の少年だ。

カフィーヤ（男性用スカーフ）からのぞくその顔つきもまだあどけない。

チャンがライトを消すようハマドに指示する。

『と、とにかくハマドもライトを消して』

そして画面が暗転、暗視カメラの映像に切り替わった。

『おい少年。暗視カメラは止める』

『え？ でもそれじゃ何も見えないんじゃない？……』

『相手に明かりを向けられたら目をやられるぞ。暗がり待ち伏せする時は肉眼が基本だ。暗闇に目を慣らせ』

『あ、なるほど。すみません』

そう言うチャンが慌ててカメラを切り替える。その後、映像の視点が上にずれた。おそらくチャンがマルチ・スコープを額の位置にずらしたのだろう。チャンからの映像に頼っているこちら側としては不自然なアングルになってしまう。

『おいジイサン。相手は何人だ？』

『今、映像を遡っておるわい。フムフム……2人じゃな。30分ほど前に車を降りたようじゃな。その後、真っ直ぐその穴倉に向か

つておるぞ」

「……この存在を知っているということか」

「軍の人間ではなさそうじゃの。武装はしておるがゲリラ兵っぽいな」

「まさか定期的にここを見回っているんじゃないだろうな」

それを聞いてチャンが否定する。

「そ、それは無いと思います。僕らがこの入口を見つけた時は草がボウボウで人が足を踏み入れた形跡はありませんでしたから」

「だとしたら……なぜこの場所を把握しているんだ？ 尚更怪しいな」

バベルの差し金。それが妥当な線か。だが、たった2人しか寄越してこないところをみるとそれほど危機感を持っているようには思えない。

(この秘密を死守するつもりは無いのか？)

そんな風に思考を巡らせているとハマドが反応する。

「だ、誰か階段を下りて来るよ！」

「まずいな。仕方が無い。とりあえず階段の方へ行け」

そこでチャン達は足音をたてないように階段のある部屋へ移動することにした。

彼等はようやく暗闇にも目が慣れてきたようだが、カメラを通してしか現地を見られないこちらとしては相変わらず真っ暗な映像で我慢しなければならない。

ハマドが囁く。

「やっぱり下りてくるみたいだよ。このままじゃ……」

「シッ！ 何か喋ってる」

と、チャンがハマドを制して集音レベルを上げる。

「おいおい。いったいどこまで続いているんだ。この階段は？」

「なあ。こんだけ下ってるってことは上りは相当キツいことだよな？ 割に合わなくねえか？」

「さぼりてえのはヤマヤマだけだよ。これ持たされてっからそう

もいかなえし」

「まったくだ。にしてもホント気味が悪いな。だいたいこんな地下になんでこんなもんがあるんだろ。作った奴は完全にいかれてるな」
「いや。たぶん中東戦争の時に作ったんじゃないか。つまり秘密基地ってわけさ」

「それだ！ おまえ頭いいな」

会話の内容から彼等がこの長いらせん階段に辟易していることが直ぐ分かった。それと同時に彼等がこの場所について勘違いをしていることも。

（どうやら相手は2人組のようだな。しかも油断してる。よし。これなら何とかなるな）

そう思っただけで指示を出す。

「少年。奴等が奥に行くタイミングを見計らって入れ違いで階段を上れ」

「はい。わかりました」

そう言っただけでつばを飲む音がはっきりと聞こえた。

「……集音マイクの効きすぎだ。余計なものを聞かせるな」

「あ、すみません」

チャンとハマドにはすぐに階段を上れるような位置取りを指示した。敵に近付きすぎるのは危険なようにも思えるが、この場所自体は階段しか無いガラシとした吹き抜けの部屋なのでここを念入りに調べることはしないはずだ。仮に二手に分かれたとしても恐らくは左手の手術室と前方の塔への通路に向かうと予想される。いわゆる『灯台下暗し』というやつだ。

正体不明の2人組が放つ明かりが円を描きながら徐々に下降していく。次第に足音が大きくなり、目視は出来ないがその距離は確実に縮まっている。

「やれやれ。やっと着いたぜ」

「どれだけ深いんだよ。まったく呆れたもんだ」

「おい。さっさと回って帰……ん？」

「どうした？ トカゲでも踏んづけたか？」

「……畜生」

突如、銃の安全装置を外す音がした。「畜生」と叫いた男が銃撃の準備をしたようだ。

「おい。どうしたってんだ？」

「誰か居る！」

（気付かれた？ なぜだ？）

奴等を甘く見ていた。油断しているようにみえて何か特殊なセンサーを持ち歩いていたのかもしれない。

「クソツ、出てきやがれ！」

火花と銃声が3秒間続く。いったんそれが止むと同時に音が反響して上に抜けていく。厭な余韻だ。最も、昔からむやみに発砲する輩は『雑魚』と相場は決まっている。これなら強行突破が可能かもしれない…。

「少年。大したことは無い。相手はビビっている。その辺の石を一発食らわせれば突破できるはずだ」

そのコメントに対して声を漏らしそうになったチャンが息を飲む。

「お前さんがハマドを守るしかないだろう。何。あんなのはクロックアップの敵じゃない」

暗闇を映す画像が小刻みに振動する。

（震えているのか？ この期に及んで……）

その表情は見られなくても今チャンがどんな顔をしているのか想像出来た。が、突然、耳をつんざく叫び声。

『うあああ！』

（何だ？）と、思った瞬間、前方に強く引っ張られるような感覚。

（クロックアップ！？）

身体が前に投げ出されるような錯覚。

そして視界に飛び込んできたのは目を見開いた男の顔！

音声は叫びに掻き消されている。視界は物凄い形相のアップに塞がれている。

何が何だか分からないうちに視界がぐるりと回転した。

再び加速するような感覚、と同時に別な男の顔面に何かが突っ込んでいくサマがはつきりと見えた。すぐにそれがチャンの手であることが分かった。

(チャンが暴走している……)

チャンの襲撃を受けた男の顔が画面下に崩れ落ちていく。すかさず加えられる二発目、三発目の打撃……。チャンの手には石のような物が握られている。

いつのまにか叫びは荒い息に変わり、それは泣いているようにも聞こえた。同時に相手の顔面を打つ音が響く。視界に付着したのは返り血……。顔を背けたくてもそれもままならない。

「少年。もういい……」

頃合を見計らってその声を掛けてみたものの反応は無い。

こちらに送られてくる映像は返り血のせいで視界が殆ど塞がれている。聞こえてくるのはチャンのすすり泣きだけだ。それはまるで絶望的に深い井戸の底で助けを求める子供の泣き声のように聞こえた……。

第38話 歡迎光臨

長い沈黙を経て、チャンが口を開いた。

『……何で……何でこんなこと……』

その自問は嗚咽のように聞こえた。おそらく初めて人を殺めたこととかなりのショックを受けているのだろう。やはりこの少年はことう修羅場には向いていない。だが、ここは敢えて突き放す。

「確かに先に攻撃してきたのはあっちだが……殺す必要は無かったな」

消え入りそうな声でチャンは答える。

『……はい』

「こつというのは初めてか？」

『……ええ』

「そうか。今更とやかく言っても仕方ない。だが、結果に対する責任は取れよ」

『……責任？』

「そうだ。直にその男の仲間がやってくるだろう。で、死体を発見したらどうなると思う？ 恐らく必死でお前さんたちを追ってくる」

その指摘にチャンが息を飲むのが分かった。

「自分でまいた種だ。後は自力でなんとかしろ」

『そんな……今はまだ……とてもそんな』

「甘ったれるな！ 自分を責めるのは自由だ。クヨクヨしたって構わん。だが、そんなのは後でやれ。今はそこからどうやって脱出するかを考える。それとも大人しく自首するか？」

『そ、それは……』

「捕まれば銃殺。良くて死刑だな。で、その少年も巻き添えにする気か？」

そこでチャンが首を振る。それにつられて映像が左右に揺さぶられる。

「だったらグズグズするな。立てるか？」

『なんとか……』

チャンがそう言った後に映像が揺れて視点の位置が高くなった。そして顔を潰された男を見下ろすような形で画像が固定される。

なぜチャンが急にこんな暴力的な行動に出たのかは分からない。しかし、今は彼等を国外へ脱出させることが先決だ。

マイクを通してもう一人の少年に呼びかける。

「ハマドとかいったな。聞こえるか？」

『え？ あ、聞こえます』

「すまないが国境まで面倒をみてやってくれないか」

『は、はい。分かりました』

「その連中が乗ってきた車を使え。それで北へ向かうんだ。迎えを手配しておくから」

引き受けてくれるかどうかは分からないが、以前、その辺りで仕事をした時に組んだ男が居るのだ。それなりに腕は立つ奴なので金さえ払えばチャン達を無事に国外へ連れ出してくれるだろう。

少年達にはくれぐれも早まった真似をしないように言い聞かせてから通信を切った。

(やれやれ……)

結局、あの塔は何だったのか？

あの遺跡が本当に五千年前のものなのかどうか……。その信憑性とはともかくとして当初の目的である『バベル』との繋がりは判然としない。確かに30年前にあの場所を訪れた人間がそこに印されていた情報を真似て成功を収めた可能性は高い。だが、そのメンバーが必ずしもバベルの中心人物とはいえない。それはもっと調べてみると断定は出来ない。

「終わったの？」

その声にはっとして顔をあげる。

「何だ。起きていたのか」

ナミが首を竦める。

「起きてたも何も……目も覚めるわよ。大きな声を出してたからスポーツ中継でも見ているのかと思ったわ」

「すまん。ちよつと激を飛ばしていたんでな。通信の相手に」

「相手はあの男の子？」

「ああ。彼のガイドでちよつとした冒険気分を味わったところだ。その後遺症で目眩がするがね」

ナミが不思議そうな顔をするのでチャンとのやりとりについて簡単に説明してやった。

はじめは『バベルの塔』と聞いて半信半疑だった彼女だが、話を聞くうちにその表情は強張り、とうとう最後には黙り込んでしまった。

「信じられるか？ 五千年前の遺跡だぞ？」

「……あなたがそう言うのなら信じるわ。現実にその痕跡があったわけでしょ。だったら信じるしかないじゃない」

「まあ、まともな考古学者は相手にしないだろうがな」

「ナンセンスね。よくいるでしょ。『科学的に説明できないから』って信じようとするしなない学者が。幾ら科学が発達したからって今の科学は万能じゃないわ」

「そうだな。そういう連中にはなぜ恐竜があんなにでなくなったのかを是非とも『科学的』に説明して貰いたいものだ」

妙なところで意見が合う。その思いは彼女も同じようで2人で笑いあった。

「それであなたはどうするの？ C国に行くんでしょ？」

「ああ。放っておくと危険だからな」

「そう。じゃあ私もついて行くことにするわ」

「なに？ 腕はどうするんだ。置いていくつもりか？」

「送り先を変えて貰うから心配要らないわよ。ホテルはどこにする？」

「本気か？ そんなものを送ったらホテルマンに通報されるぞ。当局に」

「大丈夫よ。イザという時はデパートに行つてマネキン人形の腕でも借りるわ」

「やれやれ」

観光に行くわけではないのだが……仕方が無い。彼女の好きにさせよう。ごねられるのも面倒だ……。

* * *

飛行機の出発を待つ間、ナミはやけに上機嫌だった。

彼女は鼻歌など口ずさみながら待合室を埋めるC国系の旅客者達を物珍しそうに眺めている。こっちはこれからナイーブな少年のお守かと思うと気が滅入っているというのに。

「やけにご機嫌だな」

「そう見える？」

「十分、浮かれているように見える。それにさっきから何の歌だ？」

「『Fly me to the moon』よ。特集をやつたの。今年で月面基地開設30周年なんだって」

「ほお。百年前の曲か」

「あら。知つてるの？」

「聞いたことはある。だが、曲のタイトルを聞くまでは分からなかったな。別に君の歌唱力を責めるわけじゃないんだが」

「まあ。酷いわね」

そう言つて彼女が睨む真似をする。

せつかくなので検索してその曲を聴いてみることにした。

(こんなに沢山の人間が歌っているのか)

カバーしている歌手だけでも相当な数だ。それだけ名曲ということなのだろう。そこで『HIKARU・U』という歌手を選んでしばらく聞き入った。他の歌手も幾つか試していると、ふいに待合室がざわついた。

「……速報みたいね」

と、隣でナミが呟く。

人々の視線が中央の大型モニターに注がれる。

ニュースキヤスターが淡々と原稿を読み上げる。

「地震の影響でインド洋沿岸地域では深刻な津波被害が出ています。インド洋では75年前の2004年12月にも大規模な津波があり……」

スマトラ沖地震というのがあったことは知っている。確か数百年に一度の大地震でインド洋沿岸ではかなりの犠牲者が出たということも。それが100年も経たないうちに同じような場所でもまた起こったとはとても信じられない。そこで思い出したのがイタチ男との会話だ。イタチ男はヘーラーが核爆発を使って海底火山を噴火させる計画を持っていると言った。

（まさか、な。人為的に地震を起こせるはずが無い）

それにイタチ男が指摘したのはカナダのバンクーバー沖だった。全然、場所も違う。

「どうかしたの？」

「……いや。何でもない」

イタチ男と話した内容についてナミには詳しく言っていない。ウラをとる為に確かめたところで彼女がヘーラーの全貌を知っている可能性は低いと考えたからだ。

再びキャスターの声に耳を傾ける。

「後々の調査で多少の修正はあるかもしれませんが、今回のマグニチュード9.5はチリ大地震を上回る可能性があり、観測史上、最大の規模になるのではないかと専門家は指摘しています」

それを聞いてナミが表情を曇らせる。

「どこまで津波が広がるのかしら。これでまた住むところを失う人が何十万人も出てしまうわね」

「そうだな……」

恐らく津波の被害を受けた地域の一部はこのまま水没してしまうに違いない。ということは世界地図にまた青く塗り潰されてしまう箇所が増えることを意味する。

「震源地に近いスリランカ沿岸では巨大な水柱が多数目撃されています。また驚くべきことに水柱の高さは1・5マイル（約2・4キロメートル）に達していたとの情報もあり、この津波が隕石の落下によるものではないかとの見方も浮上しています。しかし公式発表を控えているNASAはその可能性について否定的な見解を示しており……」

「水柱だと？ そんなにデカイ水柱なら衛星で把握できるだろうに。何の為の『クローリー』だ」

「緊急メンテナンス中なんだから仕方がないんでしょ。知ってるくせに」

「そりや流石に14歳の女の子に乗っ取られたとは公表出来ないだろう。『重大なシステムエラー』とはよく言ったものだな」

今頃サアラ達はどこで何をしているのだろうか？

（バベルに軟禁されているのか？ それとも……）

せつかくC国まで行くのであればインドにも寄りたいたいと思っていた。クライアントに断りを入れる為に。もはやこの状況ではサアラを追う意味はないように思われる。もともとあの依頼内容には無理があったのだ…。

「さ、行きましょ。搭乗手続きを済ませるわよ」

ナミに促されて待合室を出る。

空港内の長い通路を歩いていると正面から来た中年の男とぶつかりそうになった。

何のことは無い。ただの『スリ』だ。

男とすれ違ってからナミが立ち止まる。

「今のはスリね。大丈夫だった？」

「ああ。特に問題はない」

「でも、クロックアップから財布をすり取ろうなんて大胆ね」
「考えようによっちゃ『スリ』の指さばきだつてクロックアップの
ようなもんだ」

「それもそうね。確かに100マイルの速球を棒切れで打ち返す人
間もいるぐらいだし」

「ああ。それにスポーツじゃなくても『神業』を持った人間なら幾
らでもいる。そう考えればこの能力は別に特別なもんじゃないのか
もしれんな」

「で、お返しにあなたは何を盗つたの？」

「いや。何も」

「うそ。相手の懐に手を差し込んでなかった？」

「ああ。あれか。財布を取り返したついでに鼻をかんだ紙を押し込
んでやつただけさ。ゴミ箱が見当たらなかつたんでな」

それを聞いてナミはクスクスと笑い出した。

「楽しい旅になりそうだわ」

「だといいがね」

やれやれ。この調子では先が思いやられる…。

* * *

超速ジェットは眼下に壮大な雲の大地を臨みながら航路を進んだ。
呆れるくらい無防備に太陽光を浴びる雲はくつきりと白い。混じ
りけが無いその白はまるで自らが発光しているようで、こうして眺
めているとアクリルで出来ているのではないかとさえ思えてくる。
空は空で日差しを独占してその青さをどこまでも誇示し続けている。
この青と白のコントラストは何億年も前から飽きることなく地表を
見下ろしてきたのだらう。ずっとそこに存在し続ける。そしてただ
見守るのみ…。もし神というものが存在するというのなら、案外、
それは時間に無頓着な傍観者なのかもしれない。
(あと5時間ぐらいか。随分と早くなつたものだ)

ここ数十年で航空機のスピード化は一段と進んだ。やはり宇宙用の水素エンジンが民間に転用されるようになったことが大きい。何しろこの飛行機だって仕様をちよつと変更すれば軌道エレベーターの基地まで到達することができるのだ。しかし、昔から「交通手段の発展は世界を狭くする」という表現が使われるが、移動時間が短縮されたからといって物理的に世界が小さくなるわけではない。それは一部の人間にとつてだけの事情であつて、むしろ一般の人間にとつて世界はより広がつていようような気がする。それは情報がグローバルに包括されても遠くの現実には実感がわかないのと同じだ。どれだけ文明が発達しようとも人間のテリトリーは有限で所詮、身近に無い世界は他人事ではないのだ。

ふと気付くと肩にもたれかかつていたナミが眠っているのに気付いた。

眠っている彼女の横顔を眺める。はりのある肌。柔らかそうな頬から顎にかけてのラインはすつきりとしている。だがその若さもいずれば失われてしまう。何億年も変わらないものもあれば人の一生のなんと儂いことか。

「ん……」

どうやら寝言のようだ。こうやって眠っている分にはごく普通の女の子だ。改めて見ると随分とまつげが長い。その長いまつげはなぜか雨に濡れた針葉を連想させた。

* * *

空港を出てタクシーを拾った。

C国第2の都市S。ここを訪れるのは十数年振りだ。しかし、たったそれだけの間に空港の周りはさらに整備されたように見える。真新しい建物が立ち並び、まるで『竹の子』が成長を競い合っているみたいだ。それらのデザインはここ数年の流行なのか、やたらと尖っていたり、ビル全体が身をよじっていたり、積み木を適当に重

ねたような形をしていたり、中には体操選手が背を反らしたような形の物まである。片側二車線の道路には自転車専用の道と歩道も併設されているのだが、平均しても30階以上はあるのかと思われる高層ビル群に両脇を固められては妙に窮屈そうだ。とはいえメイン・ストリートを一歩外れて裏側に回ってみると古くからの市街地がまだ残っている。

はじめは近道なのだろうと思っていた。だが車外の光景を見る限りちよつと様子がおかしい。

(妙だな……)

どうやら見当違いの道を走っているようだ。多分、運転手がわざと遠回りをして料金を稼ごうとしているのだろう。

そう思って釘を刺した。

「随分と遠回りだな。言っておくが余計な金は支払わないぞ」

その一言で運転手がぎょつとしたように見えた。その途端、車が急加速して、さらに寂れた通りを直進し、やがて人気の無い空き地へ突っ込んだ。

(どういふつもりだ。仲間でも呼ぶのか?)

そう思った矢先にナミが呟く。

「どうやら私たちに用があるのは後続の連中のようね」

振り返ると確かに黒い車が3台、ワゴンポ置いて空き地になだれ込んでくる。

こちらのタクシーはといえば急停止の後、運転手が転がるように車外に逃げ出した。

「やれやれ。入国早々に目をつけられてしまったようだな。さて、日頃の行いが悪いのはどつちだ?」

「よく言うわ。あなたでしょ。前にこの国で派手にやらかしたんじゃないの?」

「さあ。覚えていないな。まったく身に覚えが無いとは言わないが」
仕方なく我々も車外に出る。程なくして黒い車から降りてきたこれまた黒っぽい服装を身にまとった男達に取り囲まれる。

ナミと背中合わせで会話する。

「悪いがそつち側の3人は任せていいか？ 残りの7人はこつちで引き受ける」

「あら。5人5人でもいいわよ」

「無理するな。まだ腕が届いていないだろう？」

「問題ないわ。腕を使わなければいいだけの話よ」

彼女がそう言うやいなや背中中の圧力がふつと消えた。

振り返ると既に彼女は体勢を低く半回転しながら『くの字』型に身体を曲げ、左足を高く跳ね上げるところだった。そして回し蹴りの要領で左の踵が手前にいた男のアゴを払う。だが彼女の回転はそれで終わらない。勢いを維持したまま軸足を変えて今度は右足で次の標的の側頭部を打つ。さらにもう一回転。3番目の男はその回転運動に頭を巻き込まれて敢え無く沈没した。

(ほお。器用に回るもんだな……と、感心している場合ではないな) 呆気にとられていた男達が銃を彼女に向ける。

そこでこちらもクロックアップする。

1……三歩前進、正面の敵に左肘を当て、右の手刀で2人目の首を打つ。ここで反転。

2……3人目の裏に回って掌底を後頭部に。さらに切れ込んで4人目にカウンターの肘。

3……五歩分の間を詰めて5人目のみぞおちに左の膝を食い込ませる。

(ん？ 被ったか？)

5人目への膝蹴りと彼女のハイキックが被った。

2人分の攻撃を一時に喰らった不幸な男は悲壮な表情を浮かべたまま膝から崩れ落ちた。

「やれやれ。運の無い男だな」

「6対4よ。これでひとつ貸しが出来たわね」

「おいおい。最後のこれもカウンントするのか？」

「当然でしょ」

一通り片がついたところで一番偉そうな男を選んで尋問することにした。彼等の場合はバッジを見ればある程度の階級が判別できるので楽なものだ。

スイカをぶら下げる要領で男の髪の毛を掴んで頭を持ち上げる。そして耳元で囁いた。

「先に言っておくが正直に吐かないと大変なことになる。ああ見えて彼女、かなりのサディストなんだ。それで十人は殺している」

それが聞こえたのかナミはこちらを睨んでいる。

それには気づかないフリをして男に答えを求める。

「誰の命令だ？」

男はすっかり観念したのか大してためらいもせず答えようとする。

「コウ……コウ大校、です」

（コウ大校だと？ 雪山で会ったあいつか？ しかし変だな……）

クロウリーの中継基地で会った男は『コウ中将』と名乗っていた。大校は准将のことだから中将、少将の下の階級だ。

（クロウリー乗っ取りの件で昇進するなら分かるが……別人か？）

しかし、C国に到着して早々にこのような『歓迎』を受けるということは、バベルの差し金と考える方が順当だ。つまり、デンバーでヘリから降り出しておきながら実は自分のことをマークしていたということなのだろう。

「なるほど。君の言った通りだな」

それを聞いて彼女がきよとんとする。

「何が？」

「実に楽しい旅になりそうだ」

呆れるやら感心するやら……今は苦笑いを浮かべるしかなかった。

第39話 合流

男と女とは永遠に分かり合えないのかもしれない。

次々と試着する彼女を見てつくづくそう思った。例えば『服』ひとつとつても男と女は根本的に異なる。女はやたらとそれを着たり、男はそれを脱がせたがる。どうしても違うのだろう。同じ人間だというのに…。

ナミの場合はまだ同情する余地がある。彼女の生い立ちを鑑みるに、女の子らしい生活とは無縁だったと思われるからだ。当の本人も「その反動」だと言いつつ、出資する側にとっては実に迷惑な話だ。女の浪費という行為は、それを楽しむ当人と店員だけは幸福にするが一部の男を確実に不幸にするものなのだ。

結局、チャンを待つまでの一日半、厭というほど彼女の買い物に付き合わされてしまった。何しろ朝の開店時間から夜中まで目に付いた店を片端から回るものだからすっかり疲れ果ててしまった。買い物好きの女に辟易している世の男性は今こそ団結して声高に主張すべきだ。『せめて店を開ける時間を短縮しろ！』と。

もう五年分ぐらいの服を買い漁ったというのにホテルのラウンジでチャンの到着を待つ段になっても彼女の頭からは買い物することが離れないらしい。

「あ！ 『スリムK』 買い忘れてたわ」

「スリム・ケー？ ああ。塗っただけで痩せるクリームか。だけど君には必要ないんじゃないか？」

「そうでもないのよ。ここんとこ運動不足だったから。また買わなくちゃ」

スリムKの『K』は『熊』の頭文字だということはあまり知られていない。その名は日本の某大学教授が熊の糞から発見した『脂肪を食べるバクテリア』を遺伝子組み換えで美容品に転用したことに由来する。が、それを愛用している人間の前でそんな雑学を披露す

るのも何なので黙っておいた。

ちようど3杯目のコーヒーを注文したところでチャンが現れた。

「何だ。あと5分早く来ればよかったのに。おかげでコーヒーが一杯無駄になってしまった」

半分冗談でそう言うところチャンは申し訳無さそうに首を竦めた。

「すみません。ちょっと迷っちゃって」

「何か頼むといい。糖分は足りてるか？」

「出来れば補給したいです」

少しやつれたようだが思っていたよりも元気そうでほっとした。

チャンの性格だと自らの犯した罪に耐え切れず、いつまでも自分を責めてしまうのではないかと心配していた。

長旅で疲れたのかチャンは物凄い勢いで甘いものを平らげた。まずは砂糖たっぷりのホットミルクを3杯。ケーキ6種。パフェを3つ。

ナミが呆れ顔で尋ねる。

「どこか壊れてるんじゃないの？」

「皆そうなんだとさ。糖分を大量に摂らないと体力を維持出来ないぞうだ」

チャンの代わりにそう答えてやると彼女は羨ましそうにチャンを眺める。

「いいわね。かたやクリーム塗って痩せようとする人間が沢山居るっていうのにね」

それに対してチャンは疑わしそうな目つきを返す。

「ところで……いつの間に仲良くなったんですか？」

そうだった。チャンにはまだナミのことを話していなかったのだ。

「気にするな、少年。大人の事情だ。話せば長くなる」

「けど……」

「言いたいことは分かる。だが、彼女は足を洗ったんだ」

「はあ……」

チャンはどうにも納得がいかないらしい。

しばらくバツの悪い空気が流れた。夕食前のラウンジは客が少なく、居ても外国人観光客が数組程度だ。これなら少々、きわどい話をして問題はあるまい。

「ところで、少年。本気で学校に乗り込む気なのか？」

「ええ。そのつもりです」

と、チャンは即答する。

「学校に乗り込んだところでどうするつもりだ？」

「それは……」

そのままチャンは口をつぐんでしまった。

「そこまでは考えていなかったようだな。悪いことは言わん。無駄に危険な橋を渡るな」

「でも、あの病院では今も実験が行われているかもしれないですよ。放っておけません」

「ほお。だったら爆弾抱えて吹き飛ばしに行くのか？ 仮にそこを潰したところでまた別な病院が出来るだけだろうよ」

「それは……確かにそうですね……」

「お前さんが焦る気持ちは分かる。けどな。引き際が肝心だ。バベルを追うのはしばらくお休みだ」

「けど、自分で考えて行動しろとサアラには言われました」

「サアラか……」

いずれチャンには話さなくてはと思っていたのだがどう説明して良いものか迷った。

「そつだ。サアラは？ サアラは今何を？」

そつ目を輝かせるチャンに本当のことを話すのは気が引けた。しかし隠していても仕方が無い。止む無く事実だけを話す。

デンバーでの一件を聞いてチャンは頷いた。

「そうですね……でも、きつとサアラには考えがあるんだと思います」

「彼女を疑わないのか？」

「はい。僕はサアラを心底信じていますから。それにそつと聞いた

らなおさら病院に行かなくてはなりませんね！」

チャンはサアラがバベルと繋がっていたという事実を知って落ち込むどころか逆にやる気になってしまったようだ。

「おいおい。まさか単に彼女に会いたいから病院に侵入したいと言っただけじゃなかるうな？」

「まあ、それもあります。でも、僕たちがバベルの中枢に迫ることで間接的にサアラの役に立てるかもしれないじゃないですか」

チャンはあっけらかんとそんな事を言う。まったく、どこまで前向きなんだか……。

紅茶を飲みながら黙って我々のやりとりを聞いていたナミが口を挟む。

「で、その病院はどこにあるの？」

チャンは残念そうに首を振る。

「それが……正確な場所は分からないんです」

「何よそれ。あなた達の学校だったんでしょ？」

「そうなんですが実は……」

チャンの説明によると彼等の学校はC国が指定する7つの『特別保全区画』のうちのひとつだというのだ。『特別保全区画』とはC国がスパイ衛星からの撮影を禁止する地域の事で、大抵は軍事機密に関わる施設が存在するといわれている。C国はそれらの保全区画の上空に自国の監視衛星を常駐させており、他国の衛星が侵入してくるのを阻害しているばかりか『ジャミング』と呼ばれる妨害電波を張り巡らしている。その為、他国の衛星は側に近付けない状態なのだ。それはかのクローリーでさえ例外ではなかった。国債という人質を捕られている米国にとってはC国の強い要請には逆らえないからだ。21世紀初頭には既に米国債の一番の保有国となっていたC国は「言うことを聞かないなら米国債を売り払う」と度々米国に圧力をかけてきた。ジャパン・クラッシュを目の当たりにしていた米国は自国の国債が暴落する事の悲惨さをよく理解していたのでそれに逆らえなかったのだ。米国経済の赤字国債への依存は今に始ま

ったことではない。だが、一時期は米国の大統領が外国を訪問する度に「また大統領が米国債のセールスに来た」と揶揄されるほどだった。そういうわけでC国の保全区画は謎に包まれている。

「少年。本当に当ては無いのか？ それじゃ話にならないぞ」

「大体の場所なら見当がついています。サアラが逆算して大体の位置を把握したんです」

「逆算だと？」

「はい。僕らが学校の敷地を出る時は必ず目隠しされた車両に乗せられて移動するんですが、サアラは加速の時と曲がる時のG（慣性）を感じ取って車両がどのように走ったのかを計算してたんですよ。で、到着地点から逆算して出発地点を割り出したわけです」

「……バケモノか」

そんな芸当が出来るとは呆れる他なかった。サアラという女の子はやはり只者ではない……。

チャンは端末を取り出して目的の場所を指し示す。

「第六特別保全区画のこの辺りです」

「なるほどな。そう遠くはないな」

「でしょう。直ぐに出発します。止めても無駄ですよ！」

やはりチャンの決意は変わらないようだ。

「分かった。そこまで言うなら付き合う事にしよう」

「本当ですか？ やった。アンカーさんが一緒だと心強いです」

「で、忍び込むのはいいが、どういう算段だ？」

「製薬会社の納入車を利用します。あの病院はかなりの規模ですから定期的に医療品を収めているはずなんです」

「ほう。で、どこの製薬会社かは分かっているんだろうな？」

「勿論。ケガや病気で病院にかかった時に薬剤のメーカー名を見ていましたから。それにあそこは軍の秘密施設です。だから、あまり色んなメーカーは利用しないはずですよ。おそらく政府系の会社が独占的に取引をしているはず、というのが僕の読みです」

「なるほど。いい読みだ」

天下り役人の御用達ということか。よくある話だ。

「実は製薬会社の納入予定を調べておいたんです。で、明日の夜に納入車があつた病院に入ることが分かりました」

「それに便乗する訳だな？」

「そういうことです」

結局、成り行きでチャンの冒険に付き合うことになってしまった。問題の病院に行つてみたところで何も無いかもしれない。だが、それでチャンの気が済むならそれも止む無しか…。

* * *

幸運なことに運転手は仕事熱心な男ではなかつた。

我々が便乗を決め込んだ納入車の運転手は、たつた十数箱の納入品をコンテナに収めるのに30分以上を要した。なぜなら常に誰かと通信しながら度々、作業の手を止めるからだ。そのおかげでトラックのコンテナに潜り込んだ我々は余計に待たされることになってしまった。

チャンが欠伸をしながら呆れる。

「職務怠慢だなあ」

「そう言うな。只で乗せてもらつてゐるんだ」

「そりやそうですけど。それにしても危機管理がなつてないですね。確かにあまりにも隙だらけで忍び込むのにクロックアップする必要はまったく無かつた。それにコンテナにかけたロック（鍵）は端末の万能キーで簡単に開閉出来た。この調子だとコンテナの中味が盗まれても気がつかないのではないかと思われた。

「まあいいじゃない。のんびりいきましょ」

納入箱に座つて脚をぶらつかせていたナミがのん気にそんなことを言う。それが気に障つたようでチャンは舌打ちする。

「ちえっ！ 何であの人もついてくるんです？ 関係ないのに」

「あら。冷たいわね。戦力は少しでも多い方が良くない？」

「戦力って……アンカーさんが居れば十分ですっ」

待っているというのでも聞かずにナミは我々について来てしまった。しかも、ここまでの道中においてまったく緊張感の無い態度で度々、チャンを刺激する。彼にとつて彼女は、ちよつと前までは敵だったのだからその反応は当然といえは当然だ。

「まあ2人とも仲良くやってくれ」

そつとしか言いようが無い。

そこでようやく車が動き出した。これから小1時間のドライブだ。コンテナの中は寒かったが耐えられない程ではない。おのおの休息を取りながら到着を待った。

ふと、バベルの塔のことで思い出した。

「少年。そう言えばあの塔は結局、何だったんだ？」

探索の途中で邪魔が入った為、それを聞いていなかった。

「本当のことを言うとはつきりとは分かりません。でも……恐らくあれは『発射台』です」

「……発射台、だと？ あの塔がか？」

意外な答えに戸惑った。てつきり宗教的な施設だと思っていただけに……。

「前に塔の内部は吹き抜けになっていて、壁に沿ってパイプが上まで伸びていると言いましたよね？ ソフトクリームみたいな形で。

あれは一種の加速装置なのではないかと考えられます」

「つまり、あの塔全体がパイプの中味を加速させる為の装置だという事とか？」

「そうです。らせん状に配置されたパイプの中で加速された物体を外に放出することが目的だったのでしょうか」

「……馬鹿な……何の為にそんなものを」

五千年前になぜそんな物が必要だったのか？ まるで想像ができない。

「ねえ。それって大砲みたいなものかしら？」

ナミの質問にチャンは首を振る。

「分かりません。これが兵器だったとまでは断定出来ません」

加速装置といえばレーザー核融合にも利用されている電磁投射法（通称：レールガン）が思い付くが、らせん状にする意味が分からない。確かに場所は取らないのだろうか…。

「少年。例の手帳には何と書いてあったんだ？」

「記述があることはあったんですが疑問符で終わっていました。何かを撃ち出す為の装置には違いない、という結論です」

「やはり連中もレールガンを連想したか…：しかし形状が特殊だからな…：」

「らせん構造、ですよ。これは僕の想像なんです、遠心力が関係しているのではないかと」

「遠心力？ 確かにそれなりの速度であるのパイプ内を移動したら中味には遠心力がかかるな」

「アンカーさん。遠心力を求める公式はご存知ですか？」

「な！ そうだな。確か…：」

返答に窮するとナミが代わりに答えてくれた。

「R分のMかけるVの二乗」

「そうです。分母が半径R。分子が物体の質量Mに速さVを二乗したものをかけた数値になります」

「そうだったな。やっと思い出したぞ。ということは質量に速さ二乗だから相当のエネルギーになるというわけか」

チャンが頷く。

「はい。物体の移動速度が早くなればなるほどそのエネルギーは高くなります。で、それを割る分母なんです、らせん状の場合はどうなると思います？」

「半径か…：待てよ。段々と小さくなるじゃないか」

「ですよ。加速することによって分子は爆発的に数値が大きくなる。その一方で半径は小さくなる。つまり、物体はかなりの遠心力に引っ張られることになります」

「あら。でも同時に円の中心に向かつても引つ張られるわよね？」
「ええ。でも想像してみてください。重りに紐をつけてブンブン振り回している時に途中で紐が切れた場合を」

「なるほど。そういうことか……」

それは分かり易い例だ。確かにそれなら、らせん状にした意味も分かる。だが、問題はその中味だ。一体、何を発射していたのだろうか？

(結局、結論は出ず、か。やれやれ。聞くんじやなかった……)
何だか釈然としないまま、我々は目的地へ向った。

* * *

午後9時を回ったところではぼ予定通り我々は目的地への潜入に成功した。

とはいえ『成功』というのも大げさか。それぐらい手応えの無いミッションだ。車が止まってから院内に侵入するまでにやったことといえば、万能キーでコンテナを中から開けて外に出ること、スパイ・インセクトを監視カメラに張り付かせて幻術をかけること、たったそれだけだった。あとは自由に院内を歩き回っても我々の姿が監視カメラに捉えられる心配はほぼ無い。ジイサン特性のプログラムはさほど手の込んだものではない。だがこの監視システムには十分すぎる効果があった。手元の端末が発する信号を受けた監視カメラは、その瞬間にフリーズして3分間同じ映像を管理者に送り続けるのだ。

途中、ロッカー・ルームがあったので白衣を拝借する。

「それにしても……」と、チャンが笑いかみ殺す。

「何だ、少年。言いたいことがある時ははっきり言え」

「やっぱりアンカーさんに白衣は似合わないですね」

「ほう。言葉を返すようだが少年。お前さんは女性向けの服装の方

が良かったんじゃないか？ いつぞやの時みたいにな」

「なっ！」

と、チャンが顔を赤らめる。B国の病院を脱出した時のことをよ
うやく思い出したらしい。

「酷いや。思い出してしまったじゃないですか！ せつかく忘れて
たのに……」

しばらく無人の院内をうろつく。非常灯の明かり以外に光源は無
く、のっぺりとした壁や床は一昔前の病院を連想させた。

「随分と古い作りだな。まるつきり半世紀前の病院じゃないか」

思ったままを口にしてみたもののナミとチャンは、ぼかんとして
いる。それもそうだな。その頃は2人ともまだ生まれていないのだか
ら。

一階を歩く限り特に変わったところはない。普通の病院だ。総合
受付の案内パネルに電源を入れて院内の作りを確認する。

「四階から上は入院患者の病室か。で、お前さんが怪しいと思って
探索したのはどの辺りだ？」

「……地下です。この画像には表示されていませんが……ここです。
この南ブロックの下ですね」

「どれ。ジイサンに尋ねるまでもないか」

案内パネルに端末を押し当てて情報を読み取る。次に監視システ
ムの情報伝達網と照合する。

「……お前さんの言う通りだな。南ブロックの下にここには表示さ
れていない箇所があるようだ」

「やっぱり！ きつとそこですよ」

「そうだな。では早速、見学させて貰うとするか」

* * *

端末の情報を頼りに南ブロックの地下を進む。途中で三箇所ほど

ロックされている扉があつたが解除するのに苦勞はしなかつた。が、三箇所目の扉を抜けたあたりから明らかに周りの様子が変化してきた。

ナミもそれを感じたようで顔をしかめる。

「なんだか気味が悪いわね。病院じゃないみたい」

チャンも首を捻る。

「工場、みたいですよね」

「ああ。何だか細菌兵器でも作つてそんな雰囲気だな」

地下にしては広めの通路。その両サイドにはパイプの束が複数はしつていて、所々でそれらは枝分かれした後に角度を変えて壁の向こう側へ吸い込まれている。部屋の入口らしき扉はどれも重厚でまるで金庫のようにも見える。

試しに『第17号作業所』という表示の部屋に入つてみることにした。

「何だこれは？」

バスケット・コートの半分ぐらいの部屋にぎつしり機械が詰め込まれている。四方の壁は機械が山積みで壁の色さえ判別できない有様だ。よく見ると部屋の中央にガラスで仕切られた一角がある。近付いてみるとガラス窓の向こう側にもうひとつ小部屋があるのが見える。ちょうど刑務所の面会室のようにガラスで隔てられる形でその先の部屋を臨む。

「水槽……ですかね？」

と、チャンが眉を顰める。

「ちょうど人がひとり入れるぐらいだわね」

ナミの一言にチャンがぎよつとする。

「ちよつと！ 気味が悪いこと言わないでくださいよ……」

確かにその浅い水槽はバスタブを一回り大きくしたぐらいの大きさで人間が横になつて浸かれるぐらいの大きさだ。しかし、異様なのはその水槽に向かつて何本ものロボット・アーム、すなわちマニ

ピュレーターが幾つも待機していることだ。まるでそれらは獲物を待ち構えているようにも見える。

「なるほどな。恐らくこれで遠隔手術をするんだろう」

極めて精密なメスさばきを要求される手術の場合には『ナノ・オペレーション』と呼ばれる機械を使った手術が行われる。毛細血管や神経をミクロ単位で切り張りするには人間の手だけでは限界がある。そこで、昔は職人的な医師が『指先の感覚で』と表現していた技術が機械化されてきたのだ。

それにしても明らかに手術室であるのにこの部屋の表示は『作業所』になっていた。それも17番目だと…。

かなり厭な予感がしてきた。

* * *

作業所と表示された部屋の並びを抜けてもう1フロア下りる。

奇妙なことに下のフロアへ下りる階段はやたらと長く、ゆうに3階分ぐらいは段を下りた。

(天井が高いな……)

地下だというのにこの天井の高さはどうしたことか。一瞬、チャンが見つけたバベルの塔を思い出した。確かあそこも地下にやたらと深い吹き抜けがあった。

いつの間にか我々は無言になっていた。この先に何があるのか…
…恐らくそれはロクなものではない。それが分かっているだけに気分が滅入った。

「ここが一番怪しいですね」

そう言ってチャンが立ち止まった。

見ると他のとは形が異なる扉がある。

「ここは特別にロックされているようだな。さて、この万能キーで開くかどうか」

扉脇のセンサーらしき機械に端末を近づける。1秒、2秒……なかなか開かない。

「ダメですか？」

と、チャンが心配そうに覗き込む。

「ああ。流石にこのレベルだと万能キーでは解除出来ないようだ。何、ジイサン特製の鍵は他にもある」

それを聞いてナミが呆れる。

「いったい幾つそんなのを持つてるの？　あなたがその気になれば泥棒生活で豪邸が建つわね」

ナミのコメントを無視して幾つかのキーを試してみる。そして四つ目でようやくロックを解除することに成功した。

「やれやれ。ここだけは妙に嚴重だっことは中に特別なものがあるんだろっな」

ここでひとつ深呼吸する。心の準備とでも言おうか。

「さ、早く入りましょう」

と、チャンが先に部屋に入ろうとした。

「そこはレディ・ファーストじゃないのか？」

少しふざけてみたのだがチャンにもナミにも無視されてしまった。
(やれやれ。場を和らげるつもりだったんだがな……)

そう嘆きながらチャンとナミに続いて自分も分厚い扉をくぐる。

やはり広い。三階分はあろうかという天井。そして横幅も奥行きも一見ただけでは分からないぐらいの広さだ。

「体育館か？」

思わずそんな言葉が出るぐらいのスペースが我々を出迎えてくれた。

この部屋も前の作業所と同様に必要最小限の明かりが低い位置から供給されている。が、明かりはそれだけではない。円柱状の水槽が整然と並んでいて、それぞれが放つ光が明かり不足を補っているのだ。それらはまるでライトアップの淡い光をまとった円柱に支え

られた美術館の外観のようにも見える。

「ひっ！」

前方でチャンが短い悲鳴をあげた。何事かと思って近くの水槽を凝視する。中味を見るには光が足りないのだが……薄い緑色の液体は培養液なのだろうか？ 標本を保存する為のホルマリンではなさそうだが……。

「きゃっ！」

と、ナミも声を裏返して後ずさりする。

「こ、これは……」

心の準備はしていたはずなのに自分も声が裏返ってしまった。分かっていたはずなのに現物を見せ付けられるとやはり動揺してしまった。

無理も無い。そこにあったのは、むき出しになった人間の脳だったのだ……。

まるで水槽内を漂うクラゲのように、脳は所在無さそうに水槽に収まっていた。

目を逸らしたくなるのを堪えてさらに観察する。

（ひとつ、じゃない！）

残念ながらそれはチャンの予想していた通りの現実だった。今、目の前にある標本は複数の脳がブロッコリーのように一体化している。

（生々しすぎる……）

チャンがバベルの塔で発見した頭蓋骨の化石などとは比較にならない。少し灰色がかったベージュは作り物のように目に映った。

「趣味の悪いコレクションだな」

そう言うのがやっとだった。

「これって……生きてるの？」

ナミが側に寄ってきて腕を絡ませてきた。

「さあな。近寄って声を掛けてみたらどうだ？ 『ニイハオ』ってな」

「いやよ。遠慮しておくわ」

修羅場を潜り抜けてきたであろう彼女ですら震えが止まらないようだ。それほどまでに水槽の中身はグロテスクだった。願わくばこれが人間のものでなければ…。

「酷い……酷すぎる」

ひとつ先の水槽を凝視していたチャンがそう呻いた。

チャンの背中に声を掛ける。

「お前さんの言った通りだったな。とてもまともな人間のすることじゃない」

その言葉に振り返ったチャンの目は充血していた。まるで血の涙でも流さん、といわんばかりの形相だ。

「許せない！ こんなこと……こんなことって！」

チャンの怒りはもつともだ。只でさえこんなものを見せ付けられたら酷く気分を害するというのが、彼の場合はもしかしたら親友がこの中にいるかもしれないのだ。

「潰してやりたいです。バベルなんて……」

そう歯軋りするチャンの怒りの矛先は、ここを作ったであろうバベルという組織に向けられているようだ。

と、その時、後方で扉が開く音がした。

（気付かれたか！？）

振り返って入口を見る。

すると逆光の中でシルエットの主が声を発した。

「困ったものだ。君達はこんなものを見る為にわざわざ忍び込んだのかね？」

どこかで聞いたことのあるような声。確信はないが…。

「ああ。博物館と間違えたんだ。あまりにも立派な建物だったんでね」

「フン。「歓迎するよ」と言いたいところだが、職務上、そういう訳にもいかないのですね」

目が慣れてきて声の主の姿がはっきりしてきた。

軍服姿の男……それはロッキー山脈でサアラ達を保護した『コウ
中将』だった。

第40話 秒速の戦い

コウ中將は腕組みしながら我々を見下ろしている。

(相変わらずデカイな……)

相変わらずといつても一度しか会ったことはないのだが、やたらと印象に残っている。

この男、長身のうえに顔が小さいので実際以上に大きく見える。軍服にしてはダボつとした着こなしたが肩幅が広くいわゆる逆三角形だ。今時珍しくメガネをかけているのだが、その奥の目は笑っていない。

その冷たい視線に嫌味で返す。

「たった一人か？ 入国した時はもつと大勢で迎えてくれたのに」
するとコウ中將は口角を上げて答える。

「別に経費削減というわけではない。それでも義理を感じているのだよ。クロウリーの件では部下が世話になったようだからね」

コウ中將の言葉に改めて思った。

(部下……ね。やはりサアラはバベルの意思で動いていたということか)

どこまで本当かは分からない。そもそもこの男が信用に足るかどうか怪しいものだ。

そういえば彼はなぜ我々の存在に気付いたのか疑問に思っ尋ねる。

「なぜ気が付いたんだ？ 我々の侵入に」

「簡単なことだ。『歩行認証』だよ」

うかつだった。

(……歩行認証か)

体重移動、歩幅、リズム……誰一人としてまったく同じ歩き方と
いうのは存在しない。それを利用して足裏にかかる圧力から個人を
識別するシステム。床下に仕込まれたそれに気付かなかつたとは…。

「なるほど。どおりで警備が手薄だと思った」

素直に感想を述べるとコウ中將はニヤリと笑った。

「一応は部外者立ち入り禁止なのでね」

もしかするとザルのように思われたセキュリティシステムはフェイクだったのかもしれない。目に見える部分を甘く、その実、足元に巧妙な網を張って侵入者を捕捉する。単純な手法ではあるが見事に引っ掛かってしまったものだ。

今さら動揺してもはじまらないので話題を変える。

「ところでアンタの身分。中將なのか准將なのかはつきりしてくれ。紛らわしくて敵わん」

デンバーで本人が名乗った時は『中將』、入国時に尾行してきた連中から聞き出した時は『大校（准將）』だった。どちらが本当なのか？

コウ中將は含み笑いを浮かべて解説する。

「どちらの間違いではない。C国軍での私の階級は准將だ。だが、それは表向きのものに過ぎん。本当の階級、すなわち組織の中では中將なのだ。つまりC国軍の特殊外務部は『バベル』が支配しているのだよ」

「どうでもいいが、ややこしいな」

「フン。私がどちらに軸足を置いているかは、まあ、想像にお任せしよう」

コウ中將のコメントからC国軍の一部は『バベル』に支配されていることが改めて確認できた。デンバーの一件にしてもC国軍がクローリーを欲しがる可能性はゼロではないので「C国軍＝バベル」とは断定出来なかったのだ。しかし、彼の口ぶりからはC国軍の一部はバベルの意向で動いていることが伺える。

（C国軍にも根が広がっているようだが、バベルはもっと大きな組織ということか……）

しばしの沈黙を破るようにチャンが口を挟む。

「サアラは？ サアラは今どこに？」

チャンはまたそれだ。

(まったくこの少年は……サアラのことより自分のことを心配しろよ)

彼女の事よりもこの状況をどう切り抜けるか少しは考えて欲しいものだ。

コウ中將はチャンの質問に答える。

「サアラ・タゴールには任務を与えている。今頃はバンクーバーだ」「ええっ？　バンクーバーってカナダ？　なんで？」

「彼女には一個中隊を任せている。少々、厄介な任務だが組織として見逃すわけにはいかないんでね。詳しくは話せないが」

チャンは何とか情報を引き出そうとする。

「それって危険な任務ってこと？　サアラに何をやらせてるんだよ！　言えよ！」

「なるほど君もあの子の信者か。やはり私が見込んだ通りだ。サアラ・タゴールには類稀なるカリスマ性があるようだ」

コウ中將の口ぶりはまるで評論家のような。

しかし、バンクーバーといえは思い当たる節がある。なので試しに聞いてみた。

「それは『悪魔の口』か？」

それを聞いてコウ中將は微かに眉を引きつらせた。どうやら凶星のようだ。

「なぜそれを……いや。君達を見くびっていたようだ。そうとも。

確かにサアラ・タゴールを向かわせたのは『悪魔の口』だよ」

(悪魔の口。イタチ男が言っていたことは本当だったのか……)

核爆発で海底火山を活性化させるなどという馬鹿げた計画をまさか本当に実行するつもりだとは……。

気を取り直してコウ中將に問う。

「アンタ等はヘーラーと対立しているらしいが、奴等の理科実験に参加する動機はなんだ？」

「……理科実験か。面白いことを言う。どこまで知っているのかは

分からないが中々の情報網を持っているようだ。だが、断つておくが我々は彼等に同調するつもりはないよ」

「だったらなぜサアラを派遣する？」

「何も彼等の邪魔をするつもりはない。我々ぐらいの規模になると本来はお互いに干渉し合うことはしないのだよ。文字通り戦争になつてしまつからな。しかし何れ彼等とはやり合わなくてはならないだろう。だからその前に軽く牽制しておく必要がある。その点、あの子はうつつけだ。彼等も子供相手に本腰を入れるわけにはいきまい。それに彼等はあの子にご執心のようなからね」

コウ中将の言い方はいかにも嫌味つたらしい。

サアラの存在はヘーラーにとつては最重要項目だというのに敢えてそこに彼女を向かわせるといふ。バベルという組織は何を考えているのか？ その真意を問いただす。

「ヘーラーはサアラの遺伝子を欲しがっている……貴様、それを知つていてサアラを送り込んだというのか？」

「それが何か？」

悪びれもせずにコウ中将はそう聞き直つた。

するとその時「ふざけるなっ！」と、チャンが飛び出した。

彼は拳を振り上げコウ中将に向かって突進する。が、やみくもに……ではない。

チャンはまず普通の速さで左から突つ込み、切り返してクロックアップ、死角に向かつて潜り込む。

(うまい！ いつの間にかそんな技を？)

虚を突かれたコウ中将は反応できない。そこに右側から回り込んだチャンの拳が伸びる！

が、次の瞬間、「なっ!？」と、声を上げたのはチャンの方だつた。

(止められた、だと？)

チャンは右腕を伸ばしたままの格好で固まっている。よく見るとコウが正面を向いたまま左手でチャンの右手首を掴んでいるではな

いか。

(バカな……3倍速近く出ていたはず……)

コウ中將はチャンの方を見ようともしないで笑みを浮かべた。

「困ったものだ。まあいい。礼儀を教えてやらんとな。先輩として」
そう言うや否や、コウ中將はチャンの方に向き直ると高速で右のパンチを放った。

「グッ！」と、いう悲鳴と共にみぞおちに一撃を喰らったチャンが吹っ飛ぶ。

(速い！……まさか)

コウ中將は何事も無かったかのように軍服の裾を軽く払うと再び背筋を伸ばした。

「実は私もこの卒業生なのだよ。それにこれでもクロックアップは得意なほうでね」

(やはりそうか……あの動きは訓練でどうにかなるレベルじゃない)
それにクロックアップ向けの戦い方も心得ているようだ。普通、人間が動いている物体を見る時には無意識にそれを目で追ってしまふ。この時にどうしても眼球が動くのだがそこに一瞬だけスキが出る。その為、チャンがやったように緩急をつけて急に進路を変え、来る事と死角を利用する事で相手は「消えた」と錯覚するのだ。しかし恐らくコウ中將は眼球を動かさず広い視野でチャンの動きを見切ったのだろう。

「やれやれ。一筋縄ではいかないようだな」

そう言うってから首と肩を回した。ここは、やるしかないようだ。

コウ中將は満面の笑みを浮かべてウォーミングアップを始める。

「そうこなくては！一度お手合わせをしたいと思っていたところだ」

その言葉が余裕からなのか無知からきているものかは分からない。
(チャンの攻撃が軽くないなされたということは……まずは3倍速で様子を見るか)

ジグザグのステップで目くらましというのは通じない。それなら

正攻法だ。

1……七歩前進、右足を前に、左の掌底で下から突き上げる。

コウ中將はバックスウエーでそれを交わす。

2……すかさず右のボディブロー3連発、左のフック、右のストレートを見舞う。

コウ中將はそれぞれの腕でガード。

3……半歩下がって左のローキック、その勢いで左軸足の回し蹴り、左パンチ、右の掌底へ繋げる。

コウ中將は膝を曲げてローキックを受けるとバックステップと左右のステップで交わす。が、最後の回避が大きすぎてよろめく。

(体勢が崩れた！)

そこで4……の追い討ちに入る。が、コウ中將の身体が回転、足がグンと伸びてきた。

(畏か！)

間一髪で上体を引く。が、顎の先端に痛みが走った。

(危ないところだった……何てトリッキーな蹴りを繰り出してくるんだ)

思わずスピードを上げてしまった。

一旦、お互いの動きを止める。

コウ中將が感心する。

「……流石と言うしかないな。この攻撃を交わされたのは初めてだ。普通なら顎が砕かれているところなんだが」

「それは勘弁してほしいね。ビールを飲めなくなるからな」

それにしてもこのコウという男……少なくともチャンよりスピードは上だ。

コウ中將は不敵な笑みを浮かべると拳法の構えをとり、少し重心を落とした。

「フフ。まさかこの程度で終わりではなからう。本気を出してもらわないと困る」

そんな彼の挑発に乗ってやることにした。

「たまには本気を出してみるか……」
とはいえ全速の5倍速にはリスクがある。4倍速でどこまでやれるか、だ。

1……3歩前進、右、左、右、右でフェイント。左に切れ込んで手刀で側頭部を狙う。

が、コウの腕に弾かれ当たりが浅くなる。

2……右足軸の左回転で後ろを取る。と同時に左の膝蹴り、右・左の順で掌底。

ヒットはするもののコウは半身でそれを受けながら回転、バツクステップで逃れる。

3……1歩下がって敵の体勢を見る。左の足元、右のわき腹に狙いを定める。

4……左のローキック連発、左フックを見せておいて右のボディに角度を変えてパンチを3連発。

右拳の手応えはイマイチながら当たってはいる。

5……渾身の左掌底でトドメを狙う。

が、ふつとコウ中將が屈んだ。

(しゃがんだ?)

地面すれすれに脚払いが飛んでくる。思ったより相手の足が伸びてくる。止む無くジャンプで避ける。が、タンポポみたいに地面に張り付いていた体勢からコウが跳ねた。

(しまった!)

空中ではクロックアップ出来ない!

コウ中將は立ち上がり勢いを利用して右の拳を突き上げてきた。とつさに腕をクロスさせて拳を受ける。が、かなりの衝撃。恐ろしい勢いで後ろに吹っ飛ばされる。

一発で軽く身体を浮かされてしまった。だが、追い討ちは無い。体勢を整えてコウ中將の反応を伺う。

「参ったね。こんなに時間がかかるのは初めてだ。サシの勝負だといふのに」

それは事実だった。クロックアッパー同士の戦いなど傍から見ればほんの数秒にすぎない。が、当人達にとってみれば、その手数多さは半端ではない。一瞬のうちに数手先を読んで攻撃を繰り出し、同時に相手の攻撃もガードしなくてはならない。実に神経を消耗する。

コウ中将の表情からは彼の本気がどの程度なのかは読み取れないが、笑みは消えている。ダメージも通っているはずだ…。

コウ中将は息を整えながら呟く。

「噂通りだ。これが生まれながらのクロックアッパーか。ついていくのが精一杯だな」

「そういうアンタもなかなかのものだ。だが、もうひとつ上のギアはないのか？」

「そんなものがあつたらとっくに出している」

「そうか。それを聞いて安心した」

「な……まさか、まだ上があると云うのか!？」

「別に出し惜しみしてた訳じゃないんだがね」

そう言ってから深呼吸をひとつ。いい加減、終わりにしないと身体がもたない。

「くっ!」と、コウ中将が構えをとる。が、もう手加減はしない。

1……全速で前方に加速、コウ中将のガードが上がる前に左肘を全力で打ち込む。と、次に真後ろに回りこむ。

肘打ちの手応え有り。

2……右の手刀でコウ中将の首を刈る。これも全力だ。

これも確かな手応え。

(これで終わりだ)

最後の一撃でさすがのコウ中将も沈んだ。

膝をつき、前のめりに倒れるコウ中将を確認してから緊張を解いた。と、同時にこめかみに強い痛みを感じる。まるで顔面に電気が真横に突き抜けるような痛みだ。

(やはりリスクが大きいな……)

疲労感がねつとりと押し寄せてくる。方膝について目を開けていられない程の痛みをやり過ぐす。

「ねえ。大丈夫なの？」

ナミが背中をさすってくれた。

「ああ。さすがに疲れた。それよりチャンは？ あいつの方が心配だ」

「ちよつと気を失ってたみたいだけど大丈夫そうよ」

「そうか」

「そんなにダメージくらってた？ そうは見えなかつたけど」

「……言ってくれるよ。傍から見ればそうかもしれんが」

「やれやれ。やはりクロックアッパーの苦労など理解して貰えないのだ。」

ようやく痛みが去り、ゆっくりと立ち上がる。見るとチャンが咳き込んでいる。コウ中将の一撃がよほど堪えたのだろう。

「起き上がれるか？ 少年」

その声を掛けるとチャンは駄々っ子のように首を振った。

「無理。無理です。無理ですってば！ 痛すぎです！」

「それだけ大きな声が出るなら平気だな」

笑うと背中が痛い。4倍速以上は滅多に使わないので筋肉にもかなりの負荷がかかるのだ。

膝の汚れを払い大きく息をつく。コウ中将の援軍が来る前にここを出ないと面倒だ。

「立て、少年。もうここに用は無いだろう」

「そうね。なんだか気味が悪いわ。早く帰りましょ」

「えー、そんなあ！ 僕はもうちよつと……」

「お前さんだけ残るのか？ 俺達は先に帰るぞ。冷たいビールが飲みたくなつたからな」

チャンは尚も食い下がる。

「でも、もしかしたら他の部屋にも秘密があるかもしれないじゃないですか」

「勝手にしろ！俺はこれ以上付き合う気は無い。こんな下らないもの……」

そう言い掛けた時だった。

「同感だな……」と、我々3人の以外の人間の声がした。

（新手が現れたか？）と、周りを見回すがその気配は無い。

「まさか……」

そう呟いて目を疑った。なんとなくつ伏せでピクリとも動かなかつたコウ中將がゆっくり起き上がるうとしていたのだ！

（あれを喰らってもう立てるのか……）

驚くべき回復力だ。普通なら半日は目が覚めない。

首を押さえながらコウ中將は顔を歪める。

「参ったよ。潔く負けを認めよう」

それを見てナミがファイティング・ポーズをとる。が、コウ中將は手を上げてそれを制する。

「心配するな。これ以上無駄な戦いをするつもりはない。それに君達を拘束することもしない」

「えらく殊勝な態度だな。ところでさっき同感と言ったのはどういう意味だ？」

「この施設のことだ。実に下らない。それは私も同じ思いだ」

コウ中將の意外な言葉に我々は顔を見合わせた。

「だってここはあなた達の施設なんですよ？これって一体何なの？」

ナミの疑問にコウ中將が答える。

「お察しの通り人体実験をしている。我々の中では『地下農場』と呼ばれているがね」

予想通りの回答にチャンが激昂する。

「ふざけるな！お前らは狂ってる！今すぐこんなこと止める！」

「フン。威勢のいい後輩を持ったものだな。その反応、君も大事な仲間を失ったクチか？」

「そうだよ！親友を殺されたんだ。いいや。もしかしたら他の仲

間も……」

そこまで言ってチャンが口をつぐんだ。そしてコウ中將の顔を見て首を捻った。

「え？ 今『君も』って……」

「言っただろう。私もここで育った人間だ。君と同じような経験をしたんだ」

「そ、そんな……」

チャンが思わぬ展開に絶句する。

コウ中將はしんみりとした口調で語りだした。

「ここには私の大事な仲間達が眠っている。それは皆、実の親や兄弟なんかよりもずっと親しい人間だった。だが、ある日偶然に私はこの施設を発見してしまった。あの時の衝撃は今でも忘れられんよ。一晩中、ここで泣いた。そして本気でここに火をつけようと思った。だが、同時にそんな無駄なことをしても仕方が無い事に気付いた」
チャンが気の毒にといった表情で尋ねる。

「それで自らすすんでバベルに？」

「そうだ。組織に入って少しでも上に立てるように努力した。強烈なジレンマにもだえ苦しみながら、な」

その考え方は一理ある。このような愚行を根絶やしにする為には組織のトップになって止めさせようというのだろう。

「そこまで考えていたのなら他に手段はなかったのか？」

自分の問いに対してコウ中將は力なく首を振った。

「それも考えた。だが、私にはこれが一番の近道だったのだ……」

コウ中將の話聞きながら、ひよっとしたらサアラも同じような考えで動いているのではないかという気がした。だとしたら……。

（尚更、インドに行かないとならん……）

このことをクライアントに説明する必要がある。これまで集めてきたサアラに関わるナマの情報、それをありのままクライアントに伝えることで判断して貰う。それでこの依頼からは下りさせてもらう。

同情するような表情を浮かべていたナミが尋ねる。

「ねえ。バベルという組織は何が目的なの？」

「私にも分からない。今の階級ではまだまだ下端だからな。未だ半分ぐらいしか知ることは出来ない」

脳の標本が浮かぶ容器を眺めながら尋ねてみた。

「この馬鹿げた実験には何の意味があるんだ？　そもそも成功したのか？」

コウ中將はちらりと容器に視線を移して何か言い難そうに口を開く。

「成功したと聞いている。確か6つ目まで……」

それを聞いてチャンが素っ頓狂な声をあげる。

「6つだって!?!」

ナミは恐る恐る尋ねる。

「嘘でしょ……それって、生きてるの？」

「ああ。そう聞いている。ここには無いがね」
ため息が出た。

「ほお……完全にイカれていやがるな。まさか脳を繋げば繋ぐほど天才が作れるとでも？」

「それに近い。上の方が何を考えているかは分からないが『知を創る』という事のようにだ」

何ということだ。単純な発想というか妄想というか……：彼等はブロックでも積み上げるように人間の脳を弄んでいるのか？　或いは『神』を創ろうとでもいうのだろうか……。

我々は言葉を失った。何ともいえない重い空気が淀んでいる。

コウ中將が首を押さえながら「私はこれで失礼する」と告げた。

そして部屋を出て行くこととする。

その背中に向かって声を掛けた。

「アンタはこれからどうするつもりだ？　このままバベルに残って出世を待つのか」

するとコウ中將は立ち止まってため息をついた。そして振り返る。

「そのつもりだ。他に道は無い」

「アンタはサアラをかつているようだが、あの子も同じ道を進んでいると考えると間違いないのか？」

「……それは分らん。だが、サアラ・タゴールには信念がある。

私なんかよりも確たる信念が。彼女を見てみるとそれだけの覚悟があるように思える。だから放っておいてやれ。とりあえずもつこくに用は無いだろう。部下に送らせる。後は好きにしろ」

そう言い残してコウ中将は部屋を出て行った。残された我々は何とも言えぬ後味の悪さを感じながら、次に何をすべきなのかを考えあぐねっていた…。

第41話 悪魔の口

ひと仕事終えた時のビールほど美味しいものはない。とりわけそれが困難な仕事であれば尚更のこと。心地よい刺激は喉を滑降し喜びの歌を奏でる。快樂の粒は群れを成し胸の奥で思い思いに跳ねる。跳ね回る。そして最後に湧き上がった充足感が全身を震わせ、恍惚のため息をつかせるのだ。

「ふう。これだけは止められんな」

ホテルに戻るまで我慢していた甲斐があつた。この一杯は何物にも変え難い。

ナミがやれやれといった風に首を振る。

「呆れたものね。こんな所で貴方みたいな飲み方する人なんて居ないわよ」

確かにこの時間ともなればホテル内のバー・ラウンジは身を寄せ合つてヒソヒソ話をする男女ばかりだ。淡い光が寄り添いあつてほんのりと照らし出す店内にはピアノの生演奏が良く似合う。まさに我々のような『肉体労働者』は場違いだ。

一方、チャンはチャンでノンアルコールの甘いカクテルにガムシロップを大量に注いでせつせとそれを口に運んでいる。その様子を眺めていたナミが顔を顰める。

「見てるこつちの方が気持ち悪くなるわ」

と、彼女はチャンに対しても手厳しい。

「だって……仕方が無いんだもん」

チャンは上目遣いで彼女の顔を見ながら口を尖らせる。

彼女はそれを無視してグラスを救い上げた。どうも我々の下品な『飲みっぷり』がお気に召さないらしい。

彼女は届いたばかりの義手の具合を確かめながら試すような目つきで尋ねた。

「で、どうするつもり？ あなた達はこれからどうしたいの？」

そこでチャンが即座に答える。

「勿論、バベルをブツ潰します！」

彼女は冷静に返す。

「そう。で、具体的には？　どういう方法で潰すつもりなのかしら？」

「それは……アンカーさんに手伝って貰って……」

「おいおい。勝手に頭数に入れるなよ。こっちはこっちの事情があるんだぞ」

そもそもここでこうして寛いでいられるのもイタチ男というスポンサーのおかげだ。彼の高額な報酬が無ければここに滞在するどころか旅費ですら捻出できたかどうか怪しいものだ。そのイタチ男の依頼は「ヘーラーに対峙しろ」というものであって「バベルを潰せ」ではない。そういう複雑な事情があるのだ。

言葉に詰まったチャンをよそに彼女が呟く。

「やっぱりね。具体的なプランがある訳じゃないんですよ。だとしたら次の目的地はカナダかしら……」

ナミの言葉を聞いてチャンが大きく頷く。

「それだ！　そうですね。カナダに向かいますよ！」

その単純な発想をいさめる意味で確認する。

「ちよつと待て。君等はあるの男の言葉を信用するのか？」

「ええ。たぶん嘘は言っていないと思うわ」

「僕も同感です。カナダに行きましょうよ」

「やれやれ。君等はいつの間にそんなに仲良くなつたんだ？　大体、

目的も無くカナダに行ってどうする。もうちよつと冷静にだな……」

人の言葉を遮ってチャンが口を挟む。

「ねえアンカーさん。ところで『悪魔の口』って何ですか？」

「そうね。私も気になってたのよ。それって何なの？　知ってるんでしょ？」

「2人してそこを突っ込むか……まあいい。信憑性はともかく……」
イタチ男の話が鵜呑みにするのは抵抗を感じるが、彼から聞い

たままの内容をかいつまんて話してやる。

話を聞き終わってナミの表情が険しくなった。

「どうした？ やはり古巣のことが気になるか？」

「……ちよつとはね。それに思い当たる節があるし」

「どういうことだ？」

「3年ぐらい前かしら。『レーザー圧縮』の技術者を何人か集めたことがあるのよ。非合法的な方法でお集まり頂いたんだけどね」

「目的は核融合……か」

「ええ。恐らくは。でも、あの時は正直、疑問に思ってたの。組織は核兵器なんかを持ってどうするつもりなのかって」

「発言力を高める為のツールなんだろうよ。それを持っているだけで自分が偉くなったと勘違いするバカは昔から大勢居るからな。だが、ヘーラーは違った。奴等はそれを実際に使って海底火山を爆発させようとしている。実に馬鹿げた話だがな」

チャンが表情を曇らせる。

「でも、本当にそんなことが出来るなら……大きな被害が出ますよね。この前の大地震みたいに」

「そういえば今回の地震。津波の被害が酷いようね」

彼女の言うようにニュースでは連日、各国の被害状況が報じられている。

「まさかインド洋のあれもヘーラーの仕業ではなかるうな」

半分、冗談でそう口にしてみたが（ヘーラーなら本当にやりかねない）と思い直した。一部の報道では地震の直前に巨大な水柱が目撃されたとあったので核爆発を連想してしまったのだ。

「終末思想……」と、彼女は呟いた。

厭な言葉だ。それが笑い話で済むうちはまだ良い。心配性な連中の一部が憂鬱になっただけなら問題は無い。だが、今の世相はそうではない。多かれ少なかれ誰もが世界の終わりが近付いていることを予感している。それが何時なのか、どういう形でやって来るのか、それが分からないだけなのだ…。

ナミは自らの髪を指先で弄びながら続ける。

「神父様のお話には「我々は生まれ変わらなくてはならない」ってフレーズが良く出てたわ。それって修行とか信仰心とか精神論だっと思ってた。まさかそんなこと……今から思えばそういうことだったのね」

「黒い神父様とやらは教会でそんな説教を垂れていたのか。とんでもない不良神父だな」

もし、その終末思想がヘーラーという組織の最終目的であったとするなら、彼等のやろうとしていることは全世界を敵に回したテロ行為に過ぎない。

（だったらバベルはどうなんだ？ バベルはヘーラーの目的を把握しているのか？）

イタチ男は自分に高額な報酬を与えて『ヘーラーと対峙しろ』と言った。それは言い換えれば『ヘーラーのテロから世界を守れ』ということにならないか？ それにしては自分で考えて行動しろという突き放した言い方だったように思えるが……。

チャンが目を瞬かせて口を開いた。

「じゃあ、サアラはテロを阻止する為に派遣されたってことですよね？」

「さあ。どうだかな。バベルとて得体の知れん連中だ。結局は同じ穴のムジナかもしれん」

「でも……」と、チャンは反論する。

「でも、きつとサアラには目的があるんですよ。今はバベルの手先なんかやってるけど、それはポリシーを貫く為の手段なんだと思います」

「好意的に解釈すれば、だろ？ お前さんの場合、どうもサアラの事になると楽観的になり過ぎる」

サアラはバベルを利用しているのか、若しくは利用されているのか？ 現時点でそれは分からない。しかし、クライアントが心配するような事態も想定はしておかなくてはならないだろう。

(恐るべきは……あの子の潜在能力か)

コウ中將はサアラに一個中隊を任せていると言った。一個中隊といえは率いる兵士の数は200前後、階級で言えば少佐ぐらいか。いずれにせよ十四歳の女の子にそんな権限を与えるとは……。それだけサアラの能力を高く評価しているということなのだろう。

(やはりクライアントに会っておかないとならん)

そう思つて2人に提案する。

「この後、ちよつと寄り道したいんだが……」

「あら。どこに？」

「依頼人に断りを入れておきたいんでな。インドへ行く」

すると2人の言葉がほぼ重なつた。

「ダメですよ！」

「駄目よ！」

チャンは口を尖らせて反対する。

「そんな時間はありませんよ！ 僕はサアラが心配なんです。一刻も早くカナダに行かなくちゃ！」

ナミは眉間にしわを寄せる。

「そうよ。手遅れになる前に何とかしなきゃ」

「おいおい。何でこつこつ時だけ気が合う……」

「多数決よ！ このままカナダに直行するわ」

彼女はきつぱりとそう言い切る。

「やれやれ。なんで金を出す自分が指図されなきゃならないんだ」
文句のひとつも言いたくなるというものだ。

妙な雲行きになつてきた。2人ともすつかりカナダに行く気になつている。ナミは古巣であるヘーラーの暴挙を放っておけないと言い、チャンはサアラが心配だと言う。どちらも我々が行つたところで何が変わる訳ではないだろう。だったら放っておけば良さそうなものだが、それを口に出れるような雰囲気ではない。

話し合いが行き詰まつたとき特有の白けた空気が流れた。

そこへ音も無く一台のロボットがすつと場に割り込んできた。

「給仕ロボットか。懐かしいな。まだ残っていたのか」

それは人類がはじめて月面着陸に成功した頃の宇宙服姿を四頭身にディフォルメしたロボットだった。三歳児ぐらいの身長にずんぐりむっくりな体型。まん丸な頭にはピンポン球のような大きな目がふたつ。レストランなどで注文を受けるマスコットとして随分前に活躍をしていたのだが最近ほとんど見なくなった。

チャンが物珍しそうにロボットの頭を小突く。

「何ですかこれは？」

「30年ぐらい前に流行ったんだ。君等が生まれる前だ。ちょうど月面基地が出来た頃かな。小銭を入れてリクエストするとその時の気分に合わせた曲をかけてくれる」

それを聞いてナミが拍子抜けしたように呟く。

「それだけなの？ 何それ」

「そう言うな。こいつはリクエストした人間の表情や声を観察して選曲するんだ。それがなかなかどうして的確にツボを押さえてくれると評判になってな。『癒し効果』とでも言うか、当時はあちこちで見かけたもんだ」

「へえ。そういうものなの。試してみようかしら」

そう言って彼女はポケットからコインを出した。

「頭のところに入入口があるだろう。そう。それだ」

「で、何てリクエストするの？」

「何でもいい。曲名を告げてもいいし、独り言でも構わない」

「そう。じゃあ、『Fly me to the moon』をお願い」

そう言って彼女が頬杖ついてロボットを眺める。すると給仕ロボットは愛くるしい目で彼女を見上げると目を瞬かせてからコクリと頷いた。

「あら。可愛い」

給仕ロボットは目を青く光らせると「1・2、1・2・3・4」という風に頭を振って拍子をとる。そして演奏がはじまった。

まるでピアニストが鍵盤の上で指先が弾むのを楽しんでいるようなジャズピアノが聞こえてくる。

チャンが感心したような表情で給仕ロボットを眺める。

「へええ。意外と明るい曲調のをチョイスしましたね。こいつ」

（妙だな。給仕ロボットはリクエストした人間の気分を選曲に反映させるんだが……）

試しに彼女に聞いてみた。

「なんだ。そういう気分なのか？」

すると彼女は含み笑いを浮かべる。

「……そうね」

これから敵地へ乗り込もうかというのに、その表情に緊張感や不安感は微塵も感じられなかった。むしろそれを楽しんでいる、かのように思える。

やはり女心というものは理解し難いものなのだ。通りで給仕ロボットが廃れてしまっわけだ…。

* * *

雪の大地が延々と続く単調な景色の中に目的のそれは突然姿を現した。

問題の『悪魔の口』は、長さ数キロにも及ぶ大地の巨大な裂け目だった。幅は広い所で約300メートル。確かに白い大地にぽっかり開いた裂け目は唇の薄い口のように見える。

上空からそれを見下ろしながらジイサンに礼を言う。

「大した精度じゃないか。いつもこうだと助かるんだがな」

意外にもジイサンがくすねてきた情報は正しかった。というよりも中継基地でサアラ達がクロウリーを弄っている際にジイサンのプログラムを忍ばせておいたのが正解だったと言える。

『なんじゃ嫌味かい！ けど、クロウリーって奴は大したもんじゃのう』

「確かに。クロウリーでなければこんな辺鄙な場所は特定出来なかっただろうよ」

うんざりするぐらい変化の無い景色だ。この地には岩と木しか存在しない。まるで巨大な一枚岩の上に木をびっしりと植えたみたい。地表は一樣で、さらにそれを分厚い雪がまんべんなく覆い尽くしている。その絶望的な広さと単調さは人間の存在感を完全に疎外してしまうように感じられた。

雪は延々と続く交響曲のように強弱をつけながら降り続いた。時折、風が『早く帰れよ!』と言わんばかりにへりの窓を叩いていった。中には乱暴な奴が居て、強引に我々を他所へ追いやろうとする。その度に大きくへりは揺れ、体勢を整えるのに時間を要した。

「ご苦労さん。もう少しだ」と、操縦桿を握るナミにねぎらいの言葉をかけた。

「ほっとしたわよ。だってずっと同じ景色なんだもの。感覚が麻痺しちゃうわ」

「確かに。眠くなるんだろ？ 分かるよ」

「だったら途中で代わってくれても良かったんじゃない？」

「いや。それは……」

そう言い掛けるとチャンが割って入る。

「絶対にダメです!」

「なんだ。まだ根に持っていたのか。しつこい奴だ」

「何言ってるんですか。アンカーさんのせいで僕はB国で死にかけたんですからね!」

「大きなミスは無かったはずなんだがな。離陸の時は」

「離陸だけ出来てもダメじゃないですか! 着陸とセットでなくちゃ」

チャンの言い分も最もだが人には向き不向きがある。自分の場合は着陸が苦手なだけだ。

しばらく大地の裂け目に沿って飛んだ。真ん中あたりに少し開けた場所がある。そこに山の上にはぼつんと取り残された『観測所』み

たいな建物がひとつ、裂け目に隣接するように設置されている。その隣は資材置き場のようだ。車が数台並んでいて、「道」というにはやけにシンプルな一本の筋が森の中へ続いている。

ふいにチャンが声をあげる。

「あ……煙」

見ると確かに一台の車から煙が上がっている。

「こんな所でバーベキューを楽しんでいるはずはないな」

それを受けてチャンがか細い声で咳く。

「なんか様子が変わすよね……誰も居ないような雰囲気ですけど……」

……

マルチスコープに人間などの熱源反応は無い。

(機械類にはエネルギー反応が残っているようだが……みんなどこへ行ってしまったんだ?)

厭な予感がした。

雪が支配する大地には何故か死の匂いがする。例え、生が残っていたとしても、それは圧倒的な雪の存在に屈するより他はない。ちっぽけな命は息を潜め雪の下で死んだ振りをするしかないのだ。さらにヘリの高度を下げながらナミが次の指示を求めてくる。

「どうするの？ 手前で降りる？ それともこのまま乗り付けるのかしら」

「高度はこのままで正面に。そこで止めてくれ。俺が先に降りる」

「嘘でしょ？ こんな吹雪の中を降下するの？」

「ああ。何か様子がおかしい。バベルどころかヘリラーも見当たらない」

「分かったわ。でも、このヘリはどこに停めておけばいいの？」

「あの資材置き場の辺りに。で、君達はそこで待機してくれ」

それを聞いてチャンが驚く。

「え？ 僕たちを置いて行く気ですか？」

「そうだ。危険すぎる。まずは確かめてからだ。それに場合によっては迎えに来てもらわなければならぬかもしれないかもしれん。裂け目の中ま

でな」

「本気ですか？ あの中に入るつもりなんですか？」

「表に連中が見当たらないということは中に籠っているんだろうよ」
裂け目の淵に建つ建物からは直径2メートルぐらいの棒が二本、穴に向かつて突き出すような形で伸びている。そこからワイヤーのようなものが穴の中にぶら下がっているのも確認できた。恐らくそれは簡素なエレベーターなのだろう。良く見ればプールの飛び込み板のような足場も据えられている。

あまり気が進まなかったが、まずはワイヤーを使って地上に降りることにした。

柔らかな積雪のおかげで着地の衝撃は皆無だった。しかし一歩踏み出すと簡単に膝まで埋まってしまふ。歩く為にいちいち足を引き抜かなくてはならないのはとんだ手間だ。数歩前進しただけでもう帰りたくなった。

（もう少し建物の近くで下りれば良かったな）

その後悔したのも束の間、直ぐにあることに気がついた。それは人の痕跡だった。良く見ると無数の足跡の上に雪が被さっている。上空からは見えなかったが数時間前にはこの辺りで人の出入りがあったのだろう。

建物に向かって歩いていくと少し盛り上がった箇所を発見した。

（これは……）

はじめは朽木かと思った。が、それはまぎれもなく人の死体だった。雪が死体を包み込んでいるのだ。

（こんな場所で行き倒れた訳では無かろう）

雪を払って顔を確認する。どう見ても生氣は無い。が、まるで冷凍庫の生肉のように肌は冷え切っているというのに微妙な質感が残っている。

（撃たれたようだな。見張りの兵か？）

死体の服装から判断すると、どうやらこれはカナダ軍の兵士らし

い。確かにここはカナダ政府がひた隠しにしている場所だから見張りの兵士が居てもおかしくはない。だが、それが無残な姿でこんな風に晒されているということは……どうりで人の熱反応が無いわけだ。

予想通り、建物に到着するまでに同じような死体が4つばかり転がっていた。恐らく小規模な戦闘があったのだろう。血の跡こそ雪で覆い隠されているものの、やはりこの一帯にはまるで生の存在は感じられなかった。

念のために死体からハンドガンを拝借する。この足場ではイザという時にクロツクアップは使えないからだ。

(やれやれ。間が悪い時に来てしまったようだな)
気を取り直して建物の中に入ることにした。

室内は何の変哲もない事務所だった。だがここも人の気配は無い。それに思ったよりも機械装置類は少ない。

(なんだ。ただの休憩所みたいだな……)

恐らくここで大地の裂け目を調査しているのだろうが設備の充実度からするとあまり本格的とは言えないようだ。

入口とは反対の壁側には扉がある。ちょうど事務所を突っ切る形で奥の扉に向かう。

何のためらいも無く扉を開けた途端に下から突き上げるような冷気に襲われる。耳にまとわりつくは風の音。まるで空気が一斉に悲鳴をあげているようだ。

目の前には大地の裂け目がぼっかり口を開けている。間近で見ると断崖絶壁に立っているようでこれが裂け目だとは思えない。むしろ向こう側の壁がはつきりと目に入るので、まるで峡谷を挟んでにらめっこをしているような感じがする。

扉の外には穴に向かって突き出すような形で金属の足場があった。幅は2メートルぐらい、長さは5メートルほど。上を見るとこの足場と平行になる形で太い円柱の棒が二本、穴の方に伸びている。そ

それぞれの棒には太目のワイヤーが幾重にも巻かれていて、その先は真っ直ぐにぶら下がっている。まさにヘリから見たのはこれだった。やはりこれは穴の中に降りるためのゴンドラ・リフトなのだ。

ふと右手に操作パネルのようなものを見つけた。多分、この操作パネルでゴンドラを上げ下げするのだろう。

(降りてみるしかない、か)

ここに突っ立っていても仕方が無いのでパネルを操作する。すると円柱が回転を始めてワイヤーが巻き取られていくのが分かった。

しばらく待っているとゴンドラ、といっても本当にただの箱が姿を現した。

「これに乗るのか……寒そうだな」

せめて屋根ぐらい付ければ良いのにと恨めしく思いながらもゴンドラに乗る。ただ、見た目よりは重量がありそうで少々の風では煽られないようだ。

ゴンドラの中にも操作パネルがあつて今度はそれを操作して穴の中へと降下していく……。

どれぐらい下がったのだろう。ゴンドラの降りる速さから換算しても軽く数百メートルは下りていることになる。見上げると穴の最上部は遙か彼方に細い線となつて、今まさに消え入りそうな具合だ。真っ暗闇の中、ゴンドラの手すりに付けられた明かりだけが頼りだ。マルチスコープを暗視モードに切り替えても良いのだが、どうせ岩壁が延々と続いているだけだろう。

いい加減うんざりしてきた頃、ようやくゴンドラが止まった。

(ここが底なのか?)

ここでゴンドラが止まったということは下りるといふことなのだろう。

目を凝らしてみるとゴンドラの明かりが照らす先に横穴があるのが分かった。どうやらこれは自然に出来たものらしい。もしかしたら地中深くに貯まった水が流出してこのような空洞になつてしまっ

たのかもしれない。

ゴンドラを降りて横穴に向かう。が、その前にここが本当に最深处なのか確認してみようと思った。

(……まだ下があるんじゃないか)

暗視スコープに切り替えたついでにセンサーでこの付近の地形を測定してみた。すると思つた通りこの場所はまだ穴の途中であることが分かった。まるで幹に寄生するキノコの傘のようにこの付近だけ壁から出っ張っている。つまりこの下には何も無いというわけだ。(ここが崩れたら一巻の終わりだな)

首を竦めて横穴に足を踏み入れる。と、これが思つたよりも広い。奥に進むにつれて天井も幅も広くなっていく。やはり地中に溜まった水が浸食して作られたような形状だ。

(……またか)

ここにもまた死体が転がっている。

これだけ頻繁に死体に出くわすというのに、どうして生きた人間には遭遇しないのだろうか？ それに死体のすべてはカナダ軍の兵士だと思われる。

(ヘーラーはここには居ないのか？)

不思議に思いながら先を進む。

(結構、奥行きがあるようだな)

そう思つた矢先、前方に明かりを発見した。それを見て前にも同じような経験をしたことを思い出した。チャンが探索したバベルの塔、クロウリーの中継基地、C国の病院……それらは皆、地中に隠されていた。そして恐らくここもまた……。

(もしかしたら……)

そう、もしかしたらこれは必然なのかもしれない。21世紀はあらゆるものが『晒される』時代になってしまった。毛細血管のように張り巡らされた情報網といい、クロウリーのような神の視点といい、シシヨウのような集合知といい、秘密というものがその存在を著しく脅かされている。だからこそ秘密にすべきものは、より巧妙

に深く隠さざるを得ない。まるでスパイ衛星の監視を逃れる為に軍事施設が地下に潜るのと同じように。

(だとしたら、ここには何が隠されているんだろうな)

どうせロクなものではあるまい。ただそれがカナダ政府によるものなのかヘーラーの意向なのかは分からない。

(ここか……)

ようやく最深部らしき場所に出た。ちょうど照明がぐるりと取り囲むような格好で体育館ぐらいのスペースを浮かび上がらせている。入って右手奥に光源が複数ある。大小様々な装置のようなものに囲まれている一角だ。そこに至るまでの数メートルにも死体らしきものがひとつ…。

(誰か居る!)

人の気配を感じて少し身構えた。そして目を凝らす。相手が複数でないことを確認しながら少しずつその距離を縮める。

(そこに居たのか……)

途中で確信した。そこに居たのは……サアラ・タゴールだった。

彼女は、とつくにこちらの存在に気がついていたはずなのに一度もこちらを振り返らなかった。

「そこにいたのか。サアラ・タゴール」

そう声を掛けると、彼女が顔をあげる。その表情は特に驚いた風でもなく、むしろ無関心そうに見えた。

「ここに居た連中はみんな撤退したわ」

「皆というのはヘーラーの連中か。どうりで静かな訳だ。所々に死体が転がっていたが、あれは君がやったのか？」

「全部じゃないけど」

「で、君はなぜここに？」

「見届けるためよ」

「ほう。たった一人でか。部下はどうした？ 一個中隊を率いて来たんじゃないのか」

「集団行動は苦手なの。それに元々、そんなつもりはなかったし」

「ヘーラーの計画を阻止しろという命令じゃなかったのか？」

「一応はね。でも、もう手遅れよ」

「随分と冷静だな。諦めがいいというか……知らないわけではないだろう。ヘーラーがここで何をしようとしていたか」

「その気になれば止めることが出来たかもしれない。けど、敢えてそうしなかった」

「……なぜ奴等を止めなかった？　もしかしたら大惨事になるかもしれないんだぞ」

「なぜ？　そうして私がそれを止める必要があるの？」

そう言っただけで彼女は冷たい目でこちらを見据えた。その表情は淡々としていて、まるで彫刻のように生気が無かった。

(やはりそうか……)

止むを得まい。これまで先延ばしにしてきた結論をこれ以上、引っ張ったところで埒が明かない。時には思い切って幕を引くことも必要なのだ。

自分にそう言い聞かせて軽く深呼吸をした。そして、ゆっくりと左手を上げ、彼女に向かって伸ばす。

「サアラ・タゴール。悪いが……ここで死んで貰う」

そう宣言してから彼女に銃口を向けた。

第42話 トリガー

銃を握る手のひらに冷たい汗がまとわりついた。

まるで迷いが汗となつて染み出すようだ。しかしサアラは顔色ひとつ変えない。こんな近距離で銃口を向けられているというのに…。

彼女は軽く首を竦める。

「それは父の意向？」

「……そうだ」

「そう。タゴール家の名を汚したくないってところかしら」

「そうじゃない。見極めることが俺の役目だ」

その言葉にサアラの目つきが鋭くなった。そして何か言い返そうとして……結局、口をつぐむ。

いったん銃を下ろして説明する。

「クライアント、いや君の父上は『あの子はルドラの生まれ変わりかもしれない』と言っていた」

「ルドラ……破壊神『シヴァ』ね。なるほど。私がテロリストになるとでも思っていたんでしょね」

「いいや。シヴァは単なる破壊神ではない。世界の終わりにすべてを破壊して次の創造に備える神でもあるんだ。俺もヒンドゥー教に詳しい訳ではないんだがな」

それを聞いてサアラが驚いたように顔を上げる。が、すぐに顔を背ける。

「……興味ないわ」

「君の能力は群を抜いている。クライアントがその将来を危惧するぐらいにな。もし君が過つた方向に進むようならそれは親としての責任を果たせなかった自分の罪だとクライアントは考えていたようだ」

「それであなたに裁きを？」

「そういうことだ」

「それで？ どういう判決をくだすのかしら」

「正直、自分でも決めかねている。だが、ここで引き金を引いた場合、俺はもう一度同じことを繰り返さなくてはならない」

「……どうということ？」

「この後、インドに行つて君の父を撃つ。そういう条件だ」

サアラはしばし考え込むような素振りをみせた。そして吐き捨てるように首を振った。

「……バカなことを」

サアラと対峙しながらクライアントの話を思い出していた。この奇妙な依頼の背景となるサアラの生い立ちを……。

サアラが生まれる2年前、不妊に悩んでいたタゴール夫妻のもとにある提案がもたらされた。それはC国の秘密プロジェクトである『特別な人工授精』を試してみてもどうかというものだった。本来、このプロジェクトはC国でも限られたカップルしか参加が許されない。しかし、サアラの母『スイリン・タゴール』はC国有数の名門一家の出で、彼女にはプロジェクトに参加する資格があったのだ。

タゴール夫妻は悩んだ。結婚して5年。子宝に恵まれなかった夫妻にとってその誘いには抗い難い魅力があった。なぜなら『特別な人工授精』は、受精卵に遺伝子操作を施すことで生まれてくる子供の能力を超人的に高めることが出来るという触れ込みだったからだ。タゴール夫妻は考えた。人工授精だけならインドでも出来る。しかし、益々混沌とするこの世界で生き残ることは大変だ。であれば、せめてわが子には特別な力があつた方が良い。そう考えて夫妻はC国のプロジェクトに参加することを決意したのである。

そして2年後にサアラが生まれた。待望の赤ちゃんを前にタゴール夫妻は幸せの絶頂にあつた。だが、それは長く続かなかつた。サアラが3歳になる頃にC国から召集がかつたのである。当然、タゴール夫妻も警戒はしたものの『重大な病が発症する可能性がある』と言われてしまうと検査を受けない訳にはいかなかつた。そこでタゴール夫妻は絶望させられる。サアラには明らかな異常が認められ

るので長期入院を要すると判定されてしまったのだ。しかしそれはC国の罫だった。入院期間の半年が1年、1年が2年と伸び、サアラはタゴール夫妻の手から無残にも奪われてしまった。その間にタゴール夫妻はあらゆるルートを通じてわが子を取り返そうと試みた。だが、子供を人質に取られてしまうと親は何も出来ない。結局、年に数回しかサアラに会うことが許されなくなってしまったからタゴール夫妻は自分たちが取り返しの突かない過ちを犯してしまったことに気付いたのである。

それから数年後、失意の夫妻に追い討ちをかけるような事実が知らされた。その内容は極めて残酷なものであった。特異な遺伝子を持つサアラには一生、子供を生むことは出来ないという事実……。それは特にサアラの母であるスイリン・タゴールを心底、苦しめた。彼女は不妊に悩んだ自らの経験を思い出し、わが子の不幸を呪った。そして3年前に病気で亡くなるまで己の罪にもがき苦しみ、娘のことを心配しながら息を引き取った。そんな彼女のたった一つの願い。それは『サアラが普通の女の子として幸せになること』だった。

そして最愛の妻の死を看取ったクライアントは決意した。
『もし、妻の願いが叶わないのならば、自分は娘を道連れにして妻のもとに逝く』

その台詞を口にした時のクライアントは相当思い詰めていたように見えた。が、それが本心かどうかは分からない。他にも理由があるのかもしれない。もっと決定的な理由が……。

長い沈黙の後にサアラがため息をついた。その様張はまるで自らの運命そのものに呆れ果てているようにも見えた。彼女が今何を思い、この後どういう反応をするのかは読めない。

「サアラ。最後に聞かせてくれ。君はこれからこの世界をどうしていくつもりなんだ？」

「どうするって……そんなつもりはないし、私にそんな力はないわ」「いいや。君がその気になればバベルを変えることは十分に可能だろうよ。それだけでも世の中に大きな影響を与えることができる。」

それに君ならヘーラーとも互角に渡りあえる。奴等は君の遺伝子を心底欲しがっているからな」

「……知ってるわ。ちっとも嬉しくないけれど」

「分かってくれ。君をヘーラーに渡す訳にはいかないんだ。おそろく奴等は君の遺伝子を手に入れたらもつと露骨にこの世界を終わらせようとするだろう」

「だから私を消すと?」

「……それもある。だが、自分でもどうすべきか分からない。正直に言って判断材料を欲している。だから答えてくれないか? 君はこの終わり行く世界で何をしたいんだ?」

そう言いながら、きっかけを求めている自分に気付いた。きっかけというよりは言い訳に近い。本当はもう結論は出ているのだ。この馬鹿馬鹿しい依頼にうんざりしていること事態、結論はおのずから……。

サアラがぼつりと呟く。

「強いて言うなら……可能な限り生きたいと思う。それだけよ」

それは意外な答えだった。彼女にはもつと野心があると思っていた。

「バカな。だったら今までの行動は何だったんだ? すべて組織の命令だったとでも? 何か思惑があつて動いていたんじゃないのか」

「かいかぶりすぎよ。私は私という存在を肯定していないけど人並みに『生きたい』という意志はあるわ」

「悲しいことを言うなよ。自分の存在を否定するなんて」

「だって作られたモノでしかないから。偽りのレーゾン・デートウル(存在意義)よ」

「……随分と自虐的だな。考え方によつては只ならぬ能力を与えられているというのはそんなに悪いもんじゃないと思うがな」

「そうかしら。例えば私たちは脳幹の太さが常人の1.8倍あるわ。平均して。でも何の為にそんな遺伝子操作をされたか知ってる?」

脳幹といえはC国の病院でみたアレを連想する……。

「脳幹結合……連結に耐えうるようにする為、か」

「……知っていたのね」

「ああ。君の上司にも会ってきた。それで君がここに派遣されていることを知った。てつきりテロを止める為だと思っていたんだがな」
「そんなことをしても何も変わらないわ。例え今回は阻止できたとしても彼等はまた別な場所で同じようなことをするに違いないから。だったら見守るしかないでしょ」

「なるようになる、か。その点は同意する。だが、少なくともヘーラーのテロを見逃すのは頂けないな。どういう影響があるかは未知数だが、この地下で核爆発を起こすのは世界の終わりを早めることになりかねないぞ」

「そうね。この実験にあまり意味があるようには思えないけど、近い将来大きな被害が出る可能性はゼロではないわ。でも干渉はしないの。仮に自分がそれに巻き込まれたとしても。それはそれで甘んじて受け入れるつもりよ。」

「やれやれ。チャンが聞いたら卒倒しそうな話だ。チャンはサアラに心酔している。だがそれは過剰な期待に過ぎなかったのかもしれない。」

「サアラ。君は世界の終わりを本当に信じているのか？」

「そうね。確かにこの世界はもうすぐ終わるかもしれない。それは多分、誰にも止められないと思う。でも、例え滅び行く世界だとしても『私たち』はその中で可能な限り生き残ることだけを考えるわ」
「今、彼女は確かに『私たち』と言った。少なくとも『私』ではない。それにこんな世の中であつても自分達は精一杯『生きたい』という強い意志。それは中々、口に出して言えることではない。むしろ潔い。若さゆえということも出来る。だが、少なくともバベルやヘーラーのような後ろ向きな利己主義とは正反対のものだ。」

「（この子がどういう風に成長するか……やはり可能性は無限、か……）」

そこで銃を捨てた。

「分かった。はじめから撃つ気はなかったよ。ただ、君は誰にも心を開かないと聞いていたからな。最後に本心が聞けて良かった」

「サアラは捨てられた銃を眺めながら含み笑いを浮かべる。

「演技かもしれないわよ」

「フン。目を見れば分かるさ。これでも色んな人間を見てきたからな。何十年と」

「そう。じゃあ好きにさせてもらおう」

「いいだろう。クライアントには報告しておく。もう会うことは二度とないだろうが、自分のやりたいようにやればいい。君は自由だ」
これで肩の荷が下りた。恐らくこの結論にクライアントも異は唱えないだろう。

と、その時だ。

「そうはいかない」という第三者の声が背後から聞こえた。

誰だと思つて振り返る。いつの間にか入口の所に大男が立っている。

(その趣味の悪い軍服は……：：：：チヨビ髭か！)

果たしてその男はヘーラーの手先、チヨビ髭大佐だった。

大佐は髭先を撫でながらご機嫌な様子だ。

「フフン。我ながら良い判断だ」

そこで兵士が十人ほど足音を響かせて中になだれ込んできた。そしてチヨビ髭大佐の前に人の壁を作つて自動小銃を構えた。

チヨビ髭大佐は得意げに言う。

「我々が撤退した後ここに近付くヘリがあつたんでな。もしやと思つて引き返してきたんだが、まさか『ミラクル・クロップ』が居るとはな！ 思わぬ成果だ」

この男にはB国と米国でそれぞれ大きな借りがある。

「B国といい米国といい見掛けによらず『売れっ子』なんだな」

嫌味でそう言つと大佐は自信たつぷりに言い放つた。

「組織に期待されておるのでな！ 優秀な者ほど忙しくしているものだよ」

「……あいにくだがサアラは渡さんぜ」

「ほう。死に損ないの君に何が出来るか？ 言うまでもないが抵抗するなら……殺す！」

敵はチヨビ髭大佐を入れて12人。倒せない人数ではない。だが、この場所では狭すぎる。発砲を許してしまうと流れ弾や兆弾に触れてしまう。

（短期勝負だな……）

ポケットに忍ばせていた収納型刃物を右拳に移す。左手にはアイスピックを握る。そして右から順番に片付ける為の手順を組み立てる。

と、その時、乾いた破裂音が響いた。

そしてチヨビ髭大佐がぶっ倒れるのが目に入った。しかも横倒しになる直前に頭がブレたように見えた。

（……何だ？）

周りを見回して入口方面に目が留まった。そこには銃を構えるナミの姿があった。大佐を撃つたのはどうやら彼女らしい。

指揮官を失った兵士達はどうしたものかといった風に互いの顔を見合わせるばかりで撃つた彼女を拘束する素振りもない。そんな兵士達を押しつけて彼女がツカツカとこちらに歩み寄ってくる。

「おいおい。ヘリで待機していると言ったはずだが？」

一応、そうは言ってみたものの彼女は悪びれもせずと言う。

「大人しく言い付けを守るタイプだと思う？」

「いいや」と、軽く首を竦めて彼女を迎える。

「あんまり連絡が無いから穴に落ちこちたのかと思っただわ」

ナミはそう言うが実際のところはチヨビ髭大佐達が穴に入っているのを見て追いかけてきたのだろう。最も彼女の性格だと「心配だから来た」とは決して口にしないだろうが。

彼女と会話をしながらも兵士達が妙な動きをしないように睨みを利かせる。指揮官を突如失った兵士達はオロオロするだけで、とても反撃しようという意気込みは感じられなかった。

彼女が立ち止まってサアラを一瞥する。

「その子がサアラ・タゴールね？ 噂の」

その言葉に悪意は無いのだろうが、どことなく冷たいような言い方だ。

「そうか。会ったのは初めてか？」

「ええ。実物は意外と華奢なのね。普通の女の子じゃない」

ナミの登場にもサアラは特に関心を示さなかった。一寸、妙な間が空いた。ヘーラーを離れたナミにとって、今さらサアラに用は無
いはずだ。

ナミが装置を眺めながら尋ねる。

「結局、これはどうなったのかしら？」

その質問に対して、一瞬、サアラの目が見開かれた。

「どうした？」と、という言葉が銃声にかき消された。

振り返るが兵士達は誰も銃を構えていない。

（じゃあ今のは誰が……）

そう思った瞬間、右手に銃を持つチョビ髭大佐の姿が目に入った。

「なんだと!？」

大佐は顔の右半分を血に染めている。頭を撃たれたのではないのか？

（まさかナミが仕留めそこなったとでも……）

チラリとナミの方を見た時だった。彼女の視点がおかしいことに
気付く。

「ナミ!」

倒れそうになる彼女を抱きかかえる。その時、左の手のひらに粘
性のある温もりを感じた。

（血……）

背中を撃たれたようだ。

ナミが苦しそうに声を漏らす。

「忘れてたわ……不死身の大佐……」

その言葉の意味は良く分からない。しかし、確かにチョビ髭大佐

は生きている。

ナミの身体を支えながら大佐を睨む。

「貴様……」

それに対してチョビ髭大佐はアゴをしゃくってみせる。

「お返しだ。不意打ちの。だが残念だったな。私に銃撃は効かん」

ナミが声を振り絞る。

「噂は本当だったみたい……たぶん、頭の骨にもグラフエンか何か防弾素材を埋め込んでるのよ」

「無理に喋るな。分かったから」

そう言い聞かせてそつとナミを床に寝かせる。そしてチョビ髭大佐を挑発する。

「防弾素材で全身をコーティングだと？ お前はアーモンド・チョコレートか？」

大佐は口元を引きつらせる。

「以前、戦場で全身に大やけどを負ってな。治療ついでに改造したまでだ」

「手品の種にしては単純だな。聞いて呆れる。ただの『ヘタレ』じゃないか。何が不死身だ」

「フン。なんとでも言え。とにかくこれで裏切り者の始末も出来た。我ながら感心する。実に効率的だ」

そんな大佐の言葉を耳に受けながらナミの髪を撫でた。まだ息はある。彼女は胸ポケットから何やら取り出して目で訴える。

（それは……）

彼女が差し出したのはB国で追っ手をまく為に使ったペンシル型の閃光弾だった。

（これを使えという事か……）

閃光弾を受け取り、ゆっくりと立ち上がる。

怒りというには冷たい、冷え切った感情が身体の芯で沸々と湧き上がる。それは自分でも抑えきれない邪悪な衝動だ……。

目を閉じて息を吸い込む。そして宣言した。

「ひとつだけ忠告しておく。目を閉じるな。死ぬぞ」

その言葉に兵士達が半笑いを浮かべる。

その面々を一瞥してもう一度目を閉じる。そして閃光弾を宙に放った。

耳を澄ませて待つ。

1、2、3秒……「うわっ！」という短い叫びが複数。それを合図に目を開く。

(全速で殲滅する！)

1……右端の兵士に向かって加速、その首筋に刃物の先端をぶつける。刺す必要は無い。

2……反転して2番目3番目の間に割って入る。すれ違いざまに双方の首を掻き切る。と同時に踏ん張って4、5番目の兵士へ突進。

3……首と首を最短で結ぶように右を振り抜く。そのまま6番目との距離を詰める。

4……6番目を越えてその先の7番目へ。6番目の後頭部には左のスピックを突きたてて引っ掻く。

5……回転しながら7、8、9番目の首を右で刈る。10番目の位置を確認して狙いを定める。

6……10番目を左のひと突き、11番目は右の手首を返しての切断で片付ける。

7……離脱して大佐の位置を把握。

いったんここでストップ。自らが取ったルートを見る。まるでスローモーションのように11人の兵士から血が噴出した。次々と倒れていく兵士達を眺める。5倍速で当たった切っ先は兵士達の首筋に深い切り口となって致命傷を与えているはずだ。

こめかみに激痛を感じたがこれで終わりではない。

「むっ……」と、大佐が呻いた。が、こちらの位置には気付いていない。当たり前だ。只でさえ目で追えるスピードではない。そこに閃光弾のダメージだ。恐らく、敵は何が起こったのか理解する間も無かったろう。

ぐらつく足元を抑え、大佐に向かって声を掛ける。

「貴様は特別だ」

大佐がこちらに気付く。そこに急加速で接近する。

「な、ななっ！」と、目を白黒させる大佐。

その腹に左のスピックを突きたてる。が、刺さらない。

(ここもコーティングか？ ならば……)

武器を捨て、両方の拳を強く握る。全速・全力の拳を叩き込んでやる！

1秒……2秒……3秒……

その腹にひたすら拳を打ち込んだ。

8秒……9秒……10秒……

大佐の身体が下がって拳への抵抗が弱まったところで連打を止める。

1秒間に十数発、それを10秒以上続けた。短時間に5倍速パンチを集中させれば表面は破れなくとも衝撃は内臓に伝わる。恐らく粉々になったアバラ骨が内臓を引っ掻き回しているはずだ。

うめき声をあげながら大佐が後ずさりする。腹を抱え、苦悶の表情を浮かべた大佐の口から大量の赤い泡が吐き出された。自慢のチヨビ髭が赤く染まるのを見届けてから急いでナミの所に戻ろうとした。5倍速を使った反動で頭は割れるように痛む。いっそのこと本当に割れてしまった方がマシなのではないかというような痛みだ。目眩のせいで視界が極端に狭まる。ナミを寝かせた場所まではたった数メートルの距離だというのに、そこに辿り着くまでに余計な時間を要した。ふらつく足取りをなだめながらナミの側に寄ると、サアラが無言で止血を試みているのが分かった。だが、サアラは顔を上げると悲しげな顔つきで微かに首を振った。

(……ナミ)

それが致命傷であることは分かっている。だが、今は彼女を連れ帰らなくてはならない。

その時だった。一瞬、室内が真っ白になった。続けて地鳴りのよ

うな音が辺りを支配する。

「これは……まさか！」

そう思つてサアラの顔を見る。

「時間だわ……」

大きな揺れが地の底から突き上げてくる。合わせて激しい横揺れが始まつた。

サアラが眉を顰める。

「彼等は60時間前にここから気球を飛ばしたの。ちょうどそれが最深部に達する頃よ」

「気球だと？」

「この装置は気球を遠隔操作する為のものよ」

「その気球というのは……レーザー核融合の装置付きか」

「ええ。驚くぐらい小型化されてるわ。それを遠隔操作で穴の最深部に送り込んで爆破する。その為には彼等はここで何ヶ月もかけてこの穴を相当調べ上げてた」

「奴等、それを本当に爆発させやがったのか！」

「私が来た時にはもう爆発は止められない状態だった。気球の軌道を変えて爆破ポイントをずらすのが精一杯だったわ」

「それで君はここに残っていたのか……」

少し誤解していたようだ。何もサアラは指をくわえて見ていた訳ではないのだ。

「いずれにしてもここは危険ね。早く出た方がいいわ」

「そのようだな。が、その前に……」

このままの状態でナミを抱えて脱出するのは難しい。少しでもスピードを上げる為に、彼女の手足を置いていくことにした。まず、脇の下のスイッチを手探りで探す。そして、両腕を外すことに成功した。

「なっ……」と、さすがのサアラも驚いたようだ。

続いて両足を外す。これで大分、軽くなるはずだ。両手両足を取り去られたナミの身体は随分と小さく見える。

それを見てサアラが表情を曇らせる。

「驚いたわ……まったく気がつかなかった」

「複雑な事情があるんだ。だが説明している暇はない。行くぞ」

ナミの身体を抱えてここを脱出する。

揺れは断続的に襲ってくる。小さな揺れはまるで子供の食べこぼしのようにポロポロと壁面から細かい岩を落とした。大きなものはまるで暴れ牛がカウボーイを振り落とそうとするように全身を振るわせ、容赦なく足元を揺らす。

ゴンドラまでの道のりは平坦ではなかった。暗い中を2倍速での移動は大変だったが何とかここまで来られた。ゴンドラ乗り場があるキノコ岩は既に三分の一ぐらいが失われている。足場が崩れてしまいう前にゴンドラに飛び乗る。

(肝心の機械が動いてくれればいいんだが……)

幸いなことに装置はまだ生きていた。

「急げ！ のんびり巻き上げている場合じゃないぞ！」

機械に向かって叱咤激励する。

ゴンドラが上昇する間にチャンに連絡する。

「少年！ 直ぐに飛び立てるようにスタンバイを頼む！」

「ちょ、ちよつと！ いきなり何ですか。今まで音信普通だったくせに」

「いいから言うとおりにしろ！ 操縦は任せる！」

「え？ ナミさんは？」

「負傷している。かなり危険な状態だ」

「そんな……っつて、うわっ！」

そこでまた大きな揺れが生じる。それにつられてゴンドラも激しく左右に揺さぶられる。

「クソッ！ 出来ればヘリで迎えに来て貰いたいんだがな」

「そ、そんな無茶な！ それに大体、この揺れは何なんですか？」

「やっぱりこれは核融合なんですか？」

「そういうことだ。この調子じゃ無事に上まで辿りつけるか怪しく

なってきたな……」

最大速度でゴンドラは地表に向かっていているのだが、まっ直ぐに上昇していると言いはれ難い。割れ目から見える外の光は目に見えて大きくなっていく。やがてゴンドラを吊り下げる支柱の形が判別できるまでの距離になってきた。

(あとどれくらいだ?)

あの支柱が抜けてしまったら一巻の終わりだ。

「この揺れ方は……」

サアラが下を覗き込みながら呟いた。

「どうした?」

「マグマを刺激してしまったような揺れだわ。爆破ポイントはずらしたはずだけど……」

「まさか本物の地震を誘発したと?」

「爆縮にしては長すぎるわ。行き場を無くしたエネルギーが地中に溜まってる可能性もあるけど」

「クソッ! まだか……」

ナミの体温がどんどん下がっている。顔色も真っ青だ。微かに息はあるようだがとても人間を抱いているようには思えなかった。

(もう少しだ。あともう少しで出口だ……)

そう思った瞬間、またしても大きな揺れに襲われた。と同時に上の方で何かが外れるような厭な音……。そしてゴンドラが止まってしまった。

「何だ! あと数メートルじゃないか!」

動かない。ここまで来て立ち往生か!

サアラがワイヤー付フックの発射装置を取り出した。それはロッキーマウンテンで自分が使ったやつと同じものだ。だが、自分は今回それを持っていない。

「私にはこれがあるから先に上がるけど……」

「遠慮するな。そいつは一人用だからな。君は先に脱出しろ」

「何とか引き上げられれば良いんだけど」

「頼むよ。あまり期待はしていないがな……」

サアラは発射装置からフックを打ち出して穴の縁にうまく引っ掛ける。そしてワイヤーを巻き上げながら自らは壁をキックして器用に上へ上へと登っていく。

（上手いもんだな）

感心しながら上を見上げているとガクンと足元のバランスが持っていかれた。ゴンドラが大きく傾いてしまったのだ。良く見ると二本ある支柱のうち片方が大きく傾いている。そのせいでゴンドラを吊り下げるワイヤーの長さに差異が生じてしまったのだ。

（サアラは間に合うか……いや、これは持たない）

ゴンドラの傾きは止まらない。傾いた支柱が動き出したのだ。もし、あれが抜け落ちてしまったら……ゴンドラごと落下に巻き込まれてしまうことは必至だ。

目に入ったのは岩の出っ張りが数箇所……足場になるかどうかギリギリだ。曲芸じみた方法だがあれを踏み台にして上を目指すしかない。当然、ひとつでも踏み外すと真つ逆さまだ。

（無茶だが……やるしかないか）

迷っている時間は無い。

全速のクロックアップでどこまでやれるかだ。どちらの足でどの出っ張りを踏むのかをイメージする。

（南無三……）

運を天に任せて最初のジャンプに集中する。

1 …… 右斜め上の出っ張りに右足を乗せる。体重移動してジャンプ。左横の岩へ飛ぶ。左足の位置を調整して今度は大きめに右へジャンプ。

2 …… 右斜め上の出っ張りに右足を乗せる。壁から離れすぎないように空いている左手で岩を手繰り寄せる。そしてまたジャンプ。

3 …… 左、右、左、体勢を整えてまた右。左……
（しまった！）

足裏で岩が崩れるのを感じた。すぐさま右で壁を蹴って左手でゴ

ンドラのワイヤーを掴む。

(！……滑る)

あと2メートルだというのに……。右手でナミを抱いている状態での宙吊りは辛い。左腕一本で体重を支えながら足場を探す。何とか足を掛けられそうな箇所はあるがワイヤーから手を離せる余裕はない。このままではにっちもさっちもいかない。やはり思い切って脚力だけで蹴り上がるしかない。

そうこうしているうちに傾いていた支柱が大きな音をたてて一気に傾いた。その勢いでこっちが握っているワイヤーにも激しい振動が伝わった。

(クソッ！ 握力が……)

その時、上からサアラの怒鳴り声が出た。

「早くそっちを握って！」

見るとワイヤーの先に付いたフックが目の前でブラブラしている。おそらくこれはさっきサアラがここを登る際に使ったやつだ。それに全体重を預けるのは少し躊躇われたがそんなことを言っている場合ではない。ここはサアラを信じるしかない。

「頼むぞ……」

意を決し、ワイヤーを離してフックに捕まる。

飛びついた勢いで一瞬、身体が下に沈む。が、スルスルと上に引く力が生じたのでほっとした。

(助かった……)

サアラが引き上げてくれたおかげでようやく穴の外に出ることが出来た。とはいえ、ゴンドラ乗り場の足場も随分危うい状態だ。礼を言うのもそこそこに直ぐ小屋に入り、反対側の入口へと向かう。

小屋を出ると正面でへりが待機していた。

「よし！ いいぞ。このまま脱出だ！」

ここまで夢中でやってきたせいでナミの重みを感じることは少なかった。が、へりに乗り込む段になってようやくその重みを感じられた。

「もう少しだ。もう少しで……」

抱きかかえたナミに向かって呼びかけた。

「大丈夫。もう少しだから……」

そう何度も繰り返した。

冷たくなってしまった彼女の為に、そして自分に言い聞かせるように……。

第43話 カウントダウン

雨上がりの墓地は日差しのスポットライトを浴びて上気しているように見えた。

冬枯れの芝は疲れ果てた老人の頭髪のようにたなびき、なだらかな丘には墓石がドット模様のように整然と並んでいた。この辺りはまだ火葬が義務付けられていない。だが、土葬が禁じられるのも時間の問題だろう。水害が頻発する地域では衛生上の問題があるからだ。

NYで再会した時に彼女が名乗った『ジェーン・ギデオン』というのは本名だった。その名前でも過去の交通事故を検索するとすぐに身元は判明した。その情報を辿ってこの墓地を見つけ出したのだ。

家族の眠る場所に埋葬してやること。

(それがせめてもの弔いだ……)

親しい人間の死に接するといつも胸の奥が空っぽになってしまふ。さらにその空洞にはブラックホールのような引力があつてあらゆる気力を奪い取ってしまう。そして残されるのは、脱力感、虚無感、無力感……。そこから立ち直るまでにはひたすら待つしかない。時の流れがその痛みを和らげるまでただ待つしかないのだ。考えようによつては生きるといふことは誰かの死を横目で見ながら忘れていくことの繰り返しなのかもしれない。それは何度経験しても決して慣れることはない。しかし、長く生きるといふのはそういうことなのだ。

チャンがこちらの顔を窺いながら呟く。

「ここも真新しい墓が多いですね」

「ああ。そつだな……」

「沢山のお墓があるけど中にはもう誰にもケアして貰えないものもあるんでしょね」

バカみたいに人が死んでいく時代において墓を守る人間が途絶え

てしまうなんてことは珍しくない。

「それは仕方が無いさ。そもそも墓というものは死んだ本人の為に作るもんじゃない。どちらかといえば残された人間の為のものだ」

「でもそれも寂しいですよ。お墓だけが残るなんて」

残念ながらこの墓もいずれはそうなるだろう。両親と妹を失ったナミには親戚ですら他人だったという。その彼女まで居なくなってしまうってはこの不幸な一家を知る者はいずれ存在しなくなる…。

チャンは隣の墓に目をやった。そして供花に目を細める。

「アンカーさんは花を供えに来年もここへ来るんですよね？」

「いいや。定期的に花を届けるなんて真似はしない。俺は花屋じゃないからな」

「……またそんな冷たいことを」

そう言ってチャンは呆れたように首を振る。だが、本当にそんなつもりはないのだ。亡くなった人間の為にいちいち墓参りをしていたら、そのうち毎日が命日になってしまうだろう。特に自分の場合は…。

彼女と過ごした時間はあまりに短いものだった。それだけに彼女を愛していたかと問われればそれを肯定する自信はなかった。特別な存在というものがいつまでも特別であり続ける保証なんて無い。それは経験上、厭というほど思い知らされている。

「行くぞ。少年」

もう二度とここへ来ることはないだろう……そう思いながら墓地を後にした。

* * *

墓地を出て教会近くに停めてあった車に乗り込もうとした時だった。見覚えのあるシルエットに足が止まった。

（イタチ男……このタイミングで現れるか）

もはや驚きを通り越して呆れるしかない。チャンもイタチ男の姿を見つけて立ち止まる。

イタチ男はいつものようにスーツケースを片手にゆっくりとこちらに歩み寄る。

取り敢えず文句のひとつも言っておく。

「カナダに遠征したが酷い目にあつたぞ。あんたがスポンサーでなければぶっ飛ばしているところだ」

するとイタチ男は瞬きをして「ほお」と、ひとつ返事を返した。チャンはイタチ男とこちらを見比べながら首を捻る。

「どうしてこんな場所に……もしかしてナミさんの弔いに？」

イタチ男のことはチャンには少ししか話していなかったのだ。

イタチ男はチャンの言葉を無視して言った。

「想定外だった。ヘーラーの動きは予想よりも、早い。急がなければならぬ」

いつもは無表情なイタチ男が珍しくイラついているように見える。だが、こちらにも都合があるというものだ。今はとても仕事をする気分にはなれない。

「だからどうした。悪いがしばらく休養させてもらおう」

そう断りを入れるとイタチ男は眉間にしわを寄せて続けた。

「インド洋の津波。あれは彼等の仕業だ」

イタチ男の突拍子もない言葉に呆れてしまった。

「バカな。何を根拠に……」

「一昨日の山崩れ。あれも彼等によるものだ」

「山崩れというのはチベットの何か？」

埋葬のことで忙しくてここ数日、世間の動きはほとんど把握していないが、チベットで大規模な山崩れがあつたことは知っている。昨日はそのニュースで持ちきりだった。

「そうだ。あれは地震なんかではない」

イタチ男はそう断言する。だが詳しい原因はまだ解明されていないはずだ。それにインド洋の津波にしたって未だに諸説入り乱れて

いる状態だ。

イタチ男は自らの端末を取り出して何やら操作をする。

「これを見る。一目瞭然だ」

そう言っただけで彼が送ってきた映像を自分の端末で確認する。

(こ、これは……)

映像は上空から撮影したもののようだ。どこかの山のようだが、よく見ると山の右側が抉り取られているようにも見える。その隣には真新しいクレーターのような窪みが出来ている。映像は拡大・回転が出来るようだ。しかも3D…。

「これはクロウリーで撮影したものだな？」

イタチ男は頷く。

「そうだ。これはヘーラーの攻撃。津波も同様だ」

「馬鹿を言え。仮にこれが自然災害でないとしたらどんな攻撃だ？」

レーザー核融合を使用したとでも？」

そこでチャンが口を挟む。

「その人が言っていることは、あなたが絵空事ではないかもしれないよ。今、ネット上ではインド洋の津波もチベットの山崩れも隕石の落下が原因だっという説が注目されています」

「おいおい少年。まさか、ヘーラーは隕石をも操るってことか？」

「いえ、そうとは言えませんが、少なくとも短期間に二度も隕石が落下するとは考えにくいでしょう」

チャンの言葉にイタチ男が大きく頷く。

「その通りだ。偶然ではない。それらは人為的なもの。一回目はテスト。そして二回目で彼等は成功した。バベルにとって最重要施設を破壊することに」

言っている意味が分からない。思わず疑問を口にする。

「最重要施設だと？ まさかバベルの施設がチベットの山奥にあったというのか？」

その質問にイタチ男はまたしても頷く。

「そうだ。彼等は破壊した。バベルの塔を」

(なっ!？ バベルの塔……)

思わず声を失った。

イタチ男は続ける。

「組織が山頂をくりぬいて秘かに建設した塔を、彼等は周辺の山」と吹き飛ばしたのだ。驚くべき精度だ」

(バベルの塔。重要施設。まさか……発射台か！)

そこでチャンの顔を見ながらその推測を口にしてみた。

「バベルの重要施設。つまり発射台か」

そしてイタチ男の反応を窺う。するとイタチ男は表情を変えずに頷く。

「よく分かったな。そうだ。バベルの塔は発射台なのだ。組織の計画には必要不可欠。宇宙に資材を打ち上げる為に」

チャンの仮説は正しかった。らせん状の加速装置は資材を打ち上げる為のものだったのだ…。

「驚いたな。バベルは自前でそんなものを用意していたのか？」

「そうだ。とはいえモデルはあったのだ」

すかさずチャンが口を開く。

「イラン奥地のジークリッド」

イタチ男はちらりとチャンの顔を見て頷く。

「知っていたのか。なるほど。あれを見れば大体の想像はつくだろう」

チャンはイタチ男を睨みながら言う。

「とんでもない！ まったく理解に苦しみます。あれは何なんですか？」

ちよつと間を置いてイタチ男が口を開く。

「神の創造。先人に習っただけだ」

(……なんと愚かなことを)

我々は絶句した。チャンがイランで見たバベルの塔。あの忌まわしき痕跡から想像される古の蛮行が繰り返されようとしているのか…。

イタチ男は我々の反応などお構いなしに話を続ける。

「宇宙空間に神を創ること。それが組織の最終目的だ。その為には低軌道上を完全に支配しなければならぬ。なんぴたりとも神に触れることは許されないのだ」

「クロウリーを乗っ取ったのもその一貫か」

「恐らくそういうことだろう。しかし計画の完遂にはあと数年は要するはず。軌道衛星の建設は準備段階にすぎない。それに肝心の神がまだ完成していない」

「……あんた等の言う『神』って奴はひょっとして脳みそのバケモノのことか？」

「そうだ。先人が創った神は108の脳が結合した集合体だったという」

突然、教会の鐘が鳴り出した。腹の底から尻の穴に抜けるような響き。その低く荘厳な音色は、まるでバベルの愚行を戒めようとしているようだ。

鐘が鳴り終わるのを待ってチャンがイタチ男を問い詰める。

「狂ってる！ 脳を結合するだって？ なんでそんな無意味なことをするんだよ！」

チャンはいまにも掴みかからんという勢いでイタチ男を睨み付ける。が、イタチ男は冷静に答える。

「確かに。彼等の方向性は間違っている。だから我々は組織と距離を置いた」

(我々？ 単独ではないのか？)

ふとそんな疑問を持った。だが、イタチ男は一方的に話を打ち切ると我々に背中を向けた。その背中にチャンが罵声を浴びせる。

「待てよ！ この変態野郎！ お前らみんな頭がおかしいよ！」

そこでイタチ男が振り向く。

「月に行け。答えはそこにある」

彼は強い口調でそう言った。

「お断りだ」

唐突な命令にそう反発してみたのだが、イタチ男は意外そうな顔を
をする。

「なぜ？」

「ビールが飲めない所には行かない主義なんでね。月面基地は炭酸
飲料が禁止なんだろう？」

二酸化炭素量を厳密にコントロールする月面基地では炭酸飲料な
どもつてのほかなのだ。

「もう一度言う。月へ行け。そしてケリをつけて来い」

イタチ男はそう言うが月に降り立つには資格が要る。少なくとも
3カ月、国際宇宙開発センターで適正検査と訓練を受けなくてはな
らないのだ。

「そんなに暇じゃないんでね。遠慮しておくよ」

「いや。既に審査は済んでいる。登録もしておいた。後はガラパゴ
ス・フロートに行けば直ぐ通してくれる」

「そんなことを頼んだ覚えはないんだがな……」

ガラパゴス・フロートといえば軌道エレベーターの発着場だ。イ
タチ男は自分を月に送り込むつもりで準備をしておいたということ
か。

イタチ男は自分の車に乗り込む前に付け足した。

「カウントダウンはもう始まっている」

（やれやれ。どこかで聞いたような台詞だな……）

思わず苦笑した。が、彼の言うカウントダウンはもしかすると本
当にのっぴきならない状況を指しているのかもしれない。それはヘ
ーラーの計画が最終段階に入ったということなのだろうか…。

* * *

2049年に月面基地が完成して今年で三十周年になるとい
う。そこに至るまでの過程を一言で表現すれば、それは大国の思惑によ

る『妥協の産物』だ。その始まりは20世紀の米国・ソ連による宇宙開発競争に遡る。その後、両国の政治経済の変化を背景に月へ向かうモチベーションは大きく低下してしまった。この時点では投資額に見合うだけの魅力が月に見出せなかったのである。一方、2010年に完成した国際宇宙ステーション（ISS）は最終的に2025年まで現役を続けたが、結果的にこのプロジェクトに参加することが出来なかったC国とインドの闘志に火をつけることとなってしまった。彼等は独自に宇宙空間への進出に執念を燃やし、月面への到達を競い合ったのである。

だが、ここでスペース・デブリ問題が一気に深刻化してしまう。スペース・デブリとは宇宙空間に放置された廃棄衛星や切り離されたロケットブースターの残骸などのことであるが、2031年にEUが保有する軌道衛星がこれに衝突して機能不全に陥るという事態が発生したのだ。翌年には米国の通信衛星が破損、また退役したISSの不要なパーツが不法投棄されていたことが発覚した。それを受けてスペース・デブリの実態調査が本格的に実施され、その危険性が想像以上であることに各国は衝撃を受けた。そして『スペース・デブリに関する国際条約』によってロケットの打ち上げ等が制限されることになったのである。この条約によってC国とインドの宇宙開発熱もいったんは沈静化したようにみえた。しかし2037年に実用化された軌道エレベーターが新たな局面を開くこととなる。

ロケットの打ち上げよりも圧倒的にコストパフォーマンスに優れる軌道エレベーターは条約の後盾もあり、短期間に世界中の打ち上げを独占的に請け負うことに成功した。その開発・運営は米国の民間会社『スペース・ブリッジ』社が行っていたのだが、それに目を付けたC国は国家予算を投じてブリッジ社の株式を買占めた。それに対抗するために米国がSブリッジ社に必要な第三者割増増資をさせた結果、世界中の資本が流入して、軌道エレベーターの開発・改良をさらに促すこととなった。そして2043年には軌道エレベーターの宇宙側発着場が拡張を重ねて『軌道ステーション』が

完成したのである。

軌道ステーションの存在は各国の月への進出を強力に後押しすることになった。なぜなら従来は地球上から月へ行くまでに多大なエネルギーを消費していたのだが、これが完全に解消したからである。これは非常に大きい。時速28000キロメートルで軌道を周回する軌道ステーションから遠心力を利用して宇宙船を打ち出すことで月への道のりはぐっと短縮される。これらのコンテナ・プレーンのおかげで人類は月への資材運搬という手段を手に入れることが出来たのである。

このような下地があつて月面基地が現実のものとなつたわけである。

* * *

ガラパゴス・フロートにはチャンが見送りに来てくれた。

スペース・ブリッジ社が運営する軌道エレベーターの発着場はガラパゴス諸島に作られた巨大な人工浮遊島^{メガフロート}にある。進化論や世界遺産で有名なこの地に軌道エレベーターを建設することには多くの抵抗があつたものの、エクアドル政府の強い意志によつてこの巨大プロジェクトは実行されたのである。

この発着場には軌道ステーションまでの観光客と各国の技術者が世界中から集まる。そのおかげで出発ロビーはまさに人種のるつぼだ。

チャンが物珍しそうに辺りを見回して感心する。

「思ったより凄い人の数ですね。これじゃあ警備する方も大変だろ
うなあ」

確かに警備ロボットの数が半端ではない。過剰とも非難されるテロ対策の体制ではあるが場所柄それも止むを得ないところだ。

チャンがクスリと笑いを漏らす。

「けど、こんな敵戒態勢でもアンカーさんみたいな危険人物はスルーなんですな」

「言ってくれるな、少年」

「お願いしますよ。人類の命運がかかってるんですから」

「よせよ。そんな大げさな」

するとチャンは真顔で首を振る。

「いいえ。ヘーラーを止められるのはアンカーさんしかいません」

いまだに半信半疑ではあるものの、イタチ男が指摘したヘーラーの手による『カウントダウン』は確実に進行しているようだ。現にここに移動するまでの一週間、米国とC国で立て続けに大地震が発生した。表向きは『地震』だが、もはやそれが自然的に発生したものでないことは明白だ。

(ヘーラーによる攻撃……)

果たしてそれがイタチ男の示唆するように宇宙空間からの攻撃によるものなのか、それを確かめなくてはならない。

出発の時間が近付いてきた。

「そろそろだな。それじゃ行ってくる。ひょっとしたら片道キップかもしれないが」

半分は冗談、残りは本音だ。

それを聞いて心配するチャンに尋ねた。

「少年。これからどうするつもりだ？」

NYの住処は、ほとぼりが冷めるまでは使えない。また、サアラとはカナダで別れたきりだ。それにチャンが望んだとしてもバベルに所属するサアラと行動を共にするのも難しいだろう。

が、チャンは意外にもサバサバした表情で答える。

「大丈夫です。もう決めました。僕は精一杯あがいてやろうと思います。例えばこの世界がどんなに酷いものになっても。せいぜい最後の瞬間まで生き残ることに執着してやりますよ」

それを聞いてサアラの言葉を思い出した。彼女も同じようなことを言っていた。

「なるほど……いい返事だ。自分の意思で生きる、か」
「はい」

「少年。成長したな。誰かの命令で動いているうちはまだまだヒョッコだ。だが自分自身で考えて行動する。そして結果がどうであれそれを甘んじて受け入れることが出来るようになったなら……お前さんはもう立派な男だ」

「……はい」

チャンの目に涙が浮かんだ。

「いつまでも『少年』は、無いな。もう会うことはないかもしれんが、せいぜい頑張つて生きろよ。少年」

チャンは唇を噛んで笑顔を作った。

「何言ってるんですか。ほら。また『少年』って言ったし」

「ああ。すっかりクセになつてしまつたようだ」

恐らくこの別れが最後になることは互いに予感していた。今度はかりは生きて帰ってくる自信が無い。それに大津波、山崩れ、二度の大地震で『世界の終わり』に対する世間の不安は急速に拡大している。どちらの境遇も予断を許さない。

「じゃあな。チャン・バステン」

そう最後に声を掛けて出発ゲートに向かう。

背中にチャンの視線を感じながら…。

第44話 月面基地

軌道ステーションまでは最高時速1200km、28時間をかけて昇ることになる。

定員60名のエレベーター内部はちょっとしたバーのような趣で、そのスペースを囲むように人数分の座席が窓に向かって配置されている。座席はリクライニングシートになっていて飛行機のファーストクラスにも引けをとらない。

最初の1時間はベルトを締めて座席で待機。その後、速度が安定したところで自由に室内を歩き来できるようになった。

その途端に隣席のアメリカ人が興奮して窓にかぶりつく。

「こ、こ、これは絶景だ！」

太った男は妻らしき女性の袖をしきりに引つ張って景色を見るよう促した。が、女性の方は高所恐怖症とみえてあまり乗り気ではない。

「ほら！ スザンヌ！ 凄い！ 凄いよ！」

「もうジェームスたら。分かったわ。分かったからもう少し静かにして」

「そんなこと言ったってほら！」

そんな調子でテンションが上がっているのはお隣だけではない。あちこちで感嘆の声や歓声が聞かれる。

「素晴らしい！ 今度はあっちに行ってみよう！」

そう言っただけでジェームスは反対側の窓に向かう。このエレベーターは円形なので場所を変えれば360度、地上を見渡すことが出来るのだ。その様子を目で追っているとスザンヌと呼ばれた女性と目が合った。彼女は（主人が騒がしくてすみませんね）といった風に苦笑いを浮かべる。軽い笑顔を返して座席に深くもたれる。そしてナミのことを思い出した。

C国行きの機中でナミは『Fly me to the moon

ん』を口ずさみながら「私も月に行ってみたい」と呟いた。あの時は「月になんて何も無いさ」と応えたものの、今自分はこうして月に向かっている。

（もし彼女が生きていたら一緒に付いてきたらどうか……）

水割りをチビチビやりながら、しばらく彼女のことを考えていた。しかし酒をストローで飲むというのも妙な話だ。恐らく微少重力下で液体が飛び出すのを防止する為なのだろう。が、まだ半分も上昇していない。せめて重力が十分の一になるまでは好きなようにさせて欲しいものだ。

ふと視線を移すと窓の外で地平線が微かに丸みを帯びるのに気付いた。この高さでは海が一枚布のように見える。それはシワが寄った紺色のカーテンに似ている。また色の濃淡がくつきり仕分けされている様がよく分かる。恐らく雲の厚みと形によって地表に到達する日の光に差が出るのだろう。一方、海岸線では茶色と緑の連合軍が懸命に青の侵食を受け止めている。だがそれは、ちよつと大きな津波があれば簡単に突破されそうでもとない。その防波堤の奥には錆びた銅版のような赤茶けた大地が少々。さらには幾つもの白い筋が黒の輪郭を伴って険しい山々の存在を知らしめている。恐らく白い部分は雪、そして灰色っぽい箇所は町なのだろう。こうしてみると人間の領域など実にちっぽけなものだ……。

かなりの速度で上昇しているはずなのだが窓から臨む光景に変化が見られなくなってきた。他の乗客達も景色を眺めるのに飽きてしまったようで室内は随分と落ち着いてきた。

（さて。少しぐらいは情報を仕込んでおくかな……）

何しろ予備知識ゼロで宇宙に送り込まれてしまうのだ。イタチ男が勝手に手続きをしてしまったせいでガイドスだとか訓練だとかは一切、受けていない。流星に初めての宇宙でそれもまずかろうと備え付けのモニターで『初心者の方へ』のメニューを開く。だが、その内容はあまりにも退屈で直ぐに眠たくなってきた……

『到着まで約2時間です……』

そのアナウンスで目が覚めた。いや、正確には少し前からとうとうとしていた。異様に心地よい空間に包まれて現実と夢の間を行ったり来たりしていたのだ。

姿勢を正して周りの様子を探る。

(……身体が軽いな)

もう重力がほとんど感じられない。その一方で身体の変化に気付く。まず、妙に顔がむくむ。熱っぽい。そして鼻が詰まる。

(ガイドンス通りだな)

そこではたと気付いた。身体を傾けてもその感覚が無い。試しに反対方向に傾ける。やはり同じだ。

……方向感覚が失われている。というよりそれが無いのだ。それに気付いてしまうとどちらが下でどちらが上なのか急に自信が無くなってくる。

(妙な気分だ)

それに方向感覚が無いと自らの身体と空間の境界線が曖昧になってくる。この場所に居るようで居ないような感覚とでもいおうか。座ったままなのに自分の身体があるべき場所に収まらない……。

飲み物を取ろうと手を伸ばす。腕の重さが感じられない。腕を上げるのにまったく力を必要としないのだ。油断すると必要以上に手を突き出してしまうような感触だ。これはまさにガイドンスにあった『微小重力下ではひとつひとつの動作が非常に重要になってきます』という注意事項そのものだ。今更ながらその情報の重要性を思い知る。確か『慌てず落ち着いて、ひとつひとつの動作をゆっくり区切って行いましょう』というくだりもあった。あの部分はこれのことを言っていたのか……。

微小重力の世界に触れて、はしゃいでいた乗客達もようやく事の

重大さに気付いたのか室内は微妙な緊張感に包まれた。自分の座席に戻ろうとしていた人間が大げさに躓く。そして照れ笑いを浮かべながら歩き出そうとしてまた体勢を崩す。恐らく『歩く』という無意識の行為ですら油断するついでに床を強く蹴ってしまうのだろう。それを見て必要以上に多く備え付けられた『手すり』はこれの為だったのかと初めて気付かされる。

水割りの入ったカップの蓋を開けてみる。

(これは……)

カップの中では飲みかけの水割りが、まるで水中に出来た大きな気泡のように腰を浮かせてフルフルと震えていた。

窓の外に目を移すと地球の輪郭がはつきりと捉えられる。白く薄い雲を幾重にも纏った紺色は、その下に無数の生命を包括しているとは思えないぐらいに無機質に感じられた。そのせいかリアルタイムで見ているはずなのに静止画像を眺めているようだ。

(まさか肉眼でこれを見る日が来るとは思わなかったな……)

エレベーターは慎重に減速しながら軌道ステーションを目指す。慣性で乗客が天井に頭をぶつけないようにする為だ。

到着まであと1時間半。少し気を引き締める。

(ここからは未知なる領域だ……)

* * *

エレベーターを降りた我々新参者は真っ直ぐに別室に送られた。そこで『必要な手続き』を取らなければならないというのだ。それが具体的にどういうものかは皆知っているようだった。

軌道ステーションに到着した乗客が最初に受ける洗礼は殺菌処理である。出発前にも懇切丁寧な浣腸と遠慮の無い殺菌処理をされたのだが、ここでは一人ずつ狭い箱に押し込められさらに執拗な除菌を施される。大抵の人間は、まるで自分がバイキンにでもなったよう

な気分になるといふがそれは本当だった。また、メデイカルチェックも徹底している。特に抗生ウイルスを持っていないかのチェックは念入りにされた。だがこれらをすべて受けないとステーション内を自由に歩き回ることもままならないのだ。

2時間近くを要してようやく最初の関門をクリアした。しかし、ステーション止まりの観光客はまだいい。月面基地へ向かう人間はさらにまた2日間のメデイカルチェックが待っているのだ。そう考えると心底うんざりした。

(やれやれ。ホテルでのんびり出来る連中が羨ましいもんだ)

そこで尿意を催したのでトイレを探した。

トイレの使い方は、初心者向けガイドでは最初に紹介されていた項目だ。それはある意味、誰もが避けて通れない問題。なので、バキュームで吸わせるのが基本ということは学んでいた。だが、実際にやってみるとこれが結構、難しい。微少重力下では身体を安定させるのにも一苦労する。それに下という感覚が完全に失われているので、本当にここで出してよいものか迷う。

(排泄ごときに不安になってしまふとはな……)

宇宙のトイレでは男といえども立つたままで用を足すことは出来ない。お行儀よく座つてことを済ませなければならぬのだ。

便座に座ると使用者の体型に合わせて穴の位置と大きさが自動的に調整される。そして前方から筒が伸びてきてサオをすっぽり収めてしまふ。そこでバキューム開始という手際の良さだ。さすがにこの一連の動きにはぎよつとした。

(何だこりゃ!)

『POW』のダイヤルは吸引力の強弱を調整出来るらしい。その隣の『SIZE』のダイヤルは筒の大きさを変えられるのだから……これは余計なお世話だ!

(しかし、すつきりとは程遠いな)

何だかオムツのお世話になったような感触でどうもしっくり来ない。これも慣れるしかないのだから先が思いやられる。

トイレを出たところで係官がすつと寄ってきた。

この係官はICCA（国際宇宙管理機構）が直轄する軍隊に所属する。彼等は月面基地を含む宇宙空間で唯一の軍隊である。その権限は絶大で例え大国の意向といえども彼等をコントロールするとは出来ない、と言われている。あくまでも表向きだが。

青地に白の係官の軍服には何やらごちゃごちゃと付属品が満載されている。どんな時にそれを使うのかは知らないが武装していることは間違いない。

係官は耳元で囁いた。

「ミスター・カイドウ。こちらへ」

その声を掛けられて一寸、躊躇した。

（まさかもう目をつけられているのか？）

係官は軽く周囲を警戒しながら言う。

「ミスター・インプウから命令されています。貴方を大至急、送り届けるように」

「……なるほど。手配済みというわけか」

「急いでください。時間ありません」

着いて早々にただ事ではない雰囲気だ。止む無く係官に急かされて別ルートに向かうことにした。

* * *

月までの移動はコンテナ・プレインの定期便に一本化されている。これは月面基地への出入りを一元管理する為に設けられた国際ルールだ。したがって他のルートはすべて不法侵入として扱われてしまう。ここで法を犯した国はペナルティとして軌道ステーション及び月面基地の使用を全面的に禁じられてしまうので、どの国もこのルールに従わざるを得ないのだ。

コンテナ・プレインは軌道ステーションの発射口から遠心力を利

用して打ち出される。その後80分間加速を続け5時間かけて月に到達する。その際には軌道ステーションから月までレーザーを照射、予めプレーンの進むコースと位置を計算して障害物に衝突しないようにタイミングを見計らって発射される。正確には月まで飛行させるといふよりは月に向かつて大砲をぶっ放すのに近い。

全長48メートルのコンテナ・プレーンは胴長のラグビーボールの下部に小さな羽を6枚つけたような形状をしている。もともと物資の運搬に重きを置かれているので定員は12名と少ない。そのうち操縦士は一名。操縦といっても殆どが自動なので特に問題は無いらしい。その点はワンマンバスに乗っているのと変わらない。月に行くといふのに何だか緊張感が足りないように感じられるのはそのせいかもしれない。

こうして特に意気込む訳でもなく淡々と月まで来てしまった。

地球から38万キロも離れてしまったという実感はまるで無い。ただ、船外の光景にはやはり目を見張るものがある。

(これが近くで見た月か……)

左手に太陽光を直に浴びた球面はなぜか女の白い肌を連想させた。月と女は良く似ている。その裏側は決して見えないという点において

有名な歌の一節を思い出す。しかし実際に周回軌道に入ってから、その印象は幻想に過ぎないと思ひ直した。高度100キロから見下ろす月面は、まるで何百年もかけて錆付いた鉄球の表面のように見えた。それは美しさとは程遠い。そこに広がるのは灰色のグラデュエーションのみで構成された静寂の世界に過ぎない。窪んだ部分と隆起した部分の境界は曖昧でそれぞれのスケールがいまひとつ把握できなかった。平坦ではないが変化に富むわけでもない。それは電子顕微鏡で見る細菌の表面を連想させた。

そんなことを考えながら船外の景色を眺めていると隣の男が急に話しかけてきた。眠っているとはかり思っていたのだが…。

「お前さん、月は初めてかい？」

「ああ」

「どうだい。見事に何も無いだろう。まあ、すぐに分かると思うがロクな所じゃない」

「そう言うあんたは？」

「8回目かな。出稼ぎでね。半年働いては半年休む。なんだかんだ言っただけの稼ぎは悪くないからな。それに身体が楽なんだ。重力が少ないからな。地球でのんびり過ごしても一ヶ月もすればここでの生活に戻りたくなるんだ」

男の年齢は40代半ばぐらい。よく日焼けした顔つきはスペイン人っぽい。聞けばやはりそうだと云う。

「俺の故郷のムルシア州じゃロクな仕事が無い。海面上昇でマール・メノール潟がやられちまってからは酷いもんさ」

マール・メノール潟といえば半月型の巨大な海水湖として以前はその名を知られていた。特に、砂州によって地中海と仕切られたこの海水湖が海面上昇によって失われてしまった時にはまるで世界の終わりが始まったといわんばかりにマスコミによく取り上げられていた。だが、今やそんな事例は珍しくもない。気の毒だとは思おうが……。

その時、プレーンが着陸態勢に入ったというアナウンスが流れた。見ると、前方に人工物らしき場所が判別できる。緑っぽい色の半球。それはまるで砂漠の真ん中に放置されたカプセルのように見えた。

(あれがゼロ号基地か……)

いよいよ月面に降り立つ。

* * *

コンテナ・プレーンは予定通りの時間に月面のゼロ号基地に着陸した。

ほんの僅かではあるがここには重力が存在する。だが、ほっとし

た。正直言っつてずっと落ち着かなかつたのだ。まさか重力が恋しくなるとは思っつてもみなかつた。「失つてから初めてそのありがたみが分かる」とは良く言つたものだ。

ゼロ号基地は文字通り最初に作られた月面基地だ。また、月面唯一の宇宙船の発着場でもありICCA（国際宇宙管理機構）の本拠地でもある。したがつて月を訪れる人間は必ずこの玄関を通ることになる。そのためゼロ号基地には病院などの施設が集中しているだけでなく商業的にも月面世界の中核として機能しているのだ。

言つまでも無く月は死の世界である。その表面には生物を養うだけの水も酸素もない。ゼロ号基地の初代キャプテンであるロベルト・ワーズバーグの名言を借りるまでもなく「宇宙は何も無いように見えて水素と放射能だらけ」なのだ。そこで月面基地は半径数百メートルのクレーターを強化ガラスでドーム型に覆う形で作られる。次に地面を掘り下げ、さらに放射能対策をしたうえで居住空間が設けられる。その際には水と植物の循環が最重要視される。いわば『小さな地球』をドーム内に再現するのだ。

こうやつて作られた月面基地の数は現在で19。米国の7つは別格としても主要国はそれぞれ独自の基地を持ち、月面でのレアメタル採掘や月面でしか作れない製造物、例えば高純度の人造ダイヤやナノマシンの工場を設けている。

コンテナ・プレーンで話をしたスペイン人はその第6基地の工場で働くことになっているそうだ。

「俺は一日休んでから第6基地に行くことになつてゐる。それまでは暇なんでどうだい。良かったら案内するぜ」

ゼロ号基地のドーム内を歩きながらスペイン人の男はそう誘つてくれた。だが、自分は行くところがある。先ほど入管手続きの際に係官からの指示が端末に来たのだ。

「せつかくの申し出だが、あいにく予定が詰まつていてね。悪いがこのあと直ぐに人に会わなければならぬんだ」

「そうか。そりゃ残念だ。色々案内してやりたかつたんだがな。遊

ぶところとかよ」

男はそう言うが、とてもそんな場所があるようには思えなかった。なぜならドーム内部に作られた都市は整然とした緑地に未来都市のような建物で構成されていて完璧に統括されているように思えたからだ。

「まるで味気の無い町並みだな。完璧すぎるといつかロボットの国にでも迷い込んでしまったような雰囲気だ」

素直な感想を漏らすと男は小指を立ててニヤリと笑う。

「あるところにはあるのさ。所詮、人が住むところには自然とそういうものが出来る。自然の摂理って奴さ」

「なるほどな。ところで何で建物がみんなキノコ型なんだ？」

と、素朴な疑問をぶつけてみた。

「ああ。それはスペースを有効に使う為だよ。多分な」

「高層の箱物を密集させた方が容積率は上がるんじゃないか？」

「どうだろう。だけど重力が小さいからこそああいうのが建てられるじゃねえかな」

男にもその理由はよく分からないらしいが『椎茸』のような建物が互いに重なりながら並ぶ様はちよつと異様に思えた。もともと緑の占める面積が多い中でキノコが立ち並ぶというのは、まるつきりファンタジーの世界だ。まるで自分がゴブリンになってキノコの町を散策しているような感覚だ。それは空、正確には天井が青緑色をしているせいもあるのだろう。だが、道行く人々は特に気にするでもなく軽いステップを踏みながら器用に歩いている。彼等はまるで水中でジャンプするかのように身体を宙に投げ出してはゆっくり着地というのを繰り返して前に進む。歩き方を見れば月での経験の差が一目瞭然だ。かくいう自分も初心者に過ぎないので不恰好なステップをするぐらいなら『すり足』で歩くことを選択するのだが。

「それじゃ俺は飯でも食って安ホテルで一休みするよ」

男はそう言って手を上げた。

「ああ。それじゃ」

軽く挨拶を返してそこで男と別れる。そして目的の場所に向かった。

* * *

指定された場所はドームの中心から離れたところにあった。周りにはまるで人の気配が無い。見たところ工場というより倉庫街のよな場所だ。

しばらくすると端末に人の反応が表示された。月面でも端末機能の幾つかは使えるようだ。

「ミスター・カイドウ。お待ちせしました」

そこに現れた男は英語で話しかけてきた。

「随分と寂しい場所に呼び出したもんだな」

「それは失礼しました。ですが止むを得ません。あなたの存在は極秘なので」

そう詫びる男はICCAの軍服を着ている。同じICCAでも軌道ステーションや月面エントランスの係官のそれが青地に白であったのに対し、この男のは薄い紫色を基調にしている。

「こんなものをぶら下げて極秘も何もないだろう」

そう言つて左手首につけられた『輪つか』を示す。月に降り立つと同時に装着されたこれは恐らく所在確認の為のものだろう。ICCAがすべての人間を管理下に置く為に。

それを見て係官の男は苦笑する。

「申し訳ありません。一応、決まりなので……」

「まあ仕方が無い。それは諦めるとして、俺はこれからどうすればいいんだ？」

どうせこの係官もイタチ男の指示を受けているのだろう。

「はい。ミスター・カイドウにはこれから月面の裏に行って頂きませぬ。」

「月面の裏だと？ 何も無いところじゃないか」

「はい。表向きは未開発区域になっています。ですが一箇所だけアメリカがひた隠しにしている場所があるのです」

「……その噂は知っている。だが、そこに何があるんだ？」

「え？ ミスター・インプウからお聞きになつていいるのではなかつたのですか？」

「予備知識無しに放り込まれたもんでね。文字通り右も左も分からないんだ」

「それは困りましたね。しかしこれは命令ですから。ご案内するしかありません」

アメリカが隠匿する場所……イタチ男が自分をそこに誘導しようとするからには何か理由があるのだ。そしてそれにはヘーラーが関与している。

係官は表情を引き締める。

「一刻の猶予もありません。間もなく突入の時間です」
思わず聞き返す。

「突入だと？ 誰が？」

「我々バベルの精鋭部隊が封鎖地区に」

「ちよつと待て。まったく状況が掴めないんだが」

「私も詳細は知らされていません。ですが後で説明致します。とにかく急いでください」

そう言つて係官は力強く背中を押してきた。

(やれやれ。月面基地を見物するどころじゃなさそうだな……)

何の準備をするでもなく、ただ慌しく流れに身を任せるより他はなかつた。

第45話 ラスト・クロップ

係官に導かれるままにゼロ号基地の裏手に回った。

ICCA（国際宇宙管理機構）の印が誇らしげに掲げられた扉を抜けて薄暗い通路を進む。そこからエレベーターで地下に下りて幾つかの扉をくぐる。さらにしばらく進んだところでガラス越しにドックのようなものが見えた。

（地下にこんな所があるのか……）

地下ドックには様々な形の小型船があった。

係官が振り返って説明する。

「ここはICCA専用のドックです。ここから小型船発着場に直接出られるようになってるんです」

「ここまですんなり来られるとはな。これもアンタの役得か」

「本当はまずいんですがね。でも仕方ありません。緊急事態ですから」

「で、俺はどれに乗ればいいんだ？」

「あれです。操縦は私がします」

そう言って係官が指差した小型ロケットはまるで『シユモクザメ』の頭みたいな形をしていた。しかも機体の三分の二はロケットブースターのように見える。

係官がパネルに自らの端末をかざすとシユモクザメ型ロケットが我々の立っている所まで運ばれてきた。そして左手の扉が開く。どうやらこの扉の向こうがボーディング・ブリッジ（搭乗橋）になっているようで、ここから直接ロケットに乗り込むらしい。

係官の案内で小型ロケットに乗り込む。

小型ロケットは4人乗りのようで前方がコクピットになっている。係官は自ら操縦席に座って機器を操作し始めた。その様子を眺めながらふと彼の名を聞いていなかったことを思い出した。

「そつえば名前を聞いていなかったな」

そこで係官が手を止める。

「あ！ それは失礼しました。申し遅れました。自分はクリス・K・サトウと申します。昨年、中尉に昇進しました」

「サトウ……父親は日本人か」

「はい。母はノルウェーの出身です」

「なるほど。いい顔をしている」

確かにクリス中尉は男前と言って差し支え無い。茶色の髪にブラウンの瞳。少し鼻が長いが北欧系の端正な顔つきは母親譲りなのだろう。

クリス中尉の隣に座りながら尋ねる。

「バベルはどれぐらいICCA（国際宇宙管理機構）に食い込んでいるんだ？」

彼は手際よく発進の準備を続けながら答える。

「分かりません。自分が知っているのは5名だけです。ですので実際にどれぐらいの仲間がいるのかは正確には……」

「そうか。ICCAの中でも色んな派閥があるんだろうな」

何しろ宇宙開発を一手に仕切る組織のことだ。当然、各国がスパイを送り込んでいると考えられる。恐らくは幾つもの勢力が水面下で複雑に絡み合っているのだろう。

「お待たせしました。さあ行きましょう。急げば5時間ぐらいで着くはずですよ」

「たった5時間で月の裏側まで飛ぶのか。そいつは早いな」
「では出します」

クリス中尉の操縦で小型ロケットは静かに動き出した。重力が小さいせいか揺れは少ないように感じられた。

まずは機体と搭乗口を繋ぐボーディング・ブリッジを切り離し、ゆっくりとドック内を移動する。そしてシャッターの並ぶ区画まで進む。そのうちのひとつがゆっくり開いてその先に進路をとる。次に機体が入りきったところでシャッターが閉められ、同時に機体が上昇する。どうやらここがエレベーターになっているらしく、ここ

から発着場に向かうようだ。

待っている間に試しに聞いてみた。

「念のために確認しておくが……ICCAの許可は得ているのか？」

「いいえ。全然」

「だろうな……」

それは予想通りの答えだったが納得するしかなかった。今は緊急事態なのだ。

* * *

ゼロ号基地を一步出るとそこは岩と砂漠しか存在しない世界だった。それはまるで夜の底に放置された荒地のように無味乾燥な光景に過ぎなかった。闇に組み敷かれた広大な大地は空虚に満たされている。なにひとつ命の痕跡が無い『死の世界』だ。ここでは時間という存在がまるで無意味なもののように思える。

(まったくワンパターンにも程があるな)

似たような光景が延々と続くことにいい加減うんざりしてきた。

一時間前に見たものと今見えるものに大して違いは無い。とはいえ、そもそも月面世界に個性を求める方が間違っているのかもしれない。なぜなら剥き出しの表面は常に太陽フレアにさらされ、落下物に対してもあまりに無防備だからだ。

太陽光が届かない区域に入ってからにはもつと酷かった。ちょうど深海探索の潜水艇で海底をライトで照らしながら進んでいるような具合だ。まるで同じ所をグルグル回っているような感覚にすら陥る。終わりになきデジャビュという奴だ。

結局、三時間ほど飛んでようやく月の裏側に回り込んだ。しかし、月の裏側も大して代わり映えのしない光景だった。月の自転周期と公転周期はほぼ一致しているので月は常に表側だけを地球に向けて

裏側の素顔を隠している。そのために地球側から月の裏側は観察できない。だが、こうしてみると特に目立った違いがあるわけではない。

そろそろ船外に出る準備をした方が良く、クリスが言うので防護服を着込むことにした。

(……漁師みたいな格好だな)

長靴とズボンが一体化した『つなぎ』を着ながら苦笑する。素材的に多少ゴワゴワするのは止むを得ない。断熱、対放射能などの機能を何層にも織り込んでいるのだろう。膝、腰周り、肘にはそれぞれサイズ調整のベルトが付いているが、ぴったりという訳にはいかない。とはいえ、ここまで完全にガードしなければ外には出られないのだ。

着替えを終えてコクピットに戻るとクリス中尉が緊張気味に告げる。

「まもなく禁止区域に侵入します」

「しかし何でこんな所を立入禁止にするんだ？」

「さあ。我々ICCAの人間ですらその理由は分かりません。ただ、なぜか米国は頑なにここを守り続けてきたんです」

どうして米国はこの場所に他者を近寄らせないのか？ 米国がここに固執するということは何かがあると考えるのが自然だが……。

「他の国はここに興味は無いのか？」

「うーん。どうでしょう。実際のところ、ここまで手が回らないんじゃないでしょうか」

確かに月は広い。恐らく表面を片端から開発していったところで裏面まで到達するには何十年とかかるだろう。

クリス中尉がベルトを締めながら言う。

「これから減速しますのでベルトを締めてください」

月の重力は地球のその六分の一だが慣性は別物だ。加速、減速をすれば普通にGがかかる。

クリス中尉はモニターを指し示して説明する。

「この先にクレバスのような地形があります。その中に仲間の反応はあるのですが、応答がありません。まさか全滅なんてことはないと思いますか」

「おいおい。そんな物騒な所に招待されても困るんだがな」

それに構わずクリス中尉はロケットの進路を調整する。

「仕方ありません。このまま突入します」

(やれやれ。客人の意向は無視か……)

シュモクザメ型ロケットは高度を下げて月面すれすれを飛行した。そして目的のクレバスのような地面の裂け目にゆつくりと侵入した。クリス中尉はここからはメイン・ブースターをオフにして補助ロケットで進むと言った。彼の説明ではこの船体には姿勢を制御すると同時に低速での航行を行う為に上下左右に38もの小型ロケットが備え付けられているというのだ。

「大丈夫です。ここの地形はインプットされていますから。貴方に接触する直前に仲間から送られてきたデータがあるんです」

「この先は随分狭くなっているようだが？」

大地の裂け目は先に進むにつれて急速に幅が狭くなっている。が行き止まりという訳ではなく3Dで見ると一箇所だけ穴のような部分がある。

クリス中尉がモニターを操作しながら感心する。

「これは……空洞になっているんですね。なるほど、これだと外部から見ただけではとても判別できませんね」

「仲間はこの奥か？」

「そのようです。データに従ってコースを取ります」

操縦補助を使ってクリス中尉は慎重に穴の中に侵入を試みる。が、少し入ったところで前方に壁が現れた。

「う！」と、クリスが呻きながら進路を上取る。と、思いきや今度は下に切り返す。その度に大きく揺すられる。

クリス中尉がモニター表示を眺めながら顔をしかめる。

「このアップダウンは……」

どうやら真っ直ぐな穴ではないらしい。しばらく進んでは上へ、そしてまた急降下を余儀なくされる。

クリス中尉は操縦桿を握り締めながら呟く。

「自然の力は凄いですね。こんな洞窟を作ってしまうなんて」

「……本当にそう思うか？」

「え？ だってこれは水が……」

「ここに洞窟を作るだけの水があったとは思えんか？」

「あ！ そうでした。だったらこれはどうやって出来たんでしょう」

「さあな。それに形も不自然だ。穴の大きさが均一すぎる」

「そう言われてみれば……そうですね」

「それとさつき下がった後に急にアップした箇所があっただろう。

あそこを通過した時に気がつかなかったか？」

「……ロケットの出力ですか？ 少し不安定でしたが」

「ガスだ。センサーに二酸化炭素の反応が出ていた。それもかなりの濃度だ」

そう言っている間にも警告音が鳴る。また進行方向正面に障害物があるという表示だ。

クリス中尉はレーダーを見ながら舌打ちする。

「チツ！ また下か！」

目的地まではあと数分で到達出来そうなのだがどうにも落ち着かない。

「この先で仲間の反応があります！」

ようやくゴールが見えてきたようだ。穴のアップダウンも一段落した。周りの地形を見ると穴を抜けたらしい。だが、天井があるということはまだ地下に位置するということなのだろう。

「あ！」と、クリス中尉が声をあげた。その声につられて前方を見る。肉眼で赤い光が確認出来る。

「光……いや」

明かりにしてはゆらゆらと不規則だ。ということとは……。

(炎が出ている……)

外気センサーを見ると確かに酸素の反応がある。

(気温、放射能は?)

気温は7、放射能はゼロ。

(どういうことだ……)

この深度からすれば放射能が無いのは分かる。酸素が存在するの
も理解できる。だが、熱源はどこから来ているのだろうか？ 太陽光
が当たらない時に月面の温度はマイナス150度以下になる。逆に
太陽光が当たる時は120度を超えるが空気が無いので熱は反射で
しか伝わらない。それなのにこんな地下深くの洞窟がどういう原理
で温められているのか？

クリス中尉が眉間にシワを寄せる。

「信じられないですね……酸素があるなんて。それも気体の状態で
「閉じ込められているんだろう。恐らく排水管のような形でな」

排水管は真っ直ぐ下に伸びるのではなく、いったん盛り上がって
そこから下に向かう形になっている。そこに溜まった水が蓋をして
匂いが上がってこないようにブロックしているのだ。

「……そうか！ さっきの二酸化炭素ですね」

それにしても自然にこんな環境が作られたのだとすると奇跡だ。

気体が外部に漏れることもなく常温が保たれている。それにこの不
自然に均一な幅の穴……本当にこれらが自然の手によるものなのか
疑わしい。

クリス中尉が着地体勢に入ったことを告げる。

「少し手前で下ります！」

「やはり仲間からの応答は無いのか？」

「……残念ながら。恐らくこの奥に入ってしまったと思われませんが」

「仕方が無い。お前さんはここで待機している。一人で行く」

「いえ。私も同行します！」

「そういう命令を受けているのか？ 俺をここまで送り届けるまで
がお前さんの任務なんじゃないのか？」

そう指摘されてクリス中尉が口ごもる。

「そ、それは……その」

彼の肩に手を乗せて諭す。

「中にケガ人がいるかもしれん。その時はお前さんが運べ」

「……分かりました。では、せめてこれを」

そう言つてクリス大尉が差し出したのはハンド・ガンだった。

それを受け取るかどうか躊躇していると彼は頷いた。

「大丈夫です。これは反動が小さいタイプですから」

「分かった。受け取っておく」

このフワフワした月面でクロックアップがまともに使えるとは思えない。出来れば銃など使いたくはないが……。

その他にも一通りの探索用装備を持たされて、いよいよ船外に出ることになった。

* * *

サメ型ロケットにクリス中尉を残して船外に出た。そして広域ライトで前方を照らしながら慎重に進む。ライトの明かりが届く範囲は20メートルほどだが特に浮遊物などは無く視界は良好。ただし全身を防護服で覆っているせい、外部との接触が無さ過ぎて本当に前に進んでいるのか怪しくなってくる。まるで音の無い暗闇に突然放り込まれてしまったような感覚だ。

まずは先ほど見た炎の正体を探る。

(このロケットは……バベルの突入部隊か)

小型ロケットが二台。右と左にそれぞれ乗り捨てられている。炎を発していたのは左側のもので不時着の時に岩に衝突したらしい。

外気センサーには相変わらず気体の存在を示す数値が点滅している。

(これは……益々妙なことになってきたな)

数値を見る限りはヘルメットを外しても呼吸が出来そうだ。だが無理にチャレンジする必要も無い。とにかく行ける所まで進んでみよう。

乗り捨てられたロケットを離れて奥に進む。しばらくして急に開けた場所に出た。

いったんストップして周囲を警戒する。やはりセンサーの生体反応は無い。ところがさらに百メートルほど進んだところで妙な物体が目に入った。

はじめは脱ぎ捨てられた防護服かと思った。だがそれは違った。

(……死体か)

ひとつ……ではない。右にも左にも……。

ライトの出力を上げて息を飲んだ。手前に6つ、その先にも幾つかの死体が転がっている。それらは一目で死体と分かるぐらい酷く損傷していた。防護服は穴だらけでヘルメットはかなり変形している。血の量も半端ではない。恐らく重力が小さいのに対して血圧がそのままなので出血が激しくなるのだろう。また死体の周りにはもなくマシンガンらしき武器が落ちていて。ということはここで銃撃戦をやったに違いない。だが、最も近くにあった死体の周りを観察していて気付いた。

(これは！？ 爆発物か?)

防護服には銃創が認められたがそれ以上に焼け焦げたような跡があるのだ。

(これじゃまるつきり地上での戦闘と変わらん……)

周りに生体反応がまるで無いところをみるとどうやらトコトンやりあったのだろう。この調子では殆ど生き残りはあるまい。改めて広範囲を照らしてみても息をついた。無味乾燥な光景に敵味方無く防護服の死体が幾つも転がっている。そのシユールな様はサルバドール・ダリが描いた砂漠の絵画を連想させた。

気を取り直して奥に進む。しばらくすると、ぽつんとひとつ、小さな光源が目に入った。

(生き残りがいるのか?)

センサーの反応と合わせて警戒しながら明かりの出所に近づく。すると明かりの中に動くものが混じった。ここからでは逆光になるのだがそれは人影に違いない。

通信をオーブン・コードにして呼びかけてみる。

「誰だ? 生き残りか?」

返事は無い。だが、少し間を置いて思わぬ反応があった。

「よく来たね。アンカー君」

その音声は集音マイクを通じて耳に届いた。一瞬、それが通信によるものなのか外部の音声なのか区別がつかなかった。なぜなら空気の無い所では音は伝わらないからだ。音として伝わってきたということは、やはりこの場所には空気がある…。

「メットを取りたまえ。ここでは不要だ」

今度のはつきり聞こえた。やはりこれは外部音声だ。しかも聞き覚えのある声…。

(……黒神父)

場所が場所だけに多少意外な気はしたが、この件にヘーラーが関与していることは分かっていたので特に驚きはしなかった。ただ、なぜ奴は自分がここに来ることを知っていたのだろうか?

黒神父の様子を見る限りここは特別な場所のようなのでメットを取ることにした。

「歓迎してくれるのは光栄だが……なぜ俺がここへ来るのを知っている?」

「君がゼロ号基地に到着したという報告は受けている。そしてバベルの案内でここに向かったこともな。なにもICCAに入り込んでいるのはバベルだけではないのだよ」

「やれやれ。世間は狭いな」

そう言って軽く首を竦める。

すると黒神父は突然大げさに両手を広げた。

「ようこそ。パライゾへ!」

「フン。何がパライゾだ。何だ。このイカサマみたいな場所は？」

「驚いたかね？ 私も初めは信じられなかったよ」

「……あんたらが作ったんじゃないのか？」

黒神父はゆっくりと首を振る。

「まさか。我々がここに到達したのはごく最近の話だ。ここは偉大な先人の遺産なのだよ。そうだな。明かりを点けよう。そうすれば君にも良く見えるだろう」

そう言つて黒神父はこちらに背中を向けると屈んで何かをいじりような動作を見せた。すると次の瞬間、明かりの範囲が一気に広がった。

（この光りは……チャンが見つけたバベルの塔と同じ原理か）

まるでどこかの神殿に紛れ込んでしまったような気がした。目の前に出現した舞台でまず目を引いたのは太い円柱に囲まれた一角だった。その中心に黒神父が立っている。その背後には大小様々な瘤がびっしり生えた一枚岩が鎮座している。よく見ると黒神父の足元には機械類が山積みされている。

「さつきは『先人』と言つたな。イランでも似たようなものを見たな」

それを聞いて黒神父は感心する。

「ほほう。君も見たことがあるのかね。私は見たことがないのだが噂には聞いている」

「個人的にはあまり信用したくはないが現物を見せ付けられるとな

……否定することは難しい」

「それは私とて同じだよ。だが、実際にそれに触れてみると分かる。偉大なる先人達の技術は我々の理解を遥かに超えている」

「確かにこここの作りひとつとっても大したものだ。しかし、意味が分からない。だいたいその先人とやらはここで何をしようとしていたんだ？」

その質問に対して黒神父は不敵な笑みを浮かべる。

「リセットだよ。我々人類が定期的に行うべき行為だ」

「な……何を言っている？」

「アンカー君はいわゆる『洪水伝説』というものをどう解釈するかね？」

洪水伝説とは神が人類に対する戒めや人口調整などのために文明を大洪水によって葬り去るといふ伝説や神話のことだ。なので、素直に答える。

「所詮、作り話だ」

「なるほど。ありきたりな見解だな。だが、洪水伝説は事実なのだよ。そしてこの装置はそれを可能にする」

「そんなバカな！」

「おやおや。信じられないかね。既に何度も立証しているんだが」

「まさか巨大水柱や山崩れがこれのせいだということのか？」

「その通りだ。それらは実験に過ぎないのだがね。本番はこれからののだよ」

「……実験だと？ あれが、か？」

「そうだ。実験なので威力は大分抑えたつもりなのだがね」

「信じられん。いったいこれは何なんだ？」

「おや？ 君はイランで見たんじゃないのか。分からないかね。これは加速装置だよ」

「何だと！？」

チャンの話によるとバベルの塔は宇宙に物資を打ち上げるための加速装置だった。らせん状パイプの中で加速された物体が遠心力を使って発射される仕組みだというのだ。

思わず聞き直す。

「加速装置だと？ しかし、あれはロケットの代わりに物資を打ち上げるための……」

「原理は同じでも用途は異なるというのはよくある話ではないかね？」

「まさか……隕石を、撃ち込む為の加速装置なのか？」

「お察しの通りだ。ここは月だからね。重力は六分の一。だから弾

は軽くてすむ。それに加速するパイプもべらぼうに長い。この星の半分を使っているからね。十分に加速することが出来る。我々は神の雷を手に入れたのだよ」

「まさかこの星の半分が全部、加速装置だということのか」

それが本当だとすれば恐ろしい規模だ。もし、バベルの塔で物資を宇宙に運ぶことが出来るというのならこの装置だと一体どういうエネルギーを生み出せるのだろうか……。

黒神父はこちらの驚く様を眺めて喜んでいるようだ。

「驚いたかね？ この完成のメドが立ったのでバンクーバーからは撤退したのだよ」

「ふざけるな。あれのせいでナミは……」

「ナミは亡くなったそうだね。可哀想な子だ」

「本当にそう思っているのか怪しいもんだな」

「勿論、心を痛めているとも。あの子は実に不幸な子だ。幸いにして命は助かったが必ずしもそれが良かったとはいえない。そもそも医療技術の進歩はナミのような子を生き長らえさせる反面、多くの弱者を生んでしまう。中にはそれを食いものになっている輩も存在している。私は以前、酷い病院を見たことがある。病院というよりは工場だ。より多くの医療報酬を受け取る為に患者を無理やり生かす続ける医者が経営していた。酷い話だ。彼らは命すら金に換算してしまう。そう考えると科学の進歩、いや文明の発達とは魂の退化に過ぎないとは思わんかね？」

「魂か。いかにも宗教家が口にしそうな言葉だな」

「君は世界の終わりについてどう考える？」

「さあな。ロクでもない方向に向かっているのは皆わかっている。だが誰もそれを止められないってところか……」

「その通りだ。世界は誤った方向に向かっている。今の世の中を鑑みてみたまえ。女は身体を売り、男は権力を求める。良心は衰退し、犯罪への垣根は下がり続ける。誰もが不当に利益を得ることを願い、他人を出し抜くことに腐心する。自由は権利、義務は回避。実に嘆

かわしい風潮だ。そんな世界に何の価値がある？」

「だからその装置でぶっ壊すのか？」

「誰かが正さねばならん。いいかね？ 文明は必ず腐敗する。これは宿命なのだ。所詮、人間は進化しない生き物なのだ。だからリセットしなればならない」

「それがヘーラーの目的か。フン。あきれたもんだな」

「神はこのような事態を予言し、このような贖罪の仕組みまで用意されたもつた！」

「馬鹿馬鹿しい。みんな死んじまったら贖罪もクソもあるか」

「だから洪水なのだよ。核兵器などもつてのほかだ。あくまでも再生がテーマなのだから」

文明のリセットと再生というのは別に珍しい考え方ではない。ヒンドウ教でも破壊神シヴァは世界をすべて破壊して次の世界を創造するという。だからといって誰かがその引き金を引いて良いということにはならない。

改めて黒神父に問う。

「よしんば世界が生まれ変わったとして人類が同じ過ちを繰り返さないとは限らないだろう？ だとしたらアンタ達がやろうとしていることは無意味じゃないのか？」

「意味はある。恐らく、先人達も同じ選択をしたのだろう。もしかしたら単にその痕跡が残されていないだけで我々の祖先はこの破滅と再生を何度か繰り返してきたのかもしれない」

「だったら尚更だ。また同じことを繰り返すだけだ」

「いいや。これで最後だ」

「えらい自信だな」

「なぜなら、我々ヘーラーが人類を正しい方向に導くからだ。永遠に」

「おいおい。まさかその永遠というのは『奇跡の種』を使って長生きするっていうのが前提じゃあるまいな？」

「半分は当たっている。だが断っておくが我々は不老不死を望んで

いる訳ではない。大事なものは精神だ。ありていに言っと『魂』だ」
「またそれが。それを持ち出すと途端に胡散臭くなるな」

「何を言うか。魂の世界は永遠だ。例えば肉体が朽ち果てたとしても問題ではない。なぜなら現世は修行の場に過ぎないからだ。清らかな魂、すなわち正しい精神を維持し続けることのみが人間の存在価値なのだよ」

「長い説教だ。それでよく日曜のミサでブーイングが出ないもんだな」

「これは真理だ。神の一滴から命は生まれ、現世で修行をし、そして神の元に還る。その繰り返しだ」

「……ナミから聞いたが、あんたは「我々はラスト・クロップ」だと言っていたそうだな。それもその考え方からきてるのか？」

「そうだ。ラスト・クロップというのは我々が最後の人類、そう、神が最後に残した人類であるとの意だ」

「クロップス……てつきり農作物のことだと思ったが」

「あながち間違いではない。この世界が畑だとすればな。我々は神が作りたもつた作物ともいえる。神が種を蒔き、育て、収穫する。

出来の良し悪しにバラつきが出るところなどまさにそうだ」

「やれやれ。俺には理解し難い思想だな」

「君は特別な存在だ。悪いことは言わん。我々と共にこのパライズで人類を救済するのだ」

「ふざけるな。アンタは裁きのつもりかもしれんが誰もそんなものを望んじやいない。アンタがやるうとしてしている事。そういうのを日本語で何と言うか知っているか？ ……「大きなお世話」というんだ！」

その言葉と同時に銃を撃つ。が、弾道は大きく上へ外れてしまった。反動があつて肘が持ち上がってしまったのだ。

黒神父が困つたような顔を見せる。

「おやおや。残念だ。君も話せば分かる人間だと思つていたのだがね」

「君も？ だと？」

「紹介しよう。新たな同志だ」

そう言つて黒神父が横を向いた。すると柱の影から何者かが現れた。これもまた見知つた顔だ。

（やれやれ。今日は知つた人間に良く会う日だ）

こちらから向かつて左手に現れた男はコウ中将だった。

黒神父が得意げにコウ中将を紹介する。

「バベルの若き幹部のコウ君だ。彼とは意気投合してね。やはり崇高な目的を持つ者同士だと直ぐ分かり合える」

それに対してコウ中将は黙つて腕組みをしている。彼が黒神父と一緒にであるということは組織を裏切つたということなのだろう。

「なるほど。バベルでの出世は諦めてヘーラーと手を組むことにしたのか？」

嫌味でそう尋ねるとコウ中将は面倒そうに口を開いた。

「……確かに自分はバベルの意向を受けてここに攻め入つた。だが、この人が次にどこを標的にしているかを知つて考え方を改めた」

「標的……だと？ 今度はどこを狙っている？」

コウ中将に代わつて黒神父が答える。

「ドバイだ。バベルの本拠地がある。今度は少し大きめの弾にしてみようかと思う」

「バベルを殲滅するつもりだな？」

コウ中将は何の感情も示さず吐き捨てるように言う。

「C国で会つた時に話したように私は組織を憎んでいる。だから何の異論も無いという訳だ。むしろ手間が省ける」

駄目だ。こいつらは狂っている。

「……何がリセットだ。世界をなぶり殺しにするつもりか？」

黒神父がやれやれといった風に首を振る。

「そういう訳ではない。世界を終わらせるのは簡単なこと。それはいつでも出来る。ただ、パライゾを完成させるにはひとつピースが欠けていた。だが、コウ君のおかげでそれも実現できそうだ」

そう言って黒神父はコウ中將と顔を見合わせた。そして満足そうに頷く。

「もう直ぐそのピースが手に入る。コウ君の素晴らしい手土産だよ」
嫌な予感がした。

「まさか……サアラを売ったのか？」

するとコウ中將は初めて笑みを浮かべた。どうやらその表情が答えのようだ。

「とんだクソ野郎だな。ヘドが出る」

「ならば君はどうする？ 我々を止めるつもりかね？」

黒神父のその言い方は幾分か挑発しているようにも聞こえる。

（やはりやるしかないか……）

ただし、ここでクロックアップがうまく使えるかどうかは自信が無い。黒神父だけならともかくコウ中將は一度手合わせをしているだけに厄介な相手であることは分かっている。

（一か八かだな）

そう思った時だった。

左から右へ、コウ中將が一瞬のうちに移動した。その動きは瞬間移動したと見紛うほどの速さだ。恐らくそれは目の前を横切られた黒神父にとつて残像すら視界に残らなかっただろう。

黒神父は「な」と、言いかけて自らの時を止める。

ほろり……

まさにそんな感じで黒神父が頭を垂れた。

スロー映像のようにそれは転がり落ち、首からは赤い液体がまるで取り乱した噴水のように噴出した。低重力の世界では落下物は半分の速度になり、心臓が送り出す血液は大いに解放される。

（なに……？）

何が起こったのか理解するのに数秒を要した。コウ中將の手に光るモノ。そしてそれによつてもたらされた無残な結果を見比べながら聞いた。

「手を組んだんじゃないかったのか？」

その質問に対してコウ中將は興味無さそうにそっぽを向いた。

「元よりそんなつもりは無い」

そう吐き捨ててコウ中將は、首の無い黒神父が膝から崩れ落ちるのを眺めた。

しばらくして何かを知らせる警告音が発せられた。

(何だ?)

周囲を見回すがどこがもとなのか分からない。

するとコウ中將が黒神父のそばにあった機械を見ながら言った。

「爆弾だ。この男の生体反応が無くなると起動する」

「なんだと? なぜそんなもの……」

「下らん脅しだ。私が裏切らぬよう牽制のつもりだったのだろう」

「それを知っててなぜ?」

「戦いの邪魔になるからだ」

そう言ってコウ中將は手にしていた小刀を放り出した。小刀は二分の一の速度でゆっくりと放物線状に落下した。

「呆れたものだ。こっちの事情はお構いなしか」

「私はもう一度戦いたい。これはリベンジだ」

「こんな場所か?」

「この場所でなければ私に勝ち目は無いからね」

「ほう。まるでここなら勝てるんでも言わんばかりだな」

「勿論、そのつもりだよ」

そう言っつてコウ中將は自信ありそうな笑みをみせる。

戦うのは避けられないようだ。だが爆弾というのも気になる。

「で、その爆弾はあとどれぐらいで爆発するんだ?」

「約6分」

「短いな」

「いいや。十分だろう。我々クロックアップーにとっては」

そう言っつてコウ中將はゆっくりと戦闘態勢に入った。

問題はここでクロックアップを使えるかどうかだ。高速での移動

は足元が覚束無い。そんな中で果たしてイメージ通りに動けるのか?

(まずは動きすぎず、相手の動きに合わせて……)

コウ中将は拳を握り締め、息を吐き出して飛び出した。

(速い！)

ここは右の拳をカウンターで合わせる！

敵の進路に角度を合わせてタイミングを取る。

(何？)

パンチの軌道を一直線上に定めたいと思いきや、コウの進路が左に変わったのだ。

右腕に引っ張られて身体が右に流れる。コウは左側をすり抜ける。
「クッ！」

左に反転しながら右拳を引っ込める。が、敵の回転の方が速い！
行き過ぎたと思われたコウはもう180度ターンして直ぐ目の前まで接近してきた。

(ツッ……)

痺れるような衝撃が左わき腹に生じた。と同時に吹っ飛ばされた。踏み止まろうとするが、急流に飲み込まれたみたいには止まれない。これも低重力のせいだろう。

敵の攻撃は止まない。すかさず追い討ちでコウが突っ込んでくる。止む無く牽制で左足を前方に蹴り出す。

しかし、またしてもコウは急に進路を変えて左右にステップして接近してきた。そして連続したパンチが飛んでくる。

5倍速でガードするがその圧力に押されてしまう。スキを突いて右の掌底を放つがバツクステップで射程外に逃れられてしまう。

(ヒット&アウェイで来られると不利だな。しかし……)

低重力下では地面を蹴る強さが莫大なスピードを生む。その反面、一度ついた慣性を押さえ込むのに苦労する。それなのに奴はなぜこの環境で自由に動き回れるのか？

またコウが離れた位置から急接近して蹴りを繰り返してくる。

(あれは！？)

コウの靴！ その靴裏に牙のような突起が付いているではないか！

（スパイクか？ 考えやがったな。あれで急停止をしているという訳か）

これは想像以上のハンデだ。コウの動きに慣れるまで交わし続けることも考えたが爆発までの時間も気になる。それに瞬間的にはいえ5倍速を使っているとこちらも身体に堪える。

（参ったな……）

最終話 Fly me to the moon

コウは靴裏の突起を使って急加速と減速を使いこなしている。恐らく月面で相当、訓練を積んだに違いない。それに比べてこっちは防戦一方だ。

コウは大きく左右にステップを踏んで接近してくると今度はしゃがみ込んでの回転足払いをみせる。

ついジャンプで交わしたくなつたが咄嗟に右斜め前へのステップに切り替えた。

(ジャンプはまずい)

天井の高さは3メートル足らず。間違つて3倍速で上に飛ぼうものなら頭をぶつけてしまうだろう。それに着地するまでの隙が大きすぎる。

しかしコウは続いて軽くジャンプすると回し蹴りを繰り出してきた。上体を反らして寸前で交わす。が、すぐさま二発目が目の前に！

(何っ！)

しかもそれで終わらない。宙に浮いたまままでの蹴りが連発で襲ってきた。まるでプロペラだ！ たまらず後ろにステップする。が、最後の一発が間に合わない。しゃがもうとするが早くしゃがめない！

(上半身がついていかない……グッ！)

右のこめかみあたりに痛みが走った。やはり重力が小さいので『しゃがむ』という動作がイメージ通りに出来ないのだ。

痛みを堪えてコウの着地を狙う。5倍速で左の掌底だ。

が、コウはひらりと斜めにスライドする。また交わされた！

(大振りでは当たらないか。ならば……)

コウの攻撃を待つ。それも浅い攻撃ではダメだ。そこでわざとスキを作ることにした。

まず、コウの蹴りを避けた際にわざと身体の重心をずらして体を左に開く。やはりコウはそれを見逃さない。コウは一旦、左に回って急角度で左わき腹に攻撃を仕掛けてきた。

(よし！)

コウの正拳突きをギリギリで交わし、一步踏み込む。そしてコウが下がるうとする方向に向かってステップして追いかける。身体を密着させるまで近付くと同時に左手の掌をコウの腹にあてがう。

(これでどうだ！)

掌を5倍速で突き出す。至近距離から急加速で放つ打撃だ！

「ムグツ！」と、コウが反応した。

手応えはあった。その証拠にコウは身体を『く』の字に曲げて後方に大きく弾き飛ばされた。5倍速とはいえ超至近距離でのそれは通常の掌底やパンチより威力は劣る。が、この低重力下では漫画みたいに敵は吹っ飛ばされる。

(やったか……?)

しかし、激しく飛ばされて壁に背中を打ちつけられたはずのコウが意外にあっさりと体勢を整える。やはり甘くはないようだ。恐らく、この低重力下では打撃を当てた時の運動エネルギーが吹き飛ばすほうに割かれてしまつて敵の体内にダメージが残りにくいのだろう。

コウは腹をさすりながら余裕をみせる。

「寸勁すんけいか。フン。なかなかやるな……」

これは超至近距離で放つ打撃、いわゆる『ワンインチ・パンチ』だ。

「一応、打撃には自信があるんでね」

わざとそう口にしてみた。これが伏線になればいいのだが……。それを聞いてコウは勝ち誇つたように言う。

「ほう。だが、今ので勝利を確信したよ」

「どうか。今度はこちらから攻めさせてもらうぞ」

3倍速で地面を蹴って突っ込む。が、上体が先に突っ込むような

形でバランスを崩す。その結果、意に反してジャンピングヘッドになっちゃった。

コウは軽くそれを交わして嘲笑う。

「何だそれは？ 頭突きか？」

「クッ！」

一歩、間を詰めて左拳を振り抜く。バックステップで交わそうとするコウに食らいについては左右のパンチを5倍速で繰り出す。が、ことごとく空振りしてしまう。

コウは余裕ありげに挑発する。

「どうした？ 得意の打撃も当たらなければ意味がないぞ」

どうしても一完歩が大きくなるので攻撃が直線的になってしまう。それでもパンチを見せておいてフェイントの蹴りを見舞うとつま先がかすった。

そこでコウは大きく後退すると呆れたように言った。

「がっかりだな」

「ご期待にそえずに悪かったな。だが、結局、お前さんは何をしたいんだ？ バベルを裏切ったうえにヘーラーまで……」

その問いかけにコウは腕組みをしながらゆっくり答える。

「私にとってはバベルもヘーラーも関係ない。私に言わせれば仏教もキリスト教も大して差はないのだよ」

「仏教？ バベルの思想は仏教なのか？」

「ああ。それに近い。バベルの思想は輪廻転生を基礎としている。あの世というのは精神の集合体であって、そこからこぼれ落ちたものが魂として人間に宿る。そして現世で経験を積み、また集合体に還る。その繰り返しだというのだ」

「精神の集合体。それがあの脳みその化け物作りのルールか？」

「恐らくはな。だが無神論者の私にはどっちでもいいことだ。所詮、生まれてから死ぬまでのプロセス、それをどう解釈するかの違いでしかない。結局、人は死ぬ。人はどこから生まれ、死んでからどうなるのか。宗教はそこに意味を求める。だが、そのこと自体に意味

などない。それが私の考え方だ。つまり、生きているうちに来るだけのことをする。どういう生き方をしようと最後の瞬間に悔いが残らなければそれで御の字だ」

「……お喋りが過ぎたようだな。時間が無いっていうのに」

「問題ない。次で終わりにするからな」

そう宣言してからコウは再び戦闘態勢に入った。恐らく奴は足裏の突起での攻撃をフィニッシュに持つてくるはず。その時が唯一のチャンスだ。

「いくぞ！」

そう言ってからコウは地面を蹴った。

（来る！）

高速で接近してくるコウの動きを見極める。右、左、右、右……？

（消えた？）

バカな？ 見失っただと？ 途中でスピードを上げたのか？

次の瞬間、左のわき腹に激痛が襲ってきた。咄嗟に5倍速で身体をよじる。と同時にコウの足にしがみつく。そしてコウの懐にタックルする。

（捕まえた！）

「ム！？」と、コウが呻く。そして拳が右方向から飛んでくる。

が、それに構わずコウの腹を両腕で抱える。そのままの体勢で身体が浮きそうになるのを堪えながら押す、さらに押す。そして勢いをつけて……渾身の力で地面を蹴る！ 真上に向かって最大速のジャンプだ！

溜めに溜めていた力を地面にぶつけた反動で天井に向かって加速、めり込むぐらいの勢いで天井の岩に激突した。目の前に火花が散って、しこたま後頭部を打ち付けてしまった。が、抱きかかえられていたコウはもつと強打しているはず。

ゆっくり、ゆっくりと月の重力に導かれ、我々は着地した。

腕を放してコウと離れる。

コウは顔面を真っ赤に染めながら呻いた。

「ま、まさか……そんな方法を使う……とは」

不恰好だがやむを得ない。だがコウはまさかクロックアッパーがこんな泥臭い攻撃をしてくるとは思わなかったのだろう。打撃を意識させておいて正解だった。

しかし勝利の余韻に浸っている場合ではない。わき腹にかなりのダメージを受けてしまった。それに5倍速を使いすぎた反動も出てきた。爆発までの時間も迫っている。

幸い重力が小さいので移動することは出来そうだ。瀕死のコウを残して出口に向かうことにした。

* * *

気が付くと病院のベッドの上だった。

おそらくクリス中尉に運ばれたのだろう。わき腹の痛みはまだ残っているが手で触れてみると再生治療中であることが分かった。

(……イタチ男の奴、どこまで用意周到なんだ)

まるで自分が深手を負うことを予期していたかのような。

長く眠っていたのだろうか。圧倒的な脱力感に包まれている。天井を眺めながら色々なことを思い出していた。身体が軽いせいで腕も足も重さが感じられない。腰も背中も首にかかる負荷さえもまるで他人事のような。ぼんやりしていると自分の身体が本当に存在しているのかさえ自信が無くなってくる。考えてみれば身体という器を失った時、この意識というものはどうなってしまうのだろうか。それは無になってしまうのか、しかるべき場所に還るのか、それとも……そこで両手両足を失った女達の顔が脳裏をよぎった。

しばらくしてベッド脇にあった端末が反応した。

「……ジイサンか。どうした？」

「どうしたも何も今まで何をしておったんじゃい！ 全然、連絡も

「寄越さんと！」

「ああ。ちよつと月の裏側を散策してたんだ」

「……で、用件は済んだのか？」

「まあな。少し休んだら帰る」

「そうか……」

ジイサンはそれ以上、何も聞かなかった。多分、声のトーンで分かるのだろう。付き合いが長いと互いにそういう配慮が出来るものなのだ。

「まあ、せいぜいゆっくりするこつたな。こつちはちよつと騒がしいからの」

「何かあつたのか？」

「また隕石が落下したらしい。今度はドバイの方がやられたようじゃ」

「な！？ ……それはいつだ？」

「8時間ぐらい前かの。次はどこだとパニック気味じゃわい」

あの場所を立ち去ってから十数秒後に一回目の爆発があつた。その後、小爆発がしばらく続いてから大きな爆発が起こつた。てつきりあの爆発で発射装置は破壊されたものと思ひ込んでいたが…。

（あの爆発では止まっていなかつたのか……）

ジイサンが続ける。

「かなりの被害らしいぞ。有名人も多く犠牲になつたようじゃ。その中にはあのアル・ハシリドはじめバベルの幹部も多数おつただろうな」

「……バベル壊滅か。奴等の狙い通りか」

「奴ら、とな？」

「黒神父だ。あれはヘーラーの攻撃だつたようだ。そういえばジイサン、チャンに分析を頼まれていただろう。バベルの塔にあつた加速装置の」

「ああ。あれか。あれは恐らくチャンの推測通りのブツじゃな。だが、本当に宇宙まで物資を打ち上げられるだけの代物かはまだ立証

できとらんのだが……」

「立証も何もそいつの親玉みたいなのが月にあったようだ。信じ難いことだが、月の半分を使った加速装置でヘーラーは地球を攻撃していたらしい」

「な、な、なんじゃと!? 信じられん……」

黒神父が予告した通りになってしまったということは、やはりあの装置は本物だったということだ。しかし、それは逆にこれ以上の攻撃は無くなったということでもある。

「ジイサンよ。そっちは何かと大変だろうが……長生きしろよ」

「な、なんじやい急に。気持ち悪いのう。変なことを言っない!」
しばらく会話が途絶えた。互いに次の言葉を決めかねているようなバツの悪い間があいた。

「……悪かったな。心配するな。大したケガじゃない」

「驚かせるな。わしゃてつきり……」

「しばらくこっちでのんびりしたいだけさ。じゃあな」

「おう。地球に戻ってきたら寄ってくれ。ご馳走を用意しておくから」

「ああ。冷製パスタ以外で頼む」

「フン。それは聞こえんかったことにするわい」

ジイサンとの通信が終わって少し現実に戻ってきたような気がした。

そっぴえは酷く喉が渇く。

(ちょっと抜け出すとするか……)

ベッドから起き上がり、外に出てみることにした。

* * *

病院を抜け出して2ブロック離れた観光ホテルのラウンジに入った。

このホテルはゼロ号基地の端にあつてラウンジから地球が眺められるということだ。人気のあるスポットなのだそう。恐らく地球を臨みながらの食事や飲酒が定番なのだろう。ところがそういう時間帯では無かつたのかラウンジ内は意外に空いていた。客の入りは2割といったところか。しかも皆、窓際の席に集中していて自分が座つた席の周りは空きテーブルに囲まれていた。

ここでビールを注文したいところなのだがメニュー表示にそれは無かつた。やはり酸素量のコントロールが最重要視される月面基地で炭酸飲料は禁止なのだ。そこで諦めてウイスキーの水割りを頼む。喉が渴いていたので薄めの水割りを立て続けに喉に流し込んだ。そして渴きが収まつたところでロックに乗りかえる。長く考え事をする時にはロックに限る。

程好い酔いと静かな空間に意識を漂わしていると、ふいに目の前に何者かが現れた。顔を上げてそれを見た途端に酔いが引いていくのが分かつた。こういうのをまさに『興ざめ』というのだろう。

「何の用だ？」と、相手の目を見ずに言った。これは（関わりたくない）という明確な意思表示だ。だが、相手は気にする素振りもない。

「片はついたようだな」

そう言つてイタチ男は勝手に向かいの席に座つた。もはやこの男のストーカー振りには諦めるしかない。

大した感慨も無く返事を返す。

「まさか次は火星にでも行けつて言うんじゃないだろうな？」

「いいや。これ以上、依頼することはない」

「それは良かつた。おかげでのんびりできる。バベルだとかヘーラーだとか訳の分からない連中と関わりあうのに疲れたからな。ついでに言わせて貰つとアンタの相手をするのもこれで最後にしたいもんだ」

「……そう言うな。兄弟」

「止めてくれ。そもそも俺は実の父親を知らない。なのにアンタに

兄弟と呼ばれる筋合いは……」

「だったら、会ってみるか？」

そう言うといタチ男はこちらの答えを待つまでもなくスイーツケースをテーブルの上に乗せた。こんな所でもいつものそれを持ち歩いているとは呆れたものだ。が、イタチ男がそれを開けた瞬間に息が止まりそうになった。

(な、何だ！？ それは……)

スイーツケースの中味は液体漬けの脳だった。しかもその脳には無数の電極や機械が差し込まれているように見える。

言葉を失っているとイタチ男が無表情に言った。

「これが『瀬戸源一郎』本人だ」

「……生きて、いるのか？」

「勿論だ。話すこともできる」

「……どうやって？」

イタチ男はその質問には答えず、微かに笑みを浮かべると自らのこめかみに両手を添えた。そしてゆっくりと髪を持ち上げた。

(カツラ？ ……う！)

まるでゆで卵の殻を取り去るようにイタチ男が外したのはカツラではなく頭部の一部だった……。イタチ男の額より上部分は真横に切り取られている。どういう仕組みになっているのかは分からない。が、むき出しになったのは恐らく頭骨、それも金属製パーツと一体化している。まるで機械の塊に人のお面を被せたような具合だ。

「前にもこうして話したことがあるだろう」

イタチ男にそう言われて戸惑った。

「前にも、だと？ ……そんな奇妙な物にお目にかかるのは初めてだが？」

「そんなことはなかるう。本を贈った時だ」

「何！？ まさか……あの時か」

恐らくそれはデンバーの日本食レストランで対峙した時のことを言っているのだろう。

「あの時は楽しかったよ。それでつい喋りすぎた。普段は余分なエネルギーを使わないように箱の中で安静にしているんだが」

（箱の中……スツケース。つまりイタチ男が持ち歩いていたのは瀬戸源一郎の脳だったということか？）

試しに聞いてみる。

「今喋っているのが瀬戸源一郎だとしたらその身体の『主』は何者だ？」

「この身体は私のコピーに過ぎない」

「その身体に人格はあるのか？」

「少しはある。だが知力は著しく劣る。これはクローンで出来た個体特有の欠点だ。ある程度の意志を持って行動することは出来るがコントロールしているのは私だ」

「普段は身体の主にある程度任せて時々そうやってアンタが表に出てくるといふ仕組みか」

「そうだ。残念ながら私は箱の中から出られない。しかも定期的にメンテナンスを行わなければならない。このクローンは私の身体の代用であり、また介護役でもあるのだ」

それで分かった。B国の病院で初めて会った時にイタチ男は『我々はこれで失礼する』と言っていた。あれはそういう意味だったのだ。

イタチ男、いや瀬戸源一郎は目を細めて頷いた。

「宜しい。いい顔をしている」

「何だ。気持ち悪いな」

「良い出来だ。まったく老いることが無い」

「当たり前だ。だが、不老不死にしてくれなんて頼んだ覚えはないが？」

「そう言っな。こうやってお前の顔をじっくりと見るのはこれが初めてなのだ。なぜなら視覚から入る情報は容量が大きすぎるからな。情報整理の為、脳に負荷がかかるから普段は見ることはしない。だから今までは情報としてしかお前のことを認識してこなかった」

厭な予感がした。嫌、この予感はこの予感が初めてではない。まるで心の奥底に無理やり押し込んだ感情がゆっくりと染み出してくるような感覚だ。

イタチ男、いや、イタチ男の身体を借りた瀬戸源一郎は機嫌が良さそうに呟く。

「フフ。こういう気分は初めての経験だ。これが何十年ぶりに我が子に会った喜びというものか」

「な、な……」

言葉が出てこなかった。『輪廻』などというイカれた本を読まされた時から厭な予感はしていた。が、実際にそんな風に言われてしまつと目の前が暗くなるような気がした。

やつとの思いで口を開く。

「まさか……あの本に書いてあつたことを実践したんじゃ……」

すると瀬戸源一郎は静かに首を振った。

「勿論、妹と肉体関係を持ったわけではない。当然のことながら妹は拒否した。だが、22歳の若さで妹は脳死してしまったのだ。事故だった。私は妹の身体から卵子を取り出して人工受精させたのだ」

「バカなことを……それで？」

「当時、私はまだ大学院生だった。T大学でDNA書き換え技術の研究をしていた私はこっそりと人間の遺伝子で実験を重ねていたのだよ。夜間、誰も居ない研究室で勝手に機械を使わせてもらった。その集大成がお前だ」

「何の為にそんなことを……」

「私の身体が朽ちる前にどうしてもスペアが欲しかった。だから妹の卵子を借りて私の分身を作ろうとしたのだ」

「なぜクローンにしなかった？」

「その時点のクローンでは満足出来なかったのだ。どうせなら自分が入る器のスペックは最高のものにしたと考えていた。例えば、不老不死。さらには超反射神経……」

「クロックアップもアンタの仕込みだったと言うのか」

「だがその代償も大きかった。一代限りというのは想定していなかった。最も死なないのだから子孫を作る必要もないのだが」

「ふざけるな……」

そのせいで過去に失ったもの。それは決して消えることのない痛みだ。

瀬戸源一郎の独白はさらに続く。

「その後、私は受精卵を妹の腹に戻した。つまりお前は脳死状態の妹の腹の中で育ったわけだ。病院では大問題になったてしまったが、医者も驚いていたよ。流石にお腹の子の父親が実の兄だとは気付いていなかったよ。それで、生まれたお前を海堂に預けたという次第だ。もう何十年前の話だ」

「……それが本当だとすると、今までなぜ俺に接触してこなかった？俺はアンタの『器』だったんじゃないのか？」

その問いに対して瀬戸源一郎は静かに首を振った。

「出来なかった。お前は意思を持った人間だ。『器』にするのは残酷すぎる。それに正直に言えば自身が生んだ最高傑作に手をつたくなかったのだよ。だから、私の意識はその後につたクローンに移すことにした。クローンなら何の気兼ねも無い。それに失敗しても機会は何度でもある」

「……意識を移すだと？脳を移植するのではないのか」

「脳とていずれば朽ちる。私が不老不死を得るには自らに宿った意識、つまり『自我』を物理的に他の脳へ移すしか方法がないのだ」

それを聞いてまず連想したのはトレースの技術だ。脳の特定部位に電気刺激を加えることで他人の記憶をリアルに再現するこの技術は人工知能の父ジョン・ササン・ホフマン教授の功績によるものだ。さらにそのホフマン教授で思い出した。瀬戸源一郎もホフマン教授も、三十年前にイランの『ババルの塔』を訪れていたはず。

「そういえばアンタもバベルの塔探検隊の一員だったな。写真をみたぞ。今と変わってないということは、あれはアンタのクローンだったわけか」

「そうだ。脳科学は私の専門分野ではないからな。私の脳にあるすべての情報をクローンの脳に写す作業にはホフマン教授の力がどうしても必要だった。彼がバベルの塔で得た情報を利用して私は何度もチャレンジをした。今から十数年前のことだ」

「それがその結果か？ 見事に失敗してるじゃないか」

「……言い訳はせんよ。確かに失敗だった。私の意識、すなわち私の脳にあるすべての情報を電気信号としてクローンの脳に送り込んだつもりが目覚めた時に思い知らされたよ。自分はどこにも行けない。意識はここに留まり続けるしかないということ。それで悟った。いちど肉体に宿った自我は切り離せないのだと」

(結局、行き着くところはそこか……)

『魂』などという概念は自分にはどうでもいいことだ。生死観というものは人それぞれであるが、それを突き詰めていったところで真実には辿り着けない。所詮、「人はどこから生まれ、どこに還るのか」なんて誰にも分からないのだ。

そう思って尋ねてみた。

「それでアンタは何を学んだ？ アンタのやってきたことはバベルやヘーラーと変わらんように見えるが？」

「……それは否定せん。バベルは脳を結合することで個々の脳に宿る自我の領域を拡げようとした。自我と自我の垣根が取り去られそれが一体化する。それはまさに死後の世界を再現することだ。彼らは無数の自我が集合したものが生命の源と考えている。そこからこぼれ落ちた『自我』が肉体に宿ることで命が誕生し、肉体が滅びると元の場所に統合されるというのだ」

「輪廻転生か。つい最近、同じ話を聞いたよ」

そういえばコウ中將も同じことを言っていた。

瀬戸源一郎は続ける。

「一方のヘーラーとて特異なものではない。彼らの死生観は、命は神によって創られ神の元に還るという考え方だ。その点でヘーラーもバベルも根は同じモノなのかもしれん。彼らはそれぞれのアプロ

「チで命をコントロールすることに腐心していた。だが、それはあまりにも儚く脆い。その一滴は誰にも掬い取れないのだ」

「そこまで話し終えて瀬戸源一郎は静かにため息をついた。ここま
で彼は一度も瞬きをしていない。イタチ男という器のストックは幾
らでも用意できるかもしれない。だが、スーツケースの灰色に近い
瀬戸源一郎の脳は青息吐息のように見えた。」

「で、アンタは俺にどうしろと？」

「……好きにしろ。この世界が滅んでゆく様を傍観するもよし、何
かを変えようとあがくもよし。好きにするがよい」

「フン。すっかり父親気取りだな。言われなくても……」

「どうしてもその後の言葉が出てこなかった。『生きる』という言
葉の重みというものが今更のようにはかかってきたのだ。」

「瀬戸源一郎はスーツケースを閉じると最後に1つだけと断ってか
ら質問をした。」

「己の運命を呪うか？」

「そこで頷くのはシャクだった。なので首を振る。」

「いいや」

「それを聞いて瀬戸源一郎は満足そうに頷くとゆっくり席を立った。
恐らく彼の脳が機能を停止する日は遠くないだろう。そうならばも
う会うこともあるまい……。」

「瀬戸源一郎が去ってから茫然としていた。すっかり酔いがさめた
せいもある。だが、知りたくも無かった生い立ちを聞かされたこと
で気分が滅入った。」

「しばらくたって給仕ロボットがテーブル脇に待機しているのに気
付いた。ふと思いついて曲のリクエストでもしてみようという気にな
った。給仕ロボの口にチップを差し込むとリクエスト受付中と表
示される。」

「Fly me to the moon」

「そう告げると曲の候補がズラリと出てきた。そこで「この淀んだ
空気にピッタリなものを」と条件を付け加えると、給仕ロボは一寸、

首を傾げる仕草をみせた。そしてそのクリクリとした目でこちらを観察すると小さく頷いた。

出だしはジャズ風。歌い手の名は分からない。しかし雰囲気は合っている。

いつの間にかこの席からも地球の姿が臨めるようになっていた。月を見ながら聴くのではなく反対に地球を眺めながらこの曲を聴くというのもおつなものだ。

「Fly me to the moon」をツマミにウィスキーを飲む。考え事をするにはぴったりのシチュエーションだ。

(深く考えても仕方がない……か)

普通の人間より長生きすること自体に意味は無い。だが、例え意味の無い人生だったとしても生きること否定する理由にはなるまい。「人はどこから生まれてどこに行くのか？」そんなものは死んだ時に考えればいい。知らない方が良いことというものはある。

もう一度、地球を見上げてみた。ただし瀕死の惑星を眺めて感動するほど純粋な心は持ち合わせていない。だが、それでも地球は美しい。それなりに……

そんな地球を眺めていると、なんだか無性に冷たいビールがやりたくなってきた。

終わり

最終話 FLY ME TO THE MOON (後書き)

最後までご愛読ありがとうございました。特に不定期連載ながら長らくお付き合い頂いた方々には深く感謝致します。皆さんのアクセスが励みでした。ご感想など頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3215h/>

クローズ

2010年10月8日13時09分発行